

一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う

## 舞出北遺跡発掘調査報告 2

—第1次・第2次調査（下層）及び第3次調査—

2010（平成22）年3月

三重県埋蔵文化財センター









## 序

三重県の北東部に位置している伊勢平野は、西側に布引山脈があり東側には伊勢湾が広がる随所に豊かな自然が残された地域です。この伊勢平野の中央部を雲出川が流れており、雲出川流域は肥沃な土壤によって、古くから人々の生活が連続と営まれた地域です。

今回報告する舞出北遺跡は、一般国道23号中勢道路建設に伴い遺跡の現状保存が困難な部分について、緊急発掘調査が実施されました。調査の結果、弥生時代後期の方形周溝基群、古墳群、奈良時代の集落跡、中世以降の集落跡、さらに第3次調査においては弥生時代終末から古墳時代にかけての水田跡が確認されました。特に5世紀後半から6世紀にかけて造成された古墳群のうち1基からは鉄刀や鉄鏃をはじめとした副葬品、大量の埴輪、土器、木製埴輪の樹立を想起させるような木杭痕等が確認され、低地に埋没した古墳群の様相が見えてきました。また、7世紀末から8世紀前半の集落では区画溝や掘立柱建物などが確認され、鉄滓・糶の羽口等の出土から集落の一画で鍛冶が行われていた可能性を示すことなどが分かってまいりました。

しかし残念ながら、昔の人々の生活の跡はすでに消滅しました。開発が進み私たちの生活が便利になることは喜ばしいことではありますが、古くからこの地に生活していた人々が遺した「証し」を保存していくことも大切なことであります。消滅してしまう遺跡を記録保存という形で少しでも皆様方に知っていたき、埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力を願うばかりです。

末筆となりましたが、調査にあたりましては、多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 河北 秀実



## 例言

1. 本書は三重県松阪市舞出町（旧一志郡三雲町舞出）に所在する舞出北遺跡平成11・12年度発掘調査（第1次・第2次調査）のうち下層（弥生時代～奈良時代）及び平成16年度発掘調査（第3次）にかかる報告書である。
2. 本遺跡の調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局三重河川国道事務所（旧建設省中部地方建設局三重工事事務所、国土交通省中部地方整備局三重工事事務所）より委託を受けて、平成10～12・16年度に一般国道23号中勢道路建設に伴って実施した。また、整理・報告書作成業務を平成11～13年度、16年度、19～21年度に実施した。調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。
3. 調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査協力	津市教育委員会
発掘業務	社団法人中部建設協会
4. 第1次現地調査は、山中由紀子、小林俊之が担当した。また、遺構写真は山中、山口 格が撮影した。第2次現地調査は、山中、川崎志乃、瀬野弥知世が担当した。第3次現地調査は、辻本泰宏、福島伸孝、山中、坂 住彦が担当した。
5. 本書の執筆は原田恵理子、水橋公恵、野島美沙子、小林俊之、株式会社九州テクノリサーチ、バリノ・サーヴェイ株式会社が行った。また、遺構写真撮影は各現地調査担当者が行い、遺物写真撮影は原田、水橋、野島、小林が担当した。全体の編集を原田が担当した。
6. その他の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課（松阪駐在）〔平成19～21年度〕（10～12年度：調査第二課第三係、13年度：第二課第二係、16年度：調査研究Ⅱグループ）及び情報普及課〔平成19～20年度〕（10～13年度、16年度：情報普及グループ）、支援研究課〔平成19～20年度〕、活用支援課〔平成21年度〕が担当した。
7. 自然科学分析のうち、鍛冶関連遺物の金属学的調査（第1次・第2次調査）は株式会社九州テクノリサーチが、放射性同位体炭素14分析（第1次・第2次調査）および花粉分析、植物珪酸体分析等（第3次調査）はバリノ・サーヴェイ株式会社がそれぞれ行った。
8. 発掘調査においては、旧一志郡三雲町在住の方々や旧三雲町教育委員会にご協力いただいた。また、下記に示す諸氏からは、調査・報告書作成にあたって、様々なご教示・ご助言を頂いた。記して感謝いたします。（順不同・敬称省略・所属は当時）

青木哲哉（立命館大学）	榎村寛之（齋宮歴史博物館）	小林真理（財団法人元興寺文化財研究所）
高橋 学（立命館大学）	外山秀一（皇學館大学）	中野晴久（常滑市民俗資料館）
藤澤良祐（愛知学院大学）	村田 匡（三雲町教育委員会）	渡辺智恵美（別府大学）
9. 本報告書に関連した舞出北遺跡の調査成果については、『中勢道路調査ニュースNo.37』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）、『同No.43』（三重県埋蔵文化財センター 2005年）、『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報XIII』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）、『同17』（三重県埋蔵文化財センター 2006年）等で随時報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。  
なお、第1次・第2次発掘調査のうち、上層（平安時代～江戸時代）については、『一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う 舞出北遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2007年）において既に報告されている。
10. 本報告書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

# 凡 例

## 〈地図類〉

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三雲町都市計画図1/5,000である。
2. これら地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地形による座標第VI系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
3. 挿入図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏6°40′、真北方位は西偏0°17′34″（平成10年）である。

## 〈遺構類〉

4. 土層図は、層の区分を実線で、実際に掘り下げた部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
5. 土層図の色調は基本的に、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版）を用いた。
6. 当報告書での遺構番号は、下記のように100位の数字を変えて、それぞれ通番としている。  
第1次・第2次（下層）：301～ 第3次（第2面）：401～ 第3次（第3面）：501～  
第3次（第4面）：601～ 第3次（第5面）：701～
7. 遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、見通し図となっている。
8. 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、凡そ以下の略記号を付けている。  
SA：柵列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SF：カマドなど SH：竪穴住居  
SK：土坑 SX：墓、古墳 SZ：不明遺構など Pit：ピット、柱穴
9. 遺構平面図等で略記号のない数字のみの表記はPitの番号を示す。
10. 遺物出土状況図の遺物に付された数字は遺物実測図の報告番号を示す。

## 〈遺物類〉

11. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度表記している。
12. 遺物観察表は、以下の要領で記載している。  
報告番号 … 挿入図掲載番号である。  
実測番号 … 実測段階の登録番号である。  
種類 … 遺物の大分類したものを示す。弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、石器、鉄製品等。  
器種等 … 種類を細分した器種・器形等を示す。  
グリッド … 調査時に設定した地区名を示す。  
出土遺構・出土層位 … 遺物の出土した遺構や層名を記した。Noを付した土器等は取り上げた際の区分番号である。  
法量 … 遺物の法量を示す。口径は口縁部径、器高は遺物の高さ、底径は底部径を示す。  
調整技法の特徴 … 遺物観察時に確認した主な調整技法等を記した。外は外面、内は内面を示す。  
胎土 … 小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。  
焼成 … 焼成時の状態を「良～軟」で区分した。但し、埴輪は「土師質・須恵質」で区分、記載した。  
色調 … その遺物の代表となる色調を記載した。但し、大きく色調が異なるものは部位も表記している。外は外面、内は内面を示す。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。  
残存 … 残存度を主な部位を示した上で分数表記した。但し、部位が表記していないものは全体からみた残存度を分数で表記し、残存がわずかなものは小片、全体が残っているものは完存と記した。  
備考 … 遺物の特徴となる事項を記した。また、『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報XIII』（2001年）及び『同17』（2006年）で掲載された際の挿入図番号を概報番号として記した。

## 〈写真図版〉

13. 写真図版の遺物番号は、挿入図掲載番号と対応している。
14. 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

## 本文目次

I	前 言	(原田)	(1)
1	調査の契機		(1)
2	調査の体制		(1)
3	調査の経過		(2)
4	調査の方法		(5)
5	整理作業の方法		(5)
II	位置と環境	(小林)	(6)
1	地理的環境		(6)
2	舞出北遺跡上層の成果		(6)
3	周辺の遺跡		(6)
III	第1・2次調査(下層)の遺構と遺物	(原田・水橋)	(9)
1	遺構		(9)
2	遺物		(40)
IV	第3次調査の遺構と遺物	(野蔭)	(103)
1	遺構		(103)
2	遺物		(126)
V	自然科学分析		(137)
1	科学分析の目的	(原田)	(137)
2	放射性炭素年代測定	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	(137)
3	須恵器壺内の赤色物質の由来	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	(140)
4	鍛冶関連遺物の金属学的調査	(九州テクノロジーサーチ・TACセンター)	(141)
5	古環境分析	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	(153)
VI	まとめ	(原田・野蔭)	(163)
1	遺跡の立地について		(163)
2	主要時期の様相		(164)

## 挿 図 目 次

第1図	調査区位置図 .....	(3)
第2図	中勢道路 (13~14 工区) 内遺跡位置図 .....	(3)
第3図	舞出北遺跡周辺の遺跡位置図 .....	(7)
第4図	第1・2次 (下層) 調査区土層図 (1) .....	(10)
第5図	第1・2次 (下層) 調査区土層図 (2) .....	(11)
第6図	第1・2次 (下層) 遺構平面図 (弥生時代) .....	(12)
第7図	第1・2次 (下層) S X 311 平面図 .....	(13)
第8図	第1・2次 (下層) S X 311 周溝土層断面図・遺物出土状況図、 S X 318・S K 319 平面図 .....	(14)
第9図	第1・2次 (下層) S X 388 遺物出土状況図 .....	(15)
第10図	第1・2次 (下層) 遺構平面図 (古墳時代) .....	(16)
第11図	第1・2次 (下層) S X 301 平面図 .....	(17)
第12図	第1・2次 (下層) S X 301 土層断面図・木杭痕跡ち割り図 .....	(18)
第13図	第1・2次 (下層) S X 301 主体部平面図・見通し図 .....	(19)
第14図	第1・2次 (下層) S X 301 周溝内埴輪出土状況図 .....	(20)
第15図	第1・2次 (下層) S X 301 周溝内遺物出土状況図 .....	(21)
第16図	第1・2次 (下層) S X 302 平面図・断面図・土層断面図 .....	(22)
第17図	第1・2次 (下層) S X 302 遺物出土状況図 .....	(23)
第18図	第1・2次 (下層) S X 310 平面図・土層断面図 .....	(24)
第19図	第1・2次 (下層) S X 310 周溝内遺物出土状況図 .....	(25)
第20図	第1・2次 (下層) S X 312 平面図・土層断面図 .....	(26)
第21図	第1・2次 (下層) S X 312 西周溝遺物出土状況図 .....	(27)
第22図	第1・2次 (下層) S X 387 平面図・東周溝土層断面図 .....	(28)
第23図	第1・2次 (下層) 遺構平面図 (奈良時代) .....	(29・30)
第24図	第1・2次 (下層) S B 391・394 平面図・断面図 .....	(32)
第25図	第1・2次 (下層) S B 392・393・395 平面図・断面図 .....	(33)
第26図	第1・2次 (下層) S D 352 土層断面図、S D 357 遺物出土状況図、 S D 360 内遺物出土状況図 .....	(34)
第27図	第1・2次 (下層) S K 399 遺物出土状況図 .....	(35)
第28図	第1・2次 (下層) S F 366 平面図・土層断面図、 S F 396 平面図・土層断面図・断面図 .....	(36)
第29図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (1) .....	(40)
第30図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (2) .....	(41)
第31図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (3) .....	(42)
第32図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (4) .....	(45)
第33図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (5) .....	(46)
第34図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (6) .....	(47)
第35図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (7) .....	(48)
第36図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (8) .....	(49)
第37図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (9) .....	(50)
第38図	第1・2次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (10) .....	(51)

第39図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(11)	.....	(52)
第40図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(12)	.....	(53)
第41図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(13)	.....	(54)
第42図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(14)	.....	(55)
第43図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(15)	.....	(56)
第44図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(16)	.....	(57)
第45図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(17)	.....	(59)
第46図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(18)	.....	(60)
第47図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(19)	.....	(61)
第48図	第1・2次(下層)	遺構出土遺物実測図(20)	.....	(62)
第49図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(1)	.....	(63)
第50図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(2)	.....	(65)
第51図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(3)	.....	(66)
第52図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(4)	.....	(67)
第53図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(5)	.....	(68)
第54図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(6)	.....	(70)
第55図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(7)	.....	(71)
第56図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(8)	.....	(72)
第57図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(9)	.....	(73)
第58図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(10)	.....	(74)
第59図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(11)	.....	(75)
第60図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(12)	.....	(76)
第61図	第1・2次(下層)	包含層出土遺物実測図(13)	.....	(77)
第62図	第3次	調査区土層図	.....	(104)
第63図	第3次	下層断ち割り調査東壁土層断面図	.....	(105)
第64図	第3次	第5面遺構平面図	.....	(106)
第65図	第3次	SX701・703平面図・土層断面図・遺物出土状況図	.....	(107)
第66図	第3次	SX702平面図・土層断面図	.....	(108)
第67図	第3次	SX705平面図・断面図	.....	(109)
第68図	第3次	SD704平面図・断面図・遺物出土状況図、SB706平面図・断面図	.....	(110)
第69図	第3次	第4面遺構平面図	.....	(112)
第70図	第3次	SZ601・621平面図・遺物出土状況図	.....	(113)
第71図	第3次	第4面トレンチ配置図・東西トレンチ土層断面図	.....	(114)
第72図	第3次	第4面南北トレンチ土層断面図	.....	(115)
第73図	第3次	第3面遺構平面図	.....	(117)
第74図	第3次	SD502・503・504平面図・断ち割り図・断面図	.....	(118)
第75図	第3次	SD505・506、SA507・508平面図、SA507・508断面図、 SD505・506断面図	.....	(119)
第76図	第3次	SD505遺物出土状況図、SK501平面図・断面図、 SD505出土遺物実測図	.....	(120)
第77図	第3次	第2面遺構平面図	.....	(122)
第78図	第3次	SD401・402・403・404・405平面図・断面図	.....	(123)
第79図	第3次	SK406・SD407平面図・断面図、SB408平面図・断面図	.....	(124)

第80図	第3次 遺構出土遺物実測図(1)	(127)
第81図	第3次 遺構出土遺物実測図(2)	(128)
第82図	第3次 包含層出土遺物実測図	(130)
第83図	舞出北遺跡周辺の地形図	(163)
第84図	第1・2次調査区及び第3次調査区東壁土層図	(164)
第85図	舞出北遺跡遺構変遷図(1)	(165)
第86図	舞出北遺跡遺構変遷図(2)	(166)

#### 〈V 自然科学分析〉

図1	分析試料採取地点	(138)
図2	須恵器甕内赤色物質のX線回折図	(140)
図3	鍛冶関連遺物実測図(1)	(143)
図4	鍛冶関連遺物実測図(2)	(144)
図5	鍛造剥片3層分離型模式図	(152)
図6	Fe-O系平衡状態図	(152)
図7	舞出北遺跡とその周辺に立地する遺跡の位置図	(153)
図8	遺跡の位置と周辺の地形	(153)
図9	分析試料採取位置図	(155)
図10	分析試料採取層準の堆積物の累重状況	(155)
図11	植物珪酸体含量	(157)
図12	軟X線写真とそのトレース図	(158)

## 表 目 次

第1表	中勢道路(13~14工区)内遺跡調査経過表	(4)
第2~4表	第1・2次(下層) 遺構一覧表(1)~(3)	(37~39)
第5表	第1・2次(下層) 掘立柱建物一覧表	(39)
第6~28表	第1・2次(下層) 出土遺物観察表(1)~(23)	(80~102)
第29表	第3次 遺構一覧表	(125)
第30~33表	第3次 出土遺物観察表(1)~(4)	(133~136)
第34表	水田状遺構の規模	(165)

#### 〈V 自然科学分析〉

表1	放射性炭素年代測定	(139)
表2	暦年校正結果	(139)
表3	供試材の履歴と調査項目	(141)
表4	供試材の組成	(145)
表5	出土遺物の調査結果のまとめ	(150)
表6	花粉分析結果	(157)
表7	植物珪酸体含量	(157)



## 写 真 図 版

図版 1	第1・2次 (下層)	調査区遠景 (東から)	調査区遠景 (西から)
図版 2	第1・2次 (下層)	S X311 (北西から) S X388 (北東から) 古墳時代面全景 (13 ライン以南) (北から)	S X318、S K319 (北西から) S X388 土器閉塞状況 (南から)
図版 3	第1・2次 (下層)	S X301 主体部調査前状況 (北西から) S X301 埴輪出土状況 (西から) S X301 遺物出土状況 (西から)	S X301 西側周溝土層 (南から) S X301 遺物出土状況 (西から)
図版 4	第1・2次 (下層)	S X301 埴輪出土状況 S X301 主体部 (西から) S X301 埴輪列掘形検出状況 (南から)	S X301 埴輪直下須恵器出土状況 S X301 (西から)
図版 5	第1・2次 (下層)	S X301 木杭痕 1 (南東から) 作業風景 S X302 (北西から)	S X301 木杭痕 5 (北西から) S X302 馬歯出土状況 (西から)
図版 6	第1・2次 (下層)	S X310 南半部 (北東から) S X312 土器出土状況 (南東から) 奈良時代面全景 (13 ライン以南) (北から)	S X310 土器出土状況 (西から) S X387 (東から)
図版 7	第1・2次 (下層)	耕作溝群 (北東から) SD357 遺物出土状況 (東から) SD360 遺物出土状況 (西から)	SD308 (北東から) SD309 (南東から) SD352 (南東から)
図版 8	第1・2次 (下層)	S B392・393 (北から) S F366 (北から) 現地説明会風景	S B395 (北から) S F396 (北西から) S K399 (南東から) S Z363 (北から)
図版 9	第1・2次 (下層)	23、24、25、30	
図版 10	第1・2次 (下層)	31、44、45、47	
図版 11	第1・2次 (下層)	60、62、70、239、239 内面、239 内面拡大	
図版 12	第1・2次 (下層)	83・302~305・307・311、82・235・239・309・312~314	
図版 13	第1・2次 (下層)	23 線刻、24 線刻、25 線刻、31 線刻、23 タガ、23 底面、1、2	
図版 14	第1・2次 (下層)	5、7、11、11 鹿と龍、11 稲妻状、11 鹿、11 龍	
図版 15	第1・2次 (下層)	12 穿孔、13、13 拡大、17、20、21、22、111	
図版 16	第1・2次 (下層)	124 拡大、128、144、145、146、148、158、166	
図版 17	第1・2次 (下層)	167、168、174、175、187、188、190、191、192、206	
図版 18	第1・2次 (下層)	209、218、222、224、227、228、238、248	
図版 19	第1・2次 (下層)	249、253、254、255、263、256、265、269、274	
図版 20	第1・2次 (下層)	275、275 拡大、285、290、316、323、328、353 暗文	
図版 21	第1・2次 (下層)	345、346、350、367、380、408、427、428、430、434、481	
図版 22	第1・2次 (下層)	482 左、482 右、482 下、482 顔、493、240~244、245~247、 15・120・121・160・161・503・504・507~510、122	
図版 23	第1・2次 (下層)	84、164、176・177、527、523・524	
図版 24	第3次	調査前風景 (北から)	第5面全景 (北から)
図版 25	第3次	S X701 (北東から) S X701 南周溝土層断面 (西から) S X702 (北から)	S X701 遺物出土状況 (北から) S X702 北周溝土層断面 (西から)

図版 26	第 3 次	S X703 (東から) S B706 (北から) S X705 土層断面 (南から) 第 3 面包含層遺物出土状況 (西から) S X705 (北東から)
図版 27	第 3 次	S D704 (東から) S D704 遺物出土状況 (東から) S D704 遺物出土状況 (東から) 第 4 面全景 (北から)
図版 28	第 3 次	第 4 面全景 (北東から) S Z601 遺物出土状況 (北から) S Z601 遺物出土状況 (南から) S Z617 (西から) S D616 (西から)
図版 29	第 3 次	S Z621 遺物出土状況 (北から) 下層断ち割り調査風景 (南から) S D505 遺物出土状況 (西から) S D505 遺物出土状況 (北西から) 第 3 面全景 (北から)
図版 30	第 3 次	第 3 面南半部 (北東から) S D502・503・504 (西から)
図版 31	第 3 次	S D505・506、S A507・508 (西から) S D506、S A507・508 (西から) 第 3 面包含層遺物出土状況 (東から)
図版 32	第 3 次	第 2 面全景 (北から) S D401・402・403・404・405 (北西から)
図版 33	第 3 次	S D403 土層断面 (西から) S D405 土層断面 (東から) 作業風景 (東から) 調査後風景 (平成 20 年 4 月撮影:北東から) S B408 (西から)
図版 34	第 3 次	1、5、5 線刻、8、13、15、16、17
図版 35	第 3 次	18、19、25、37、38、41、42、56
図版 36	第 3 次	27、28、29、22、24、44、2~4・6・7・9・11
図版 37	第 3 次	12・14・20・21・23・31、34~36・39・40・43・45~47
図版 38	第 3 次	48~54、57~59・64・67、30・60・62・65、61・63・66

#### (V 自然科学分析)

図版 39	鍛冶滓片・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織
図版 40	椀形鍛冶滓・鍛冶滓片の顕微鏡組織
図版 41	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織
図版 42	椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織
図版 43	椀形鍛冶滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織
図版 44	椀形鍛冶滓・鍛冶鉄器片の顕微鏡組織
図版 45	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織
図版 46	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織
図版 47	E PMA調査結果[反射電子像及び定量分析値]
図版 48	植物珪酸体

# I 前 言

## 1 調査の契機

国道23号は近年、交通量が増加し、主要交差点では渋滞が発生している。そのような交通集中の緩和と周辺の適切な土地利用の誘導、ひいては生活環境の整備を進めるため、バイパス建設が計画された。このバイパス「中勢道路」は、鈴鹿市北玉垣町から松阪市小津町に至る総延長33.8kmの道路で、鈴鹿市・津市・松阪市の3市を通過する。

この計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、昭和58年度に計画路線内の分布調査を行った。その結果をもとに、建設省中部地方建設局（当時、以下同）と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現状保存が困難な遺跡は事前発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査主体は三重県教育委員会、調査は三重県埋蔵文化財センターが担当している。平成10～11年度は調査にあたって「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」にもとづき、津市教育委員会から平成10年度は2名、平成11年度は1名の派遣職員を得た。また現地作業は、調査の円滑を期して建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託していた。

事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・社団法人中部建設協会の三者で昭和63年4月8日付け「協定書」（9・10工区対象）を締結し、事業を推進してきた。その後工事計画の進展に合わせて、平成3年10月31日付けで「変更協定書（第1回）」（6工区追加）を、平成5年9月7日付けで「変更協定書（第2回）」を、平成10年3月31日付けで「変更協定書（第3回）」（新発見2遺跡の追加と期間延長）を締結し、調査計画と道路建設事業との調整を図った。平成10年度には、平成11年3月31日付けで改めて6・8～10・13（震出川以南4遺跡）・14工区を対象とした「埋蔵文化財発掘調査協定書」（平成16年3月31日まで）を締結し、11年度以降の事業を推進することとした。

さらに、平成16年度3月31日付けで「変更協定書（第1回）」を、平成18年3月30日付けで「変更

協定書（第2回）」を締結し、三者体制は終了した。平成18年度以降は現地作業を含めた委託契約書が中部地方整備局と三重県で締結され、事業を推進している。

## 2 調査の体制

〔平成10年度〕

主幹兼調査第二課長	吉水康夫
主査兼第三係長	本堂弘之
主 事	宮田勝功
技 師	西村美幸
派遣主事	村木一弥 山口 格 (津市教育委員会から派遣)
業務補助員	市川嘉子 黒川敬子 太田浩子 蒔田やよい 森川絹代 新田智子 倉田由起子 鈴木 妙
調査補助員	池野香代 酒井巳紀子 西脇智宏

〔平成11年度〕

主幹兼調査第二課長	吉水康夫
主査兼第三係長	本堂弘之
技 師	川畑由紀子
派遣主事	山口 格 (津市教育委員会から派遣)
業務補助員	市川嘉子 黒川敬子 太田浩子 蒔田やよい 森川絹代 新田智子 倉田由起子 三谷 妙 中西千鶴
調査補助員	小林俊之 西脇智宏

〔平成12年度〕

主幹兼調査第二課長	吉水康夫
主 幹	新田 洋
主査兼第三係長	森川常厚
技 師	川畑由紀子

臨時技術補助員	川崎志乃	瀬野亦知世
業務補助員	黒川敬子	太田浩子
	蒔田やよい	森川絹代
	新田智子	倉田由起子
	中西千鶴	
調査補助員	西脇智宏	山田詩奈
	北川祐樹	

〔平成13年度〕

主幹兼調査第二課長	新田 洋	
主査兼第二係長	本堂弘之	
主 事	川合圭子	中川 明
	東 敬義	
技 師	川畑由紀子	
臨時技術補助員	川崎志乃	瀬野亦知世
業務補助員	黒川敬子	太田浩子
	蒔田やよい	森川絹代
	倉田由起子	中西千鶴
	早川陽子	
調査補助員	西脇智宏	

〔平成16年度〕

主査兼調査研究Ⅱグループリーダー	泉 雄二	
中勢道路担当（津市駐在）		
主 査	辻本泰宏	上村安生
主 事	船越重伸	福島伸孝
技 師	山中由紀子	
臨時技術補助員	川崎志乃	坂 佳彦
業務補助員	黒川敬子	太田浩子
	蒔田やよい	森川絹代
	宇河由起子	山口香代
	中西千鶴	浜崎佳代
	堀 さや子	

〔平成19年度〕

主幹兼調査研究Ⅱ課長	田村陽一	
中勢道路担当（松阪市駐在）		
主 幹	上村安生	
主 査	藪部英幸	
主 事	浅尾 太	石井康晴
技 師	原田恵理子	水谷 豊

臨時技術補助員	角正芳浩	野島美沙子
業務補助員	才木 薫	小林俊之
	黒川敬子	太田浩子
	森川絹代	北岡佳代子
	山口香代	西山実公子
	中西千鶴	浜崎佳代
	中村敬子	小倉靖子

〔平成20年度〕

主幹兼調査研究Ⅱ課長	田村陽一	
中勢道路担当（松阪市駐在）		
主 幹	上村安生	
主 査	藪部英幸	
主 事	浅尾 太	前野謙一
技 師	原田恵理子	水橋公恵
	野島美沙子	
臨時技術補助員	才木 薫	
業務補助員	太田浩子	黒川敬子
	森川絹代	北岡佳代子
	山口香代	西山実公子
	中西千鶴	浜崎佳代
	中村敬子	小倉靖子

〔平成21年度〕

主幹兼調査研究Ⅱ課長	田村陽一	
中勢道路担当（松阪市駐在）		
主 査	松葉和也	藪部英幸
主 事	浅尾 太	西口剛司
技 師	水橋公恵	野島美沙子
業務補助員	太田浩子	黒川敬子
	森川絹代	北岡佳代子
	平井治代	山口香代

### 3 調査の経過

#### a 経過概要

舞出北遺跡の発掘調査は、平成10年度の範囲確認調査に始まる。その後、範囲確認調査結果を受けて平成11年度（第1次）・12年度（第2次）に発掘調査を行った。第1次調査では平安時代から室町時代の土層遺構検出面2,890㎡の調査（平成11年6月2日～同年10月16日）と、弥生時代から奈良時代の



第1図 調査区位置図 (1:5,000) [三雲町、礪野町都市計画図1:2,500より作成]



第2図 中勢道路(13～14工区)内遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院1:25,000松阪港、大仰より作成]



## 4 調査の方法

### a 掘削の方法

掘削については、表土及び旧耕作土まで重機を用いて行った。次いで、排水対策を兼ねた層位確認用トレンチを第1次・第2次調査では北・西・東壁に沿って、第3次調査では4方の壁に沿って人力で掘削した。その後、層位確認トレンチにおいて判断した遺物包含層を人力にて掘り下げた。遺構検出については雲出川という大河川脇の微高地のため困難を極め、何度か精査を重ねた。遺構掘削についても、中世遺構検出面から20 cm程下で下層にあたる奈良時代面になることから、掘削終了の判断がつきにくい状況がまま見られた。

### b 地区設定について

三重県埋蔵文化財センターでは、地区名は東西方向を算用数字、南北方向をローマ字としているが、中勢道路は道路建設に伴う調査のため、南北に調査区が長くなる可能性が高いことから、東西方向（道路短辺）をローマ字、南北方向（道路延長）を算用数字とし、道路予定センターラインをMラインとNラインではさんでいる。東西に任意の基準線を設定し、4 m方眼の北西隅の交点をその小地区の符号とした。

### c 遺構カードについて

遺構カードは小地区ごとに作成し、間筆を用いて遺構の略測図（縮尺1/40）、遺構埋土の土質・色調、遺構の重複等を記載した。

### d 遺構図面について

遺構平面図は第1・2次下層調査で検出した方形周溝墓群は航空測量を実施し、図化した。その他、第1・2次下層調査で検出した奈良時代の遺構面は縮尺1/20で作成し、第3次調査の各遺構面は縮尺1/50で平板測量を行い、それぞれ作成している。また出土状況図などについては個別に縮尺1/10、もしくは縮尺1/20の実測図を作成した。

### e 遺構写真について

記録保存・普及公開に必要と判断した遺構について、その状況・内容にあった画角・フィルムサイズで撮影を行った。

基本的に、4×5 inch判・ブローニー判（ウイスタSP）・35 mm（ニコンF401・F3）で撮影した。

フィルムは、モノクロネガとカラーリバーサルを使用した。

## 5 整理作業の方法

調査で出土した土器類は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄、乾燥、接合等の1次整理作業が行われた。1次整理作業後、遺物の選別作業を行い、遺物実測を行った。実測図等が完成した遺物は、報告書作成のためのレイアウトを作成し、報告書番号順で保管・管理作業を進めた。遺物実測を行わなかったものは、出土遺構毎に、包含層等はグリッド毎にまとめ、遺物整理箱に番号を付し、保管・管理作業を行った。

遺物写真は、主だったものについて4×5 inch判又は6×9 cm判で撮影した。

木製品は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄し、水漬けて一時保管した。また鉄製品は調査現場で取り上げ後速やかに付着した土を除去し、可能な限り密閉状態にして一時保管した。これらの遺物のうち可能なものは実測を行い、特に残存度の良好なものは4×5 inch判又は6×9 cm判で写真撮影を行った。平成11年度以降、保存処理作業を進めた。

なお、発掘調査に関連する資料類には、図面（平面図・土層断面図・航測図面など）、遺構カード（縮尺1/40）、調査日誌、写真類などがある。また、整理段階で作成された遺物実測図、遺物写真などがある。これらは所定の番号を付け、当センターにて保管している。

また、自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管している。

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

舞出北遺跡(1)は松阪市舞出町字西沖に所在する。ここは、平成17年の市町合併前まで、一志郡三雲町舞出であった。

当遺跡は、伊勢平野中部を流れる雲出川によって形成された沖積平野の下流域右岸に位置する。遺跡のすぐ北側は雲出川である。

雲出川は、三重・奈良県境にある高見山地を水源とし、伊勢平野を東流して伊勢湾へ注ぎ込む。この川は、三重県内でも有数の河川のひとつであり、流域では古来より多くの文化を育んできた。

調査区周辺の地形を見ると、当遺跡周辺は舞出集落を中心として標高5.2～5.9mの微高地になっており、発掘調査区はその西端にあたる。

### 2 舞出北遺跡上層の成果

舞出北遺跡は弥生時代から江戸時代までの複合遺跡で、平安時代以降(第1・2次調査上層)の遺構・遺物については既に報告済である<sup>1)</sup>。これについて概要のみ触れておきたい。

上層の調査では、平安時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認したが、中心は鎌倉時代・戦国時代で、当該期の良好な集落跡である。時期別に、簡単にまとめておく。

**平安時代** 掘立柱建物や溝、墓、耕作溝群を検出している。これらの遺構は大きく2時期に細分することが可能で、掘立柱建物や溝、墓は11世紀代、耕作溝群はやや遅れた時期(12世紀代か)のものである。これらの遺構のうち、墓は小刀を副葬する土壌墓で、比較的良好なものである。

**鎌倉時代** 溝により区画された屋敷地群を検出している。屋敷地は8区画を検出しているが、掘立柱建物は1棟しか確認されていない。ほかに井戸、積石を伴う土壌墓等が屋敷地内より検出されている。時期は12世紀後半から13世紀後半までである。

遺物としては、当該期の遺構はもちろん、戦国期の遺構からも大量に出土している。このため、集落

としてはかなり大きいものであった可能性もある。また、特筆しておくべき事項として、わずかながらも京都系土師器皿(「て」の字状口縁土師器皿)が出土していることである。ほか、山茶碗については、内面の磨耗等から大半が使用されているものと考えられており、産地としては尾張と瀬美の比率がほぼ5対5との指摘がされている。

**戦国時代** 14世紀から15世紀前半の空白期の後、再び集落が形成されている。この時期にも溝により区画された屋敷地群を検出している。屋敷地は8区画検出しており、南北の溝は規模が大きいが、東西の溝は非常に規模の小さいものであることが指摘できよう。

その屋敷地の内部には、掘立柱建物、井戸を検出している。掘立柱建物は全部で4棟確認している。また、井戸には覆屋が伴っているものがあり、当時の生活を考える上で非常に興味深い。

この時期の遺物も、土師器類を中心に多数出土している。土師器類は南伊勢系のもので大半を占めているが、わずかに中北勢系のもも認められる。雲出川がその両者の境との指摘もあり<sup>2)</sup>、当遺跡の出土状況は注目に値するものである。

**江戸時代** 炭化木を検出した土坑1基を確認したのみである。

### 3 周辺の遺跡

ここでは、今回の報告に関わる、弥生時代から奈良時代までの周辺遺跡等の歴史的環境について見ていきたい。なお、舞出北遺跡周辺の遺跡については、これまでに多くの報告書でさらに詳細に触れられてきているため、そちらを参照されたい<sup>3)</sup>。

#### a 弥生文化の流入

この地域は、伊勢平野でも弥生文化の伝播が早い地域として知られる。代表的な遺跡として中ノ庄遺跡(8)があり、亞流遠賀川式土器が出土したことで有名である<sup>4)</sup>。また、筋違遺跡(9)では前期の水田が検出された<sup>5)</sup>。これらの資料により、弥生文化の



東方伝播が近年再び語られるようになってきている。

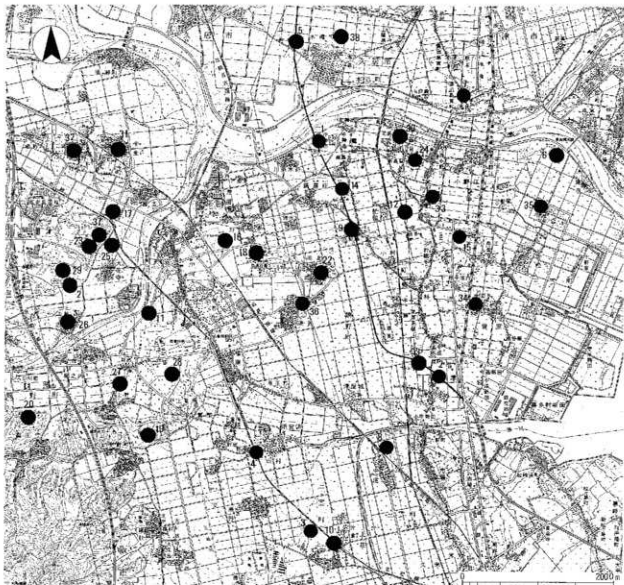
そのほか、弥生時代の遺跡としては、下之庄東方遺跡(11)で、弥生時代全般を通じて方形周溝墓や竪穴住居が検出されている<sup>6)</sup>。小谷赤坂遺跡では、丘陵頂部に後期前半の環濠を巡らせた集落が検出されている<sup>7)</sup>。前述の筋違遺跡では、中期末の方形周溝墓や後期の竪穴住居も確認されている。また、片野

遺跡(32)も良好な弥生時代の遺跡として知られている<sup>8)</sup>。

#### b 前方後方墳と古墳文化

古墳時代になると、前期初頭に方形周溝墓群が築かれており、前田町屋遺跡(6)<sup>9)</sup>、雲出島貫遺跡(7)<sup>10)</sup>などで見られる。

これらにやや遅れて築かれるのが、この地域でよ



1. 舞出北遺跡 2. 小湊遺跡 3. 上ノ庄北出遺跡 4. 田村西都古遺跡 5. 木道赤坂遺跡 6. 前田町屋遺跡
7. 雲出島貫遺跡 8. 中ノ庄遺跡・中ノ庄古墳 9. 筋違遺跡 10. 上ノ庄宮ノ腰遺跡 11. 下之庄東方遺跡
12. 西肥留遺跡 13. 中林・中道遺跡 14. 赤部遺跡 15. 松本権現前遺跡 16. 片部遺跡 17. 堀田遺跡
18. 西山古墳 19. 西山古墳 20. 駒山古墳 21. 筒野1号墳 22. 庵ノ門1号墳 23. 小谷赤坂遺跡・小谷古墳群
24. 小野江養自遺跡・小野江菘百古墳群 25. 天花寺廃寺 26. 一志廃寺 27. 二野廃寺 28. 掃部廃寺
29. 中谷廃寺 30. 観音寺権定地 31. 平生遺跡 32. 片野遺跡 33. 佐藤氏館跡 34. 曾原城跡 35. 曇合城跡
36. 須賀城跡 37. 天花寺城跡 38. 木道城跡

第3図 舞出北遺跡周辺の遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院1:25,000 松阪港、大仰より作成]

く見られる前方後方墳である。西山古墳(18)、向山古墳(19)、鯖山古墳(20)、筒野1号墳(21)、庵ノ門1号墳(22)が挙げられ、このうち筒野1号墳からは三角縁神獣鏡が2面出土している<sup>11)</sup>。当地域の豪族の力の大きさと大和朝廷との関係、当地域が伊勢平野における重要地域であったことを物語っている。

その後、天花寺丘陵上では中期から後期にかけて、馬ノ瀬・小谷・清水谷古墳群など100基以上の古墳が確認されている。特に小谷古墳群(23)の13号墳では、三角板鋸留短甲が出土している。

後期になると、小野江甚目古墳群(24)や中ノ庄古墳(8)が確認されている。これらの古墳では、周溝から円筒埴輪が出土しており、特に小野江甚目古墳群では馬形埴輪が、中ノ庄古墳では人物埴輪や家形埴輪が出土している。当遺跡でも埴輪が多数出土しており、この地域の埴輪文化を考えるための貴重な資料である<sup>12)</sup>。また、これらの古墳は沖積低地に立地するため、低地での古墳のありかたを問題提起した遺跡でもある。当遺跡で検出した古墳を考える際の重要な資料である。

このほかに、集落として、前期で赤部遺跡(14)<sup>13)</sup>、松本権現前遺跡(15)<sup>14)</sup>、中期から後期にかけては上ノ庄宮ノ腰遺跡(10)<sup>15)</sup>などが確認されている。

### c 古代一志郡の繁栄

古代、この地域は一志郡に属した。一志郡は中央と伊勢との交通の要地と考えられており、「一志駅家」の設置や古代寺院の集中がそれを物語る。

この地域の古代寺院には、天花寺廃寺(25)、一志廃寺(26)、上野廃寺(27)、嬉野廃寺(28)、中谷廃寺(29)が知られている。特に、天花寺廃寺では発掘調査が行われ、法起寺式の伽藍配置で、複線廻廊文を施す川原寺式軒瓦が出土することが確認された<sup>16)</sup>。

また、「宮古」の地名にあたる堀田遺跡(17)では、精緻な暗文が入った土師器(畿内系暗文土師器)が出土しており、前述の古代寺院の分布等とも併せ考えると、この辺りが古代一志郡の中心地であった可能性もある<sup>17)</sup>。なお、暗文土師器は平生遺跡(31)、片野遺跡(32)、天花寺北瀬古遺跡でも出土している。

### 【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『舞出北遺跡発掘調査報告』2007
- 2) 伊藤裕彦「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚え書」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999
- 3) 前掲註1)のほか、三重県埋蔵文化財センター『小津遺跡発掘調査報告』2007や三重県埋蔵文化財センター『筋違遺跡発掘調査報告-第1分冊-』2004など。
- 4) 三重県教育委員会『中ノ庄遺跡発掘調査報告』1972
- 5) 三重県埋蔵文化財センター『筋違遺跡発掘調査報告-第1分冊-』2004
- 6) 三重県教育委員会『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要1 下之庄東方遺跡(高畑地区)』1987 同『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要2 下之庄東方遺跡(小野・四反畑・夜ノ塚地区)』1988
- 7) 三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』1996 同『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-1』2005 同『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ』2000 同『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅴ』2005 同『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』2005 同『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅶ』2005
- 8) 三重県教育委員会『片野遺跡発掘調査報告』1985 一志町教育委員会『片野遺跡発掘調査報告』1986 同『片野遺跡第三次発掘調査報告』1989 同『片野遺跡Ⅳ』2002
- 9) 三重県埋蔵文化財センター『前田町屋遺跡(第1次)発掘調査報告』1997 同『前田町屋遺跡第2次調査-前田地区・大名神社地区-』1999
- 10) 三重県埋蔵文化財センター『鳩抜 第1次調査』1998 同『鳩抜Ⅱ』2000 同『鳩抜Ⅲ』2001
- 11) 嬉野史編纂室編『嬉野史 考古編』2006など。
- 12) 三重県埋蔵文化財センター『小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告』1999 前掲註4)
- 13) 松阪市教育委員会『赤部遺跡発掘調査報告』2006
- 14) 三重町教育委員会『松本権現前遺跡発掘調査報告』1999 同『松本権現前遺跡第2次発掘調査報告』2002
- 15) 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』1997
- 16) 三重県教育委員会「天花寺廃寺」『昭和55年度県営岡場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1981
- 17) 三重県埋蔵文化財センター『堀田 第3～5次調査』2002 同『堀田 第6次調査』2005

### Ⅲ 第1・2次調査(下層)の遺構と遺物

#### 1 遺構

##### a 基本層序(第4・5図)

当該調査の基本層序は、概ね上層から1層表土、2層戦国時代から江戸時代以前の包含層(オリブ褐色極細砂:2.5Y4/4)、3~5層中世包含層(褐色極細砂:10YR4/4 褐色シルト:10YR4/4 にぶい黄褐色シルト:10YR5/3)、6層・69層の上面が中世検出面(黄褐色シルト:2.5Y5/4 オリブ褐色シルト:2.5Y4/3)、9・10・70層奈良時代包含層(黄褐色シルト:2.5Y5/3 暗灰黄色シルト:2.5Y5/2 黄褐色シルト:2.5Y5/4)、11・12・71層の上面が奈良時代検出面(6層よりやや砂質の黄褐色シルトと9層が混じる 灰オリブシルト:5Y5/3 褐色砂質土:10YR4/4)、16~18層古墳時代包含層(オリブ褐色シルト:2.5Y4/3 に黄褐色シルトブロック:10YR5/6 を含む 18層にオリブ褐色極細砂:2.5Y4/3 とオリブ褐色シルト:2.5Y4/6 がブロック状に混入 黒褐色シルト:2.5Y3/2)、22・77層が弥生時代後期から古墳時代後期検出面(黄褐色シルト:10YR5/6 にぶい黄褐色弱粘質土:10YR4/3)、23・77・78層が弥生時代後期までの包含層(オリブ褐色シルト:2.5Y4/4 にぶい黄褐色弱粘質土:10YR4/3 黄褐色シルト:10YR5/6)となる。

上層の報告書でも記述しているように、当遺跡は沖積地に立地しているため、層位確認・層序の把握が非常に困難であった。調査区北西部分はほ場整備の際の変更により中世遺構面下まで削り取られており、中世の遺構は確認できなかった。

下層調査は、調査区12列以北を第1次調査として、13列以南を第2次調査として行っている。奈良時代包含層は北へ行くほど薄くなっていくこともあり、第1次調査では奈良時代遺構面を捉えることができず、古墳時代遺構面と同時に奈良時代の遺構を調査した。第2次調査では、第1次調査の結果を踏まえ、奈良時代遺構面・古墳時代以前遺構面の2面と一部最下層の確認調査を行った。そのため、第1次調査と第2次調査で遺構検出面が異なっている。

また、調査区中央部以南では古墳墳丘盛土が比較

的良好に残存しており、古墳墳丘盛土の上面が奈良時代および古墳時代検出面となった箇所もある。

このように複雑な要素が絡み、後に行った第3次調査時ほど検出面が明確にできなかったものの、検出時の遺構埋土、重複関係、周囲の遺構との関連性、出土遺物等から時期の検討を行った。

第3次調査との対応関係は、第1・2次(下層)調査で確認された弥生時代後期から終末の遺構が第3次調査第5面、古墳時代中後期の遺構が第3次調査第3面、奈良時代の遺構が第3次調査第2面に概ね相当する。

以下、時期別に主要遺構について記述する。

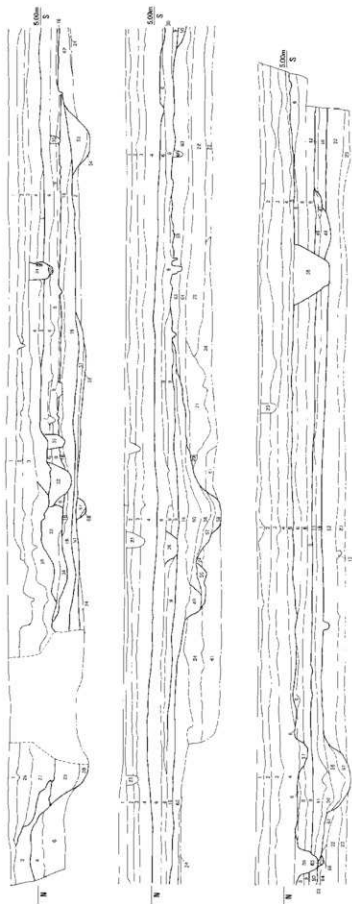
##### b 弥生時代後期から終末の遺構(第6図)

周溝墓3基、土坑1基、不明遺構1基を確認した。確認した周溝墓は調査区北部で方形周溝墓が2基、調査区南部で円形周溝墓が1基である。調査区中央部では当該期の遺構は確認していない。

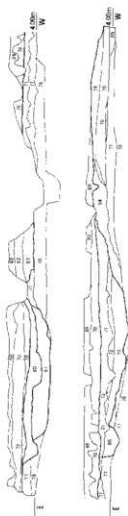
**方形周溝墓SX311(第7・8図)** 調査区北西部に位置している周溝墓で、周溝の南半分のみ確認した。周溝の平面形態は、西半部を見る限り緩やかな弧を描くようにみえ円形になる可能性があるものの、M9グリッド以東は直線的に東北東へ延びるため、M9グリッドを南西隅とする方形周溝墓と捉えておきたい。方形と見るならば、東側周溝が確認できなかったことになる。もっとも、古墳SX302周溝によって削平された可能性も想定される。方形周溝墓の規模は推定17m程度になり、主軸方向は概ねN30°Eとなる。周溝の幅は約0.9m、深さは検出面から約30cmである。墓の南東部にあたるN9グリッドの周溝内から土器が一括出土した(第29図1・2・5・6)。なお、主体部は確認できなかった。

**方形周溝墓SX318(第8図)** 調査区北東部に位置している。規模は南北方向8.5m、東西方向9m程度で、主軸方向はN20°Eである。周溝の南西部は途切れ、東側周溝は確認できなかった。古墳SX302の周溝によって削平された可能性も考えられる。周溝は幅0.7~1.2m、深さは最深部で検出

〈調査区東型〉

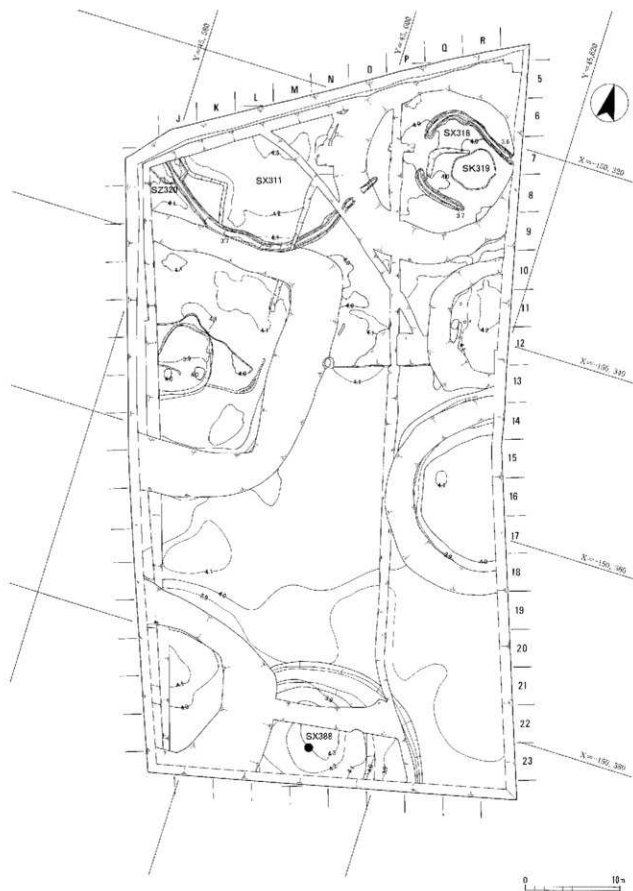


〈調査区10列土層図〉

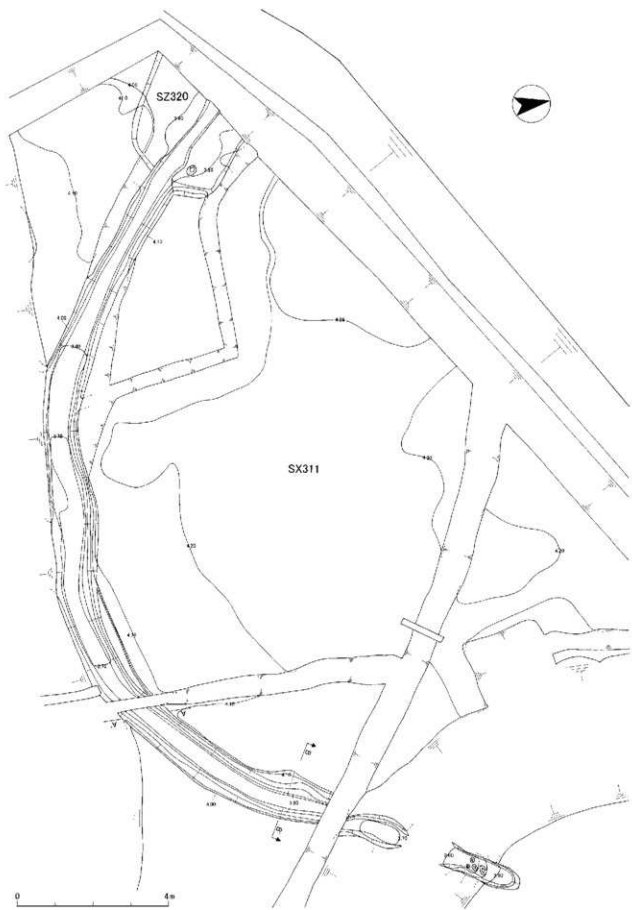


第4図 第1・2次(下層)調査区土層図(1)(長さ1:120、深さ1:100)

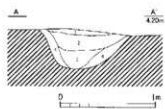




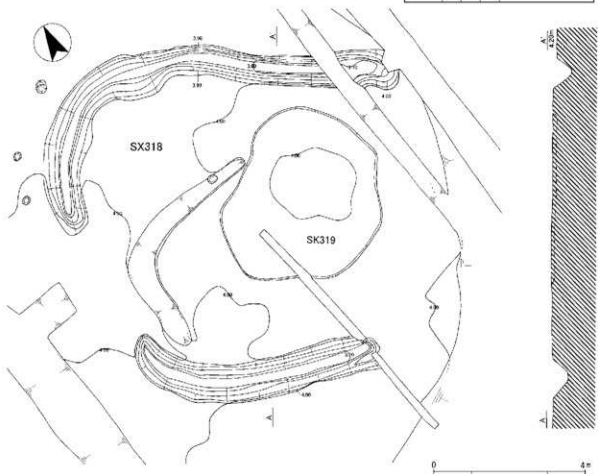
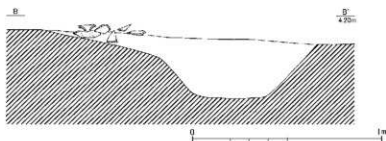
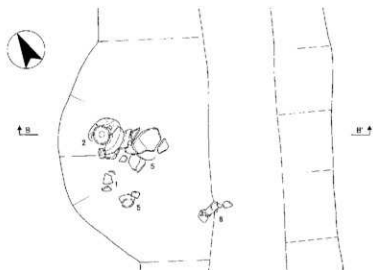
第6図 第1・2次(下層)遺構平面図(弥生時代)(1:400)



第7図 第1・2次(下層)SX311平面図(1:100)



- 1 2層と3層が混じるシルト (砂質強い)  
 2 暗褐色シルト (砂質強い)  
 3 暗褐色粘質土  
 4 茶褐色粘質土



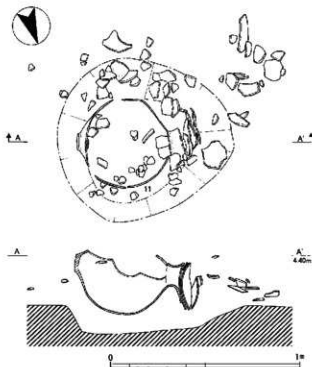
第8図 第1・2次(下層)SK311周溝土層断面図(1:40)・遺物出土状況図(1:20)、SK318・SK319平面図(1:100)



面より 38 cm 下がっている。なお、主体部は確認できなかった。

**円形周溝墓 SX388** (第9図) 調査区南端で周溝墓の北半を確認した。周溝西側が古墳 SX387 によって削平されているが、規模は径 17m 以上である。周溝は円形に巡るとみられるが、当調査区から 14m 程南に位置している第3次調査区ではその続きが確認できなかった。周溝の幅は狭い部分で 2.8m、広い部分で 6m である。墳丘は古墳時代遺構検出面での調査より確認しており、墳頂部から周溝底部の比高差は少なくとも 50 cm 以上あったと推定される。

墳頂部からは弥生土器広口壺 (第30図 11) が出土した。この広口壺は器高 54.9 cm、体部最大径 49 cm と大型のもので、横位で検出した。口縁部には別個体の壺体部片で蓋をした状態で出土した。これらの状況から広口壺が棺として用いられたのではないかと推察される。しかし、調査時に土器棺の周囲を掘り下げてしまったため、土器棺を埋置した土坑は検出することができなかった。なお、土器棺として用いられたと推定される広口壺の体部肩にはヘラ状工具で絵画等が描かれている。



第9図 第1・2次(下層) SX388 遺物出土状況図 (1:20)

**土坑 SK319** (第8図) 調査区北東部に位置している平面不定形で深さ 9 cm の土坑である。方形周溝墓 SX318 の周溝に囲まれているが、土坑の平面形態から方形周溝墓 SX318 の主体部とは考え難い。

**不明遺構 SZ320** 調査区北西隅に位置している長さ 2.4m 以上、幅 3.0m、深さ 10 cm の不定形の遺構である。重複関係は、方形周溝墓 SX311 より古いことを確認している。

### c 古墳時代中後期の遺構 (第10図)

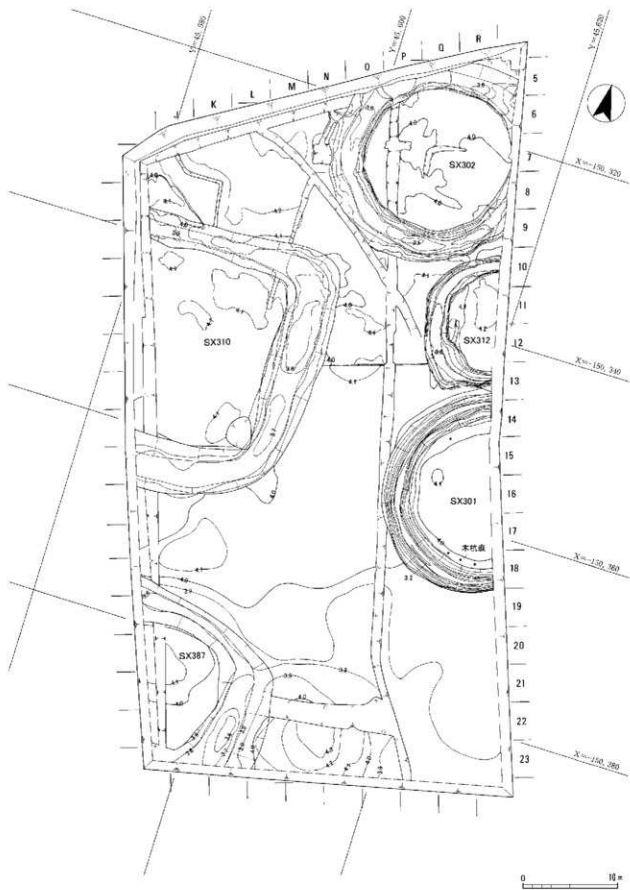
古墳5基を確認した。確認した古墳は円墳3基、方墳2基である。

#### 古墳 SX301【舞出北4号墳】(第11~15図)

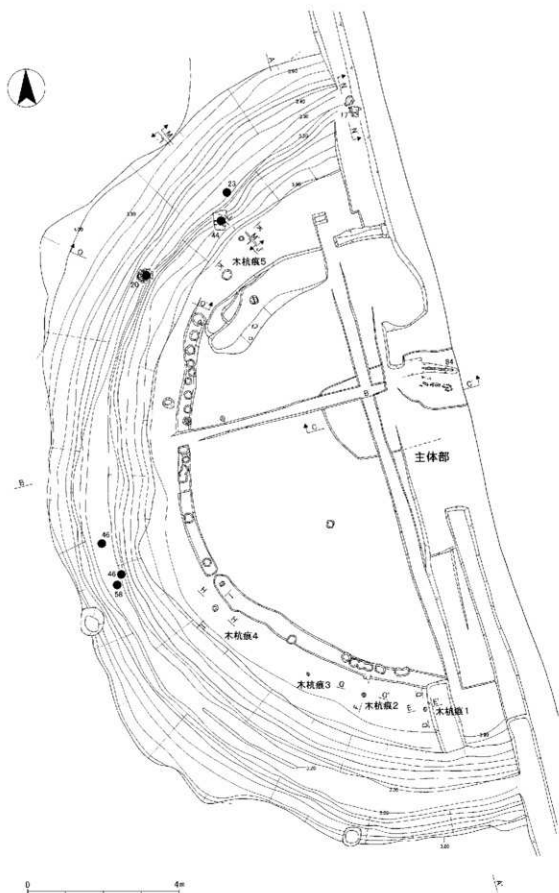
調査区中央東側に位置している円墳で、西半分のみ確認した。規模は周溝も含めて径 20.8m である。南北トレンチでの土層観察から墳丘盛土は頂部が後世の遺構面によって削平されているものの、標高 4.5m 辺りまで確認できた。墳丘基底部から 55 cm 程度の盛土が残存しており、主体部の残存の程度からみて少なくとも 1m 以上の盛土がなされていたとみられる。

周溝は検出面で幅 3m、残存部分での墳頂部との比高差約 1.4m (周溝底部の標高 3.11m) である。古墳西側の周溝底部からは、ベンガラを入れた可能性が高い須恵器甕 (第32図 21) が出土した。この須恵器甕は体部を丸く打ち欠き、打ち欠いた部分を上にした横位で、かつその上に埴輪片を蓋にした状態で確認した。出土状況から意図的に置いたものと考えられる。また、周溝埋土から埴輪・土器などが多く出土したが、これらは墳丘にあったものが古墳築造後まもなく転落したとみられる。

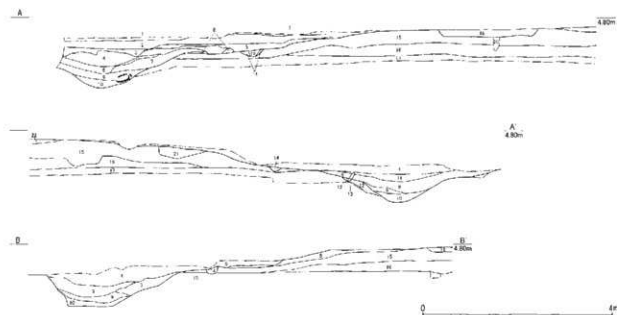
周溝内法から墳丘側へ約 1.5m 入った所で、周溝にはほぼ平行して埴輪掘形が検出された。埴輪掘形は幅 30~40 cm、深さ 3~5 cm 程度と浅く、いわゆる布掘状となっており、溝内には埴輪を据えたと想定される径 25 cm 程度、溝底からの深さ 3 cm 前後の小穴も一部で確認できた。また、周溝と埴輪布掘底の間では径 5 cm 程度の小穴を 5箇所確認した。この小穴は北西部分で1箇所、南西部分で4箇所確認し、そのうち南西部分の3箇所(木杭痕1~3)については



第10图 第1・2次(下層)遺構平面図(古墳時代)(1:400)



第11图 第1・2次(下層)SX301平面図(1:100)



- 1 オリーブ粘シルト(2.SY4/6) (奈良色)
- 2 灰オリーブシルト(av5/3) 炭屑細砂(2.SY3/4)がラミナ状に入る (奈良遺構埋土)
- 3 灰オリーブシルト(av5/3) オリーブ粘シルトブロック(2.SY4/6)多く含む (奈良遺構埋土)
- 4 緑オリーブ粘シルト(2.SY3/3) (河津岸土域扇形内埋土)
- 5 オリーブ粘シルト(2.SY4/3) (積上粘土)
- 6 黒褐色粘質土(2.SY3/2) (河津埋土)
- 7 粘シルト(10YR6/4) (河津埋土)
- 8 オリーブ粘シルト(2.SY4/2) (積上埋土)
- 9 オリーブ粘質粘質土(5Y3/2) 粘シルトブロック(10YR4/4)多くラミナ状に入る (河津埋土)
- 10 緑オリーブ粘粘質土(2.SY3/3) 炭化物多く入る (河津埋土)
- 11 粘粘シルト(10YR3/4) (河津埋土)
- 12 オリーブ粘シルト(2.SY4/6) (積上埋土)
- 13 炭粘シルト(2.SY5/4) (構造物の底層)
- 14 灰オリーブシルト(av6/2) 明黄褐色砂(2.SY6/5)多く含む (扇形内埋土)
- 15 明黄粘シルト(2.SY6/5) 白色粘層砂粒と灰質シルトブロック(2.SY7/4)を多く含む
- 16 黄粘シルト(2.SY5/4) 黄粘ブロック(10YR7/5)多く含む
- 17 炭粘シルト(2.SY5/4) オリーブ粘シルト(2.SY4/4)を多く含む
- 18 灰黄シルト(2.SY6/2) (主部埋土)
- 19 緑灰質シルト(2.SY5/2)
- 20 緑灰質シルト(2.SY5/2)
- 21 灰オリーブシルト(2.SY6/2) 黄粘粒(10YR7/6) 炭分を多く含む
- 22 土色空欄なし

木杭痕1

D D' 4.40m E E' 4.40m



木杭痕2

F F' 4.40m G G' 4.40m



木杭痕4

H H' 4.40m I I' 4.40m



木杭痕5

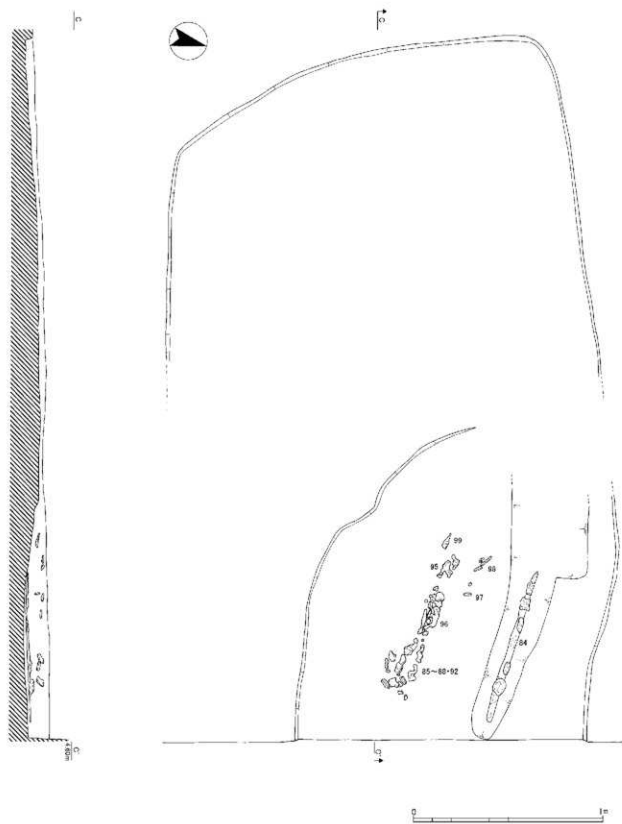
J J' 4.40m K K' 4.40m



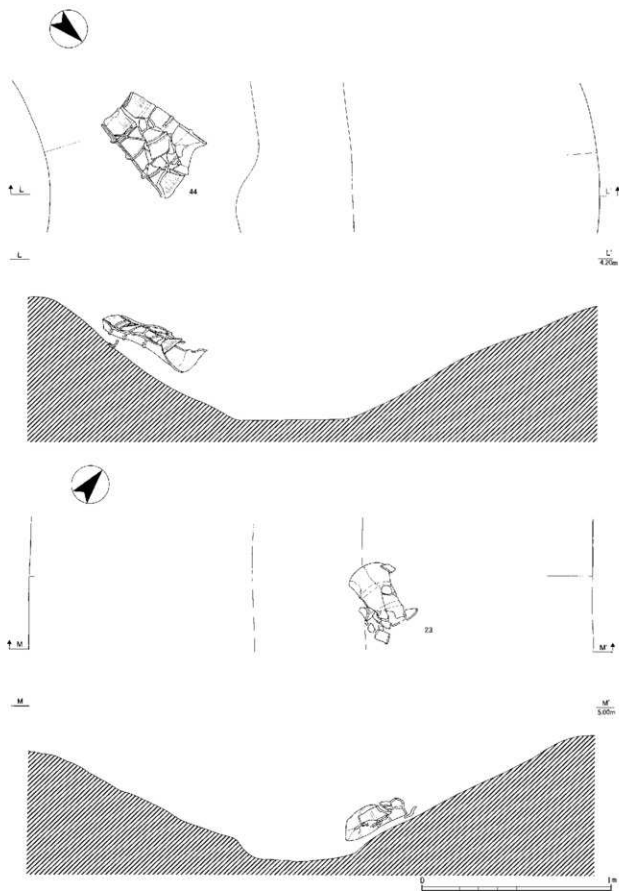
- 1 緑灰黄色シルト(2.SY5/2) 積灰層
- 2 灰黄色シルト(2.SY7/3) 粘の腐蝕による融化
- 3 炭質色シルト(10YR6) 積土
- 4 黄褐色シルト(10YR7/8) 炭分沈着部分

0 2m

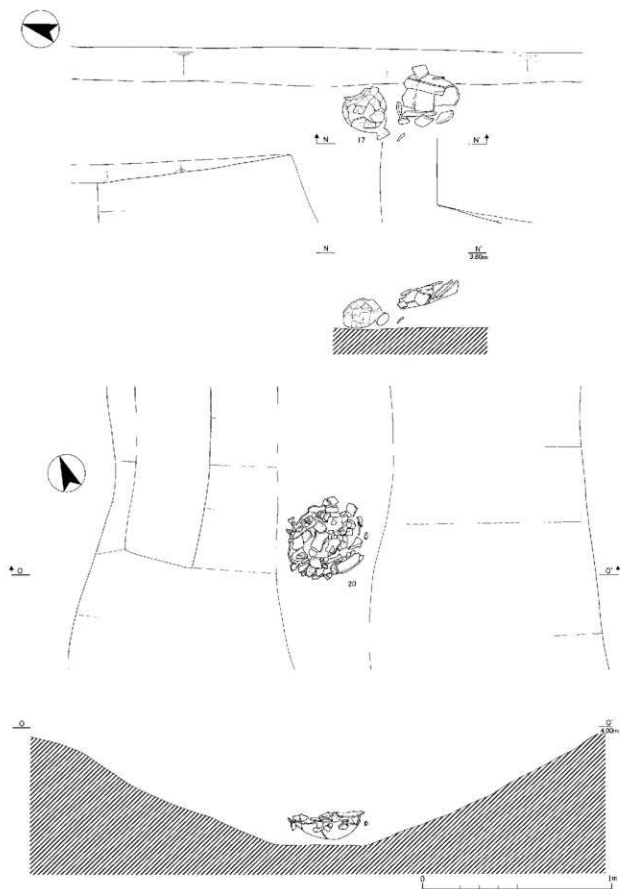
第12図 第1・2次(下層)SX301土層断面図(1:80)・木杭痕断ち割り図(1:40)



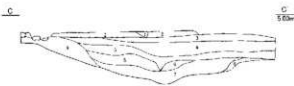
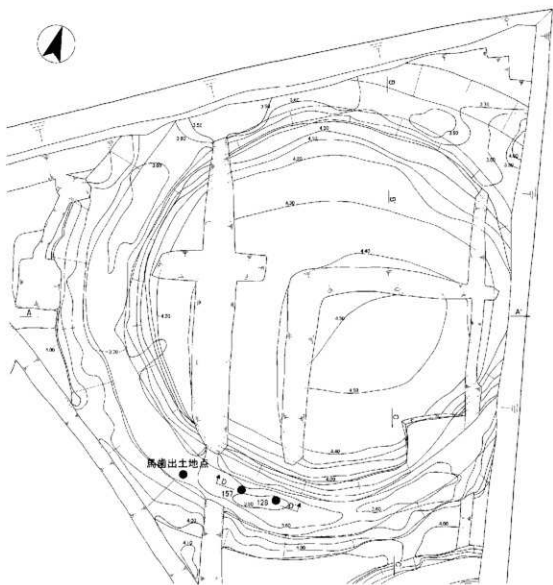
第13图 第1・2次（下層）SX301主体部平面図・見通し図（1：20）



第14图 第1・2次(下層)SX301周溝内埴輪出土状況図(1:20)



第15圖 第1・2次(下層)SX301周溝内遺物出土狀況圖(1:20)



- 1 明褐色土
- 2 黄褐色シルト(中世を形成する層)
- 3 黄土
- 4 黄褐色砂質土
- 5 暗褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土(砂混入)
- 8 土色紫褐色
- 9 暗褐色粘質土に暗褐色土が混入
- 10 黄褐色砂質土
- 11 黄褐色粘質土
- 12 暗黄褐色粘質土
- 13 土色紫褐色



第 16 図 第 1・2 次 (下層) SX302 平面図・断面図 (1:160)・土層断面図 (1:80)



約1.5mの間隔で認められる。断ち割り調査の結果、杭状の痕跡を確認した。杭を立てるための掘形は確認できず、直接打ち込んだものと思われる。

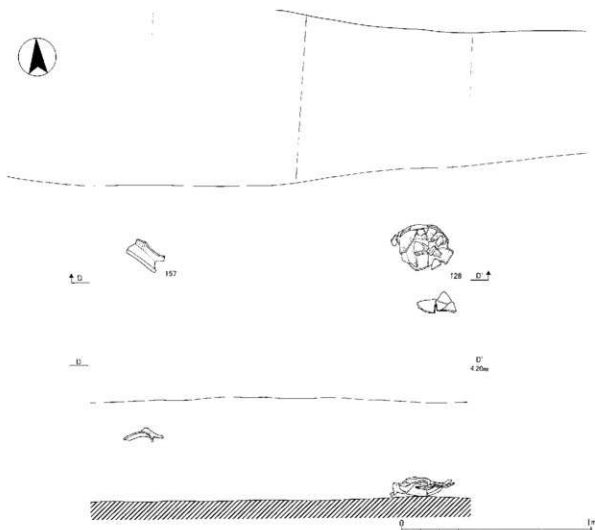
主体部は1基認められた。上層調査に入る際、排水を兼ねた土層確認トレンチ掘削時に長さ81.4cmの鉄刀(第40図84)が出土したため、調査当初から主体部が残存している可能性が想定された。精査の結果、墳丘中央付近で長さ3.7m以上、幅2.2m程度の長方形の掘形を確認した。主軸方向はN73°Eである。しかし上部はほとんど削平されており、深さ3cm程度で底を確認した。掘形部分を下げた段階で、東側に不定形であるが、さらに3cm程度の落ち込みを確認した。その落ち込みから鹿角装刀子片や鉄刀鞘又は刀装具片と推定される鉄製品が集中して出土した(第40図85~100・102~107)。また調査

初期段階で取り上げた鉄刀(第40図84)も、落ち込みの範囲内に納まるとみられることから、この落ち込みが木棺等を安置した所と考えられる。鉄刀の向きおよび鉄製品の分布範囲を見る限りではこの箇所の主軸方向がほぼ東西方向となり、掘形の主軸方向とのずれがある。なお、主体部の底面は地山まで至っていない。

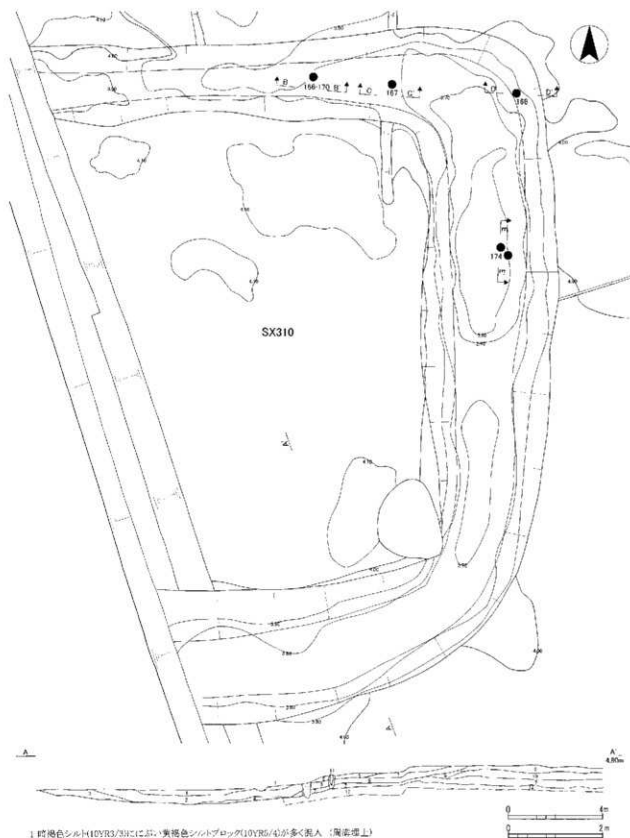
#### 古墳SX302【舞出北1号墳】(第16・17図)

調査区北東部に位置している円墳である。規模は周溝も含めて22.8mである。

周溝は検出面で幅3.3m、残存部分での比高差約1.0m(周溝底部の標高3.55m)である。周溝南東部で須恵器蓋杯が、南西部で土師器台付甕および馬歯等が出土した。



第17図 第1・2次(下層)SX302遺物出土状況図(1:20)



1 暗褐色シルト(10YR3/3)にぶら黄褐色シルトブロック(10YR5/4)が多く混入。(腐成埋土)

2 黒褐色シルト(10YR2/3) (腐成埋土)

3 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3) (腐成埋土)

4 暗褐色泥状質土(10YR3/4) (腐成埋土)

5 褐色シルト(10YR4/4) (積圧盛土)

6 暗オリーブシルト(5Y4/3) (積圧盛土)

7 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/4) (積圧盛土)

8 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/6) (積圧盛土)

9 褐色泥状質土(10YR4/4)に黄褐色シルトブロック(10YR5/6)が多く混入。(積圧盛土)

10 黄褐色シルト(2.5Y5/6)+黄褐色シルト塊(2.5Y5/6)多く混入。(積圧盛土)

11 灰オリーブシルト(5Y4/2) (黄褐色埋土の底)

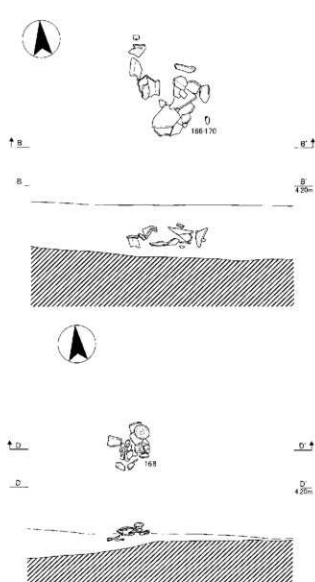
12 黄褐色シルト(10YR5/6) (土)

第18図 第1・2次(下層)SX310平面図(1:160)・土層断面図(1:80)

古墳S X 3 1 0【舞出北3号墳】(第18・19図)

調査区中央西側に位置している方墳で、東半分のみ確認した。規模は周溝も含めて南北28.6mである。南北トレンチでの土層観察から墳丘基底部は標高4.0m辺りとみられ、盛土は40cm程度しか残存せず、主体部は確認できなかった。

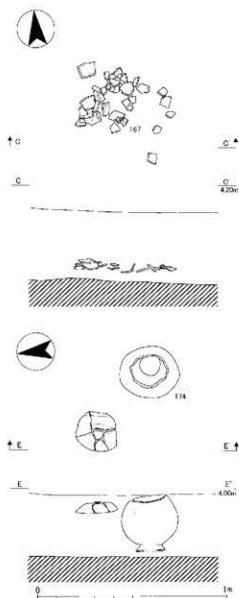
周溝は検出面で幅5.8m、残存部分での比高差約55cm(周溝底部の標高3.55m)である。東側周溝では墳丘側の斜面上で径30cm程度、深さ7cm程度の小穴が検出され、小穴内より鉄斧(第43図164)が出土している。



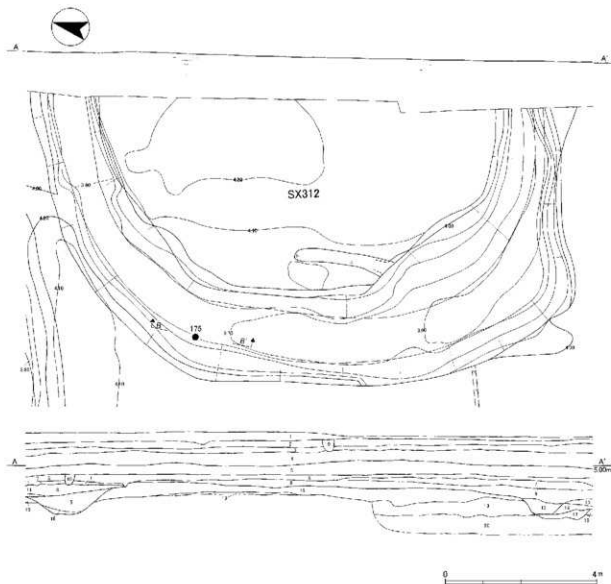
古墳S X 3 1 2【舞出北2号墳】(第20・21図)

調査区中央東側に位置している円墳で、西半分のみ確認した。S X 3 0 1 と重複しており、調査区東壁の土層観察で確認した前後関係はS X 3 0 1 よりも古い。また墳丘基底部は標高4.0m辺りとみられ、盛土は30cm程度しか残存せず、主体部は確認できなかった。

周溝は南西部でかなり広がるが、概ね幅2.3m、残存部分での比高差約70cm(周溝底部の標高3.6m)である。



第19図 第1・2次(下層)SX310周溝内遺物出土状況図(1:20)



- 1 オリーブ褐色極細砂(2.5V4/4) 耕作上、果樹園の影響大
- 2 オリーブ褐色極細砂(2.5V4/4)
- 3 褐色粗面砂(10VR4/4) 耕作上、果樹園の影響はSは少ない
- 4 褐色シルト(10VR4/4) (中世白古層)
- 5 黄褐色シルト(2.5V5/4) I 面が中世遺構面
- 6 黄褐色シルト(2.5V5/4) II 層が若干砂質
- 7 黄褐色シルト(2.5V5/3) (古墳古層)
- 8 オリーブ褐色シルト(2.5V4/3)に黄褐色シルトブロック(10VR5/6)を含む(古墳穴内側)
- 9 近代以降の貯留排水
- 10 黄褐色シルト(2.5V5/4) (上層Ft埋土)
- 11 オリーブ褐色シルト(2.5V4/4)I: 径1cm程度の黄褐色シルトブロック(2.5V5/4)を多く含む
- 12 暗オリーブ褐色シルト(2.5V3/3)I: 径1cm程度の明黄褐色シルト塊を多く含む
- 13 II: SA、硬褐色シルト(10VR4/3)シルトに黄褐色シルトブロック(10VR5/8)を多く含む(粘土磨滅土)
- 14 黄褐色シルト(10VR3/2)層に上面は灰化層の残存がみられる(SX312埋埋土)
- 15 暗灰黄色シルト(2.5V4/2)に黄褐色シルトブロック(2.5V5/4)・暗オリーブ褐色シルトブロック(2.5V3/3)を多く含む(SX312埋埋土)
- 16 暗褐色シルト(10VR3/4)有機物を多く含む(SX312埋埋土)
- 17 オリーブ褐色極細砂(2.5V4/4) (SX312埋埋土)
- 18 オリーブ褐色シルト(2.5V4/4)に径1cm程度の黄褐色シルトブロック(2.5V5/4)を多く含む(SX312埋埋土)
- 19 紫色砂(10VR4/6)
- 20 オリーブ褐色シルト(2.5V4/4)I: 径1cm程度の黄褐色シルトブロック(2.5V5/4)を多く含む

第20図 第1・2次(下層) SX312平面図・土層断面図 (1:100)

古墳SX387【舞出北5号墳】(第22図)

調査区南西隅に位置している方墳で、北東部分のみ確認した。

周溝は検出面で、幅4.8~6.0m、残存部分での比高差は75cm(周溝底部の標高3.58m)である。

なお、主体部は確認できなかった。

d 奈良時代の遺構(第23図)

掘立柱建物5棟、溝11条、耕作溝多条、土坑11基、カマド等2基、不明遺構2基確認した。

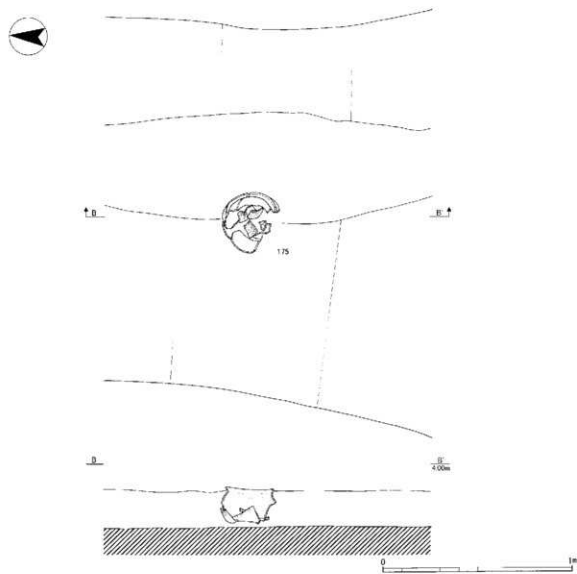
掘立柱建物SB391(第24図) 調査区北西部に位置しており、J7~K9グリッドで検出された側柱建物である。桁行4間、梁行2間の東西棟で、概ね桁行間は1.5m、梁行間は2.1mである。主軸方

向はEW0°である。柱掘形は長軸40~80cm、短軸35~60cmの円形ないしは方形で、柱痕跡が確認できたものは一部であるが、概ね径15~20cmであった。

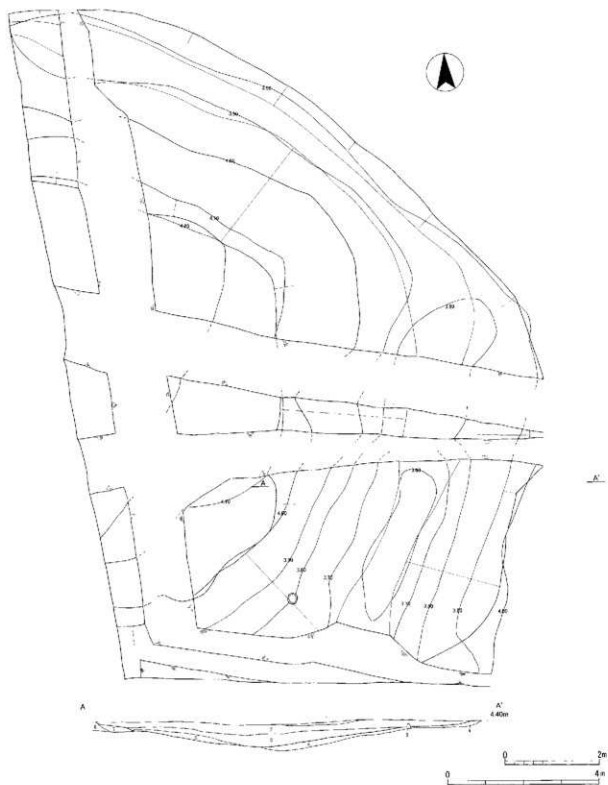
SD307と重複しており、平面での土質観察から、SB391がSD307よりも古いことを確認した。

掘立柱建物SB392(第25図) 調査区ほぼ中央に位置しており、M14~N15グリッドで検出された3間×3間の総柱建物である。柱間は概ね1.2~1.5mで、主軸方向はNS0°である。柱掘形は長軸50~70cm、短軸40~50cmの楕円形もしくは隅丸方形で、径20~30cm程度の柱痕跡が確認された。また、一部の柱穴では柱抜き取り痕も確認した。

SB393と重複しており、断面土層観察で、前後関係はSB392がSB393より古いこ



第21図 第1・2次(下層)SX312西周溝遺物出土状況図(1:20)



- 1 褐色シルト(10YR4/6) (上層灰含層)
- 2 暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3) (向漕埋土)
- 3 暗褐色弱粘質土(10YR5/3) (向漕埋土)
- 4 オリーブ褐色粘質土(2.5Y4/4) (SX388埋土)
- 5 濃い、黄褐色シルト(10YR4/3) (高埴埋土)
- 6 黄褐色砂質土(2.5Y5/8)
- 7 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3) (填土)
- 8 土色煎磁なし

第22図 第1・2次(下層)SX387平面図(1:100)・東周溝土層断面図(1:80)







とを確認した。

**掘立柱建物SB393** (第25図) 調査区ほぼ中央に位置しており、L14～N16グリッドで検出された東西棟の側柱建物である。確認できた柱穴は桁行2間、梁行2間であるが、柱間の距離をみる限りでは桁行が3間になる可能性が高いと考えられる。柱間は桁行が西から2.1m 3.75m、梁行が2.1mで、主軸方向はW10° Nである。柱掘形の規模は長軸45～80cm、短軸40～50cmの楕円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡が確認できたものは一部であるが、概ね径20cmであった。

またSB392と重複しており、SB393の北東隅にある柱穴部分の断ち割りによる土層観察から、SB393がSB392より新しいことを確認した。

**掘立柱建物SB394** (第24図) 調査区南半中央部に位置しており、M17～N19グリッドで検出された側柱建物である。桁行4間、梁行2間の南北棟で、桁行間は北から3.0m 2.4m 1.7m 1.3m、梁行間は西から2.7m 2.4mである。桁行間の南側は他の柱間よりも狭いが、東側・西側共に確認できたため、建物を構成する柱穴と捉えておきたい。主軸方向はN2° Wである。

柱掘形の規模は長軸50～95cm、短軸45～60cmの楕円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡が確認できたものは一部であるが、概ね径20cmであった。

**掘立柱建物SB395** (第25図) 調査区南東隅に位置しており、P18～Q20グリッドで検出された側柱建物である。桁行3間、梁行2間で、桁行間は北から1.0m 2.4m 0.8m、梁行間は西から1.5m 1.6mである。南側は庇である可能性も想定されるが、柱掘形および柱痕跡の規模等の違いは認められなかった。主軸方向はNS0°である。柱掘形は長軸35～70cm、短軸35～50cmの楕円形又は不定形で、柱痕跡が確認できたものは一部であるが、径10～20cmであった。

**溝SD307** 調査区北西部に位置しており、I7～K9グリッドで検出された溝である。幅0.6m程度、深さ12cmで若干蛇行しているが、主軸方向は概ねN62° Wである。平面で確認した土質の違いから、SD307はSB391よりも新しいとみられる。

**溝SD308** 調査区北半中央に位置しており、

N6～L11グリッドで検出された溝である。幅0.5m程度、主軸方向はN1° Eである。平面での土質観察の結果、SD309よりも古いことを確認した。

**溝SD309** 調査区北半東寄りに位置しており、M7～P12グリッドで検出された溝である。幅0.8～1.2m、主軸方向はN42° Wである。平面での土質観察の結果、SD308よりも新しいことを確認した。

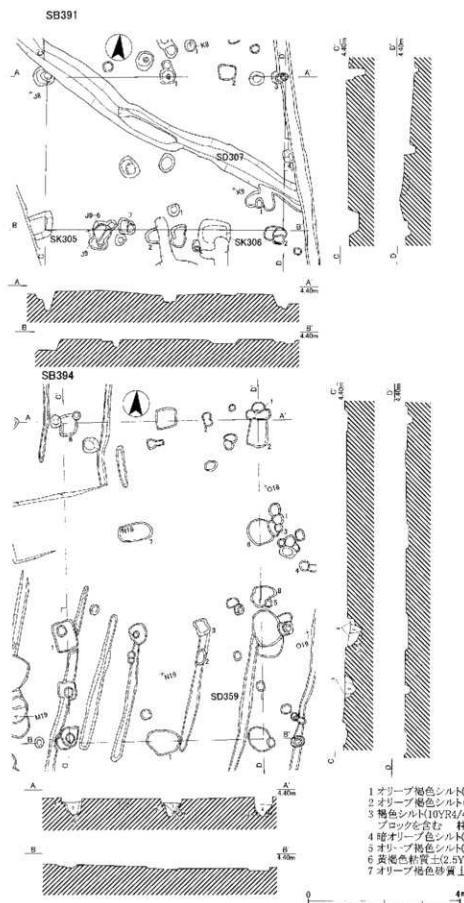
**溝SD352** (第26図) 調査区南半部に検出された溝である。この溝は調査区南端ではほぼ東西方向であるが、Q22グリッド辺りで屈曲し南北方向へ向きを変える。溝の北および西側と南側で当該期の遺構密度が大きく異なることから、区画溝であると考えられる。東西方向の溝と南北方向の溝では、東西方向の溝がやや幅が広く断面形態が逆台形であるのに対し、南北方向の溝は幅が狭く断面形態がU字状であり、形状に違いがみられる。区画溝が屈曲する辺りは、SD357・SD360・SD369などの溝が錯綜しておりSD352がSD357より新しいことは確認できたものの、SD360・SD369との前後関係は不明である。

**溝SD357** (第26図) 調査区南東部に位置しており、蛇行しているが向きは概ね東西方向である。溝の西側はSK374によって途切れている。また、溝の東側はSD352と重複しており、平面上での土質等の違いからSD357がSD352よりも古いとみられる。

溝は北側が浅いテラス状の段になり、南側がさらに1段下がる。断面は逆台形である。テラス状の部分から土師器皿(第45図188)が出土した。

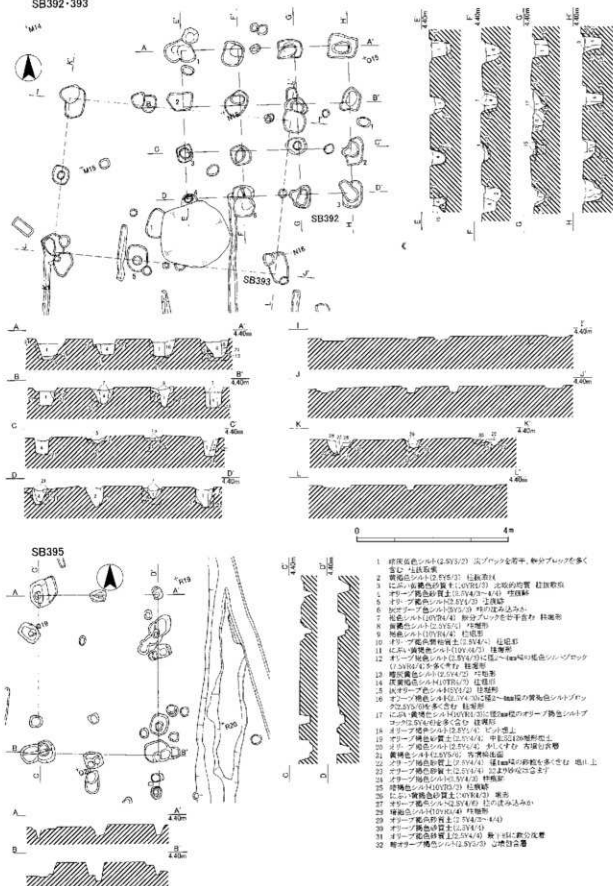
**溝SD358** 調査区南部に位置しており、O21・22グリッドで検出された溝である。しかし、溝の大半が上層遺構によって削平されたため、西側肩部分が確認されたのみで詳細は不明である。

**溝SD360** (第26図) 調査区南西部に位置している。Q22グリッド付近では区画溝SD352・溝SD369等が錯綜しており、土層観察からSD360がSD369よりも新しいことが判明したものの、SD352との前後関係は不明瞭である。底付近からは長径15～20cm程度の礫と共に土師器片が大量に出土した。



第24図 第1・2次(下層)SB391・394平面図・断面図(1:100)

SB392・393



第25図 第1・2次(下層)SB392・393・395平面図・断面図(1:100)

## SD352 (Q21グリッド)



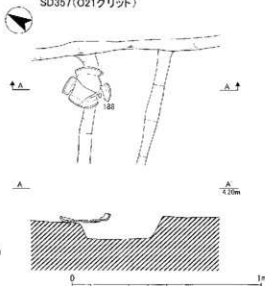
- 1 にぶい黄褐色粘砂(10YR4/3)  
 2 暗褐色シルト(10YR3/4)  
 3 褐色砂質土(10YR4/4鉄分多い)  
 4 3に黒褐色ブロック(7.5Y15/6)を多く含む  
 5 灰黄褐色シルト(10YR4/2)  
 6 褐色ブロック(10YR4/6)を多く含む  
 7 土色記載なし

## SD352 (K21グリッド)

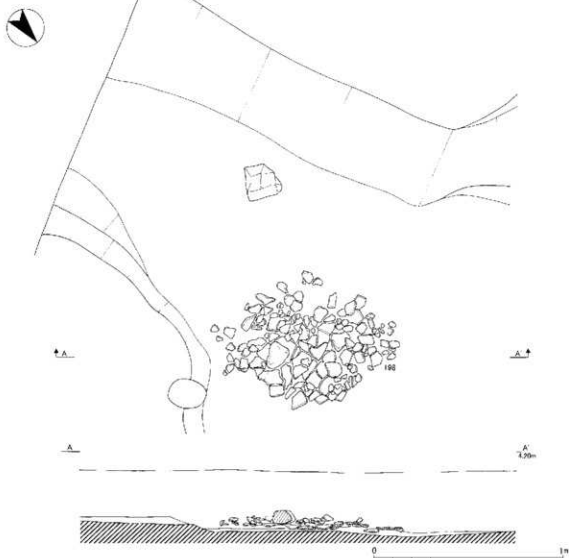


- 1 にぶい黄褐色粘砂(10YR5/4)  
 2 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3)  
 3 暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/6)  
 4 暗オリーブ色砂質土(5Y4/3)  
 5 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/4)  
 6 にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)  
 7 オリーブ褐色粘質土(2.5Y4/3K)  
 8 灰オリーブ色シルト(5Y4/2粘土)  
 9 暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3) (古墳心土層)  
 9 オリーブ褐色粘砂質土(2.5Y4/6) (地山)

## SD357 (O21グリッド)



## SD360内おちこみ (Q・R22グリッド)



第 26 図 第 1・2 次 (下層) SD352 土層断面図 (1 : 40)、SD357 遺物出土状況図 (1 : 20)、SD360 内遺物出土状況図 (1 : 20)

ほぼNS0°になるもの、やや西に振るものもあり、一定期間以上、耕作地として利用されていたと考えられる。第1次調査と第2次調査との境である13列で耕作溝が途切れるのは検出面の違いによるもので、第2次調査区ほど遺構密度は高くしないし第1次調査区にも耕作溝群が広がっていたことが推察される。他の遺構との前後関係は、平面での土質観察からSB392・SB393・SB394、SD364・SD377、SK372・SK390が耕作溝よりも新しいことを確認した。

**土坑SK399** (第27図) 調査区中央やや西寄りに位置しており、K・L14グリッドで検出された土坑である。平面形は径1.5~1.6mの不整形円で深さ4cm、壁面の傾斜は西側の方が東側よりも緩い。土坑内東方から長胴甕(第46図224)が出土した。

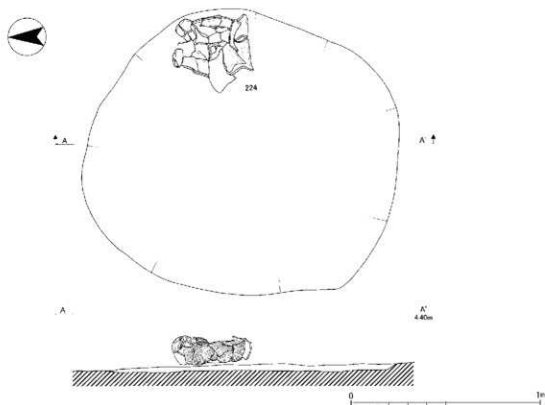
**焼土SF366** (第28図) 調査区南半部、掘立柱建物SB394の南に位置しており、M19~N20グリッドで検出された焼土および炭化物の散布範囲である。この散布範囲は検出時、長軸2.1m、短軸1.3mの不定形であった。中でも焼土の散布が確認できた範囲は北側に偏りが認められる。炭化物の散布

範囲からは、小片ではあるが遺物が出土している。

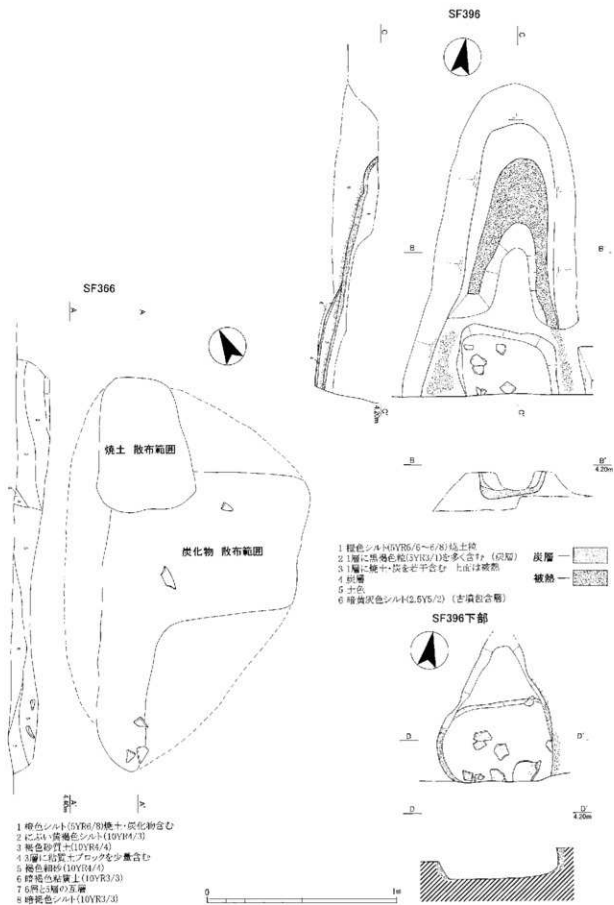
**カマド?SF396** (第28図) 調査区南端に位置しており、L23グリッドで検出された。底部は北から南へ下る傾斜となっており、調査区南壁に接する部分は深さ10cm程度の土坑状であった。土坑の側壁では被熱が認められた。また炭層の直下でも被熱が確認でき、少なくとも2度は熱を伴う作業を行ったとみられる。被熱面の傾斜は約12~15°である。遺構の形状や被熱面が確認できること、埋土に炭・焼土粒等が認められることからカマドもしくは炉と推定されるが、周囲に竪穴住居等の遺構は確認できなかった。

**不明遺構SZ362** 調査区南西部に位置しており、N19~P20グリッドで検出された遺構である。平面は長軸6.1m、短軸5.3mの不定形で深さ20cmである。中央部分は上層遺構および溝SD358によって削平されている。

**不明遺構SZ363** 調査区中央部やや東寄りに位置しており、O16~P17グリッドで検出された遺構である。平面は長軸3.8m、短軸2.9mの不定形で、深さは15cmである。



第27図 第1・2次(下層)SK399遺物出土状況図(1:20)



第28図 第1・2次(下層) SF366平面図・土層断面図、SF396平面図・土層断面図・断面図(1:20)

第2表 第1・2次(下層) 遺構一覧表(1)

報告遺構番号	目遺構番号	遺構面	地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な出土遺物	備考
SX301	下層 SX1	第3面	P14~R19	古墳	古墳時代中期	直径20.6 (周溝含む)	—	—	埴輪・埴器類・土師器・鉄製品(鉄刀等)・刀道具	横溝: 4号埴・円埴 主体部1基・埴輪列、木製輻輪横立板 SX312→SX301
SX302	下層 SX2	第3面	M5~S16	古墳	古墳時代中期 ~後期	直径22.8 (周溝含む)	—	—	土師器・埴器類・馬骨	横溝: 1号埴・円埴 SX312→SX302
欠番	下層 SD3	—	R7	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 SD4	—	R6	—	—	—	—	—	—	—
SK305	下層 SK5	第2面	I8	土坑	古代小	0.6以上	0.65	28	—	—
SK306	下層 SK6	第2面	J9	土坑	古代小	0.9	0.85	12	—	—
SD307	下層 SD7	第2面	I7 J7・8 K8・9	溝	奈良時代	—	0.6~ 0.7	12	—	—
SD308	下層 SD8	第2面	L10・11 M8~10 N6~8	溝	奈良時代	—	0.5	不明	—	SD308→SD309
SD309	下層 SD9	第2面	M7 N7~9 O8~10 P11・12	溝	奈良時代前期	—	0.5~ 1.2	不明	土師器・埴器類	SD308→SD309
SX310	下層 SX10	第3面	I~N 8~16	古墳	古墳時代中期 ~後期	1径28.6 (周溝含む)	—	—	土師器・鉄片	横溝: 3号埴・方埴 SX311→SX310
SX311	下層 SX11	第4面	I~O 5~9	周溝墓	弥生時代後期	1径17.0 (周溝含む)	—	—	弥生土器	横溝: 周溝墓1、方形周溝墓 SZ320→SX311 →SX310・SX302
SX312	下層 SX12	第3面	P~S 10~14	古墳	古墳時代	1径13.4 (周溝含む)	—	—	土師器・鉄製品(馬具)	横溝: 2号埴・方埴小 SX312→SX301→SX302
SD313	下層 SD13	第2面	N10・11	溝	古代小	—	0.34	8	—	—
SD314	下層 SD14	第2面	Q11・12	溝	奈良時代	—	0.5	不明	—	SX312→SD314
SK315	下層 SK15	第2面	J9	土坑	埴器時代 ~奈良時代	1.4	1.0以上	18	—	—
欠番	下層 SK16	第2面小	P8	—	—	—	—	—	—	覆瓦
欠番	下層 SK17	第2面小	P8	—	—	—	—	—	—	覆瓦
SX318	下層 SX18	第4面	P~S 6~9	周溝墓	弥生時代後期	1径9.5 (周溝含む)	—	—	弥生土器	横溝: 周溝墓2、方形周溝墓
SK319	下層 SK19	第4面	Q7・8 R7・8	土坑	弥生時代小	4.5	4.1	9	—	—
SZ320	下層 SZ20	第4面	I・J・7	不明	弥生時代	2.4以上	3.0	10	鉄製品	SZ320→SX311
欠番	下層 SX21	—	O~Q12	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 23	—	N・O6	—	—	—	—	—	—	覆瓦
欠番	下層 24	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 25	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 26	—	K12	—	—	—	—	—	—	位置不明
欠番	下層 27	—	K11	—	—	—	—	—	—	位置不明
欠番	下層 28	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 29	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 30	—	O10	—	—	—	—	—	—	位置不明、土層遺構小
欠番	下層 31	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 32	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 33	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 34	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 35	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 36	—	P14	—	—	—	—	—	—	位置不明、土層遺構小
欠番	下層 37	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 38	—	—	—	—	—	—	—	—	—
欠番	下層 39	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD340	下層 SD40	第2面	P17~19	耕作溝	奈良時代	—	0.35	5	—	SD340→SD341
SD341	下層 SD41	第2面	P17~19	耕作溝	奈良時代小	—	0.3	5	家形埴輪	SD340→SD341
SD342	下層 SD42	第2面	P18	耕作溝	奈良時代小	—	2.0~ 2.5	4	—	—
SD343	下層 SD43	第2面	P20・21	耕作溝	奈良時代小	—	0.2~ 0.45	3	—	—
SZ344	下層 SZ44	第2面	Q14	不明	奈良時代	3.8	0.5~ 0.85	17~27	—	—
SD345	下層 SD45	第2面	O16 P13~16 Q13	溝	奈良時代	—	0.8	7~8	—	SD346→SD345

第3表 第1・2次(下層) 遺構一覧表(2)

報告遺構番号	田遺構番号	遺構面	地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な出土遺物	備考
S D346	下層 S D46	第2面	P14~16	溝	古代	—	0.4	6~8		S D346→S D345
S D347	下層 S D47	第2面	P15・16 Q14・15	溝	奈良時代	—	0.3~0.5	8~12		S D348→S D347
S D348	下層 S D48	第2面	O17・18 P16~18	溝	奈良時代	—	0.3~0.6	9		S D348→S D347
S D349	下層 S D49	第2面	Q18	溝	奈良時代か	—	0.25	5		
S D350	下層 S D50	第2面	O18・19 P18	耕作溝	奈良時代か	—	0.45	5		
S D351	下層 S D51	第2面	P19	溝	奈良時代	—	0.3	3~5		
S D352	下層 S D52	第2面	P22 Q19~22 R18~20	区画溝	奈良時代か	—	1.0~2.4	17~45	須恵器(畚入)	Q22で堀由 S D357・360・361・369→S D352
S D353	下層 S D53	第2面	P17	耕作溝	奈良時代か	—	0.2	7		
S D354	下層 S D54	第2面	P20	溝	奈良時代か	—	0.2	5		S D343に繋がる可能性あり。 (残存長約0.5m)
S K355	下層 S K55	第2面	P22・23	土坑	奈良時代か	1.2	0.65	23		S D360→S K355
S D356	下層 S D56	第2面	Q21・22 R21	溝	奈良時代	—	0.15	4		
S D357	下層 S D57	第2面	O21 P21・22	溝	奈良時代前期	—	0.7~1.0	23~28	土師器・須恵器	S D360に繋がる可能性あり。 S D361・S Z362→S D357→S D352
S D358	下層 S D58	第2面	O19~22	溝	奈良時代	—	0.3以上	不明	土師器・須恵器 中世の遺物(畚入)	S K373→S D358
S D359	下層 S D59	第2面	N18・19	耕作溝	奈良時代	—	0.2~0.3	5~7		S D359→S B304
S D360	下層 S D60	第2面	L・M21 M~R22	溝	飛鳥時代 ~奈良時代	—	1.5~2.0	31~33	土師器・須恵器	S D360→S B360
S D361	下層 S D61	第2面	O21・22 P21・22 Q21・22	溝	飛鳥時代 ~奈良時代	—	2.0以上	20	土師器	S D361→S D352・S D357
S Z362	下層 S Z62 下層 S K73	第2面	N・O19 N~P20	不明	奈良時代	6.1	5.3	4~20	土師器・須恵器	S Z362→S D357
S Z363	下層 S Z63	第2面	O16~P17	不明	飛鳥時代 ~奈良時代	3.8	2.9	15	赤生土器・土師器	
S D364	下層 S D64	第2面	J16・17 K16・17 L17	溝	奈良時代か	—	0.5~0.8	7~14		S K380→S D364→S D365
S D365	下層 S D65	第2面	L17	耕作溝	奈良時代か	—	0.25	2		S D364→S D365
S F366	下層 S F66	第2面	M19・20 N19・20		飛鳥時代 ~奈良時代	2.1	1.3	不明		堀端は境上・炭化物が検出された範囲。 構造等は不明。
欠番	下層 67	—	—	—	—	—	—	—		位置不明
欠番	下層 S D68	—	S23	—	—	—	—	—		位置不明
S D369	下層 S D69	第2面	Q・R22	溝	飛鳥時代 ~奈良時代	—	0.5以上	12~15	土師器	調査時の「S D66」を含む。 S D357につながる可能性あり。 S D369→S B360
S K370	下層 S K70	第2面	K21	土坑	古代	0.8以上	0.9	6	須恵器	S D352→S K370→上層 S D208
欠番	下層 S D71	—	N21	—	—	—	—	—		位置不明
S K372	下層 S K72	第2面	M・N21	土坑	奈良時代	1.3	1.1	10~15	土師器	
S K374	下層 S K74	第2面	N20・21	土坑	奈良時代か	2.9	2.5	14	土師器	
S K375	下層 S K75	第2面	N・O21	土坑	奈良時代か	3.0以上	2.0以上	2~24	土師器	遺跡は北から南へ傾斜する。 S K375→S D356・352
欠番	下層 S D76	—	N20	—	—	—	—	—		位置不明
S D377	下層 S D77	第2面	I・J18	溝	平安時代	—	0.2~0.3	4~7		
S D378	下層 S D78	第2面	J18	溝	古代か	—	0.2~0.3	5		
S D379	下層 S D79	第2面	J17・18	耕作溝	奈良時代	—	0.2	2		J19グランド S D78は別遺構のため、S D307とした。 S D379→S K380
S K380	下層 S K80	第2面	J・K17	土坑	奈良時代か	0.5以上	0.9	4		S D379→S K380→S D364
S D381	下層 S D81	第2面	J14~16	溝	古墳時代 ~奈良時代	—	0.4~0.5	6~10		S K386→S D381
S Z382	下層 S Z82	第3面	Q13	不明	不明	3.3以上	2.1	不明	土師器・須恵器	検出時の略図のみ S X312関連→S Z382
S D383	下層 S D83	第3面	O13~15 P13~15	溝	不明	—	0.5	不明	山家綱・土師器片	検出時の略図のみ
欠番	下層 84	—	O16	—	—	—	—	—		上層遺構か



第4表 第1・2次(下層) 遺構一覧表(3)

報告遺構番号	田遺構番号	遺構面	地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な出土遺物	備考
SD385	F層 S D85	第3面	K・L20	溝	不明	—	0.2~0.5	不明	土師器	検出時の略図のみ S X 287→S D385
SK386	F層 SK386	第3面	J14・15	土坑	不明	0.8	0.60	推定34		検出時の略図のみ S X 210→S K386→S D381
SX387	F層 SX387	第3面	I~L・I7~23	古墳	古墳時代中後期	—	—	墳頂と周溝底の北高差0.25m	土師器	観測：5号墳。方墳か
SX388	F層 SX388	第4面	L23	周溝墓	弥生時代~古墳時代前期	—	—	墳頂と周溝底の北高差0.3m	弥生土師	観測：周溝墓3 円形周溝墓か土師器墓 土師器製の溝Sは不明。 S X 388→S X387
次巻	F層 89	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK390	F層 SK390	第2面	M20	土坑	奈良時代	2.2	1.6	11	土師器	
SB391	F層 SB391	第2面	J7 I~K8 J-K9	竪立柱建物						詳細は第5表を参照
SB392	F層 SB392	第2面	M-N14 M-N15	竪立柱建物						詳細は第5表を参照
SB393	F層 SB393	第2面	L-M14 L~N15 M-N16	竪立柱建物						詳細は第5表を参照
SB394	F層 SB394	第2面	M~O17 M-N18 M-N19	竪立柱建物						詳細は第5表を参照
SB395	F層 SB395	第2面	Q18 P-Q19 Q20	竪立柱建物						詳細は第5表を参照
SF396	F層 SF396	第2面	L23	カマドか	奈良時代か	1.3以上	0.5	12~27		カマドか
SD387	F層 SD387	第2面	J19	耕作溝	奈良時代	—	0.2	2		番号重複のための新規に追加
SK398	F層 SK398	第2面	M21	土坑	奈良時代	1.45	0.8	6		番号重複のための新規に追加
SK399	F層 SK399	第3面	K-L14	土坑	飛鳥時代~奈良時代	1.6	1.5	4	土師器	観測：3号墳の墳丘南東隅土坑

第5表 第1・2次(下層) 竪立柱建物一覧表

遺構番号	地区	方位	間数(間)	柱間(m)	柱穴底(標高:m)	時期	特徴
SB 391	J7 I~K8 J・K9	E W O <sup>+</sup>	4×2	東西方向: 2.1 2.1 南北方向: 1.5 1.5 1.5 1.5	東西方向: 3.745 不明 3.952 4.171 3.818, 3.914 3.842 不明 4.107 4.108, 3.745 不明 3.914, 不明 3.842, 3.952 不明, 4.171 4.107, 3.818 3.91 4.108, 4.065 4.030 3.875 3.630, 4.100 4.050 4.115 3.675, 4.075 4.050 4.115 3.675, 4.030 4.145 4.060 3.835, 4.065 4.100 4.075 4.030, 4.030 4.050 4.050 4.145, 3.875 4.115 4.115 4.060, 3.630 3.675 3.675 3.835,	奈良	竪立建物(東西棟) S B391→S D397
SB 392	M・N14 M・N15	N S O <sup>+</sup>	3×3	東西方向: 1.5 1.2 1.2 南北方向: 1.5 1.5 1.4	東西方向: 4.085 4.125 4.175, 4.015 4.080 4.115, 4.125 4.08, 4.175 4.060 4.115,	奈良	竪立建物 S B392→S B393
SB 393	L・M14 L~N15 M・N16	W10 <sup>+</sup> N	2×2?	東西方向: 2.1 2.1 南北方向: 2.1 3.75	東西方向: 4.110 4.090 3.920, 不明 4.020, 4.090 3.995, 4.090 3.945, 4.090 4.030 4.005, 4.110 4.090 4.090 4.080, 3.920 4.020 3.995 3.945 4.005,	奈良	竪立建物(東西棟) 軒行3間の可能性あり S B392→S B393
SB 394	M~O17 M・N18 M・N19	N 2 <sup>+</sup> W	4×2	東西方向: 3.0 2.4 1.7 1.3 南北方向: 2.7 2.4	東西方向: 3.800 3.875 3.800, 3.790 3.830, 3.885 3.915, 3.785 3.650 3.800, 3.800 3.790 3.885 3.785, 3.800 3.830 3.935 3.800,	奈良	竪立建物(南北棟)
SB 395	Q18 P・Q19 Q20	N S O <sup>+</sup>	3×2	東西方向: 1.0 2.4 0.8 南北方向: 1.5 1.6	東西方向: 3.800 3.875 3.800, 3.790 3.830, 3.885 3.915, 3.785 3.650 3.800, 3.800 3.790 3.885 3.785, 3.800 3.830 3.935 3.800,	奈良	竪立建物(南北棟)

※東西方向は北側から、南北方向は西側から記述

## 2 遺物

### a 弥生時代後期遺構出土遺物 (第29~31図)

**SX311 (1~8)** 掲載した遺物のうち1~6がSX311に伴うものと考えられる。そのうち1・2・5・6は周溝南東部から一括出土した。

1・2は高杯である。1は杯部が浅く、上端部は上方に短く立ち上がっている。杯部の上部外面は上から、櫛状工具による波状文、櫛描直線文が施されている。脚部は杯部の大きさの割合に低脚で、脚柱部が太い。脚端部で大きく外反し、脚端部付近に径0.7cmの透孔が残存部で4箇所認められた。透孔の配置から、2孔一組であった可能性が考えられる。脚部には櫛描直線文は認められない。2も杯部は浅めで、立ち上がり部分は内傾している。杯部の上部外面は櫛状工具による波状文、櫛描直線文が2段施されている。脚部は杯部の大きさの割合に低く、脚柱部は太く器壁が厚い。脚端部で大きく外反し、透孔は認められない。この地域ではみられない形状である。

3・4は小形の甕である。3は口縁部が緩く内彎し、端部に内傾する面を持っている。平底で体部最大径が上部にくるものである。体部内面および外面

はハケ調整である。4は口縁部が短く上方に伸び、端部は丸く収めている。体部最大径は中心付近にくるもので、内外面共にナデ調整をしている。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残っている。

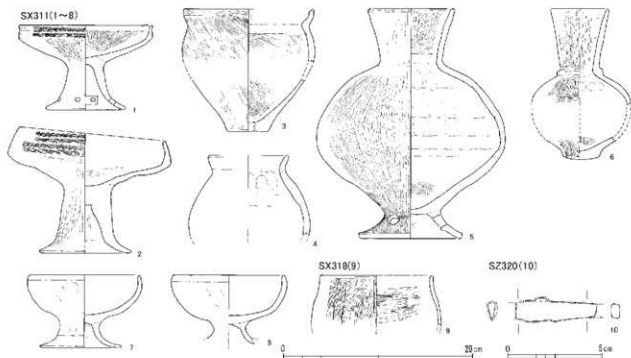
5・6は壺である。5は口頸部がやや外方へ直線的に開き、体部は算盤状で最大径は中央にくる。台は低く外反しており、径1cmの透孔が3箇所認められる。胎土は尾張低地部のものに類似している。6は口頸部が長く外方へ直線的に開く長頸壺である。頸部と体部の境界部に突帯が付いている。

1~6は概ね上村安生氏編年<sup>1)</sup>のV様式前半頃に比定される。

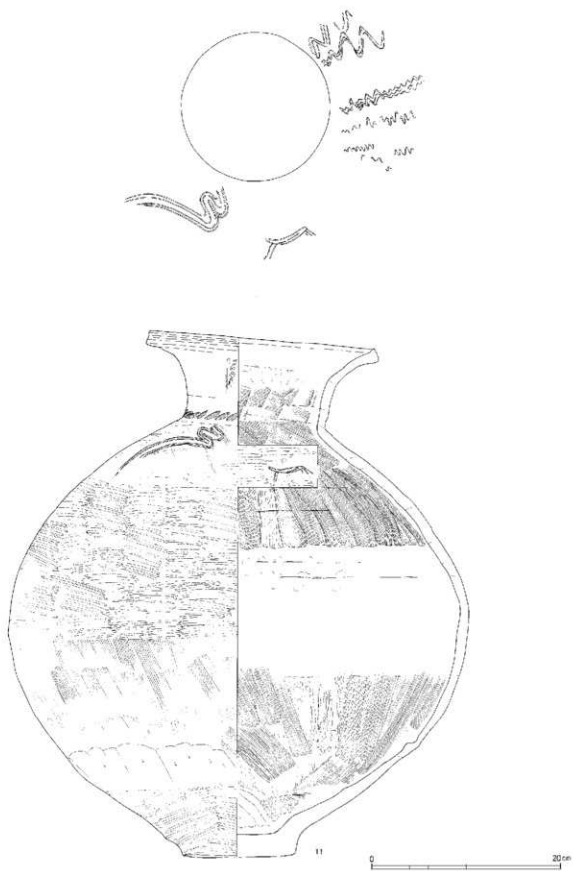
7・8は土師器高杯である。いずれもナデ調整されており、外反する脚がつくものである。6世紀代のものとみられ、周溝の埋没過程において混入したのと考えられる。

**SX318 (9)** 口縁端部に向けてやや内彎する所謂ワイングラス形高杯の杯部である。内面は横方向、外面は縦方向のヘラミガキが施されている。第V様式に納まるものであろう。

**SZ320 (10)** 鉄製品である。両端の破損部で確認した断面の形状が逆三角形と長方形で異な



第29図 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(1)(10は1:2, 他は1:4)

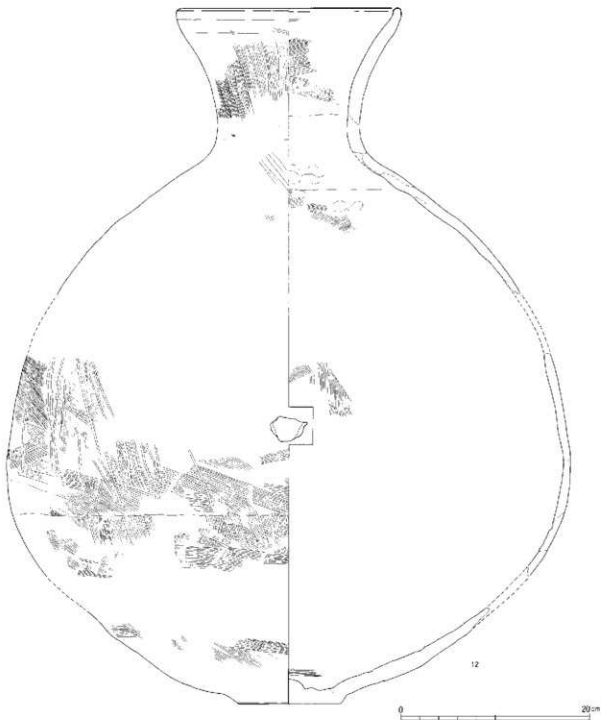


第30图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(2)(1:4)

り、刀子または片刃の鉄鏝である可能性が想定されるが、表面に木鞘の痕跡とみられる部分が残存していることから、刀子の可能性が高いと思われる。

**S X 388 (11・12)** 11・12は大型の壺である。11はS X 388の中央付近で横位の状態で検出されたものである。口頭部が外反し、口縁端部は比厚して外面に擬凹線文を施している。体部はほぼ球形で最大径は中央に位置する。頭部に櫛状工具による

刺突文が巡り、体部上半部には龍および鹿と思われる絵画が描かれている。龍は2本隣接したヘラ描きの線が、5mm程の間隔で平行している。ヘラの向きを変える際、ぎこちなく向きが変化する部分も同様に平行して確認できることから、ヘラ状工具2本又は先端部が二又になったものを2組使用して描いたものと考えられる。鹿はヘラで頭から体部・脚部を描いている。頭から体部の外形ラインは省略して描



第31図 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(3)(1:4)

かれており、鹿の向きが特定できない。体部は部分的に二重の線になっている。また龍に対峙して縦方向に波状の線が描かれている。この波状線は幅が広く比較的緩やかな曲線が1箇所、幅が狭く一見稲妻を想起させる屈曲した線が1箇所確認できた。これらの線は龍と同じ原体で描かれているとみられる。その他に1本の原体を用いた縦方向の波状線が5箇所で見られる。これらの線は文様というよりは龍および鹿と同様、何らかの意図をもって描いたものと思われる。V-3様式～VI-1様式に納まるものであろう。12は頸部から口縁部にかけて外方へ広がるが口縁端部でナデ調整により内彎し、丸くおさめている。体部は最大径が下半部にあり、球筒形である。体部中央に1箇所、焼成後穿孔が認められる。

(原田)

## b 古墳時代中後期遺構出土遺物

(第32～44図)

**SX301** (13～107) 墳丘および周溝から大量の埴輪、主体部から鉄製品が出土したほか、墳丘盛土から土師器(壺・甕)・磨製片刃石斧、周溝から土師器(甕・高杯)・須恵器(小型短頸壺・甕)が出土した。墳丘盛土から出土した土師器(13・14)は、古墳時代初頭頃のもので、磨製片刃石斧(15)とともに墳丘築造時に混入したものであろう。

周溝から出土した遺物のうち、土師器甕(17～19)は、いわゆる「宇田型」甕である。須恵器甕(20・21)は、いずれも体部外面には平行な叩き目の痕跡が残るが、体部内面は当て具痕が丁寧に撫で消されていて、器壁は薄い。20は獵投索系の製品と考えられ、外側へ大きく開く頸部や口縁端部の形状は、東山111号窯<sup>2)</sup>や東山218号窯<sup>3)</sup>の製品に近似している。21は産地不明であるが、全体の形状や、頸部に施された2段の櫛描波状文、内面の当て具痕の丁寧な撫で消しなどからみて、20とほぼ同じ時期のものであろう。年代的定点となる基準資料が乏しい古墳時代須恵器の暦年代観については、論者によって異なる見解が示されており、今ここで詳細な年代を論ずることは難しい。しかし、東山111号窯や東山218号窯の操業時期を5世紀とみることに大きな異論はみられないので、20・21についても、5世紀の

ものと考えて間違いないと思われる。

埴輪には、円筒埴輪(23～81)と形象埴輪(82・83)があり、円筒埴輪には朝顔形のもの(62・63・70・71・81)も少数含まれる。円筒埴輪には、外側に断面台形を呈する突帯(タガ)が付されており、2条の突帯で上下が3段に区分されている小型品(23・25・43・47)と、3突帯で4段に区分されているもの(24・30・31・44・45)がある。いずれも、基本的には上から2段目に、2方向に略円形の透孔が設けられているが、稀に3段目にも小さな穿孔が施されているもの(44)がある。円筒埴輪は外面の調整痕跡から、タテハケが施されるI類(30・31・43～46・59・75)、ヨコハケの認められるII類(24～29・32～42・47～53・55～58・60・61・72～74・76・78)、縦方向に粗雑なナデが施されるだけでハケ目の認められないIII類(23)の3群に大別が可能で、<sup>4)</sup>量的にはII類が最も多く、III類は1点のみである。

I類は、突帯接着前にタテハケがほぼ全面に施されている。タテハケには、間隔が広く不明瞭なもの(44・45)と、密で明瞭なもの(30・31・43など)の2種類がある。内面の調整は、基本的に指によるとみられるナデが顕著であるが、下端部付近に横方向のヘラケズリ、上端部付近にタテハケもしくはヨコハケが認められるものも少なくない。またI類には、2段目の透孔の右側に2条の弧が線刻されている事例(30・31)が散見される。

II類は、突帯接着前にヨコハケが施されているが、突帯を境にヨコハケが認められなくなるもの(25・47)や突帯接着部分を避けてヨコハケが施されているように見受けられるもの(49)があるため、突帯位置を概ね設定してからヨコハケが施されたものと考えられる。ヨコハケは途切れることなく体部一周するものの、工具の動きは断続的で、所々に工具の静止痕跡が認められる。これは、川西宏幸氏による分類のB種ヨコハケ<sup>3)</sup>にあたるもので、静止痕跡の間隔は3cm前後と短い。突帯で区画された一段の中を3段(3周)以上に細分してヨコハケが施されているもの(47・50など)がある一方で、幅広の工具を用いて1段(1周)のみヨコハケが施されているもの(48・49など)も存在し、中には工具の幅(=静止痕跡の長さ)が10cmを超える事例(24)も認め

られる。また、ヨコハケは必ずしも外面全面に施されているとは限らず、最下段には縦方向の板状工具によるナデ痕跡が残っているもの(47・58など)も散見される。内面の調整については、基本的にⅠ類と同じように見受けられる。外面に、しばしば記号風の線刻が施されていることもⅠ類と共通するが、Ⅱ類の場合は最上段であることが大きな違いで、線刻には弧と「X」を組み合わせた記号風のもの(25～29、32～42)と、波状のもの(24)の2種がある。

Ⅲ類は、前述のとおり1点のみの出土で、外面の調整だけでなく、全体の作りが粗雑で、特異な存在である。突帯で区画された外面の最上段に、絵画風の線刻が認められるが、何を表現しているのかは不明である。

Ⅰ～Ⅲ類のほかには、いわゆる朝顔形円筒埴輪がある。花状部に施されている調整はタテハケであるが、円筒部の作りは基本的にⅡ類と同じであり、記号風の線刻(62)についてもⅡ類との共通性が認められる。

絶て円筒埴輪には、底部を中心に黒斑が認められるものが多く、下端面には、製作時に下に敷いたとみられる植物の痕跡が残るものが少なくない。また、赤彩が施されているものも散見されるが、器面の一部でしか観察できないものが大半である。

形象埴輪としては、家形埴輪が出土している。82は平突帯の巡る基台部、83は屋根部の破片である。(水橋)

84～107は鉄製品である。101が墳丘土から出土した以外は、主体部から出土した。84は鉄刀である。切先がごく僅かに欠損しており、現長は81.4cm、幅は広い箇所が2.9cmで、平造の直刀である。間は直角間又はナデ間と推定されるが、鹿角や木質等が付着しており不明瞭である。茎は茎尻に向かって徐々に細くなっている。X線写真から径5～6mmの目釘穴が3箇所確認できた。部分的であるが、木質が残存している。また、間に近い刃身部では刃身を囲むような形で幅1～2mm程度の線状の痕跡が1条、その痕跡からさらに切先方向へ2cm程度離れた刃部付近に幅2mm程度の線状の痕跡が2条あり、刀装具に伴うものと推定される。

85～96は刀装具である。85～90は鉄刀の柄又は鞘

片と考えられ、内面に刀身又は茎の痕跡が確認できる。85～88は木質が、89・90は鹿角が残存している。91～94は鹿角片である。91・94の内面には茎が装着されていたとみられる箇所が回っており、刀子柄等の破片と推定される。

97～100は刀子である。97は刃先および茎尻が欠損している。また、刃部と茎の境が不明瞭である。一部鹿角が残存している。98は刃先が欠損している。刀部は木質等の確認ができなかったが、茎に木質および鹿角が部分的に残存している。刃部と茎の境部分は鹿角が残存しているため不明瞭であるが、両角間と推定される。99は刀部が3.5cmで、刃部と茎の境部分は両ナデ間である。茎は木質の鞘が良好に残存している。100は両端が欠損しており、さらに全体が木鞘で覆われているため刀身の形状が不明瞭である。

101・102・106は鉄鏃である。101は柳葉形で、頭部で欠損している。102は断面形から茎部分とみられる。出土時は中央部に鏃が集中してみられ、有機質が付着していた可能性が考えられる。106は片刃鉄鏃の先端部である。

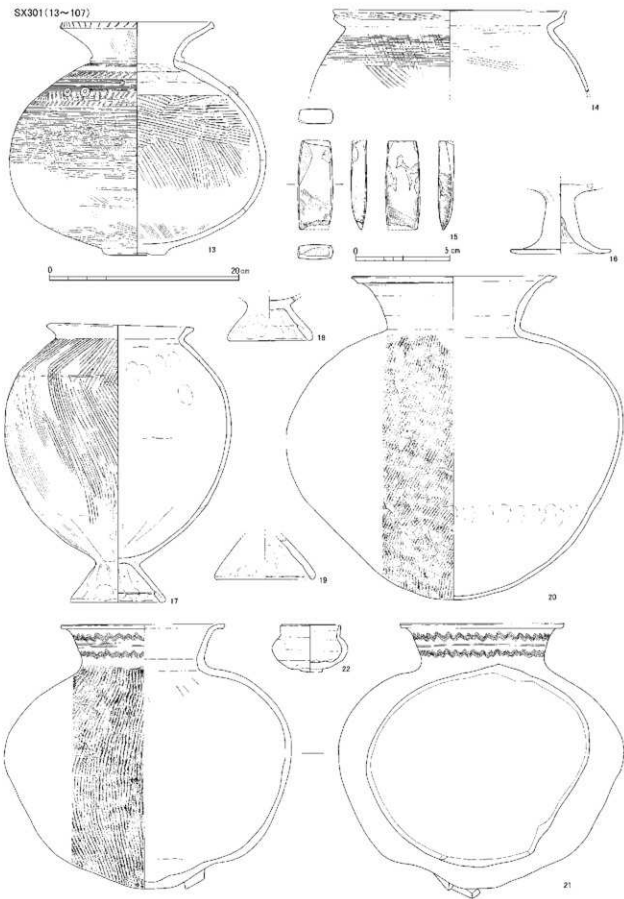
103～105は鉄鏃もしくは刀子とみられる。105は木質が若干付着している。107は不明品である。

(原田)

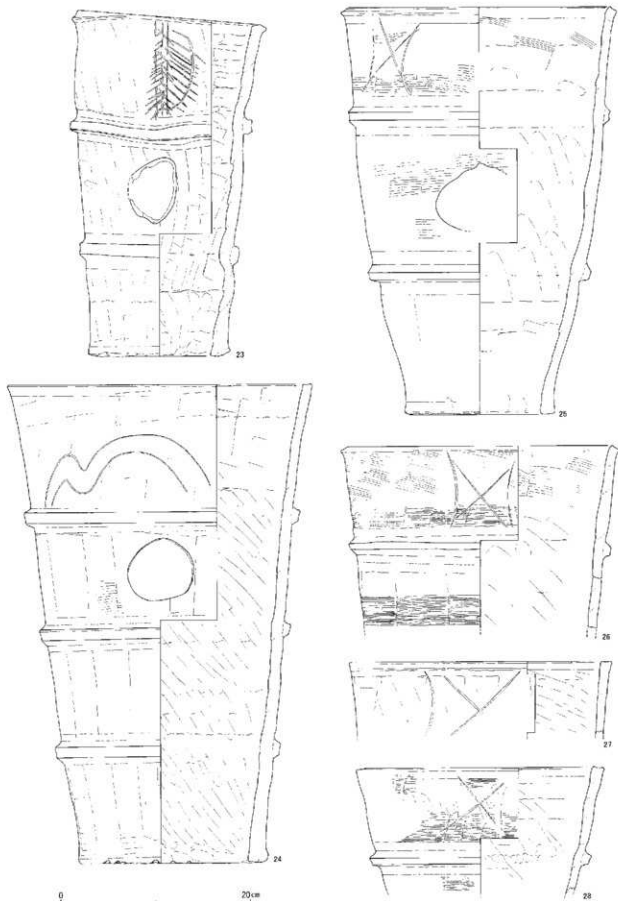
**SX302** (108～157) 周溝から弥生土器(壺・高杯)・土師器(高杯・甕・甌)・須臾器(蓋杯・短頸壺・甕)・石鏃・砥石・鉄製品、墳丘盛土から弥生土器(高杯・手焙形土器・甕)・土師器(高杯・甕)・土玉・石鏃が出土した。墳丘盛土出土の弥生土器・土師器(108～115)は、いずれも弥生時代後期から古墳時代初期に属する破片で、土玉(119)・石鏃(120)とともに墳丘築造時に混入したものであろう。こうした墳丘盛土に含まれていた遺物は、墳丘が崩れてゆく過程で一部周溝内に落ち込んでいるようで、ほぼ同時期のものとみられる弥生土器・土師器(124～126)や石鏃(121)は、周溝内からも少量出土している。

これら古い時代の混入遺物と考えられるものを除くと、周溝から出土した土師器甕は、いわゆる「宇田型」甕(128～138)と「伊勢型」甕(139～141)の2群に大別が可能である。139は、口縁部から頭

SX301(13~107)

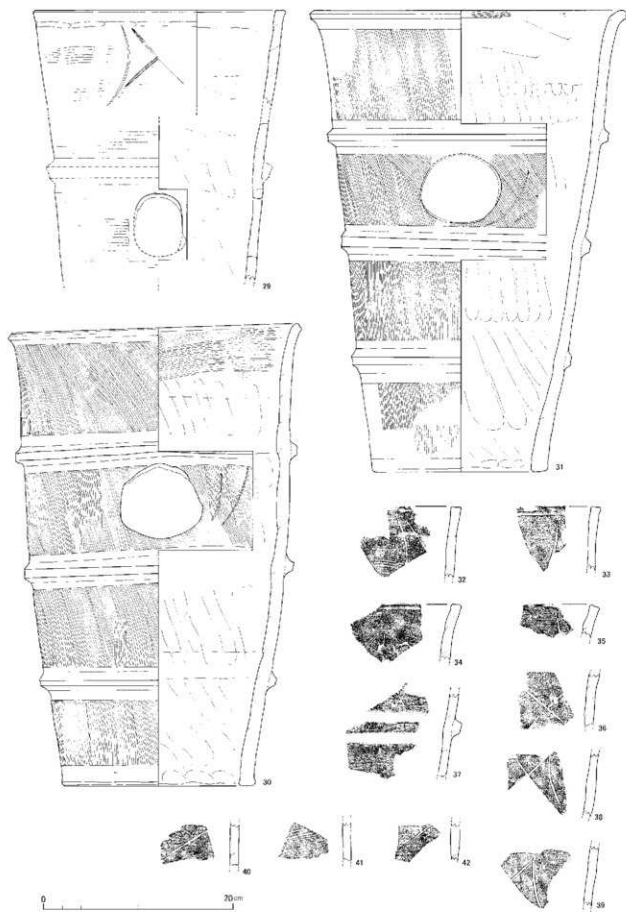


第32図 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(4)(15は1:2、他は1:4)

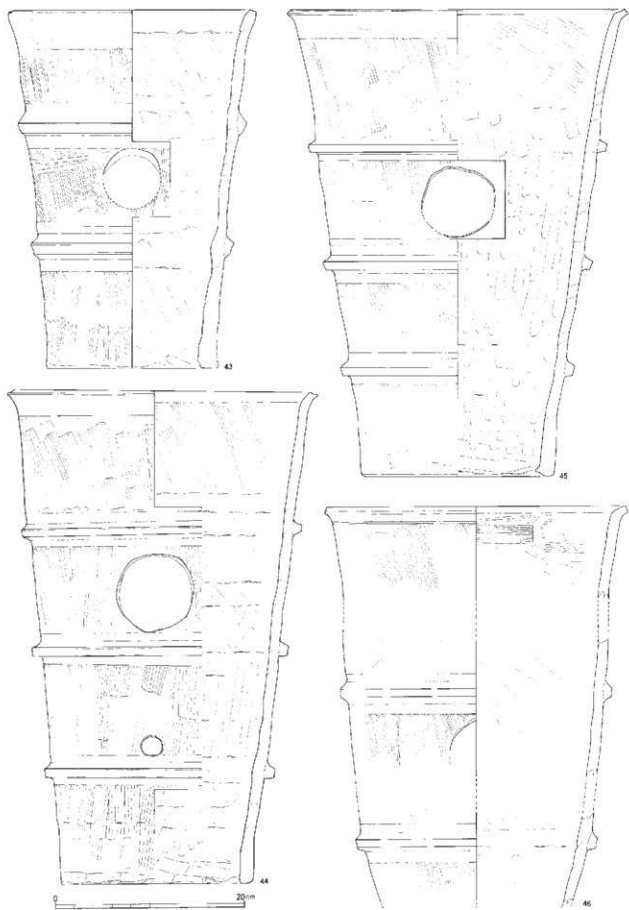


第33图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(5)(1:4)

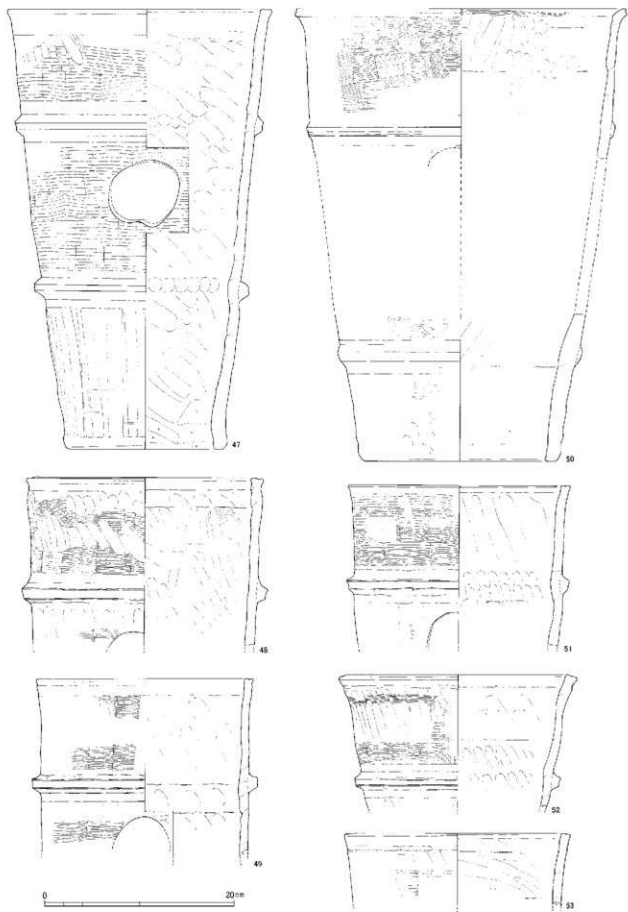




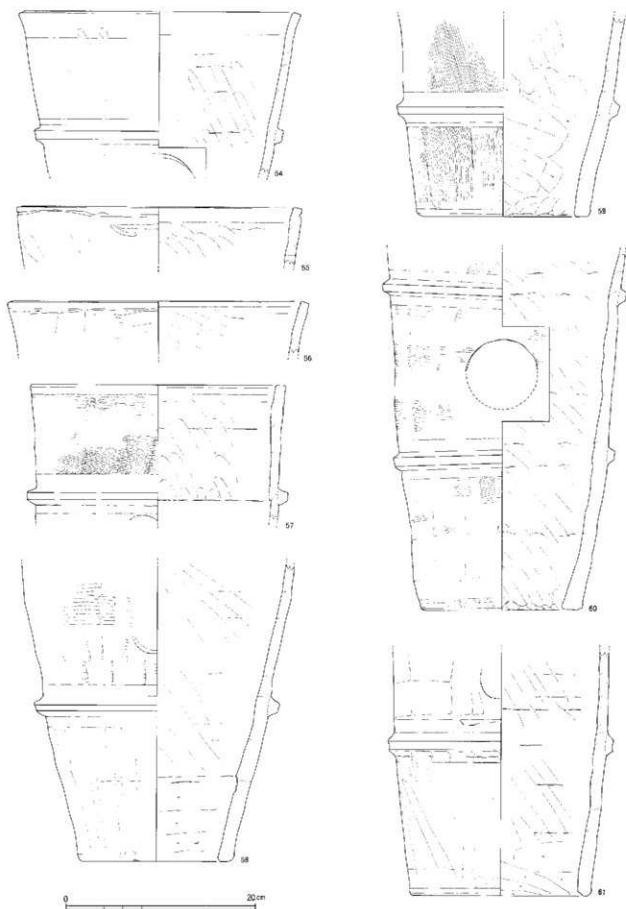
第34图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(6)(1:4)



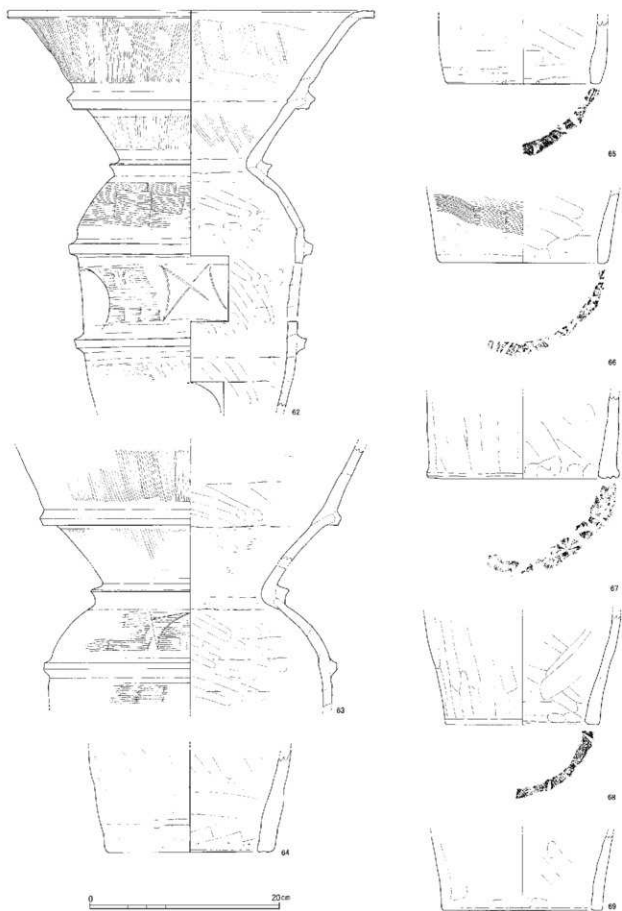
第35图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(7)(1:4)



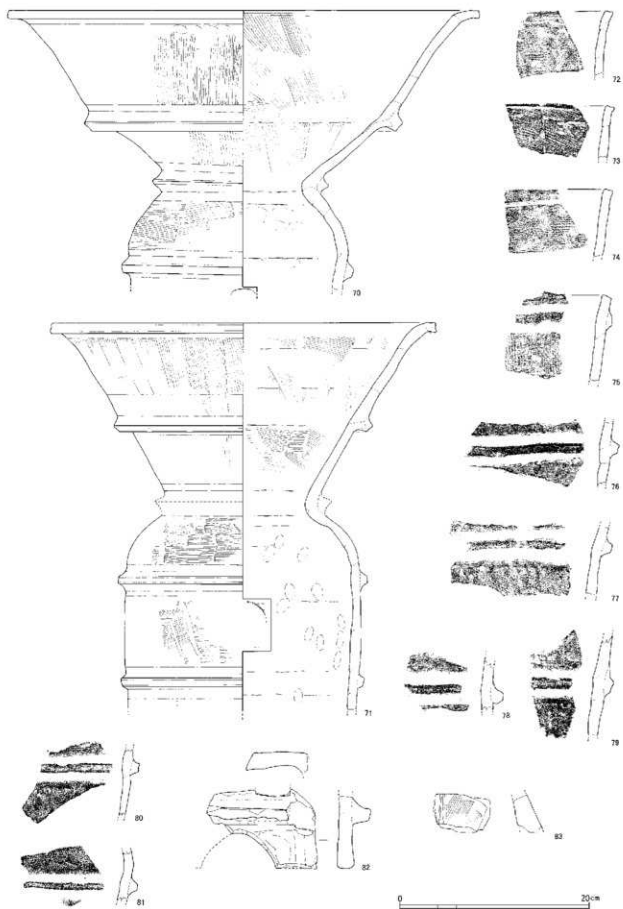
第36图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(8)(1:4)



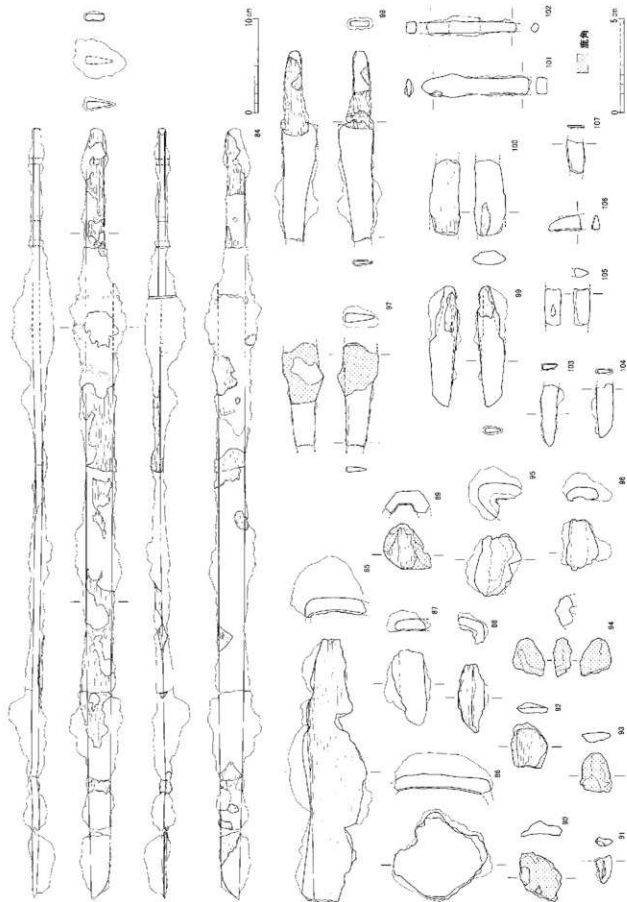
第37图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(9)(1:4)



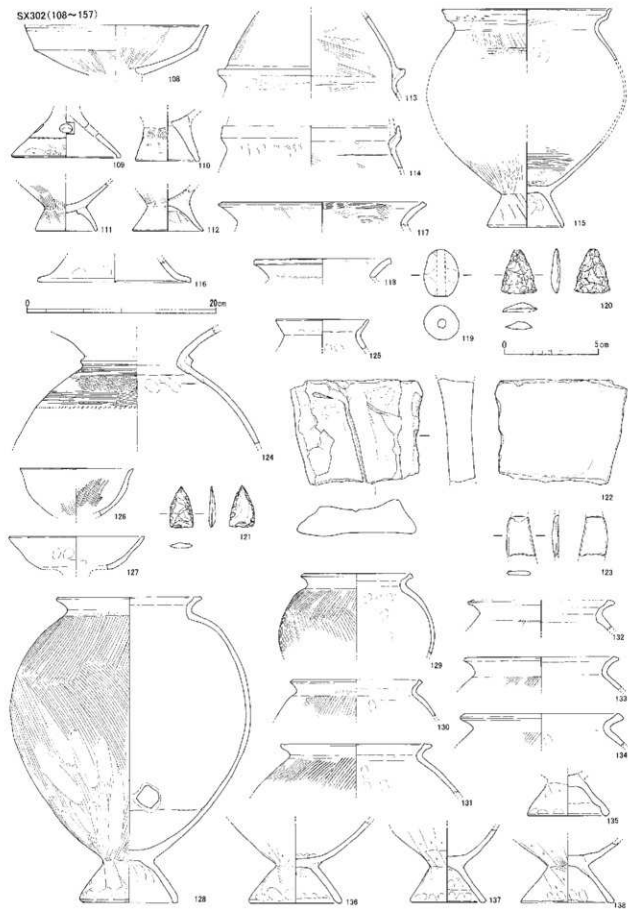
第38图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(10)(1:4)



第39图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(11)(1:4)



第40图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(12)(85~107は1:2、84は1:4)



第41図 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(13)(120・121・123は1:2、他は1:4)

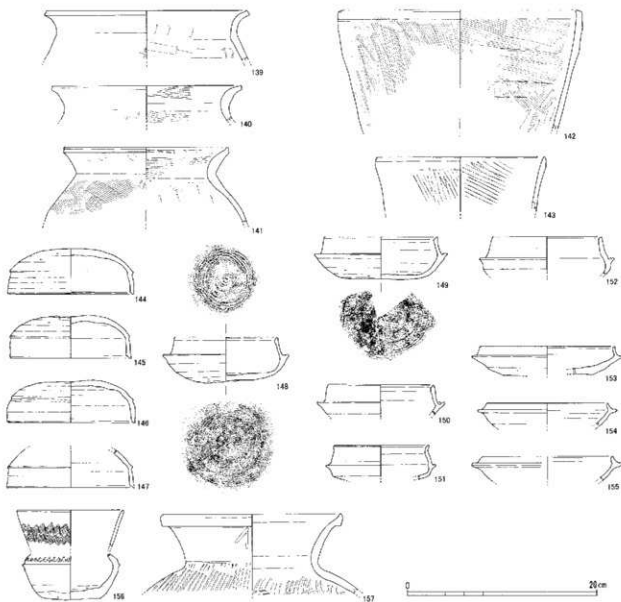


部にかけての厚みが比較的均一で、いわゆる「伊勢型」甕のなかでは古色を示す。類品には、高茶屋大垣内遺跡<sup>6)</sup>などで「宇田型」甕に共伴する事例<sup>7)</sup>も知られているので、ほぼ同時期のものとみて問題ない。これに対して、140 や 141 に認められる頸部の肥厚は、斎宮跡など飛鳥・奈良時代以降の遺跡からの出土品に通有の特徴である。年代観の隔たりが大きいため、後述の須恵器の一部 (153~155・157) とともに、後代の遺物が混入したものと考えられる。

須恵器は、南東側の周溝から杯身 (148~151)・杯蓋 (144~147)・壺 (156) がまとまって出土した。杯身・杯蓋ともに、猿投窯産の可能性あるもの (145・

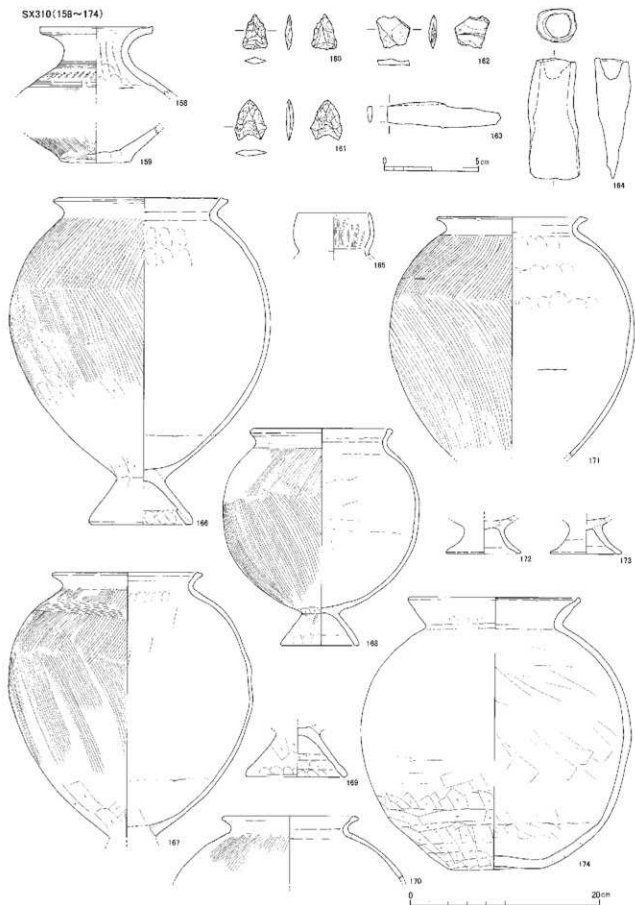
147・148・149 など) が少なからず含まれており、全体に東山 11 号窯<sup>8)</sup>の製品との類似性が高い。東山 11 号窯の操業時期についても、論者によって見解が分かれているが、5 世紀後半から 6 世紀前半の幅の中で捉えることに異論は見受けられない。

このほかに須恵器としては、杯身 (152~155)・甕 (157) が周溝内から散発的に出土しているが、猿投窯産の可能性ある 152 は東山 111 号の製品との共通性が看取され、まとまって出土した蓋杯 (144~151) と比べると、若干古相を呈している。小破片であることから、前代遺物の混入と考えられよう。一方、153~155・157 については、6 世紀末から 7 世



第 42 図 第 1・2 次 (下層) 遺構出土遺物実測図 (14) (1:4)

SX310(158~174)



第43図 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(15)(160~163は1:2、他は1:4)

紀前半頃の雑器と考えられている徳居 33・34 号窯<sup>9)</sup>などの製品との類似性を指摘でき、140・141 とともに年代的に新しく位置づけられる。SX 302 の周溝が完全に埋まりきる前の回みの堆積土中に含まれていたものか、調査時に後代の遺構の遺物が混入したものと考えられる。この周辺は、古代の遺構の分布がかなり薄い場所ではあるが、少ないながらも 7 世紀頃の遺構が存在していたのであろう。

**SX 310** (158~174) 周溝から弥生土器・土師器(甕・高杯)・鉄製品(袋状鉄斧・刀子)、墳丘盛土から弥生土器・石鏃・剥片が出土した。弥生土器(158・159)は、いずれも弥生時代後期に属する破片で、石鏃(160・161)・剥片(162)とともに墳丘築造時に混入したものであろう。

周溝から出土した遺物の大半は土師器で、甕には台付のいわゆる「宇田型」甕(166~171)と平底の甕(174)がある。「宇田型」甕は、SX 302 出土品と似通っているので、ほぼ同時期のものと推定される。土師器には、甕のほかに高杯の脚部(172・173)があり、確実ではないものの、173 は包含層出土の 276 と同一個体と考えられる。

弥生土器の瓢形壺(165)は、古墳時代初頭に属するもので、他の周溝出土遺物との間に大きな時間的

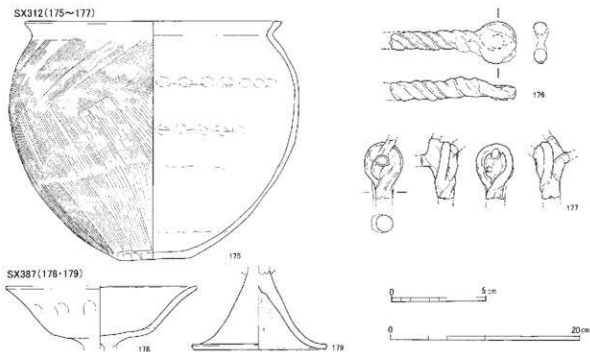
隔たりが認められる。小破片であることを考え合わせると、墳丘盛土などに含まれていた遺物が、周溝の埋没過程で紛れ込んだものと思われる。

**SX 312** (175~177) 北西側の周溝から土師器の鉢(175)と鉄製の馬具(176・177)が出土した。175 は大型の平底鉢だが、口縁部の形状や体部の調整がいわゆる「宇田型」甕に類似している。176・177 は、いずれも直径 7mm 前後の鉄棒を折り返して振り合わせたもので、折り返し部分は円環状に形作られている。176 は、轡の引手部分にあると考えられ、177 は円環部に兵庫鎖かと思われる細い 2 本の鉄棒が錆び付いている。

**SX 387** (178・179) 周溝から土師器の高杯が出土した。178 は杯部で、179 が脚部であるが、別個体である。

#### c 奈良時代遺構出土遺物(第 45~48 図)

**SD 309** (180~183) 土師器の壺・杯・皿と須恵器の杯が出土した。頸部内面に赤彩が施されている土師器壺(180)は、古墳時代初頭頃のものと考えられ、他の遺物との間に極端な時間的隔たりが認められる。前代の遺物が、遺構の埋没過程で混入したものであろう。



第 44 図 第 1・2 次(下層)遺構出土遺物実測図(16)(176・177 は 1:2、他は 1:4)

土師器の杯(181)と皿(182)は外面にヘラミガキが施されたもので、確らではあるが181の内面には左上がりの斜放射状暗文も認められる。同様のヘラミガキが施された土師器は、斎宮跡出土土器編年<sup>(9)</sup>の第1期第2段階(奈良時代前期)の基準資料であるSK5102出土品などの中に類例がある。

須恵器杯(183)は、胎土が精良な猿投窯系の製品で、底部を欠くため細かく時期を論ずることができないが、やはり奈良時代前期頃の操業と目されている篠岡112号窯<sup>(11)</sup>の出土品の中に類品の存在を見いだすことができる。これらを考え合わせるならば、SD309の埋没時期については、概ね奈良時代前期(8世紀前半)と推定されよう。

**SD341** (239) 小破片であるため図示していないが、古代の土師器・須恵器などが出土した。その他に、家形埴輪(239)の破片の一部が出土したが、古代の耕作に伴う溝と目される遺構の年代観との間に、大きな時間的隔たりが認められる。接合できることから、同一個体であることが明らかな家形埴輪の破片は、SX301周辺の包含層から多数出土していることからみて、もともとSX301墳丘上に立てられていたものが倒壊し、その破片が溝の埋没過程で紛れ込んだものと思われる。

239の屋根は切妻造で、外面には横方向のハケメが施された後に、線刻で棟覆いが表現されている。屋根の中央部裏側には、最終の閉塞工程を示すとみられる渦巻状の粘土紐痕が明瞭に残る。壁には縦方向のハケメが施され、平側に長方形の開口部が2箇所設けられている。基台部と身舎の境に設けられた床突帯は、接合面で剥離している。

**SD352** (184・185) 須恵器甕が出土した。いずれも口頸部の破片で、184は無文だが、強く外反した口縁形態が非常に特徴的である。185の外面には櫛描波状文が2段にわたって施されている。共に古墳時代に属するものと考えられ、SD357・SD360などとの重複関係から、奈良時代以降であることが明らかな遺構の年代観との間には、大きな時間的隔たりが認められるため、溝の埋没過程で前代の遺物が紛れ込んだものと思われる。

**SD357** (186~194) 土師器(杯・皿)と須恵器(杯・杯蓋・甕)が比較的多量に出土

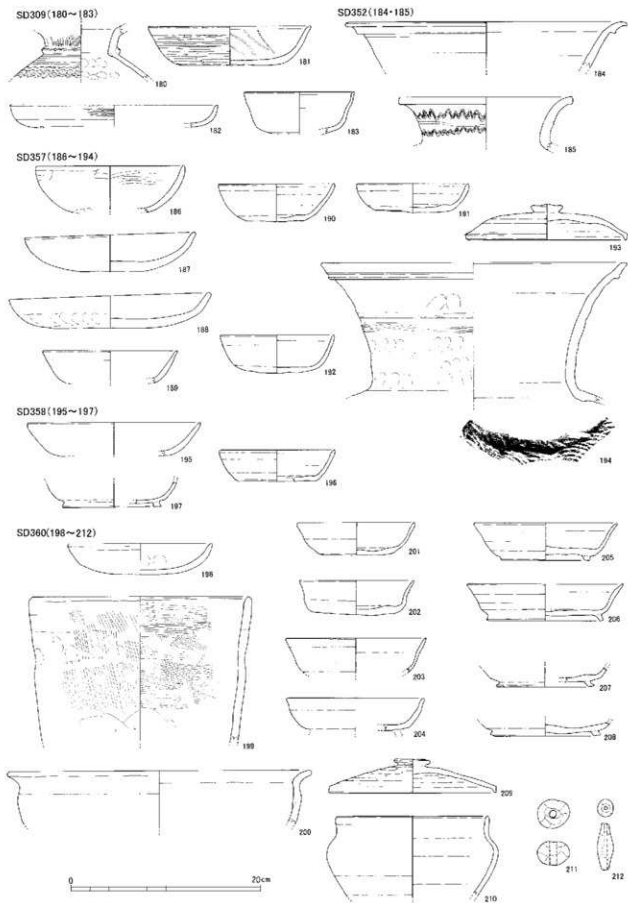
した。土師器杯(186)は、外面にヘラケズリとヘラミガキが、口縁部以外の内面ほぼ全面わたってヘラミガキが施され、丁寧に仕上げられている。土師器皿(187・188)は器壁が磨耗しているため調整は不明瞭だが、胎土は非常に粗雑である。

須恵器杯(189~192)のうち、190・191は内外面に油煙が付着していることから、灯明皿としての使用が考えられる。胎土から美濃須恵窯と推定される189・190・192は、「美濃国」印須恵器の生産から奈良時代初頭頃の操業と推定されている老洞1号窯<sup>(12)</sup>出土品の中に類品を見いだすことができる。193は、猿投窯系の窯の製品かと思われる須恵器杯蓋で、ヘラ切り手法でロクロから切り離されている点で古相を示すものの、鈕の付け根のくびれが弱くなっている点に新しい要素が認められる。こうした特徴や全体の形状は、和銅七年(714)を中心とする年代の紀年銘木簡と共に長屋王邸SD4750から出土した猿投窯系須恵器杯蓋と、神亀二年(725)から天平十一年(739)の紀年銘木簡と共に、平城京京二条坊二条大路SD5100から出土したもの<sup>(13)</sup>の中間の様相を示す。したがって、SD357の埋没時期については、前述のSD309とほぼ同じ奈良時代前期と考えることができよう。

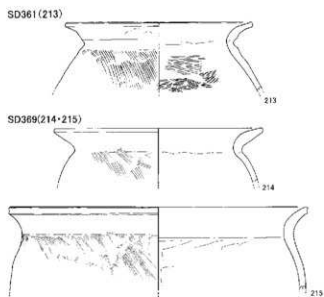
須恵器甕(194)は、外反する頸部の中央に沈線が1条施され、口縁部は薄い緑帯の下に突帯が巡る形状のものである。体部内面には同心円文当て具痕が残っている。

**SD358** (195~197) 土師器杯(195)・須恵器杯(196・197)が出土した。195は内外面ともに磨耗が著しく、器面調整は不明である。196は美濃須恵窯と推定される須恵器無台杯で、内面に油煙の付着が認められる。197は猿投窯系の窯の製品とみられる有台杯で、内面には使用による磨耗が認められる。いずれも小破片であるため、細かく時期を論ずることが難しいが、奈良時代のもののみならず問題ないと考えられる。

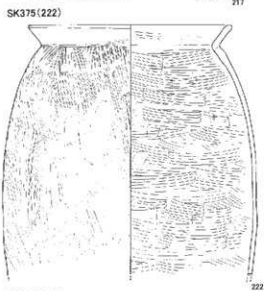
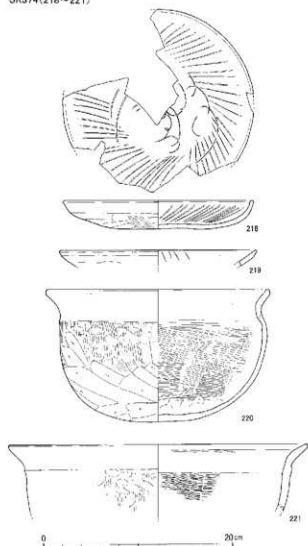
**SD360** (198~212) 土製品(土玉・土鍾)・土師器(杯・甕・瓶)・須恵器(杯・杯蓋・短頸壺)が出土した。土玉(211)は通常、弥生時代の遺跡から出土するもので、他の遺物との間には大きな時間的隔たりが認められる。古い時代の遺物が、溝の埋



第45図 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(17)(1:4)



SK374 (218~221)



第46图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(18)(1:4)

没過程で紛れ込んだものと思われる。

須恵器には、美濃須衛窯産や猿投窯系の窯の製品とみられるものが多数含まれており、美濃須衛窯産とみられる須恵器（202・203・206～208）は、いずれも「美濃国」印須恵器の生産で知られる老洞1号窯<sup>10</sup>出土品の中に、類似の形態のものを見いだすことができる。一方、猿投窯系とみられる須恵器（204・209・210）は、いずれもNN288号窯<sup>15</sup>・篠岡112号窯<sup>16</sup>出土品との類似性が見て取れるもので、杯蓋（209）については藤原宮外濠SD2300<sup>17</sup>からも類品が出土している。藤原宮外濠出土品が藤原宮の時代（694～710）に属すると考えられる一方で、「美濃」という国名表記の公定が和銅元年（708）頃と推定されている<sup>18</sup>ことを考え合わせるならば、SD360の埋没時期は平城遷都（710）を大きく前後しない時期と考えることができよう。

**SD361**（213） 土師器が出土した。213は、いわゆる「伊勢型」の土師器甕の口縁部で、斎宮跡

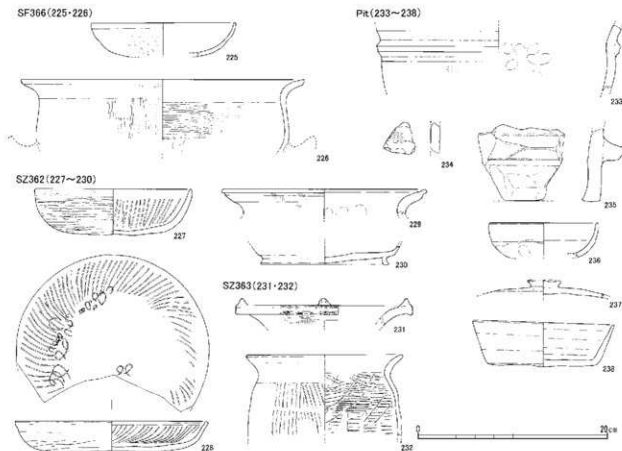
から飛鳥・奈良時代の遺物に伴って出土するものに近似している。

**SD369**（214・215） 土師器が出土した。214・215は、いわゆる「伊勢型」の土師器甕の口縁部で、やはり斎宮跡から飛鳥・奈良時代の遺物に伴って出土するものに近似する。

**SK370**（216） 須恵器の小片が出土した。216は、美濃須衛窯製品と思われる須恵器の有台杯である。

**SK372**（217） 土師器皿が出土した。217は、内面に右上がりの斜放射状暗文、外面にはヘラミガキが施されている。同様の暗文とヘラミガキの組み合わせは、斎宮跡出土土器福年<sup>19</sup>の第I期第2段階（奈良時代前期）の基準資料であるSK5102出土土師器皿などの中に認められる。

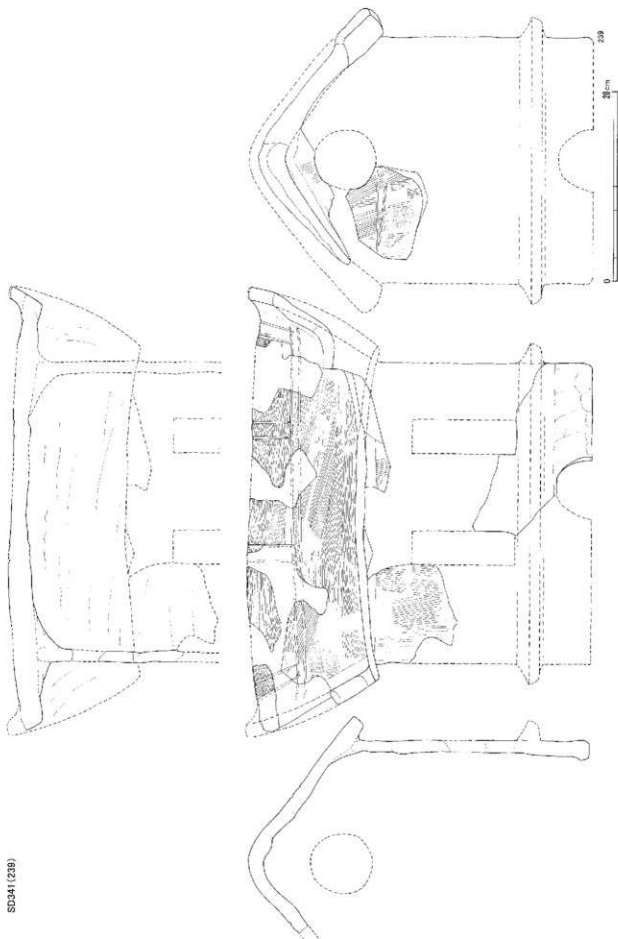
**SK374**（218～221） 土師器の皿（218・219）と甕（220・221）が出土した。218はやや深手の土師器皿で、内面に右上がりの斜放射状暗文と螺旋状



第47図 第1・2次（下層）遺構出土遺物実測図（19）（1：4）

SD341(238)

第48图 第1・2次(下層)遺構出土遺物実測図(20) (1:4)





暗文、外面には底部付近にヘラケズリとヘラミガキが施されている。219も土師器皿だが、218と較べると浅手で、内面には左上がりの斜放射状暗文が施されている。218に認められるような斜放射状暗文と螺旋状暗文の組み合わせは、斎宮跡出土土器では奈良時代前期(第1期第2段階)もしくは奈良時代中期(第1期第3段階)とされる土器群の中に散見される特徴である。

**SK375** (222) 土師器の長胴甕が出土した。222は、類例の乏しい、珍しい口縁形態の甕である。

**SK390** (223) 土師器皿が出土した。223は、内面に右上がりの斜放射状暗文、外面にはヘラミガキが施されている。SK372出土品(217)に近似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

**SK399** (224) 土師器の長胴甕が出土した。224は、斎宮跡から飛鳥・奈良時代の遺物に伴って出土するものに近似する。

**SF366** (225・226) 土師器(杯・甕)が出土した。225は、胎土が比較的精良な土師器杯で、外面には指頭圧痕が残るが、部分的にヘラケズリの痕跡も認められる。226は、やや浅手の土師器甕で、外面には把手が剥がれた痕跡がある。把手を有する類似の甕が、斎宮跡から飛鳥・奈良時代の遺物に伴って出土している。

**SZ362** (227~230) 土師器(杯・皿・甕)・須恵器(杯)が出土した。土師器杯(227)は、内面に放射状暗文、外面にはヘラミガキが施されている。土師器皿(228)は、内面に右上がりの斜放射状暗文と螺旋状暗文、外面には底部付近にヘラケズリが施されている。SK374出土品(218)に類似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

須恵器有台杯(230)は猿投窯系の製品で、回転ヘ

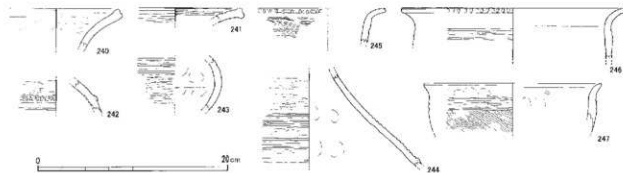
ラケズリが施されていて不鮮明ではあるものの、底部外面にヘラ切り痕跡が認められる。独特の形状の高台を有しており、類品をNN288号窯<sup>20)</sup>出土品の中に見出すことができる。

**SZ363** (231・232) 弥生土器・土師器が出土した。231は口縁部内面に瘤状突起が付く弥生土器の広口壺で、溝の埋没過程で古い時代の遺物が紛れ込んだものと思われる。232は土師器の小型丸底甕で、斎宮跡から飛鳥・奈良時代の遺物に伴って出土するものに近似している。

**Pit** (233~238) 建物として復元できないが、古代に属すると思われる柱穴状の小土坑から、円筒埴輪・家形埴輪・土師器杯・須恵器(杯蓋・杯)などが出土した。234・235は家形埴輪で、234は屋根部、235は基台部の破片である。胎土や焼成などから、234はSD341出土の家形埴輪(239)と同一個体の可能性が高いと思われるが、235は別個体と考えられる。236は土師器杯で、内外面に油煙のような黒色の付着物が認められる。斎宮跡から飛鳥・奈良時代の遺物に伴って出土するものに近似している。237・238は、いずれも猿投窯系の製品とみられる須恵器で、NN288号窯<sup>21)</sup>や篠岡112号窯<sup>22)</sup>に類例が認められる形態である。(水桶)

#### d 包含層等出土遺物(第49~61区)

弥生時代前期(240~247) 240~244は壺である。これらの壺は赤褐色から茶褐色の胎土で雲母片などの砂粒を含むものが多い。基本的には丁寧なミガキ調整で器表面が研磨されている。240・241は口縁部片である。240は口縁端部にヘラ描き沈線が1条認められる。241は口縁端部にヘラ描き沈線、内面に幅広沈線が3条認められる。242・243は体部中



第49図 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測図(1)(1:4)

央付近、244は肩部の破片である。242は刻み目を付けた貼り付け突帯がみられ、その上下にヘラ描き沈線が2条ずつ認められる。243はヘラ描き沈線が3条認められる。244は残存部の最下端で僅かに貼り付け突帯が確認できたが、突帯への刻み等の有無は不明である。貼り付け突帯から上部にかけてヘラ描き沈線が5条、やや間隔を開けて3条認められる。

245~247は甕である。甕の胎土は、壺ほどの特徴はない。245は頸部から口縁部にかけて大きく広がる形状のもので、口縁端部に刻みが、体部外面上方に半截竹管とみられる2条の沈線が認められる。外面にスガが付着している。246の口縁部は245よりやや緩やかに外方へ広がる形状のもので、口縁端部に刻みが、体部外面上方に3条のヘラ描き沈線が認められる。胎土中には別個体の土器微細粒とみられる赤褐色粒が多く含まれている。247は頸部から口縁部にかけてそれほど外方へ広がらず、口縁端部への刻みはみられない。外面体部上半に3条のヘラ描き沈線が認められる。この沈線は他の沈線と比較して鋭角に入っている。外面全体および体部内面にスガが認められる。

小片であるため頸部の突帯は確認できなかったが、240が正統遠賀川系土器とみられ、241~247は亜流遠賀川系土器である。いずれもI-3・4様式に納まるとみられる。

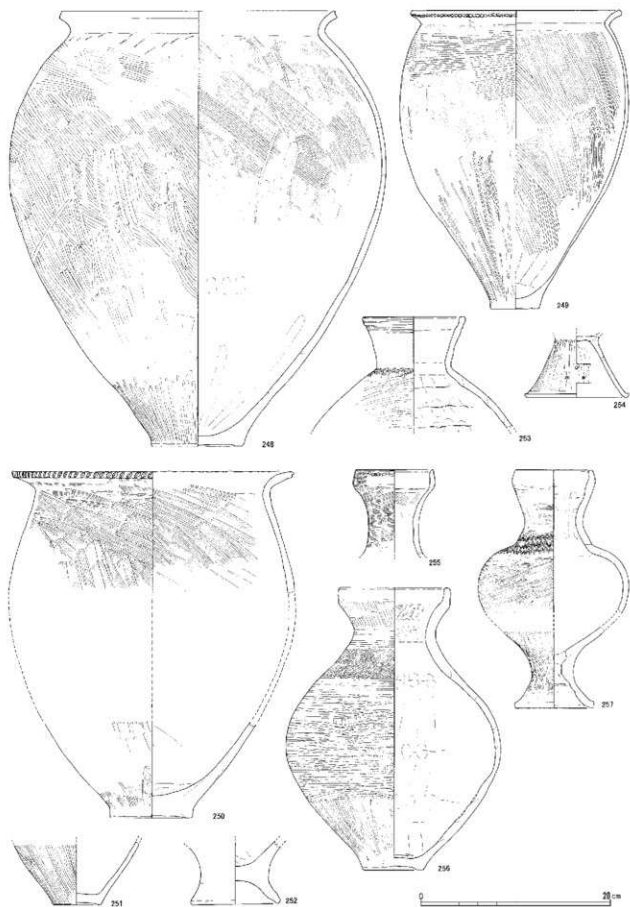
**弥生時代中期 (248~257)** 248~252は甕で、248~250はくの字状平底甕である。248・249は体部上半に最大径がくるものである。248の口頸部は上方に外反し、口縁端部は横ナデにより僅かに凹んでいる。底部から肩部にかけて縦方向ないしは斜め方向のハケ目、肩部以上は横方向のハケ目がみられ、体部中央部付近に縦方向のヘラミガキが認められる。249は口頸部が外方にほぼ直線的に広がり、口縁下端部に刻みが認められる。底部から頸部にかけて縦方向の、肩部以上は縦方向の後横方向のハケ目がみられる。IV-3様式に比定されよう。250は248・249よりも体部最大径の位置が下がっている。口頸部は大きく外方へ伸び、口縁端部に刻みが施される。体部外面は肩部から頸部にかけて斜めの、その後底部から肩部にかけて縦方向のハケ目がみられる。251は体部外面に縦方向のハケ目がみられる。252は台

付甕である。脚台部分は短く、緩やかに外方に伸びて、低い台部となる。底部と台部の境界部分には明確な稜線は認められない。

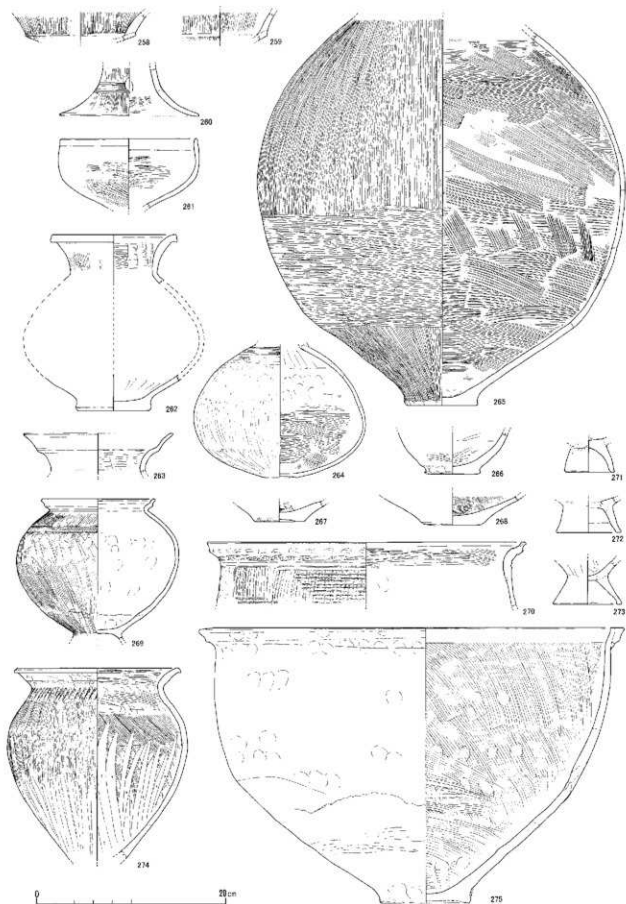
253・255~257は壺である。253は口縁部に3条の擬回線文が施され、受口状となっている。頸部にはハケ状工具による刺突文が巡っている。内面は頸部と受口部分の境で粘土紐接合痕がみられる。255は受口状口縁細頸甕である。口縁部外面は波状文がみられ、頸部には横方向のハケ目に近い細かな櫛描直線文が認められる。この櫛描文は全周せず、途切れ途切れである。256は受口状口縁甕で、体部は体部最大径よりも体部高が大きくやや縦長の球筒形である。外面は体部が縦方向のミガキ後、体部最大径付近は横方向のミガキ調整がなされ、頸部から肩部にかけて櫛状工具による直線文、波状文が施されている。受口部分は回線文が認められる。257は受口状口縁台付甕で、口縁部の形状は256よりもやや内傾し頸部も256より長く、体部は肩が張る形状である。台部は端部で外方に広がり、端部に面を持つ。頸部から体部の調整技法は256ともほぼ同じで、櫛状工具による施文で直線文、波状文が施されている。255~257はいずれもIV-3様式に比定される。

254は壺ないしは甕の脚部であると思われる。脚部は直線的に伸び、それほど大きく広がらない。器壁は全体的に薄く、外面はヘラミガキで調整されている。透孔の径はいずれも5mm程度と小さく、残存の良好な部分で脚部の中位から下部で3箇所認められる。これは三角形のそれぞれ角にあたる部分に透孔がくるような配置であり、上方に位置している孔が4箇所確認できることから、同様の透孔が4方向にあったと推定される。

**弥生時代後期から終末 (258~262・265~268・270~274)** 258~261は高杯である。258・259は杯部が外反するものである。260は脚部で、端部にかけて大きく外反しており、端部は丸く納めている。透孔が1箇所のみ残存しており、透孔付近には櫛描直線文が7条認められる。261はワイングラス形高杯の杯部である。杯部高が低く、端部が横ナデにより僅かに外反している。262・265~268は壺である。262は口頸部が外反し、口縁部はやや肥厚して外側に面を持つものである。体部は欠損しており、その



第50图 第1·2次(下層)包含層出土遺物实测图(2)(1:4)

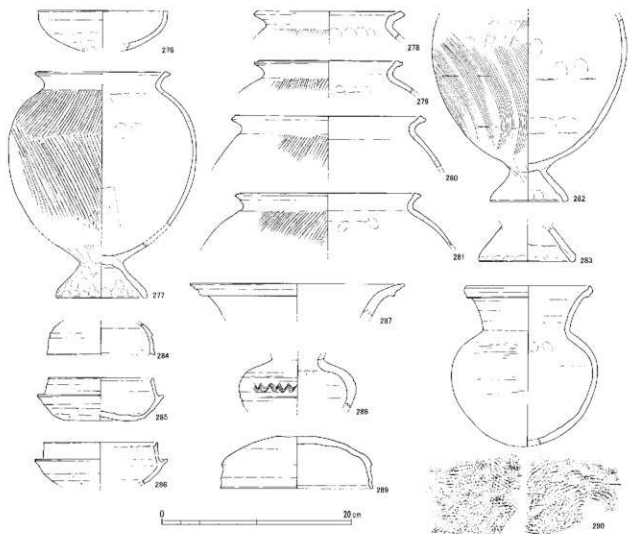


第51图 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測图(3)(1:4)

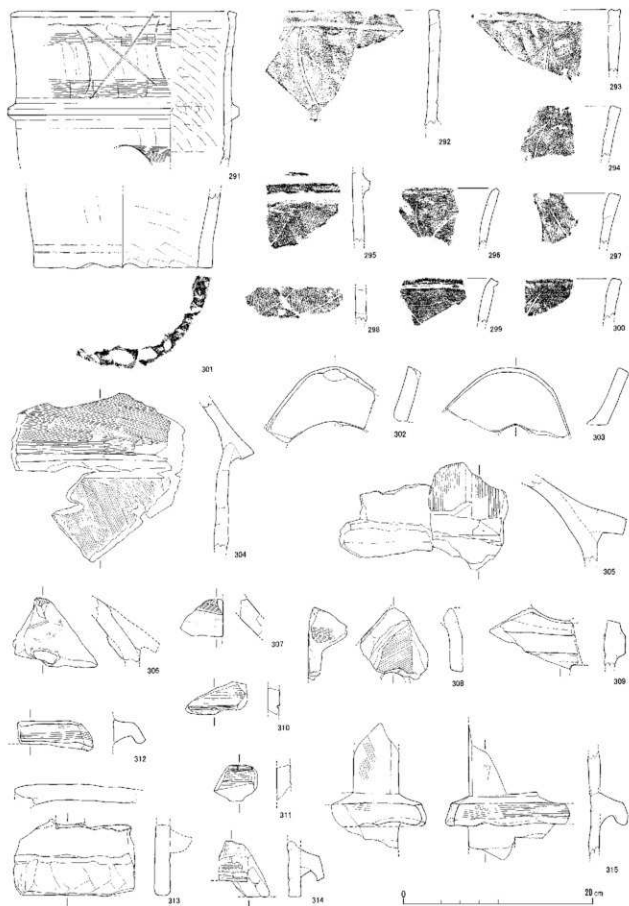
形状は不明である。底部はやや突出し、平坦である。265は大形の壺で、体部最大径が中位にくるものである。266～268は底部片である。266は底部から体部にかけての立ち上がりが急で、小形壺であるとみられる。底部外面の調整によりやや突出した平底となっている。外面はヘラミガキ調整であるが、粗雑なつくりである。271～273は甕台部である。(271)、外方に直線的に広がるもの(272・273)がある。274はくの字状甕である。外方に開く口縁部は、端部が強い横ナデにより面を持ち下方へ肥厚している。肩部の張りは緩く、頸部に列点文を施す。外面には口縁部および体部最大径よりもやや下部でススが輪状に付着している。これらは概ねV様式に納まるものとみられる。270はS字状口縁付甕(以後、S字

甕と呼称)である。大形のもので、一般的なS字甕と較べて肩部の張りが認められない。口縁部には押し刺突が認められる。また、頸部から肩部にかけて外面は粗い縦方向および横方向のハケがなされ、頸部内面にもハケメが認められる。赤塚次郎氏分類<sup>22)</sup>(以後、赤塚分類と呼称)のA類である。時期はVI-2様式である。

古墳時代前期(263・264・269・275) 263・264は壺である。263は二重口縁壺である。口縁部上段は短く緩く外反し、頸部径と口縁部径の差はさほどない。全体的に磨耗していることもあるが、器壁が薄く、口縁部下段内面に粗いハケメが認められる程度である。264は体部最大径が下位にくるもので底部に僅かな凹みが認められる。器壁は薄い。肩部の櫛描直線文は確認できるものの、明瞭ではない。



第52図 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測図(4)(1:4)



第53图 第1·2次(下層)包含層出土遺物实测图(5)(1:4)

269はS字甕である。269の口縁部は横ナゲのみで刺突文は無く、頸部にはヘラ状工具による凹みが認められる。体部は羽状ハケの後、肩部に横ハケを行っている。体部下半に粘土紐接合痕が残り、内面は粘土紐接合痕付近に炭化物が認められる。赤塚分類に拠るとB類新段階からC類古段階にかけてのもので、赤塚編年廻間Ⅱ～Ⅲ式期（3世紀後半から4世紀前半）に比定される。275は大形の鉢である。外面は一部粘土紐接合痕や指頭圧痕がみられるものの、全体的に丁寧にナゲ調整を行っている。内面は粗いハケ調整で口縁部付近は横ナゲがみられる。また、口縁部外面は粘土帯を付けて強く横ナゲをしているため、突帯状になっている。大形の鉢でこのような口縁部形態を持つ類例は現時点で不明である。

（原田）

**古墳時代中後期（276～315）** 276は、SX310出土の173と同一個体とみられる土師器高杯の杯部で、口縁端部に油煙痕が認められる。277～283は土師器甕で、いわゆる「宇田型」甕である。形態的に、SX301・SX302・SX310出土品と顕著な差は認められないので、ほぼ同時期のものと考えられる。

284～286は須恵器蓋杯で、産地の特定は難しいが、形態的にはSX302出土品に近似しており、大きく前後しない時期のものと考えられる。287は須恵器甕で、口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部直下に小さな突帯が巡る。288は猿投窯系の製品かと思われる須恵器の壺もしくは甕で、外面肩部に1条、胴部に2条の沈線が巡らされ、その間に櫛描波状文が施されている。類品は、名古屋市の牛牧離れ松遺跡第4号遺構<sup>264</sup>から出土しており、伴出の須恵器杯・高杯は城山2号窯<sup>265</sup>や東山11号窯<sup>266</sup>出土品との共通性が高いので、5世紀後半から6世紀前半のものと考えられる。289は須恵器杯蓋で、焼成不良品のため産地比定に不安は残るが、形態的には猿投窯系の製品と見てよさそうである。284～286と比べ口径が大きく、東山61号窯<sup>267</sup>出土品との類似性が高い。東山61号窯の操業時期については、論者によって差があるが、6世紀の幅の中で捉えることに異論は見受けられない。290は須恵器の小型甕で、基本的にロクロ成形されているが、ロクロから切り離した後で、底部を叩き出して丸底に作り出

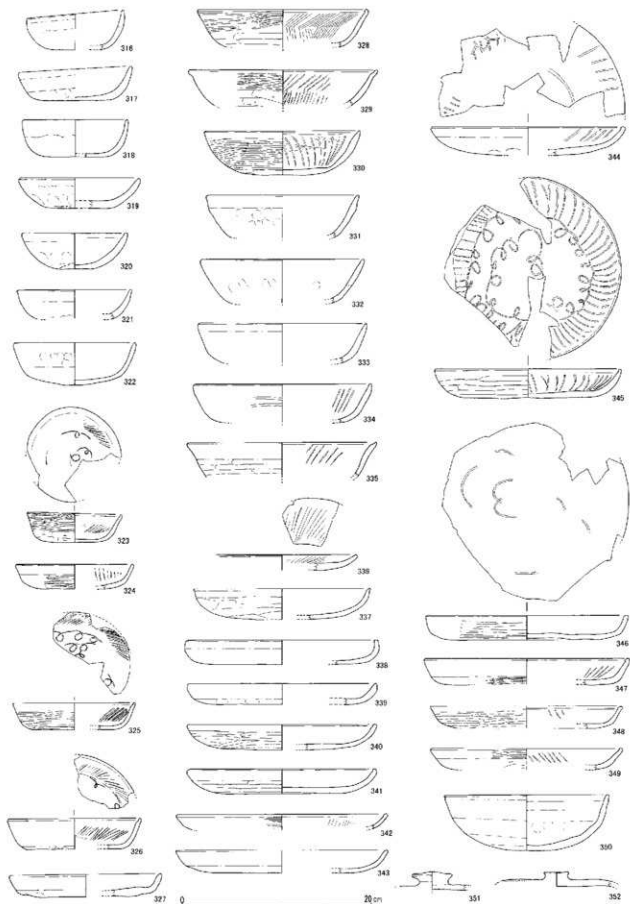
しており、底部外面には木目に直交した平行タタキ痕、底部内面には同心円文当て具痕が認められる。胎土から、伊勢在地の窯の産とみられる。

291～301は円筒埴輪、302～315は家形埴輪である。円筒埴輪は大半がSX301の周辺から出土したもので、SX301出土の破片と接合できるものが少なくないが、接合できないものも、形状・調整がSX301出土品と酷似している。周囲に他に円筒埴輪を伴っていたとみられる古墳も認められないため、もともとSX301の墳丘上に樹立されていたものである可能性が高い。線刻に、弧と「×」を組み合わせた記号風のもの（291～294・296・297・299・300）と2条の弧を並べたもの（295・298）の2種類が認められることも、SX301出土品との共通点である。家形埴輪は、やや広範囲からの出土が認められるが、分布は明らかにSX301周辺に偏っており、離れた場所（25m程度）から出土した破片がSX301周溝上の包含層出土のものと接合できることから、やはりSX301に帰属するものと考えられる。302・303は降泥板、304～306は屋根から壁にかけての部位、307・310・311は屋根、308・309は壁、312・314・315は鼠返突帯、313は基台と推定される。314・315は鼠返突帯の下方に、方形の透孔が施されている。

**古代（316～502）** 316～406は土師器。316～322は、かつて斎宮跡出土土器の中で「いなか風輪」と呼称<sup>268</sup>されていたもので、類品はしばしば飛鳥から奈良時代の遺物に伴って出土する。318の口縁部には、ススが付着したような黒い変色部分が認められる。

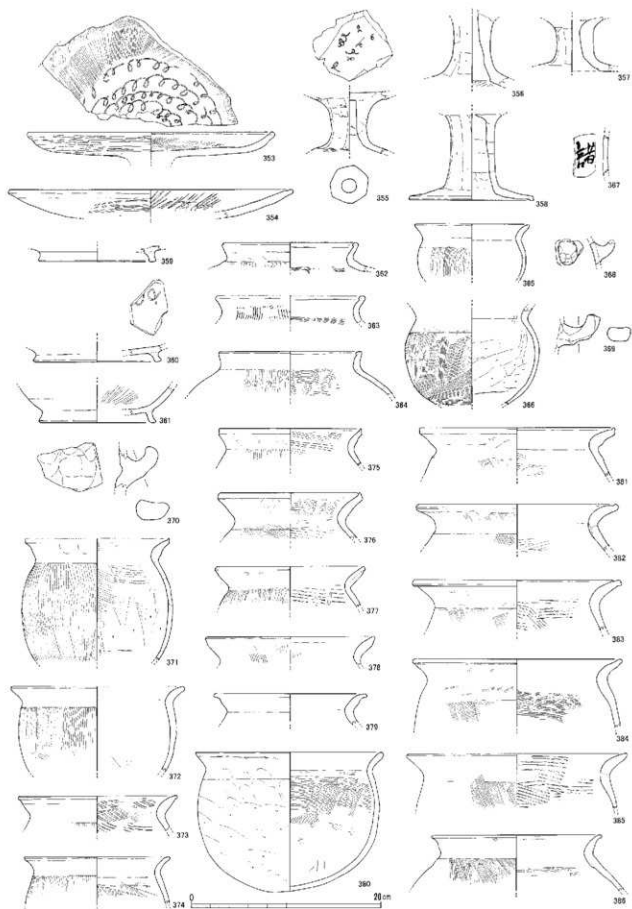
323～349は、宮都の土師器を模したと考えられるもので、323～326・328～335が杯、327・336～349は皿である。胎土は比較的精良で、橙色を帯びた色調を呈しているものが目立つ。風化により不鮮明なものもあるが、基本的には内面に暗文が施されている。中でも328には、特に丁寧に暗文とヘラミガキが認められ、赤褐色を呈する胎土の色調は、津市（旧一志町）の片野遺跡<sup>269</sup>出土のものと酷似している。

350は鉢。351・352は蓋、353～358は高杯で、やはり宮都の土師器を模したと考えられるもの。353は、内面に二段放射状暗文と螺旋状暗文、外面にヘラミガキが丁寧に施されている高杯の杯部で、358

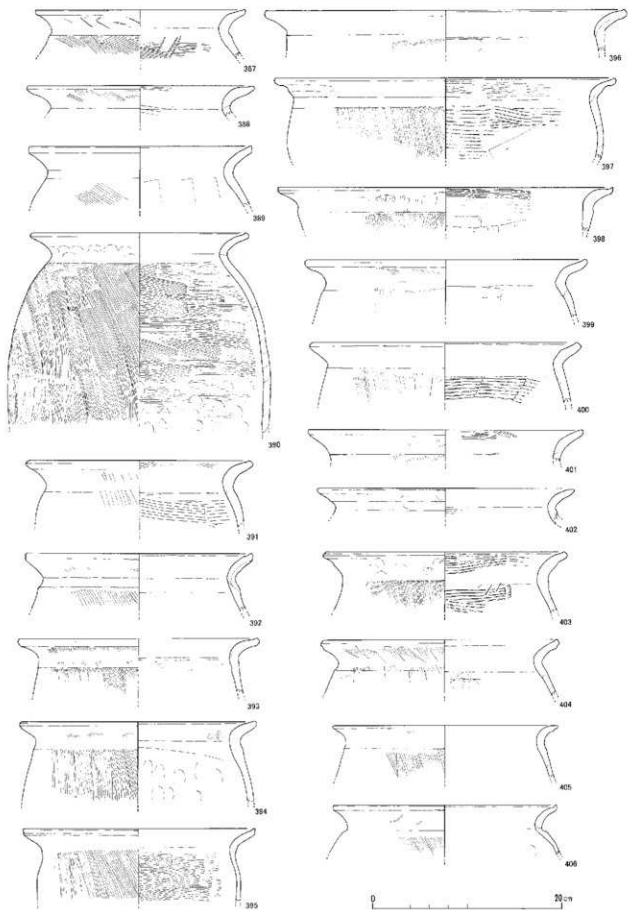


第54图 第1·2次(下層)包含層出土遺物実測图(6)(1:4)

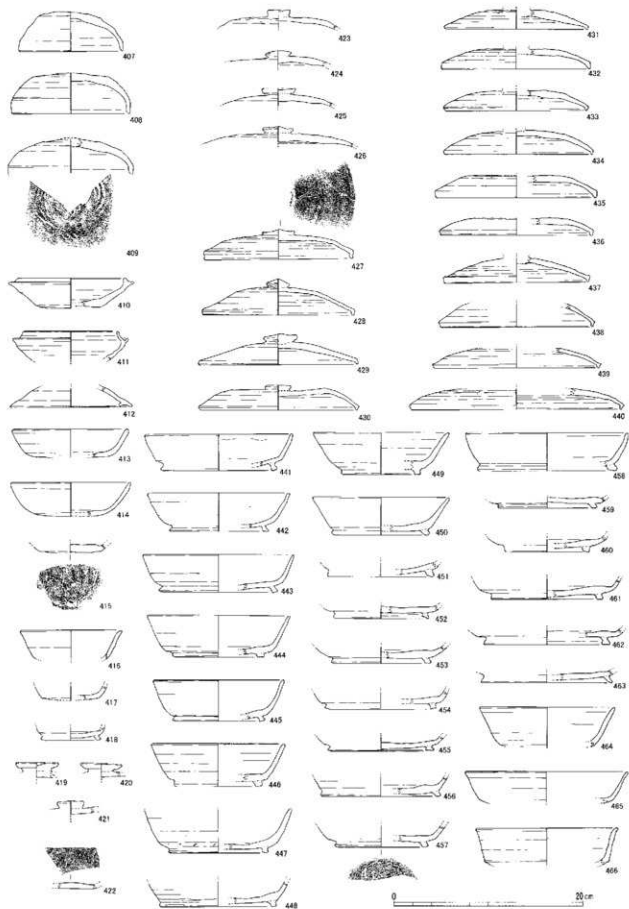




第55图 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測图(7)(1:4)



第56图 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測図(8)(1:4)



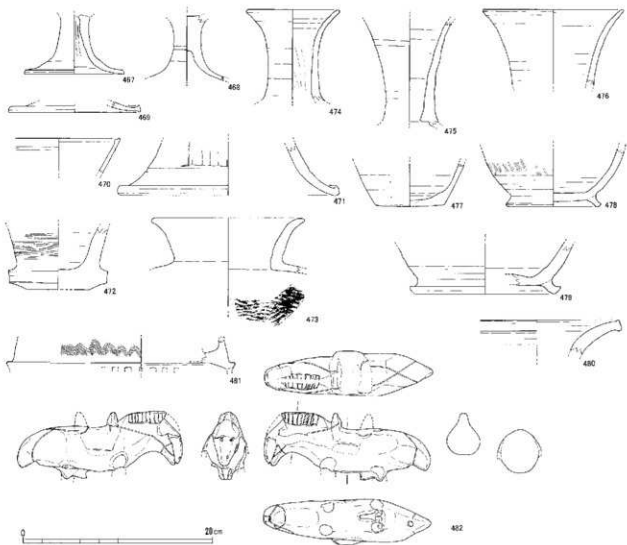
第 57 图 第 1・2 次 (下層) 包含層出土遺物実測圖 (9) (1:4)

と同一個体である可能性が高い。355～358は、面取りが施された高杯の脚部である。

359～361は台付の杯もしくは碗で、361の内面には細い放射状暗文、外面にヘラミガキが施されている。362～364は壺。365～367・371～406は甕で、367は外面に「諸」と墨書されている胴部片である。368～370は壺・甕・瓶などの把手である。

407～482は須恵器。奈良文化財研究所の分類<sup>30)</sup>に従えば、407～409が杯H蓋、410・411が杯H、412が杯G蓋、413～415が杯G、416・417・464が杯A、419～421・423～440が杯B蓋、441～463・465・466が杯Bとなろう。422は小破片であるため、器形の特定が難しいが、内面に螺旋状暗文が2重に施されていることから考えて、土師器杯模倣の器形である杯Cの底部ではないかと思われる。

杯H蓋のうち、409には内面に黒色炭化物の付着が認められるため、灯明皿のような用途が想定できる。杯Hの中で、口縁部の立ち上がりや蓋受け部直下の段といった特徴から、猿投窯系の製品と考えられる411は、皇極四年(645)の乙巳の変に伴う焼土層と目されている甘樫丘東麓遺跡SX037<sup>31)</sup>出土品に類例が認められるので、7世紀第2四半期頃のものとして推定される。1点のみ図示した杯G蓋(412)は、胎土から美濃須賀窯産とみられるもので、類品は天狗谷0号窯<sup>32)</sup>から出土している。この窯は、須恵器杯H・杯G・杯Bをいずれも生産していた窯であり、その操業年代は7世紀第3四半期頃と考えられる。杯Gのうち、415は底部外面に「罽」の字に似たヘラ記号が記されている。杯B蓋・杯B身には、猿投窯系の製品も認められるが、量的には伊勢在地



第58図 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測図(10)(1:4)

の窯や美濃須衛窯と思われる製品が多くを占めているように見受けられる。杯B蓋は、内面中央付近が磨耗しているものが多く、転用碗としての使用が考えられるが、明確な墨痕は観察されない。

467～469は高杯の脚部で、いずれも透孔は認められないが、468は中段に一条の沈線が巡る。470は平瓶の口縁部。471は大型の高盤の脚部かと思われるもので、縦長方形の透孔を有する。胎土・焼成からみて、美濃須衛窯産であろう。472は捏鉢の底部。473は横瓶で、胴部内面に成形時の当て具痕跡が明瞭に残る。474～476・478・479は長頸壺で、美濃須衛窯産とみられるものが多い。477は鉢もしくは瓶の底部。480は甕。481は圓足円面碗で、外壁に櫛描波状文が施され、脚部には7～9mmの間隔で約4mm幅の透孔が多数あけられている。482は陶馬。中空の胴部に、棒を芯にして粘土を巻きつけた脚や、鞍橋・障泥・生殖器を貼り付けて成形された雄の馬である。面繫・尻繫・手綱・タテガミはヘラ状工具による線描、鼻や口は同じくヘラ状工具による刺突、目は竹管による刺突で表現されている。

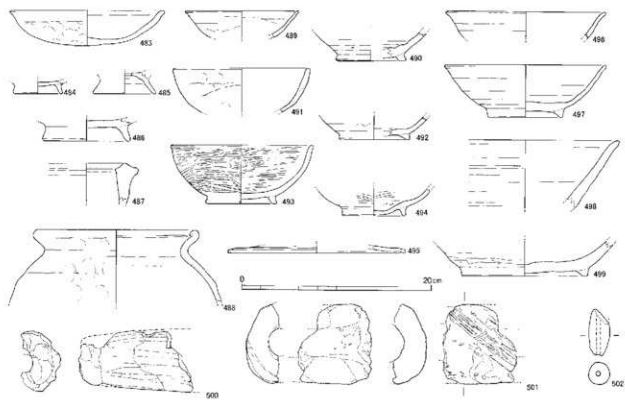
以上の他に、上層で検出された遺構の時期に属す

る土器や、時期を特定できない遺物がある。483～488は土師器で、底部が丸い厚手の皿(483)や碗・皿類の高台(484～486)、いわゆる「清郷型」甕(487)や「伊勢型」鍋(488)がある。483は口縁が外反する特徴が、平安京跡の11世紀の遺構から出土する土師器皿に似ているので、その頃のものかと思われる。484～488は、斎宮跡から出土する土器群の中に類品が散見されるもので、いずれも11世紀後半と推定されている第Ⅲ期第2段階頃のものと考えられる。

489・490は灰軸陶器。489は潰けがけ手法で施軸された碗の口縁部で、490は長頸瓶の底部。いずれも10世紀代のものと考えられる。

491～494は黒色土器。内面のみ黒色処理されたA類(491・492)と、内外面とも黒色処理されたB類(493・494)があり、A類碗には外面にヘラミガキが認められないもの(491)と、粗いヘラミガキが施されたもの(492)がある。

495は須恵器の蓋。猿投窯産とは断定できないが、灰軸陶器生産窯である海老池1号窯(折戸37号窯)<sup>33)</sup>から形態的類品が出土しているので、平安時代のものかと思われる。496～499は無軸の陶器で、496・



第59図 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測図(11)(1:4)

497 は腕、498・499 は鉢である。500・501 は轆の羽口、502 は土鍾である。 (水橋)

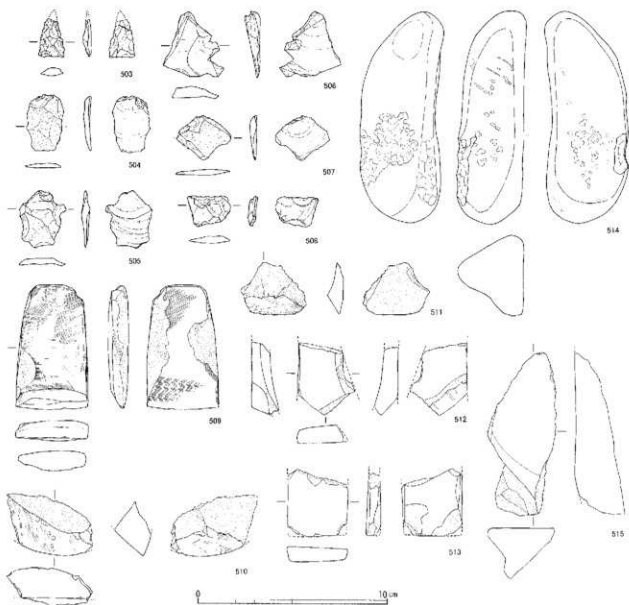
**石器・石製品 (503~515)** 503 は平基無茎石鏃である。サヌカイト製で、先端部は欠損している。横断面は頂角が鈍角の三角形となる。中央に稜を持つ (断面形が緩やかな山形になる) 面と比較的平坦になる面があり、中央に稜を持つ面が平坦な面よりも細かい押圧剥離がなされている。

504~508 はサヌカイトの剥片である。504 と 507 は一部、508 はほぼ全面が風化している。

509~511 は磨製石斧である。509 は扁平片刃石斧である。部分的に剥離しているが、全体の形状が把

握できるものである。刃部の幅がやや広い方形で、丁寧に研磨されている。刃部角は  $65^\circ$  である。510 は太型給刃石斧である。刃部のみ残存し、研磨痕が認められる。刃部角は  $70^\circ$  である。511 は残存部分がごく僅かであるため断定はできないが、残存部分が僅かに曲面であること、破片の形状からある程度の厚みが想定されることから、太型給刃石斧と推定される。

512~515 は砥石である。514 以外は破片である。512 の石材は砂岩で 3 面の使用が、513 の石材は凝灰岩で 4 面の使用が認められる。514 は不定形な砂岩を敲打したのちに研磨しているためか、他の砥石程



第60図 第1・2次 (下層) 包含層出土遺物実測図 (12) (1:2)

明瞭な研磨面となっていない。2面使用されている。515の石材は砂岩だが514より緻密であり、1面残存している使用面はよく研磨されている。

**鉄製品 (516~528)** 刀・馬具等は古墳に伴うものと推定されるが、それ以外のものの中には新しい時期のものも含まれている。

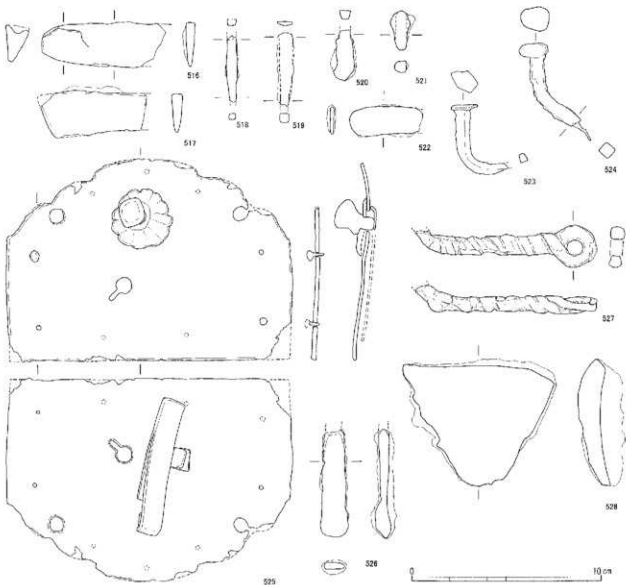
516・517は刀片である。刀片はいずれも刀身部で、断面の形状から平造と推定される。516は一方の幅が狭くなっているため、切先付近と思われる。517は片面が剥落している。

518~520は鉄織片である。518は両端で断面形が異なり、上端は横長の長方形で下部へ向かって徐々に細くなり、下端は方形となる。この形状から基部

と推定される。519も両端で断面形が異なり、上端は薄い板状で、下端は方形である。この形状から織身部に近接する頸部と推定される。520は断面が台形となり、下部は緩く屈曲して面を持っている。

523・524は釘である。断面形が方形で先端部が屈曲している。

525は家具等に取り付ける錠前金具と推定される。薄錐形をした薄い鉄板の上半部左右両端に把手を取り付けたとみられる径1.4cm程度の穴が2箇所、鉄板の端部には本体に付けるためとみられる径4mm程度の釘穴9箇所(内、釘等で穴が塞がっていたのは6箇所)を確認した。板の中央部やや上方寄りには花卉をあしらった座金があり、座金は宝珠状のつま



第61図 第1・2次(下層)包含層出土遺物実測図(13)(1:2)

みで固定されている。また花弁状座金の左方下部には鍵穴が認められる。また、花弁状座金の裏側には厚さ2mm程度の細長い鉄板が取り付けられている。この鉄板は一部欠損しているが、下部で2又になっており、可動する。鉄板部分がバネの機能をもち、鍵穴から鍵をさし、バネを動かすことによって施錠・解錠したものとみられる。時期は近世以降のものと思われる。527は馬具衝である。棒状の鉄をU字状又はO字状にしたのち反時計回りに捻り、端部に円環をつくったものである。円環の一部には、有機質とみられるものの付着が認められる。一方の円環は欠損しており、欠損部付近は歪曲している。

528は鋳造品で、鍋の口縁部片とみられる。

521は柱状のもの、522・526は板状のものであるが、不明品である。(原田)

#### [註]

1) 弥生時代から古墳時代前期の土器・土師器については下記の文献に拠る。

・上村安生「1 伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』加納俊介・石黒立人編 木耳社 2002

・赤塚次郎「第V章 考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990

なお、第I様式が弥生時代前期、第II～IV様式が弥生時代中期、第V様式が弥生時代後期、第VI様式が弥生時代終末から古墳時代初頭、期間II・IIIが古墳時代前期(3世紀後半から4世紀前半)という認識を基に記述した。

弥生時代の年代観については、従来、弥生時代前期は紀元前3世紀、中期は紀元前1～2世紀、後期は紀元後1～2世紀と考えられていた。最近の研究では、北部九州の前期は紀元前8世紀まで、中期は紀元前4世紀まで遡る考え方が示されている。また、伊勢湾沿岸地方に西日本の弥生文化が到達したのは紀元前5世紀頃とされている。舞出北遺跡における弥生時代の遺構の中心時期は後期で、従来では今から約2,000年前から200年の間にあたると思われる。弥生時代の年代観については今後も研究が進められることであろうが、当遺跡において年代を与えるのは現状では難しい。なお、これらの年代については大学共同利

用機関法人 人間文化機構 国立歴史民俗博物館『弥生はいづから!?—年代研究の最新線—』2007を参考にした。

2) 斎藤孝正「猿投案成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVI(史学29) 1983

3) 荒木実ほか「東山218号窯の古式須恵器について」『古代人』第33号 名古屋考古学会 1978

4) II類の円筒埴輪の中には、明確なハケ目が認められず、板状工具によるナデ痕跡のように見える事例(24・27・56など)を含めているが、これは工具を使用する際の木目の方向が異なるだけで、基本的には同様の調整が施されたものと考えられる。したがって、ここではII類に一括することとした。

5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻 第2号 日本考古学会 1978

6) 三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)発掘調査報告』2000

7) 例えば、第3・4次調査E区SK141・F区SK119・G区SK329などがある。

8) 愛知県教育委員会『愛知猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(II)』1981

9) 加藤真琴「伊勢 北勢南部(鈴鹿郡・河曲郡・菟芸郡)」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会 1997、

淺生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」『Miehistory』Vol.14 三重歴史文化研究会 2003

10) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告I 内院地区の調査 本文編』2001

11) 小牧市教育委員会『愛知県小牧市大字野口地区 藤岡112号窯発掘調査報告書』1994

12) 岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981

13) 金田明大・池田篤英「宮都出土の東海産須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会 2000

14) 前掲註12)

15) 名古屋市教育委員会『NN288号窯・NN289号窯発掘調査報告書』1993

16) 前掲註11)

17) 前掲註13)

18) 野村忠夫「老洞古窯跡群の歴史的背景」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会 1981



- 19) 前掲註 10)
- 20) 前掲註 15)
- 21) 前掲註 15)
- 22) 前掲註 11)
- 23) 赤塚次郎「第V章 考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 24) 名古屋市教育委員会『守山の古墳 調査報告第二』1969
- 25) 尾張旭市教育委員会『尾張旭市の古窯』1979
- 26) 前掲註 8)
- 27) 愛知県教育委員会『愛知県稲沢市山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅰ)』1980
- 28) 三重県考古跡調査事務所「斎宮跡の土師器」『三重県考古跡調査事務所年報 1984 史跡斎宮跡一発掘調査概報一』1985
- 29) 一志町教育委員会『片野遺跡V』2004
- 30) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976
- 31) 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部「甘樫丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25 1995
- 32) 各務原市埋蔵文化財調査センター『須衛天狗谷古窯跡群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市教育委員会 1998
- 33) 三好町教育委員会『三好ヶ丘地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1999





第8表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(3)

報告書番号	遺跡名	発見番号	層位	種類	数量	グリップ	出土位置		調整技法の特徴	出土状況	色調	残存	備考
							口徑	深さ					
31	SX001	362-01	埴輪	円筒埴輪	1	Q15	不明	不明	外: ヌコハクヨコナゲ、タテハク(7本/cm)、 貼付ナゲ、ユビナゲ、ナゲ、オサエ 内: ハウ儀ヨコナゲ、ユビナゲ、ナゲ、オサエ	口縁部 1/2 底部 3/4	表面: にぶい 7.087/4 断面: 黄灰 2.016/1	破片 底面 有痕	
						Q16	不明	不明					
						Q15	13.8	18.6					
						Q15	32.4	15.8					
32	SX001	298-02	埴輪	円筒埴輪	1	Q15	不明	不明	外: ヌコハクヨコナゲ、ユビナゲのちヨコハク 内: ヌコハク、ナゲ、オサエ	口縁部 小片	表面: にぶい 7.087/4	破片 底面 有痕	
						Q14	不明	不明					
						Q14	不明	不明					
						Q14	不明	不明					
33	SX001	297-05	埴輪	円筒埴輪	1	Q14	不明	不明	外: ヌコハクヨコナゲ、ユビナゲ 内: ヌコハク、ナゲ、オサエ	口縁部 小片	表面: にぶい 10.082/4	破片 底面 有痕	
						Q14	不明	不明					
						Q14	不明	不明					
						Q14	不明	不明					
34	SX001	403-03	埴輪	円筒埴輪	1	不明	不明	不明	外: ヌコハクヨコナゲ、ユビナゲ 内: ヌコハク、ナゲ、オサエ	口縁部 小片	表面: にぶい 10.082/3	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
35	SX001	403-06	埴輪	円筒埴輪	1	不明	不明	不明	外: ヌコハクヨコナゲ、ユビナゲ 内: ヌコハク、ナゲ、オサエ	口縁部 小片	表面: にぶい 7.087/4	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
36	SX001	408-06	埴輪	円筒埴輪	1	R18	不明	不明	外: タテナゲのちヨコハク(6~7本/cm) 内: ヌビナゲ	口縁部 小片	表面: にぶい 7.086/4	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
37	SX001	409-05	埴輪	円筒埴輪	1	不明	不明	不明	外: ナゲ、貼付ナゲ (ヨコハク)、 貼付ナゲ 内: オサエ、ナゲ	口縁部 小片	表面: にぶい 10.082/4	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
38	SX001	408-05	埴輪	円筒埴輪	1	P15	不明	不明	外: タテナゲのちヨコハク(7本/cm) 内: ナゲ	口縁部 小片	表面: にぶい 7.587/6	破片 底面 有痕	
						Q16	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
39	SX001	408-04	埴輪	円筒埴輪	1	R18	不明	不明	外: タテナゲのちヨコハク (縁分) 内: ヌビナゲ、貼付ナゲ	口縁部 小片	表面: にぶい 10.082/3	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
40	SX001	410-04	埴輪	円筒埴輪	1	不明	不明	不明	外: ナゲ (ヨコハク)	口縁部 小片	表面: にぶい 10.082/3	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
41	SX001	410-05	埴輪	円筒埴輪	1	不明	不明	不明	外: ヌコハク (縁分) 内: ナゲ	口縁部 小片	表面: にぶい 7.087/4	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
42	SX001	410-03	埴輪	円筒埴輪	1	不明	不明	不明	外: ヌコハク (縁分) 内: ヌビナゲ	口縁部 小片	表面: にぶい 10.087/3	破片 底面 有痕	
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
						不明	不明	不明					
43	SX001	421-01	埴輪	円筒埴輪	1	Q15	不明	不明	外: ヌコハクヨコナゲ、ユビナゲ、 タテナゲ、ナゲ 内: ヌコハクヨコナゲ、ユビナゲ、 ナゲ、オサエ	口縁部 1/3 底部 小片	表面: にぶい 7.587/6	破片 底面 有痕	
						Q15	不明	不明					
						P12	不明	不明					
						P16、 Q16、 Q17、 Q18	24.9	17.8					
44	SX001	360-01	埴輪	円筒埴輪	1	Q14	不明	不明	外: 底ナゲヨコナゲ、タテナゲ、 貼付ナゲ、オサエ、 ナゲ、オサエ、 ナゲ、オサエ、 ナゲ、オサエ	口縁部 2/3 底部 小片	外: にぶい 5.087/4 内: 5.087/6	破片 底面 有痕	
						Q14	不明	不明					
						Q14	31.3	19.2					
						Q13	不明	不明					



第10表 第1・2次(下層) 出土遺物群表(5)

遺物 番号	遺物名	数量	形態	器種等	グランド	出土遺構		直径	顕微鏡法の特徴	粘土構成	色調	残存	備考
						出土層位	位置 (cm)						
58	SX001	373-01	埴輪	円筒埴輪	P16	SX1同層位	不明	31.6以上	外: 黒コハク(5cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ケズリ, オサエ	やや粗	土質	底部	遺存 1/4 底面 無風痕
						R15	SX1墳丘南端土	不明	15.3				
59	SX001	365-01	埴輪	円筒埴輪	Q16	SX1墳丘上層	不明	21.6以上	外: ナツ, ケズリ, オサエ	やや粗	土質	底部	底面 無風痕 赤砂
						Q15・19	SX1同層位	不明	17.3				
60	SX001	370-01	埴輪	円筒埴輪	P16・17	SX1同層位	不明	37.7以上	外: 黒コハク(10cm), 黒付ナツ, ヌヒナツ, ナツ 内: ナツ, ケズリ, オサエ	粗	土質	底部	遺存 3/4 底面 無風痕
						P15	SX1同層位	不明	16.0				
61	SX001	372-01	埴輪	円筒埴輪	P16・17	SX1墳丘南1	不明	25.8以上	外: ナツ(黒付ナツ), 黒付ナツ, ヌヒナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ケズリ	やや粗	土質	底部	遺存 2/5 底面 無風痕
						P15	SX1同層位	不明	18.5				
62	SX001	424-01	埴輪	朝顔形 円筒埴輪	Q15・16・17	SX1同層位	不明	42.2以上	外: 黒コハク(5~6cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ナツ(10cm), 黒付ナツ, ナツ 内: 黒コハク(5~6cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ケズリ, オサエ, ヌヒナツ(10cm), ナツ 内: 黒コハク(10cm), 黒付ナツ(10cm), ナツ 内: 黒コハク(5~6cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ケズリ, オサエ, ヌヒナツ(10cm), ナツ 内: ヌヒナツ, ナツ	やや粗	土質	口縁部	遺存 1/6 底面 赤砂
						Q16	SX09 F	不明	38.6				
63	SX001	383-01	埴輪	朝顔形 円筒埴輪	Q15	SX1墳丘上層	不明	27.6以上	外: タタハク(5cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ナツ(10cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ナツ	やや粗	土質	底部	遺存 12/12 底面 無風痕
						Q14・15	SX1同層位	不明	21.1				
64	SX001	384-02	埴輪	円筒埴輪	R16	SX1墳丘上層	不明	10.8以上	外: 黒コハク(5cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ナツ(10cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ナツ	やや粗	土質	底部	遺存 1/4 底面 無風痕
						Q17	SX1同層位	不明	17.1				
65	SX001	379-03	埴輪	円筒埴輪	Q17	SX1墳丘南端土	不明	6.7以上	外: ナツ(9cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ナツ	やや粗	土質	底部	遺存 1/5 底面 無風痕
						Q15	SX098	不明	16.1				
66	SX001	366-01	埴輪	円筒埴輪	Q15	SX1墳丘上層	不明	7.4以上	外: 黒コハク(10cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ナツ, ケズリ	やや粗	土質	底部	遺存 1/4 底面 無風痕
						Q15	SX1同層位	不明	17.4				
67	SX001	366-02	埴輪	円筒埴輪	不明	SX1	不明	8.6以上	外: 黒付ナツ, ナツ 内: ナツ, オサエ	やや粗	土質	底部	遺存 1/4 底面 無風痕
						Q18	SX1同層位	不明	16.0				
69	SX001	426-03	埴輪	円筒埴輪	Q17	SX1墳丘上層	不明	7.8以上	外: 黒コハク(5~6cm), 黒付ナツ, ナツ 内: ヌヒナツ, ナツ	やや粗	土質	底部	遺存 1/12 底面 無風痕
						Q17	SX1同層位	不明	16.8				



第12表 第1・2次(下層) 出土遺物類群表(7)

発掘区画 番号	遺物名 番号	器種	器種等	グリップ	出土位置		調整法の特徴	粘土	地成	色調	残存	備考
					口縁	底縁						
91	SX01	S36-08	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	木質、断面					鉄刀の柄分断
92	SX01	S35-07	鉄製品	R16	SX1第1主体No5	刃長 残存長	木質と断面が付着					鉄刀の柄分断
93	SX01	S36-06	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	刀子柄の痕跡の可能性があくばみあり					断面片
94	SX01	S36-09	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	鉄分付着やサビによる赤変あり					断面片
95	SX01	S35-01	鉄製品	R16	SX1第1主体No2	刃長 残存長	サビによる赤変あり					鉄刀柄部に付着する有機質
96	SX01	S35-02	鉄製品	R16	SX1第1主体No5	刃長 残存長	断面の痕跡は認められる					鉄刀の柄分断
97	SX01	S34-01	鉄製品	R16	SX1第1主体No4	刃長 残存長	文様のように見える部分あり					鉄刀の柄分断
98	SX01	S34-03	鉄製品	R16	SX1第1主体No3	刃長 残存長	断面は木質が良好に残存					鉄刀の柄分断
99	SX01	S34-02	鉄製品	R16	SX1第1主体No1	刃長 残存長	木質柄が良好に残存					
100	SX01	S36-10	鉄製品	R15	SX1第1主体	刃長 残存長	全体を木鞘が覆う					断面形
101	SX01	S36-03	鉄製品	Q15	SX3墳丘上	刃長 残存長	有機物の付着等なし					葉のサビは有機質のため小
102	SX01	S36-01	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	断面は木質が良好に残存					鉄鏝もしくは鉄刀の一部か
103	SX01	S35-10	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	断面の痕跡あり					
104	SX01	S36-04	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	有機物の付着等なし					
105	SX01	S36-05	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	木質が若干付着					
106	SX01	S36-02	鉄製品	R16	SX1第1主体	刃長 残存長	片刃					
107	SX01	S36-07	鉄製品	不明	SX1第1主体	刃長 残存長	外：ヨコナガ、ミガキ 内：ヨコナガ、ミガキ					
108	SX02	438-01	弥生土器	高杯	SX2墳丘北東	不明	外：ヨコナガ、ミガキ 内：ヨコナガ、ミガキ	粗 員 粗 員	浅黄緑 にふい黄緑	口縁部 1/12	外面スス付着	
109	SX02	436-06	弥生土器	高杯	SX2墳丘北東	不明	外：ヨコナガ、ミガキ 内：ヨコナガ、ミガキ	や 員 や 員	外：にふい黄 内：黄緑	口縁部 4/12	浅黄緑 にふい黄緑	底縁4.4箇所 赤影
110	SX02	441-01	弥生土器	甕	SX2	不明	外：4.8以上 内：3.5以上	や 員 粗 員	外：にふい黄 内：黄緑	口縁部 1/12	口縁部 1/12	
111	SX02	437-08	土師器	甕	SX2墳丘南西	不明	外：ハケ(5.6cm)	粗 員	にふい黄緑	口縁部 6/12	口縁部 6/12	
112	SX02	437-07	弥生土器	甕	SX2墳丘北西	不明	外：ハケ(断面不明)、底縁にヨコナガ 内：ハケ(断面不明)、ミガキ	や 員 粗 員	にふい黄 にふい黄	口縁部 2/12	口縁部 2/12	
113	SX02	437-01	弥生土器	土器	Q10 下層部	不明	外：ハケ(5.6cm)、ヨコナガ 内：ハケ(5.6cm)	粗 員	にふい黄緑	口縁部 1/7	口縁部 1/7	
114	SX02	438-02	弥生土器	手形片形 土器	不明	SX2墳丘南東	外：ヨコナガ、ハケ(6cm) 内：ハケ(5.6cm)	粗 員	にふい黄緑	口縁部 1/12	口縁部 1/12	
115	SX02	440-01	土師器	甕	P8 不明	SX2墳丘南西	外：ヨコナガ、ハケ(3本(m)、断面不明、ナガ 内：ヨコナガ、ハケ、ナガ、オサニ	や 員 粗 員	にふい黄 にふい黄	口縁部 1/4	口縁部 1/4	加底
116	SX02	450-06	土師器	高杯	不明	SX2墳丘南西	外：ナガ 内：ナガ	や 員 粗 員	にふい黄 5YR6/4	口縁部 1/2	口縁部 1/2	
117	SX02	437-09	土師器	甕	不明	SX2墳丘北西	外：にふい黄 内：ヨコナガ	や 員 粗 員	にふい黄 10YR7/3	口縁部 2/12	口縁部 2/12	外面スス付着



第13表 第1・2次(下層) 出土物観察表(8)

発掘 番号	遺構名	東側 番号	種類	形状	グリッド	出土遺構 出土層位		口縁	口縁 径	底縁	調査法上の特徴		粘土 組成	色調	残存	備考
						口縁	底縁				口縁部	底縁部				
118	SK02	436-05	土師器	甕	08	SK20南南西	14.2	2.2以上	—	外：ヨコナガ、ハケ(12本/本) 内：ハケ(腐食で不明)	外：黄緑 1018A/1 内：にぶい 7.518E/4	口縁部 1/6				
119	SK02	438-03	土製品	土玉	不明	SK20南北西	長さ 4.9	幅 3.7	厚さ 3.6	厚さ 55.6g	にぶい 7.518E/4	次存				
120	SK02	443-02	石製品	石錘	不明	SK20南南西	長さ 1.86	幅 2.32	厚さ 1.68	長さ 51.6g 基部が滑つてあるか 0.44 表面に腫れが残る	にぶい 7.518E/4	次存				
121	SK02	443-01	石製品	石錘	N6	SK20南北西2層	長さ 1.3	幅 1.3	厚さ 0.8	長さ 68.8g	にぶい 7.518E/4	次存				
122	SK02	442-01	石製品	砥石	不明	SK20南南西3層	長さ 11.1	幅 13.95	厚さ 4.66	長さ 372.2g	にぶい 7.518E/4	次存				
123	SK02	537-01	鉄製品	不明	Q10	SK2	残存長 2.1	幅 1.4	—	有物物の付着が少し	にぶい 7.518E/4	次存				
124	SK02	449-01	弥生土器	甕	S6	SK20南北東2層	不明	11.6以上	不明	外：黄緑、厚さ2.2 内：ヨコナガ、ナガ	黄緑 1018E/4	胴部 3/12				
125	SK02	439-04	土師器	小甕	09	SK20南南西	9.8	3.3以上	不明	外：ヨコナガ、ナガ 内：ヨコナガ、ナガ、オサエ	黄緑 1018E/4	口縁部 1/8				
126	SK02	439-06	弥生土器	高杯	P6	SK20南北東1層	11.8	5.0以上	不明	外：ヨコナガ、ナガ、オサエ 内：ヨコナガ、オサエ	黄緑 1018E/4	口縁部 1/8				
127	SK02	439-07	土師器	高杯	N6	SK20南北西2層	14.2	3.4以上	不明	外：ナガ、オサエ 内：ナガ	黄緑 1018E/4	口縁部 1/12				
128	SK02	448-01	土師器	甕	P9 Q10 R11	SK20南南西3層 SK20南南西3層%1 下層位	15.0	32.7	10.0	外：ヨコナガ、ハケ(5本/本) 内：ヨコナガ、ナガ	黄緑 518E/8	口縁部 1/12 底縁部 1/20				
129	SK02	439-01	土師器	甕	09	SK20南南西3層	10.3	8.5以上	不明	外：ヨコナガ、ハケ(7本/本) 内：ヨコナガ、ナガ、オサエのちナガ	黄緑 1018E/3	口縁部 3/12				
130	SK02	436-04	土師器	甕	P9	SK20南南西2層	13.4	3.9以上	不明	外：ヨコナガ、ハケ(4本/本) 内：ヨコナガ、オサエ兼ナガ	黄緑 2.617/A 内：黄緑 1018E/3	口縁部 1/12				
131	SK02	436-03	土師器	甕	P9	SK20南南西2層	14.6	5.2以上	不明	外：ヨコナガ、ハケ(4本/本) 内：ヨコナガ、オサエ兼ナガ	黄緑 1018E/3	口縁部 1/4				
132	SK02	437-04	土師器	甕	S6	SK20南北東2層 集中部	14.2	3.3以上	不明	外：ヨコナガ、ハケ(5本/本) 内：ヨコナガ、ナガ	黄緑 7.518E/3	口縁部 2/12				
133	SK02	450-05	土師器	甕	N7	SK20南北西2層	15.3	3.1以上	不明	外：ヨコナガ、ナガ(6本/本) 内：ヨコナガ、ナガ	黄緑 7.518E/4	口縁部 1/6				
134	SK02	437-03	土師器	甕	S6	SK20南北東2層 集中部	16.4	3.5以上	不明	外：ヨコナガ、ハケ(4本/本) 内：ヨコナガ、オサエのちナガ	黄緑 7.518E/4	口縁部 1/12				
135	SK02	440-03	土師器	甕	P5	SK20南北西	不明	4.3以上	8.2	外：ナガ、ナガ、オサエ 内：ナガ、オサエ	黄緑 7.518E/4	口縁部 1/12				
136	SK02	450-03	土師器	甕	R9	SK20南南東%4	不明	8.5以上	9.3	外：ナガ、オサエ 内：ナガ、オサエ	黄緑 7.518E/4	口縁部 1/12				
137	SK02	440-02	土師器	甕	P9	SK20南南西1層 集中部	不明	7.8以上	7.1	外：ナガ、オサエ 内：ナガ(単位不明)のちナガ、オサエ	黄緑 1018E/2	口縁部 1/12				
138	SK02	437-02	土師器	甕	S6	SK20南北東2層 集中部	不明	6.3以上	9.8	外：ナガ(単位不明)のちナガ、オサエ 内：ヨコナガ、オサエ	黄緑 1018E/2	口縁部 1/12				
139	SK02	439-05	土師器	甕	P6	SK20南北西1層	21.1	5.2以上	—	外：ヨコナガ、オサエ 内：ヨコナガ、ナガ	黄緑 1018E/2	口縁部 2/12				
140	SK02	439-06	土師器	甕	N6	SK20南北西2層	19.9	3.9以上	—	外：ヨコナガ、ハケ(単位不明) 内：ヨコナガ、ハケ(5本/本)	黄緑 518E/4	口縁部 1/12				
141	SK02	436-01	土師器	甕	N6	SK20南北西2層	17.3	7.9以上	—	外：ヨコナガ、ハケ(5本/本)、厚さ 内：ヨコナガ、ハケ(6本/本)、厚さ	黄緑 1018E/2	口縁部 2/3				
142	SK02	436-02	土師器	甕	N6	SK20南北西2層	24.7	12.7以上	不明	外：ヨコナガ、ハケ(6本/本) 内：ハケ(6本/本)のちナガ	黄緑 1018E/3	口縁部 1/6				





第16表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(11)

報告番号	遺物名	実測番号	種類	器型	グランド	出土遺物		位置(㎝)	状態	調査	調査方法の特長	粘土構成	色調	残存	備考	
						出土層位	目録									
194	S0357	471-01	須恵器	甕	021	S670A1	32.4	14.8以上	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, 同心円当耳縁	良 良	区 区	口縁部 口縁部	2/12 1/12		
195	S0358	470-05	土師器	杯	020	S068	18.2	3.8以上	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝) 内: ヨコナデ	良 良	区 区	7.508/6	1/5	内面黒褐色	
196	S0358	471-04	須恵器	杯	021	S068	12.1	3.8以上	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面	2/12	内面黒褐色	
197	S0358	470-04	須恵器	有台杯	021	S068	不明	3.8以上	10.4	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面	2/12	内面黒褐色
198	S0360	472-02	土師器	杯	R23	S060A1	15.0	3.3	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	5/12			
199	S0360	472-01	土師器	甕	022	S060	23.0	15.3以上	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	口縁部	2/12		
200	S0360	475-01	土師器	甕	R22	S060	32.0	5.6以上	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), ケズリ 内: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), ケズリ	良 良	区 区	10/87/2 口縁部	2/12		
201	S0360	474-02	須恵器	杯	022, 022	S060	12.4	3.4	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	10/87/3 口縁部	1/6		
202	S0360	473-03	須恵器	杯	022	S060	12.0	3.6	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	5/7/1 口縁部	1/4		
203	S0360	473-05	須恵器	杯	022	S060	14.8	3.7以上	不明	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	7/12			
204	S0360	473-07	須恵器	有台杯	022	S060	14.4	3.8以上	不明	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	口縁部	2/3		
205	S0360	473-01	須恵器	有台杯	N21	S060上層% N1	15.1	3.9	9.4	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	2/3		
206	S0360	473-02	須恵器	有台杯	N22 M19 015 L19 M19	S060上層% 下層1層% (S8394) 下層3層% 下層2層% 下層1層% (S8394)	16.4	3.9	11.5	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	2/3		
207	S0360	474-01	須恵器	有台杯	P22	S060	不明	2.1以上	10.0	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	1/5	内面黒褐色	
208	S0360	473-04	須恵器	有台杯	022	S060	不明	1.4以上	10.5	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面		
209	S0360	477-01	須恵器	鉢	022	S060	17.6	3.6	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	7.508/6	1/4		
210	S0360	473-06	須恵器	甕	J21	S060	16.0	8.5以上	不明	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面	1/3		
211	S0360	474-04	土製品	土玉	P22	S060	3.4	3.9	21.6	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面		
212	S0360	474-05	土製品	土塊	022	S060	底面	幅	重さ	4.9	1.7	11.2, 8	—	—	底面	
213	S0361	476-02	土師器	甕	P22	S061	19.6	7.6以上	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面	2/12	外周スス付	
214	S0369	476-03	土師器	甕	022	S069	22.0	5.7以上	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	口縁部	1/12		
215	S0369	476-01	土師器	甕	022	S069	31.4	8.8以上	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	口縁部	7/12		
216	S8370	466-05	須恵器	有台杯	K21	S8370西	不明	1.3以上	10.4	—	外: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: 回転ケズリ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面	2/12	
217	S8372	468-03	土師器	甕	N20	S8372北	23.6	2.0	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	底面	4/12		
218	S8374	465-01	土師器	甕	N21	S8374東	26.0	3.0	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	7.508/6	8/12		
219	S8374	468-02	土師器	甕	N21	S8374西	26.8	1.7以上	—	外: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ 内: ヨコナデ, ハケ(6本/㎝), オヤエ	良 良	区 区	5/87/6	1/12		



第18表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(13)

調査番号	遺物名	高麗	種類	器種等	グランド	出土層		口徑	高さ	重量	形状	土質	土色	土質	形状	備考
						出土層位	出土層位									
242	包含層	559-04	赤生土器	蓋	014	5層包	不明	3.3以上	不明	不明	円や皿	黒	赤	5185/4	小片	沈殿土条
243	包含層	559-02	赤生土器	蓋	M19	5層包	不明	5.5以上	不明	不明	円や皿	黒	赤	5185/3	小片	沈殿土条
244	包含層	559-09	赤生土器	蓋	M17	5層包	不明	9.6以上	不明	不明	円や皿	黒	赤	5185/6	小片	沈殿土条 深部には残存わず、キザシは確認できず。
245	包含層	478-01	赤生土器	甕	M11	SZ27	不明	4.0以上	不明	不明	皿	黒	赤	5185/4	口縁部	黒斑、沈殿土条
246	包含層	532-01	赤生土器	甕	J16	5層包	23.4	5.3以上	不明	不明	皿	黒	赤	7.5187/4	口縁部	沈殿土条
247	包含層	531-05	赤生土器	甕	P14	5層包	18.7	5.1以上	不明	不明	皿	黒	赤	7.5187/4	口縁部	沈殿土条
248	包含層	526-01	赤生土器	甕	P15 R23	4層包 4層包No.1	28.6	46.2	9.4	不明	皿	黒	赤	5186/6	口縁部	沈殿土条
249	包含層	531-01	赤生土器	甕	Q19 R20	4層包No.7 4層包	17.2	20.2以上	不明	不明	皿	黒	赤	5186/8	口縁部	沈殿土条
250	包含層	528-01	赤生土器	甕	P22	5層包No.5	29.6	不明	8.6	不明	皿	黒	赤	7.5186/4	口縁部	沈殿土条
251	包含層	532-05	赤生土器	甕	不明	5層包No.12	不明	6.8以上	4.9	不明	皿	黒	赤	10183/2	底面	沈殿土条
252	包含層	531-03	赤生土器	甕	Q15	4層包No.3	不明	6.8以上	9.0	不明	皿	黒	赤	10188/4	底面	沈殿土条
253	包含層	491-01	赤生土器	甕	P11	黄褐色土(←ス)	10.7	11.7以上	不明	不明	皿	黒	赤	5188/4	底面	沈殿土条
254	包含層	501-07	赤生土器	不明	M8・9	下層包	不明	6.8以上	10.6	不明	皿	黒	赤	5188/4	底面	沈殿土条
255	包含層	532-04	赤生土器	細面碗	N16 N18 N19	4層包 5層包 下層部脱ラシテ	8.1	8.9以上	不明	不明	皿	黒	赤	5188/4	底面	沈殿土条
256	包含層	529-03	赤生土器	甕	Q22	5層包No.5 トレンチ	11.4	29.8	6.4	不明	皿	黒	赤	10186/1	口縁部	沈殿土条
257	包含層	508-01	赤生土器	甕	P22	2層包	8.1	25.0	8.3	不明	皿	黒	赤	5187/6	口縁部	沈殿土条
258	包含層	479-07	赤生土器	高杯	J12	SZ26	不明	3.2以上	不明	不明	皿	黒	赤	5187/6	口縁部	沈殿土条
259	包含層	497-03	赤生土器	高杯	P8	下層包	不明	2.8以上	不明	不明	皿	黒	赤	5187/4	口縁部	沈殿土条
260	包含層	524-02	赤生土器	高杯	Q14	4層包	不明	5.2以上	14.6	不明	皿	黒	赤	5187/6	口縁部	沈殿土条
261	包含層	498-05	赤生土器	高杯	N9	下層包	14.2	7.3以上	不明	不明	皿	黒	赤	7.5187/6	口縁部	沈殿土条
262	包含層	478-02	赤生土器	甕	112	SZ28 5層包	13.2	不明	7.4	不明	皿	黒	赤	7.5186/2	口縁部	沈殿土条
263	包含層	525-07	土師器	甕	N16	4層包	15.6	4.4以上	不明	不明	皿	黒	赤	5186/8	口縁部	沈殿土条
264	包含層	529-02	土師器	甕	Q15 R15 R16	4層包 5層包 5層包	不明	14.0以上	3.4	不明	皿	黒	赤	10187/3	口縁部	沈殿土条

第19表 第1・2次(下層)出土遺物観察表(14)

報告番号	遺物名	実測番号	種類	部類等	グランド	出土層構造		口徑	高さ	底径	調査	調査技法の特徴	加工	軸心	色調	保存	備考
						出土層位	位置										
265	包含層	435-01	弥生土器	甕	E23 F13, E23 Q23	4層包 4層包 3層包	不明	40.4以上	7.4	不明	外: ナナオハク(木)(cm)のちミガキ 内: ハク(木)(cm)	全体 1/2 底部 底面 底面 底面	黒色	底面 底面 底面	黒色		
266	包含層	532-02	弥生土器	甕	J21	4層包	不明	4.5以上	5.5	不明	外: ナゾのち一部ミガキ、オサエ 内: ナゾのちミガキ、オサエ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
267	包含層	486-05	弥生土器	甕	試掘トレンチ	(試掘トレンチ)	不明	2.1以上	5.2	不明	外: ナゾ、オサエ、オサエ 内: ハク、オサエ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
268	包含層	482-05	弥生土器	甕	S5	上層包	不明	3.2以上	4.6	不明	外: ミガキ、ナゾ 内: ハク(木)(cm)、ナゾ、オサエ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
269	包含層	529-01	土師器	甕	J19	3層包No.18	12.0	14.8以上	不明	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ミガキ、ハク(木)(cm)	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
270	包含層	533-01	土師器	甕	K16 J16・19・20 J18, K16, Q18	3層包 4層包 4層包 試掘坑	33.5	6.5以上	不明	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ハク(木)(cm)、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
271	包含層	482-06	弥生土器	甕	06	上層包	不明	3.5以上	5.2	不明	外: ハク(木)(cm)、ナゾ 内: ハク、ミガキ、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
272	包含層	501-06	弥生土器	甕	09	下層包	不明	3.3以上	6.8	不明	外: ナゾ、ナゾ、ミガキ 内: ナゾ、ナゾ、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
273	包含層	525-02	弥生土器	甕	Q13	4層包	不明	4.7以上	7.2	不明	外: ナゾ、ナゾ 内: ナゾ、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
274	包含層	530-01	弥生土器	甕	K17	4層包No.17	21.8	31.7	5.1	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ミガキ、ハク(木)(cm)、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
275	包含層	527-01	土師器	鉢	G23 E23 F23, E23 Q23	4層包 4層包 4層包 5層包No.14	42.8	29.0	9.4	不明	外: ミガキ、ナゾ、オサエ、板ナゾ、 オサエのち板ナゾ 内: ミガキ、ナゾ、オサエ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
276	包含層	498-04	土師器	高杯	M10	下層包一拵	13.6	4.2以上	不明	不明	外: ミガキ、オサエ、ナゾ 内: ミガキ、オサエ、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
277	包含層	524-01	土師器	甕	M13, M13	4層包	13.8	不明	9.4	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ミガキ、ハク(木)(cm)	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
278	包含層	483-03	土師器	甕	R9	上層包	15.3	2.9以上	不明	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ミガキ、ハク(木)(cm)	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
279	包含層	525-05	土師器	甕	L15	4層包	14.8	3.3以上	不明	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ミガキ、ハク(木)(cm)	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
280	包含層	493-02	土師器	甕	L9	下層包	19.6	5.9以上	不明	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ミガキ、ハク(木)(cm)	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
281	包含層	492-01	土師器	甕	L9	下層包	16.5	5.5以上	不明	不明	外: ミガキ、ハク(木)(cm) 内: ナゾ、オサエ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
282	包含層	493-02	土師器	甕	R9	上層包	不明	19.2以上	8.1	不明	外: ハク(木)(cm)、板ナゾ、ナゾ 内: ナゾのちミガキ、ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
283	包含層	533-02	土師器	甕	R18	排水	不明	3.7以上	10.0	不明	外: ミガキ、オサエ 内: ナゾ、オサエ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
284	包含層	494-03	土師器	杯蓋	M10	下層包	11.4	3.3以上	不明	不明	外: 面彫ナゾ 内: 面彫ナゾ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
285	包含層	485-04	土師器	杯身	R8	上層包	11.0	4.5	不明	不明	外: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ 内: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
286	包含層	494-04	土師器	杯身	N7	下層包	12.0	4.4以上	不明	不明	外: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ 内: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
287	包含層	489-01	土師器	甕	M6	下層包	22.7	3.4以上	不明	不明	外: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ 内: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
288	包含層	484-07	土師器	器蓋	J10	上層包	不明	5.5以上	不明	不明	外: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ 内: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
289	包含層	479-05	土師器	杯蓋	Q13	S252(=包含層) 3層包	16.0	5.5	不明	不明	外: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ 内: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		
290	包含層	485-01	土師器	小型甕	R9	下層包	13.0	17.0以上	不明	不明	外: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ 内: 面彫ナゾ、面彫ナゾリ	全体 底面 底面	黒色	底面 底面	黒色		









第23表 第1・2次(下階) 出土遺物観察表(18)

報告者 番号	遺物名 番号	実測 形状	種類	部位等	出土位置		出土地点	調査 位置	土層 (cm)	数量	調査方法の特徴		出土 状況	色澤	保存	備考
					グリッド	直徑					調査方法	調査結果				
373	包含層 517-03	土師器	壺	022	3層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	16.8	3.7以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	破	7.5197/3	口縁部	外面スス付着 破損による断片
374	包含層 492-04	土師器	壺	R10	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(1本/本)	15.3	4.9以上	不明	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(1本/本)	壺	5197/6	口縁部	
375	包含層 439-03	土師器	壺	L6	S3同様に西層一 包(1)	外:ヨコナナ 内:不明のナナ	ハク(単位不明)	14.9	4.6以上	不明	外:ヨコナナ 内:不明のナナ	ハク(単位不明)	壺	7.5196/4	口縁部	
376	包含層 497-06	土師器	壺	J8	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	14.8	4.6以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5198/4	口縁部	
377	包含層 486-03	土師器	壺	J9	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	15.6	4.4以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5197/4	口縁部	外面スス付着
378	包含層 492-03	土師器	壺	J9	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	17.8	2.9以上	不明	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5197/4	口縁部	内外面スス付着
379	包含層 501-05	土師器	壺	010	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ナナ	16.0	3.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ナナ	壺	5196/6	口縁部	内外面スス付着
380	包含層 513-01	土師器	壺	N20	3層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	19.8	14.7	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5197/4	1/2	
381	包含層 493-01	土師器	壺	N7	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	20.6	5.3以上	不明	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5198/4	口縁部	
382	包含層 513-04	土師器	壺	N16	3層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	21.0	5.0以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	5197/6	口縁部	
383	包含層 505-01	土師器	壺	M4	2層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	21.7	5.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	10198/4	1/6	外面スス付着
384	包含層 506-02	土師器	壺	M21	2層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	21.6	7.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5197/4	1/19	外面スス付着
385	包含層 505-03	土師器	壺	L13	2層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(10本/本)	23.0	5.8以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(10本/本)	壺	7.5198/4	1/19	外面スス付着
386	包含層 505-04	土師器	壺	M20・21	2層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	17.6	4.4以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5197/3	1/6	外面スス付着
387	包含層 514-01	土師器	壺	L15・16	3層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	22.2	5.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5198/4	1/19	外面スス付着
388	包含層 493-04	土師器	壺	L9	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(単位不明)	23.8	3.3以上	不明	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(単位不明)	壺	7.5198/3	2/12	内面スス付着
389	包含層 486-01	土師器	壺	J8	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	壺	23.6	6.4以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	壺	壺	5196/8	5/12	内面スス付着
390	包含層 516-01	土師器	壺	M21	3層包No.1	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	22.6	21.1以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	5196/8	5/12	外面スス付着
391	包含層 504-01	土師器	壺	010	下層包2層	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	23.4	7.0以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5197/4	3/4	外面スス付着
392	包含層 486-02	土師器	壺	J9	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	24.0	5.9以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	10196/2	4/19	外面スス付着
393	包含層 514-03	土師器	壺	M20	3層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	25.4	5.9以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	10198/4	1/5	外面スス付着
394	包含層 514-02	土師器	壺	013	3層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	25.0	8.5以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	10198/4	1/5	外面スス付着
395	包含層 525-01	土師器	壺	013	4層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	壺	24.7	7.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	壺	壺	7.5197/3	1/3	内面スス付着
396	包含層 487-03	土師器	壺	J9	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	37.8	4.4以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	10198/3	5/12	内面スス付着
397	包含層 487-02	土師器	壺	R9	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ナナ	36.0	8.6以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ナナ	壺	7.5197/4	3/12	内面スス付着
398	包含層 483-01	土師器	壺	不明	上層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	35.4	4.7以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5196/4	1/12	口縁部
399	包含層 505-02	土師器	壺	L20	2層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	29.6	6.6以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5196/4	1/19	口縁部
400	包含層 487-01	土師器	壺	K7	下層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	28.0	6.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	7.5196/4	4/19	口縁部
401	包含層 506-04	土師器	壺	Q22	2層包	外:ヨコナナ 内:ハク(6本/本)	ハク(6本/本)	29.2	3.4以上	—	外:ヨコナナ 内:ハク(6本/本)	ハク(6本/本)	壺	7.5196/4	1/12	内面スス付着
402	包含層 506-03	土師器	壺	N17	2層包	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	27.0	3.3以上	—	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	ハク(6本/本)	壺	10198/3	1/12	外面スス付着

第24表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(19)

発掘 番号	遺物 番号	器種名	高度	種類	器種等	グリッド	出土遺構		面整状の特徴	粘土	焼成	色調	形状	備考
							出土層階	出土層位						
		口径		底径		高さ								
403	包含層	514-04	土師器	壺	P18	3脚包	25.2	6.5以上	—	赤	7.5BRS/4	口縁部 1/7		
404	包含層	492-02	土師器	甕	L10	下層包	24.7	6.0以上	不明	赤	7.5BRS/3	口縁部 3/12	黒底	
405	包含層	507-01	土師器	壺	L30	2脚包	23.8	5.5以上	—	赤	灰白	口縁部 1/12		
406	包含層	512-05	土師器	壺	L17	2・3脚包	23.6	5.3以上	—	赤	赤	口縁部 1/5		
407	包含層	504-02	須恵器	杯盤	Q10	下層包 2層	10.9	4.1	—	赤	青灰	1/2		
408	包含層	485-03	須恵器	杯盤	05	掃木	12.4	4.3	—	赤	赤	口縁部 5/12		
409	包含層	485-02	須恵器	杯盤	05	下層包	不明	3.8以上	—	赤	赤	杯底	内面に黒色面化粧付着	
410	包含層	490-03	須恵器	杯身	07	下層包	11.4	3.2	—	赤	赤	4/12		
411	包含層	482-04	須恵器	杯身	05	上層包	10.0	3.0以上	—	赤	赤	3/12		
412	包含層	400-07	須恵器	杯盤	R13	下層包	12.8	2.0以上	—	赤	赤	1/6		
413	包含層	484-06	須恵器	杯	J10	上層包	12.0	3.0以上	不明	赤	赤	口縁部 1/12		
414	包含層	522-08	須恵器	杯	N30・21・021	3脚包	12.5	3.6	—	赤	赤	口縁部 1/4		
415	包含層	484-02	須恵器	杯	P15	上層包	不明	0.9以上	4.4	赤	赤	6/12		
416	包含層	490-06	須恵器	杯	Q11	下層包	10.7	3.0以上	—	赤	赤	口縁部 2/12		
417	包含層	490-05	須恵器	杯	Q11	下層包	不明	1.8以上	—	赤	赤	1/12		
418	包含層	489-05	須恵器	小形壺?	R12	下層包	不明	1.3以上	5.6	赤	赤	7.5BRS/1		
419	包含層	488-08	須恵器	杯盤	L7	下層包	つまみほ	1.6以上	—	赤	赤	つまみ 8/12		
420	包含層	488-07	須恵器	杯盤	L10	下層包	つまみほ	1.4以上	—	赤	赤	つまみ 8/12		
421	包含層	504-05	須恵器	杯盤	09	下層包 1層	不明	1.4以上	—	赤	赤	口縁部 1/12		
422	包含層	495-03	須恵器	杯	L9	下層包	不明	不明	—	赤	赤	口縁部 1/12		
423	包含層	523-03	須恵器	杯盤	020	3脚包	不明	2.0以上	—	赤	赤	口縁部 1/3	内面に黒化粧付着	
424	包含層	466-02	須恵器	杯盤	Q12	下層包	不明	1.6以上	—	赤	赤	口縁部 1/3	内面スス付着	
425	包含層	477-04	須恵器	杯盤	P16	2脚包	不明	1.9以上	—	赤	赤	口縁部 1/3		
426	包含層	504-03	須恵器	杯盤	P10	下層包 2層	不明	1.8以上	—	赤	赤	口縁部 1/3		
427	包含層	515-04	須恵器	杯盤	017	3脚包	15.6	3.2	—	赤	赤	口縁部 5/6	内面黒化粧	
428	包含層	515-01	須恵器	杯盤	N30・019	3脚包	16.0	3.8	—	赤	赤	口縁部 5/6	内面黒化粧	
429	包含層	533-04	須恵器	杯盤	18	腰懸土器上下	16.7	3.2	—	赤	赤	口縁部 1/12	内面赤化粧	
430	包含層	515-03	須恵器	杯盤	N21・021	3脚包	16.6	2.6	—	赤	赤	口縁部 5/12	黒底	
431	包含層	477-02	須恵器	杯盤	L10・17	2脚包	15.0	2.0以上	—	赤	赤	口縁部 1/4	内面黒化粧	
432	包含層	522-07	須恵器	杯盤	L16	3脚包	15.6	2.3以上	—	赤	赤	口縁部 4/12	内面黒化粧	
433	包含層	515-05	須恵器	杯盤	N30・21 N31・030	3脚包 3脚包	15.0	2.1以上	—	赤	赤	口縁部 5/12	内面黒化粧	

第25表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(20)

報告番号	遺物名・遺物番号	実測	種類	器種等	グリッド	出土遺物		位置 (G)	面積	形状	画像注の仕様		加工・焼成	色調	残存
						出土層階	出土層位				口径	底径			
434	包含層	515-06	須臾器	杯	N21	2層包	15.7	2.82上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	緑青/白	口縁部 5/12		
435	包含層	428-01	須臾器	杯	R14	S11(墳丘上 (出土場所不明)→ 包)	16.8	2.42上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	黒/	口縁部 5/12		
436	包含層	477-03	須臾器	杯	016	2層包	16.1	1.72上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/12		
437	包含層	484-04	須臾器	杯	J8	上層包	15.2	2.63上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 5/12		
438	包含層	405-05	須臾器	杯	L6	下層包	16.1	2.32上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/12		
439	包含層	484-03	須臾器	杯	K8	上層包	17.4	2.12上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/12		
440	包含層	482-02	須臾器	杯	S5	上層包	22.3	2.22上	—	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 2.577/A	口縁部 1/12		
441	包含層	489-03	須臾器	杯	K6	下層包	15.5	3.9	11.5	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	黒 S16/B	口縁部 1/12		
442	包含層	512-02	須臾器	杯	L17	2.3層包	15.0	4.0	10.4	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	黒 S16/B	口縁部 1/12		
443	包含層	516-04	須臾器	杯	M15	3層包	15.8	4.0	11.8	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S18/A	口縁部 1/12		
444	包含層	509-04	須臾器	杯	L20	2層包	15.0	4.4	9.5	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/12		
445	包含層	509-03	須臾器	杯	M20	2層包	13.8	4.3	9.2	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/3		
446	包含層	461-06	須臾器	杯	R14	SX	14.1	4.5	9.0	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	黒 S16/B	口縁部 1/4		
447	包含層	509-01	須臾器	杯	P15	2層包	不明	4.8以上	10.3	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S16/B	口縁部 1/4		
448	包含層	406-04	須臾器	杯	K7	下層包	不明	2.72上	12.2	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	黒 S16/B	口縁部 1/12		
449	包含層	488-06	須臾器	杯	K7	下層包	14.3	4.4	8.2	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/12		
450	包含層	488-06	須臾器	杯	L10	下層包	14.3	4.0	9.7	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/12		
451	包含層	477-05	須臾器	杯	K16	2層包	不明	1.82上	11.1	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/4		
452	包含層	462-02	須臾器	杯	R14	SX10 (出土場所不明)→ 包)	不明	1.82上	10.0	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/4		
453	包含層	509-06	須臾器	杯	021	2層包	不明	1.82上	10.2	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/4		
454	包含層	489-04	須臾器	杯	M9	下層包	不明	1.82以上	10.7	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 7.577/A	口縁部 1/12		
455	包含層	488-05	須臾器	杯	L10	下層包	不明	1.32以上	10.7	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 7.577/A	口縁部 1/12		
456	包含層	509-05	須臾器	杯	L18	2層包	不明	2.12上	12.4	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/6		
457	包含層	405-02	須臾器	杯	L9	下層包	不明	2.32以上	9.1	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/6		
458	包含層	509-02	須臾器	杯	M20	2層包	17.1	4.0	14.5	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰白 S17/A	口縁部 1/6		
459	包含層	477-06	須臾器	杯	M13	2層包	不明	1.22以上	10.3	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/2		
460	包含層	489-06	須臾器	杯	M6	下層包	不明	1.32以上	8.7	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/2		
461	包含層	495-01	須臾器	杯	L8	下層包	不明	2.12以上	11.8	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 1/2		
462	包含層	489-07	須臾器	杯	M8	下層包	不明	1.42以上	13.4	外: 凹紐ナデ、 内: 凹紐ナデ、 底: 凹紐ナデ、 不仕方向ナデ	組良	灰 S17/A	口縁部 2/12		

→タ跡号

第26表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(21)

発掘 番号	発掘名	実測 番号	種類	部類等	グリッド	出土遺物		口徑	高さ (cm)	底径	観察部位の特徴	軸土	焼成	色調	残存	備考
						出土層	位置									
463	包含層	488-04	須臾器	杯	L9・10	下層包	不明	13.7	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、黒付ナズリ 内: 陶磁ナズリ、土灰ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 4/12 口縁部		
464	包含層	484-05	須臾器	杯	9	上層包	14.2	4.1以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	黒灰 黒	1/8		
465	包含層	479-06	須臾器	杯	020	不明	17.2	3.3以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	黒灰 黒	口縁部 1/5		
466	包含層	488-02	須臾器	杯	L10	下層包	17.6	3.9以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰白 5/7/1	口縁部 1/12		
467	包含層	488-10	須臾器	高杯	L10	下層包	不明	6.7以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	底部 1/12		
468	包含層	523-02	須臾器	高杯	R14	3層包	不明	6.7以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、土練 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 1/12		
469	包含層	499-04	須臾器	高杯	07	下層包	不明	7.1以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 1/12		
470	包含層	499-02	須臾器	平杯	88	下層包	不明	3.1以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	7.5/6/1	口縁部 4/12		
471	包含層	512-04	須臾器	脚	Q17	2.3層包	不明	4.5以上	不明	不明	外: ナズリ、陶磁ナズリ、土練 内: 陶磁ナズリ、土練	赤心 黒	灰白 N7/	口縁部 1/5		透孔
472	包含層	484-01	須臾器	捫鉢	S8	上層包	不明	6.4以上	不明	不明	外: ハンテタ(8cm)のち陶磁ナズリ、 内: 陶磁ナズリ、ヘラ塗り	赤心 黒	7.5/4/1	底部 4/12		
473	包含層	523-01	須臾器	楕圓	Q13	3層包	15.6	5.8以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 4/12		
474	包含層	489-08	須臾器	長須臾	80	下層包	9.4	9.3以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、陶心凹文当具置 内: 陶磁ナズリ、シボリ	赤心 黒	灰白 5/7/1	口縁部 2/12		
475	包含層	488-09	須臾器	長須臾	M12	下層包	不明	10.6以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰白 N7/	口縁部 2/12		
476	包含層	496-03	須臾器	長須臾	K7	下層包	14.8	8.6以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 2/12		
477	包含層	494-06	須臾器	鉢小皿	86	下層包	不明	4.5以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ、ナズリ、土練ナズリ	赤心 黒	灰 黒	底部 3/12		
478	包含層	494-01	須臾器	壺	N11	下層包	不明	6.2以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ、土練ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 6/12		
479	包含層	510-04	須臾器	壺	K23, L22 L23	2層包 3層包	不明	5.2以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 10/12		
480	包含層	510-02	須臾器	壺	K15	2層包	不明	3.7以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 10/12		
481	包含層	517-01	須臾器	円面碗	017	3層包	最大径 27.0	3.3以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、陶磁ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	灰白 5/7/1	口縁部 10/12		
482	包含層	502-01	須臾器	陶筒	L18	2層包	体長 17.6 以上	4.5	不明	不明	外: 竹葉文、ナズリ、土練ナズリ 内: 竹葉文、鼻、口、土灰ナズリ、陶磁ナズリ、 陶磁ナズリ、手練、ナズリナズリ、ヘラ付工具	赤心 黒	灰白 N7/	口縁部 1/12		
483	包含層	497-01	土師器	壺	P9	下層包	16.3	3.7	不明	不明	外: ヨコナズリ、ナズリ 内: ヨコナズリ、ナズリ	赤心 黒	灰白 N5/	口縁部 2/12		
484	包含層	518-04	土師器	瓶	Q16	2.3層包	不明	4.4以上	不明	不明	外: ヨコナズリ、ナズリ 内: ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 10/12		
485	包含層	482-07	土師器	輪蓋皿	P17	上層包	不明	2.3以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、土練ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	7.5/6/6	口縁部 1/4		
486	包含層	517-05	土師器	輪蓋皿	P17	3層包	不明	2.4以上	不明	不明	外: ナズリ、取付ナズリ 内: ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 1/4		
487	包含層	559-05	土師器	壺	P12	包	不明	4.3以上	不明	不明	外: ヨコナズリ、ナズリ 内: ヨコナズリ、ナズリ	赤心 黒	5/8/4/3	口縁部 小片		
488	包含層	506-01	土師器	瓶	L15	2層包	17.0	7.4以上	不明	不明	外: ヨコナズリ、ナズリ 内: ヨコナズリ、ナズリ	赤心 黒	灰 黒	口縁部 1/2		内外部スリ溝
489	包含層	510-01	灰陶筒器	瓶	K23	2層包	12.0	2.8以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、取付ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	2.5/7/1	口縁部 1/12		横付け輪飾
490	包含層	510-03	灰陶筒器	瓶	Q20	2層包	不明	3.1以上	不明	不明	外: 陶磁ナズリ、取付ナズリ 内: 陶磁ナズリ	赤心 黒	2.5/6/1	口縁部 1/4		

第27表 第1・2次(下層) 出土遺物観察表(22)

報告番号	遺物名	数量	形状	器種等	グランド	出土層		調査	調査方法の特徴	出土状況	色調	製造	形状	備考
						出土層	調査層							
491	包含層	510-05	黒色土器	柄	L15	2層包	14.4	不明	外:ナガ, オサエ, 軸土紐 内:ナガ	口縁部 1/6	2.5N2/2 2.5I2/1	灰白 黒	A類	
492	包含層	510-06	黒色土器	柄	N20	2層包	不明	7.4	外:ヨコナガ, ミガキ, 軸付ナガ 内:ヨコナガ	口縁部 1/4	2.5I2/3 2.5I2/3	灰白 黒	A類	
493	包含層	525-04	黒色土器	柄	L15	4層包	14.9	6.2	外:ヨコナガ, ミガキ, 軸付ナガ, ナギ 内:ヨコナガ, ミガキ	底部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	B類	
494	包含層	497-02	黒色土器	柄	P9	下層包	不明	2.92以上	外:ミガキ, ナガ, 軸付ナガ 内:ミガキ, ナガ	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	B類	
495	包含層	495-04	須臾器	杯蓋	L12	下層包	18.7	0.82以上	外:回転ナギ, 回転ナガ 内:回転ナギ	口縁部 1/8	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	B類	
496	包含層	488-03	陶器	柄	L11	下層包	16.6	2.72以上	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
497	包含層	496-01	陶器	柄	P9	下層包	17.1	5.6	7.7	外:回転ナギ, 軸付ナガ, 高切り皿, 板状圧痕 内:回転ナギ	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係
498	包含層	494-02	陶器	鉢	N12	上層包	不明	7.2以上	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	内面係	
499	包含層	482-01	陶器	鉢	P6	上層包	不明	3.82以上	13.4	外:回転ナギ, 回転ナギ, 軸付ナギ 内:回転ナギ	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係
500	包含層	454-02	土製品	輪の羽口	N9	下層包	長さ 12.0 底面係 7.7 7.7 4.8	6.3	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
501	包含層	560-01	土製品	輪の羽口	O19	2層包	長さ 4.8 底面係 4.7 4.7 2.3	2.3	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
502	包含層	501-08	土製品	土罐	P23	下層包	長さ 2.02 底面係 1.7 1.7 4.8	1.39	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
503	包含層	427-02	石製品	石鏝	L23	S3層包	長さ 2.02 底面係 1.7 1.7 4.8	0.39	長さ1.1g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
504	包含層	427-04	石製品	剥片	K22	不明	長さ 3.5 底面係 3.05	1.43	長さ2.9g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
505	包含層	427-09	石製品	剥片	L13	2層包	長さ 3.05 底面係 2.47	0.39	長さ2.3g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
506	包含層	427-05	石製品	剥片	O17	S0733E	長さ 3.42 底面係 3.24	0.81	長さ5.2g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
507	包含層	427-06	石製品	剥片	I23	(S25)層包上 (41)土器層包上 (41)土器層包上	長さ 2.32 底面係 2.82	0.33	長さ1.9g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
508	包含層	427-07	石製品	剥片	J23	5層包	長さ 1.67 底面係 1.67	0.43	長さ1.7g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
509	包含層	434-08	石製品	磨製石斧	Q16	3層包	長さ 6.52 底面係 6.52	3.89	長さ4.6g 長さ2.9g 長さ2.9g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
510	包含層	434-06	石製品	磨製石斧	P19	3層包	長さ 3.29 底面係 4.53	1.90	長さ26.2g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
511	包含層	434-05	石製品	磨製石斧	O19	3層包	長さ 3.5 底面係 4.2	3.95	長さ7.4g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
512	包含層	434-04	石製品	砥石	L19	3層包	長さ 3.83 底面係 3.60	0.79	長さ14.6g 長さ13.0g 長さ13.0g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
513	包含層	434-02	石製品	砥石	I22	粘土	長さ 3.60 底面係 3.15	0.79	長さ13.0g 長さ13.0g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
514	包含層	434-01	石製品	砥石	J20	5層包	長さ 3.7 底面係 3.5	3.71	長さ13.0g 長さ13.0g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
515	包含層	434-03	石製品	砥石	L16	3層包	長さ 8.77 底面係 8.65	3.99	長さ70.0g 長さ70.0g	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
516	包含層	544-01	鉄製品	刀	P17	3層包	長さ 6.5 底面係 6.5	2.4	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
517	包含層	543-01	鉄製品	刀	P11	下層包	長さ 8.7 底面係 8.7	2.8	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
518	包含層	543-02	鉄製品	鉄鏝	O12	下層包	長さ 3.6 底面係 3.6	0.3	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	
519	包含層	544-02	鉄製品	鉄鏝	M19	3層包	長さ 3.9 底面係 3.9	0.3	不明	口縁部 1/2	2.5I2/1 2.5I2/1	灰白 黒	底面係	

第 28 表 第 1・2 次 (下層) 出土遺物観察表 (23)

報告番号 遺物番号	実測 遺物名	種類	部類等	グリッド 出土層位	法長 (cm)		調整技法の特徴	彫土 技法	色調	彫存	備考
					口長	底長					
S20	包含層 543-03	鉄製品	鉄釘?	L7 下層包	2.7	1.4	断面形状は台形				
S21	包含層 543-07	鉄製品	不明	M11 下層包	2.1	1.1	—				胡蝶文などの金具の可能性あり
S22	包含層 543-05	鉄製品	不明	J9 下層包	2.6	1.6	—				有機物の付着等なし
S23	包含層 543-04	鉄製品	鉄釘	H6 下層包	3.7	3.0	—				有機物の付着等なし
S24	包含層 543-06	鉄製品	鉄釘	L10 下層包	6.0	0.6	—				—
S25	包含層 545-01	鉄製品	鍍金金具 小	不明 上層包	1.5	11.6	—				—
S26	包含層 542-01	鉄製品	不明	N9 下層包	5.7	1.4	—				表面の剥離かなり著しい
S27	包含層 542-02	鉄製品	器具	Q11 下層包 黒褐色土(第4層)	残存長 9.3	共通引 手差接 8.0	—				有機物の付着等不明
S28	包含層 542-03	鉄製品	鏝か	M10 下層包	6.4	8.0	—				鍍金品
S29	包含層 548-01	鉄製品	鉄釘	M15 上層包	長さ 2.8	長さ 2.2	長さ 24.0cm				分析用D-1 彫治済
S30	包含層 549-01	鉄製品	鉄釘	M11 下層包	4.8	4.7	長さ 58.0cm				分析用D-2 彫治済
S31	包含層 550-01	鉄製品	鉄釘	L9 下層包	長さ 0.9	長さ 0.0	長さ 349.0cm				分析用D-3 彫治済
S32	包含層 551-01	鉄製品	鉄釘	L7 下層包	長さ 4.5	長さ 3.2	長さ 38.0cm				分析用D-4 彫治済
S33	包含層 551-02	鉄製品	鉄釘	L9 下層包	長さ 2.1	長さ 1.7	長さ 5.0cm				分析用D-5 彫治済
S34	包含層 551-03	鉄製品	鉄釘	L9 下層包	長さ 1.3	長さ 1.3	長さ 4.5cm				分析用D-6 彫治済
S35	包含層 552-01	鉄製品	鉄釘	K7 下層包	長さ 5.4	長さ 4.0	長さ 50.0cm				分析用D-7 彫治済
S36	包含層 552-02	鉄製品	鉄釘	K7 下層包	長さ 3.4	長さ 3.0	長さ 20.0cm				分析用D-8 彫治済
S37	包含層 553-01	鉄製品	鉄釘	M10 下層包	長さ 9.3	長さ 8.0	長さ 22.0cm				分析用D-9 彫治済
S38	包含層 553-02	鉄製品	鉄釘	M10 下層包	長さ 4.9	長さ 4.6	長さ 59.0cm				分析用D-10 彫治済
S39	包含層 554-01	鉄製品	鉄釘	O10 下層包	長さ 2.9	長さ 2.0	長さ 10.0cm				分析用D-11 含鉄済
S40	包含層 554-02	鉄製品	鉄釘	N11 下層包	長さ 2.6	長さ 2.1	長さ 8.0cm				分析用D-12 彫治済
S41	包含層 554-03	鉄製品	鉄釘	M10 下層包	長さ 2.2	長さ 2.2	長さ 12.0cm				分析用D-13 鉄系遺物
S42	包含層 555-01	鉄製品	鉄釘	M10 下層包 1層	長さ 6.0	長さ 4.3	長さ 78.0cm				分析用D-14 彫治済
S43	包含層 555-02	鉄製品	鉄片	M10 下層包 1層	長さ 2.3	長さ 1.3	長さ 4.0cm				分析用D-15 削治済
S44	包含層 556-01	鉄製品	鉄釘	M0 下層包 2層	長さ 4.8	長さ 3.7	長さ 102.0cm				分析用D-16 彫治済
S45	包含層 556-02	鉄製品	鉄釘	Q11 下層包 2層	長さ 5.4	長さ 5.9	長さ 10.0cm				分析用D-17 彫治済
S46	包含層 547-01	鉄製品	鉄釘	N7 SEの南西 (上層遺層一位)	長さ 3.8	長さ 3.1	長さ 11.0cm				分析用D-18 彫治済



## IV 第3次調査の遺構と遺物

### 1 遺構

#### a 基本層序 (第62・63図)

基本的には、上層から1層表土、2層旧耕作土(灰オリーブ褐色砂質土:5Y4/2)、7層中世包含層(オリーブ褐色砂質土〜シルト:2.5Y4/3)、8層奈良時代包含層(暗灰黄色シルト:2.5Y4/2)、24層古墳時代から奈良時代の包含層及び第2面検出面(暗オリーブ褐色シルト:2.5Y3/3)、34層弥生時代終末から古墳時代初頭の包含層及び第3面検出面(にぶい黄褐色粘質シルト:10YR4/3)、37層弥生時代後期から終末の包含層及び第4面検出面(暗褐色シルト:10YR3/4)、41層第5面検出面(オリーブ褐色シルト:2.5Y4/4)である。35層以下は第3面調査後に行った下層断り割り調査で確認した。42層以下はシルトや粘質土が続くが、遺物は含まれていない。

範囲確認調査の結果から、第1・2次調査の中世遺構面にあたる第3次調査の第1面からは遺構が検出されず、遺物もほとんど認められなかったため、調査は第2面(奈良時代)から第5面(弥生時代後期)までを行った。

#### b 第5面(弥生時代後期から終末)

(第64図)

方形周溝墓4基、溝1条、孤立柱建物1棟を確認した。方形周溝墓は4基とも墳丘が削平されており、周溝のみを確認したが、調査区外へ広がるため、全容は不明である。

**方形周溝墓SX701**(第65図) 調査区北東部で西半分の周溝のみ検出した。1辺6.0m以上、周溝の深さは約60cmである。周溝の幅は0.5~1.0mで、少なくとも北側の一箇所が陸橋部となっている。南側周溝から西側周溝への屈曲は緩く、円弧に近い。この陸橋部に近い西側周溝で弥生土器壺(第80図1)が出土した。この土器は第V様式後半<sup>1)</sup>のものであることから、弥生時代後期の遺構と考えられる。

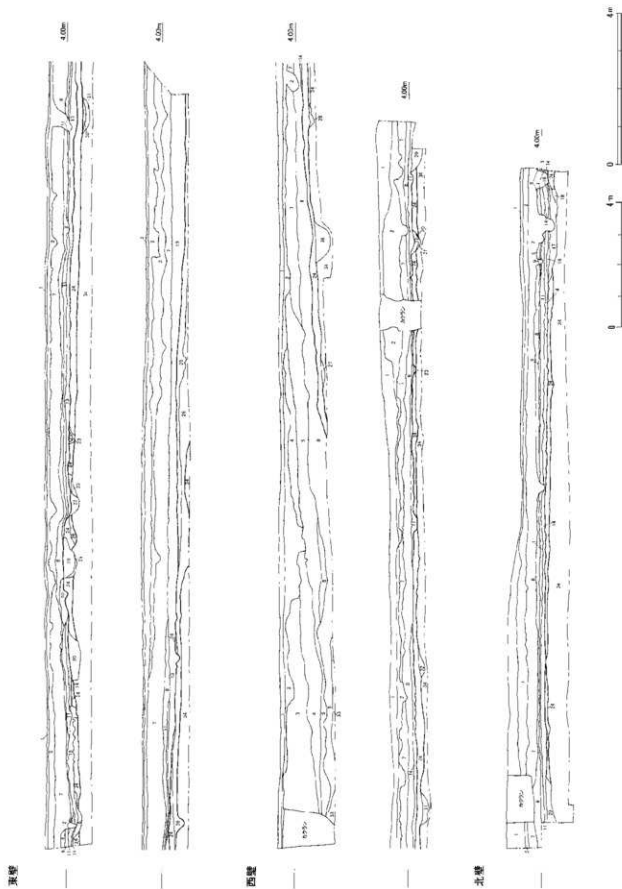
**方形周溝墓SX702**(第66図) 南北約16.0

m、東西12.0m以上、周溝深さは約60cmである。周溝の幅は2.4~4.6mである。下層断り割り調査によって掘削されたため詳細は不明であるが、西側周溝はSX705東側周溝と共有している可能性がある。しかし、SX705の東側周溝の土層断面ではSX702とSX705がそれぞれ独立していることを確認できなかった。また、SX702北側周溝西端が細くなり、南側周溝西端は陸橋部になっていることから、SX702の周溝は「コ」の字状を呈していた可能性がある。東西方向の周溝の輪郭は内側では直線的であるが、外側では丸く膨らむ。主軸方向はおよそN9°Eである。

遺物は北側周溝最下層から甕底部、広口壺などが出土した(第80図3~8)。壺の中にはベンガラが付着したものや絵面土器も含まれ、供献された遺物と考えられる。これらの遺物は第V-5様式から第VI様式に属することから、弥生時代後期から終末の遺構と考えられる。

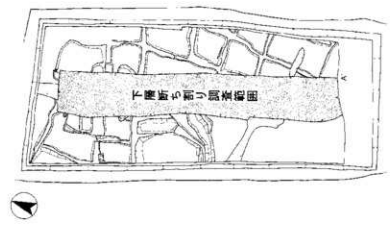
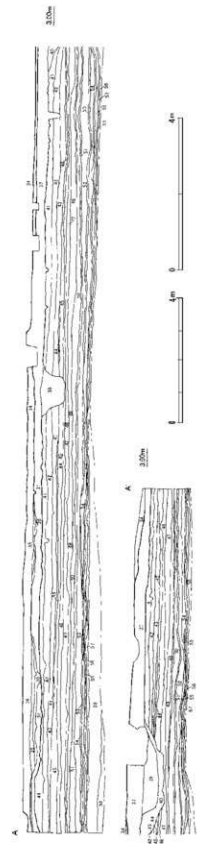
**方形周溝墓SX703**(第65図) 調査区北端で南側周溝と東側周溝南半分のみを確認した。1辺8.0m以上、南側周溝は幅約1.9m、深さ40~50cm、東側周溝は幅約0.8m、深さ約10cmであり、東側周溝は非常に小規模なものである。検出した周溝が一部であるため正確ではないが、主軸方向はおよそN12°Eであろう。遺物は全く出土しなかった。

**方形周溝墓SX705**(第67図) 南北11.5m以上、東西12.0m以上である。北側周溝は幅約0.9m、西側周溝は4.0m以上で、深さは共に約40cmである。検出されている範囲のみからの判断であるが、SX703と比較すると、深さはほぼ同じであるが、幅が南北方向の方が広く、SX703の特徴とは逆である。また、前述したように西側周溝はSX702と共有する可能性がある。主軸方向はおよそN17°Eである。第V様式後半~第VI様式の高杯脚部やワイングラス形高杯口縁部が出土した(第80図9~11)。古墳時代後期から飛鳥時代の土器器壺も出土しており、土器器壺は混入と考えられる。遺構の時期は弥

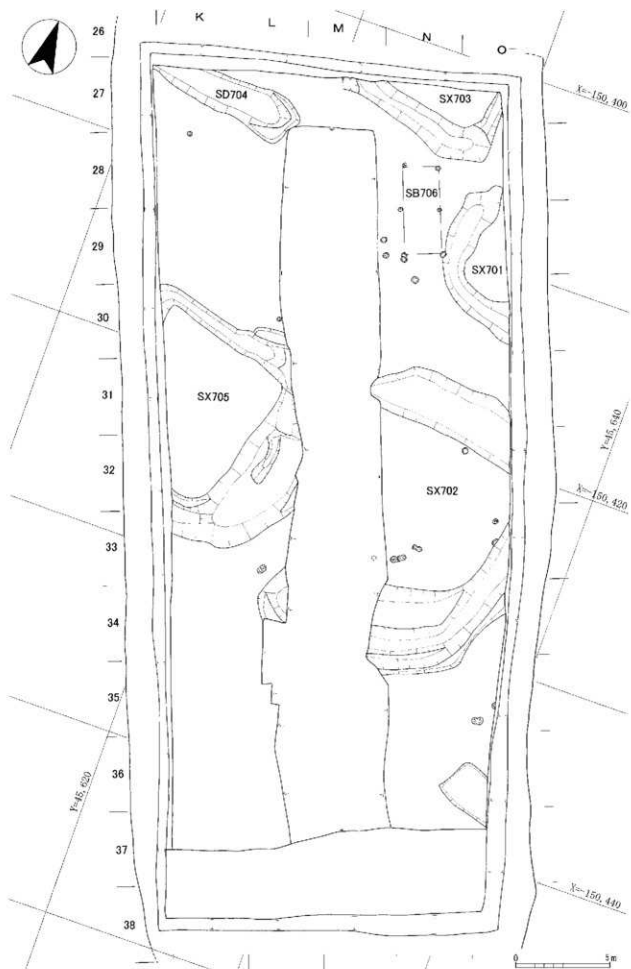


第 62 図 第 3 次調査区土層図 (長さ 1 : 120、高さ 1 : 100) 奈土層註記は第 63 図と対応

第 63 図 第 3 次下層断ち割り調査 東壁土層断面図 (長さ 1 : 120、高さ 1 : 100)

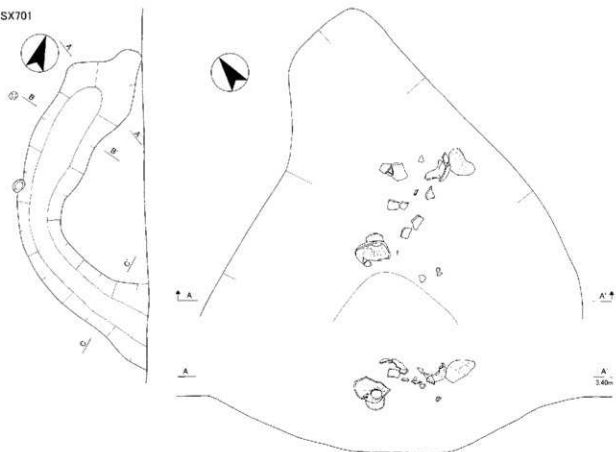


- 1 灰土
- 2 灰土(1)〜褐色粘質土(SV4/2) 正層土上
- 3 オリーブ褐色粘質土(SV1/3) 東壁上小?
- 4 褐色粘質土(SV1/1) 東壁上中?
- 5 褐色粘質土(SV1/2) 東壁上大?
- 6 灰色粘質土(SV4/1) 東壁上大?
- 7 オリーブ褐色粘質土(SV4/3) 中非砂質層
- 8 灰褐色土(SV4/2) 赤土時代包含層
- 9 オリーブ褐色粘質土(SV4/3) 赤土時代包含層
- 10 暗灰色粘質土(SV4/3) 暗赤土時代包含層
- 11 暗灰色粘質土(SV4/3) 暗赤土時代包含層
- 12 暗灰色粘質土(SV4/3) 暗赤土時代包含層
- 13 暗灰色粘質土(SV4/3) 暗赤土時代包含層
- 14 暗灰色粘質土(SV4/2) 暗赤土時代包含層
- 15 灰土(1)〜褐色粘質土(SV4/3) 赤土時代包含層
- 16 暗オリーブ褐色粘質土(SV3/3)
- 17 赤褐色粘質土(SV3/3) プログを含む
- 18 暗オリーブ褐色粘質土(SV3/3)
- 19 オリーブ褐色粘質土(SV4/2) SD013埋土
- 20 暗灰色粘質土(SV4/2) SD013埋土
- 21 灰褐色粘質土(SV4/2) SD060・065埋土
- 22 1 層位(此層位) 暗赤土時代包含層
- 23 灰褐色粘質土(SV4/2) 21層位埋土(SD060埋土)
- 24 暗オリーブ褐色粘質土(SV4/3)
- 25 暗赤土時代包含層 1層位(東壁)埋土
- 26 灰褐色粘質土(SV4/3) 埋土多々含む 埋赤含む
- 27 SD250埋土
- 28 暗オリーブ褐色粘質土(SV4/3) 埋土多々含む
- 29 暗灰色粘質土(SV4/2) SD240埋土
- 30 暗灰色粘質土(SV4/2) SD250埋土
- 31 暗灰色粘質土(SV4/2) 嵌合(此層位) SD060埋土
- 32 暗灰色粘質土(SV4/3) SD062埋土
- 33 オリーブ褐色粘質土(SV4/3)
- 34 赤褐色粘質土(SV4/3) プログを含む
- 35 灰色粘質土(SV4/3) 灰色粘質土(SV4/1) プログを含む
- 36 暗灰色粘質土(SV4/3)
- 37 暗灰色粘質土(SV4/2) 埋土
- 38 暗灰色粘質土(SV4/3)
- 39 暗灰色粘質土(SV4/3)
- 40 暗灰色粘質土(SV4/3) SD270北側埋土
- 41 暗灰色粘質土(SV4/3) SD270北側埋土
- 42 オリーブ褐色粘質土(SV4/2) 多々含む。上部が赤褐色粘土
- 43 オリーブ褐色粘質土(SV4/2) 多々含む。上部が赤褐色粘土
- 44 オリーブ褐色粘質土(SV4/2) 多々含む。上部が赤褐色粘土
- 45 オリーブ褐色粘質土(SV4/2) 多々含む。上部が赤褐色粘土
- 46 オリーブ褐色粘質土(SV4/2)
- 47 灰色粘質土(SV4/1)
- 48 オリーブ褐色粘質土(SV4/2)
- 49 暗オリーブ褐色粘質土(SV4/2)
- 50 暗オリーブ褐色粘質土(SV4/2) プログを含む
- 51 灰色粘質土(SV4/3)
- 52 オリーブ褐色粘質土(SV4/3)
- 53 灰色粘質土(SV4/3)
- 54 暗オリーブ褐色粘質土(SV4/2) プログ多々含む
- 55 暗オリーブ褐色粘質土(SV4/3)
- 56 暗灰色粘質土(SV4/3) 埋土(は) プログを含む
- 57 灰色粘質土(SV4/3) 灰色粘質土(SV4/1) プログを含む
- 58 暗灰色粘質土(SV4/3)
- 59 暗灰色粘質土(SV4/3)

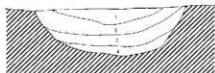


第 64 圖 第 3 次第 5 面遺構平面圖 (1 : 200)

SX701



B 1:40m

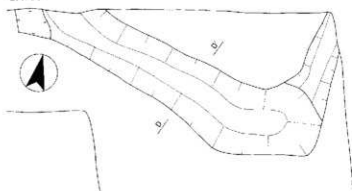


- 1 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3)
- 2 暗灰黄色粘質シルト(2.5Y4/2)
- 3 オリーブ褐色粘質シルト(2.5Y4/3)
- 4 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)

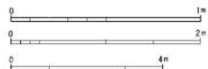
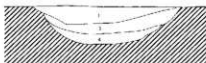
C 1:50m



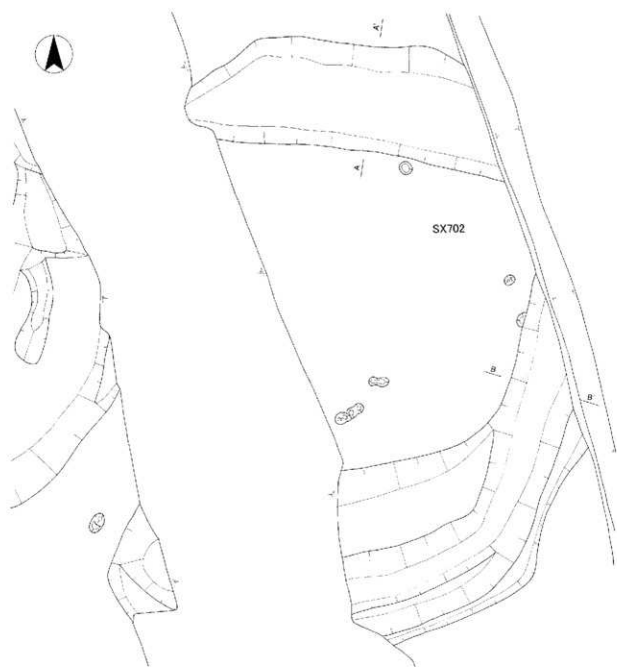
SX703



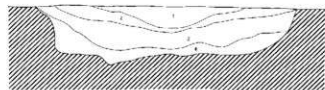
B 1:50m



第 65 図 第 3 次 SX701・703 平面図 (1:100)・土層断面図 (1:40)・遺物出土状況図 (1:20)



A 3.60m



B 3.45m



- 1 暗褐色粘質シルト(10YR3/4) 褐色シルトブロック(10YR4/6)含む
- 2 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3)
- 3 暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3)
- 4 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/4) にぶい黄褐色シルトブロック(10YR4/3)含む
- 5 オリーブ褐色粘質シルト(2.5Y4/3) 黄褐色シルトブロック(2.5Y4/3)含む
- 6 黄褐色シルト(2.5Y5/4) オリーブ褐色粘質シルト(2.5Y4/3)含む
- 7 オリーブ黒色粘質シルト(5Y3/1) 炭化物含む
- 8 オリーブ黒色粘質土(10Y3/1) オリーブ灰色(10Y4/2)細砂含む
- 9 オリーブ灰色(10Y1/2)細砂



第66図 第3次SX702平面図(1:100)・土層断面図(1:40)

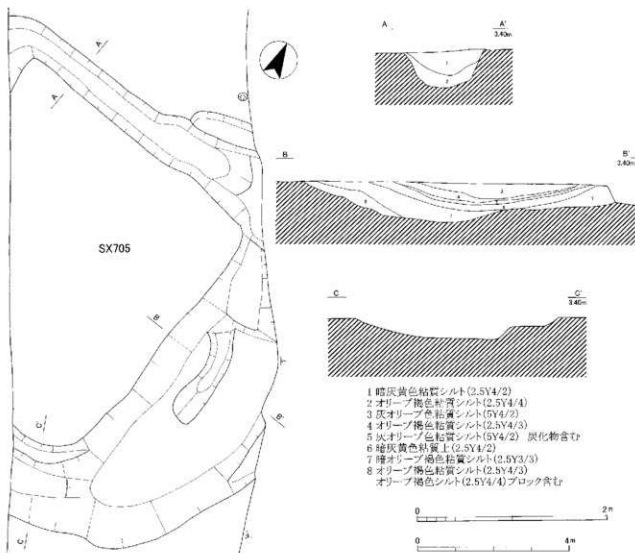
生時代後期から終末に想定されるだろう。

**溝SD704** (第68図) 方形周溝墓の東西方向の周溝とほぼ並行しており周溝墓の可能性はあるものの全体の形状が確認されていないことから、現状では溝と認識した。長さ7.8m以上、検出面からの深さ34cmほどである。しかし、土層断面で確認した面よりもかなり掘り下げた面で遺構検出を行っていることや、出土した土器が底面からかなり浮いたところで出土していることから、溝の深さは深いところで50cmはあったと考えられる。

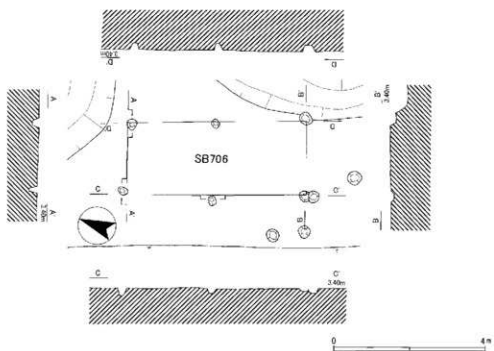
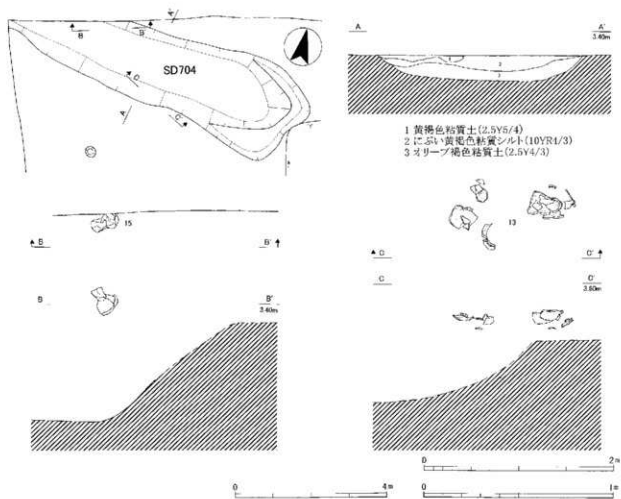
溝上層から脚付壺(第80図15)や広口壺(同図

16)など第VI様式の土器が出土していることから、弥生時代後期から終末頃の遺構と考えられる。また、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての土師器壺も混入していた。

**掘立柱建物SB706** (第68図) 1間(1.9m)×2間(1.7m 2.3m)である。棟方向はN21°Wであり、方形周溝墓の主軸とは大きくずれている。柱穴の一つから弥生土器小片3点のみ出土している。SX701との重複関係からSX701よりも古いことを確認しており、弥生時代後期の遺構と考えられる。



第67図 第3次SX705平面図(1:100)・断面図(1:40)



第 68 図 第 3 次 SD704 平面図 (1 : 100) ・断面図 (1 : 40) ・遺物出土状況図 (1 : 20)、SB706 平面図・断面図 (1 : 100)



### c 第4面（弥生時代終末から

#### 古墳時代初頭）（第69図）

下層断り割り調査にて土層確認を行った際、暗褐色シルトが畦畔状に盛り上がる部分がみられ、同層が浅いレンズ状に落ち込む部分に上から黄褐色シルト、オリブ褐色シルトの堆積を確認した。このことから水田状遺構の存在を想定し、調査を行った。その結果、水田状遺構20面、溝1条を確認した。水田状遺構は調査区南西部分を除き、ほぼ全面で検出された。なお、遺構検出の際、東西及び南北方向に幅0.3mのトレンチをそれぞれ設置し、土層断面の確認を行った（第71・72図）。

**水田状遺構SZ601**（第70図） 南北約6.3m、東西約5.3m、深さ約11cmの規模である。南側に深さ9cm程度の落ち込みが存在する。南半分は方形であるが、北半分はやや不整形である。この遺構より北側では遺構は確認されていないが、検出の際に掘りすぎた可能性もある。完形に近い壺（第81図17）や甕（同図18）、高杯が出土し、水田状遺構の中でも最も多く遺物が出土した遺構である。これらの遺物は第VI様式のものであり、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

**水田状遺構SZ602** 南北4.0m以上、東西2.0m以上、深さ約14cmの規模である。北半分については検出の際に掘りすぎたため、畦畔を検出することができなかった。ただし、南半分でも西側の畦畔は立ち上がりは緩やかで不明瞭である。南半分の平面形は方形を呈する。出土遺物は土器小片2点のみである。

**水田状遺構SZ603** 南北約4.0m、東西4.0m以上、深さ約12cmの規模である。東西方向に長い長方形であると思われる。西側に深さ7cm程度の落ち込みが存在する。東側の畦畔は急角度で立ち上がり、区画は明瞭である。壺口縁部1点のみ出土した。

**水田状遺構SZ604** 南北約6.0m、東西4.0m以上、深さ約12cmの規模である。平面形は平行四辺形に近いものと思われる。出土遺物は土器小片2点のみである。

**水田状遺構SZ605** 南北約4.6m、東西約4.5m、深さ約14cmの規模である。南半分の幅が狭

いが、正方形に近い平面形である。東側の畦畔の立ち上がりは非常に緩やかで区画は不明瞭である。出土遺物は土器小片3点のみである。

**水田状遺構SZ606** 南北約4.0m、東西2.9m以上、深さ約10cmの規模である。SZ605と同様、西側の畦畔の立ち上がりは非常に緩やかで、区画は不明瞭である。出土遺物は土器小片4点のみである。

**水田状遺構SZ607** 南北6.0m以上、東西2.3m以上、深さ約12cmの規模である。西側の畦畔の立ち上がりは比較的急勾配で、区画は明瞭である。遺物は甕や壺の体部片が出土した。

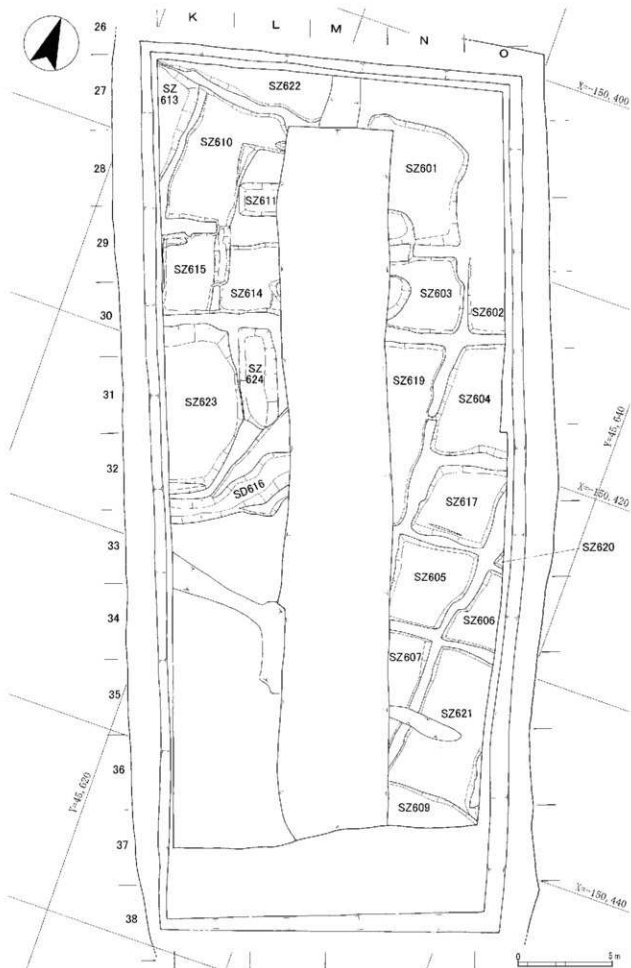
**水田状遺構SZ609** 調査区南端で検出しており、その全形はほとんど不明である。少なくとも、南北2.2m以上、東西5.2m以上、深さ約14cmの規模がある。甕もしくは壺の底部、甕の体部片が出土した。

**水田状遺構SZ610** 北東部の一部が東側に広がる至近平面形であるが、この部分を除くと南北約7.2m、東西約3.6m、深さ約14cmの規模である。東側には深さ6cmの土坑状の落ち込みや深さ9cmの落ち込みが確認されている。畦畔の立ち上がりは南側の方がやや急角度で深さもあり、区画も明瞭である。椀形高杯や壺の破片が出土したことから、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

**水田状遺構SZ611** 南北約1.8m、東西2.0m以上、深さ約9cmと小規模である。また、この遺構の北側と南側にある畦畔の幅が共に1.6mほどあることから、水田状遺構ではなく、長方形の平面形をもつ土坑である可能性がある。ススの付着した甕の体部片が出土した。

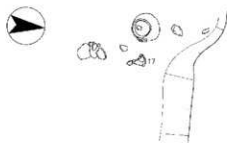
**水田状遺構SZ613** 南北5.6m以上、東西2.6m以上、深さ約14cmの規模である。西側半分以上が調査区外へ広がるため不明な点が多いが、平面形は方形と思われる。東側の畦畔の立ち上がりは比較的急角度であり、区画は明瞭である。遺物は広口壺や台付鉢、壺や甕の体部片などが出土した。壺は第VI様式のものと思定されることから、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

**水田状遺構SZ614** 南北約3.6m、東西2.8m以上、深さ約26cmの規模であり、最も深い。西側北部には畦畔は認められず、深さ5～10cm程度の土

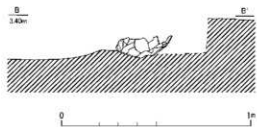
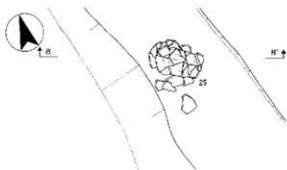
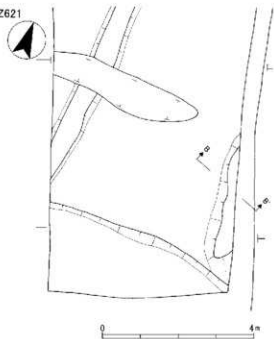


第 69 圖 第 3 次第 4 面道構平面圖 (1 : 200)

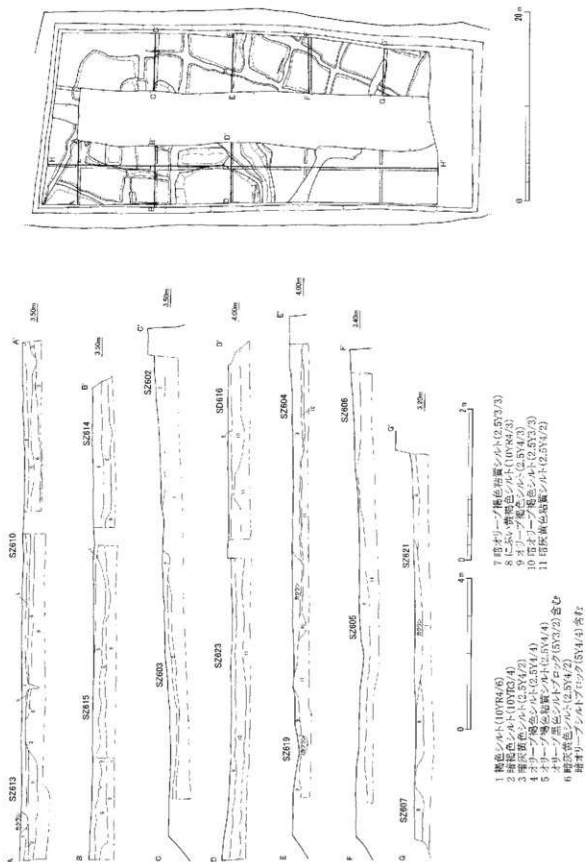
SZ601



SZ621



第 70 图 第 3 次 SZ601・621 平面图 (1:100)・遺物出土状况图 (1:20)



第71図 第3次第4面トレンチ配置図(1:400)・東西トレンチ土層断面図(長さ1:100・高さ1:50)

坑によって削平されている。西側南部の畦畔の立ち上がりは比較的緩やかである。しかし、南側の畦畔は高低差13cmと深く、急勾配である。出土遺物は土器小片2点のみである。

**水田状遺構SZ615** 南北約4.2m、東西約2.6m、深さ約22cmとSZ614同様深い。前述したように東側北部が新しく掘削された土坑によって削平されているが、比較的形の整った長方形を呈する。北端部に深さ9cmほどの落ち込みがある。南側の畦畔はSZ614と同様急勾配であり、北側の畦畔も比較的急勾配となっていることから、東西方向の区画は明瞭である。出土遺物は土器小片6点のみである。

**水田状遺構SZ617** 南北約4.3m、東西約4.0m、深さ約14cmの規模である。平面形は菱形に近い。出土遺物は甕の体部片のみである。

**水田状遺構SZ619** 南北約9.8m、東西約3.3m、深さ約10cmの規模である。西側半分は下層断ち割り調査トレンチによって削平されているが、東隣のSZ604・SZ617を考慮すると、2面分の広さをもつ南北に長い水田状遺構であると考えられる。東側の畦畔の立ち上がりは緩やかで、区画は比較的明瞭である。遺物は出土していない。

**水田状遺構SZ620** 調査区東端で南西端部のみを確認したため、全容はほとんど不明である。深さは約8cmである。遺物は出土していない。

**水田状遺構SZ621** (第70図) 南北約7.7m、東西約4.6m、深さ約10cmの規模であり、平面形は南北に長い長方形である。南側の畦畔は確認す

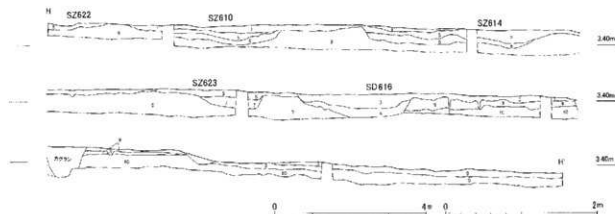
ることができなかった。西側の畦畔の立ち上がりは比較的緩やかであり、区画はやや不明瞭である。壺の下半部(第81図25)が東側畦畔付近から出土した。他にも壺や甕の体部片が出土している。

**水田状遺構SZ622** 南北2.6m以上、東西9.2m以上、深さ約6cmの規模である。調査区北端部で検出し、大部分が調査区外へ広がるため不明な点も多いが、他の水田状遺構と比べ、東西方向が非常に長い。しかし、南側の畦畔の立ち上がりが非常に緩やかであるために区画が不明瞭であることから、南北方向の畦畔の存在を見落としてしまった可能性もある。遺物は出土しなかった。

**水田状遺構SZ623** 南北約8.9m、東西4.0m以上、深さ約14cmの規模である。東側の畦畔が丸みを帯びることから、平面形は楕円形に近く、最も面積の大きな水田状遺構の一つと思われる。東側の畦畔の立ち上がりは急勾配であるが、他の畦畔は緩やかである。遺物は出土していない。

**水田状遺構SZ624** 南北5.5m、東西1.6m、深さ約14cmと、南北に細長い平面形である。水田状遺構としては小規模である。畦畔は緩やかに立ち上がり、区画は不明瞭である。遺物は出土しなかった。

**溝SD616** 長さ7.4m以上、幅1.2~3.4m、深さ約16cmの規模である。溝としては浅く、第5面のSX705の周溝と位置的に重なることから、完全に周溝が埋まらず、落ち込みとなったものと考えられる。壺や甕の体部片が出土した。



第72図 第3次第4面南北トレンチ土層断面図(長さ1:100、高さ1:50) ※土層註記は第71図と対応

#### d 第3面（古墳時代中期から飛鳥時代）

（第73図）

調査区中央部から南部を中心に溝5条、土坑1基、槽2条を確認した。

**溝SD502**（第74図） 長さ20m以上、幅約1.2m、深さ約40cmである。東西方向の溝であるが、東側は南へ円弧状に曲がる。断面形は逆台形からU字形を呈する。調査区東壁の土層観察からSD503との前後関係はSD502が新しい。土師器杯や甕、壺の体部片などが出土した。出土遺物が小片であるため詳細な時期は不明であるが、古墳時代中期から後期の遺構と考えられる。

**溝SD503**（第74図） 長さ20m以上、幅3.6～6.6m、深さ約5cmと非常に浅い溝である。調査時は円弧状にめぐり、その内側が人工的な盛土であると認識していたため、この溝を古墳の周溝として調査していた。しかし、現在残された図面等の資料から、以下の理由でこの溝が古墳の周溝である可能性は低いと判断し、溝とした。

一つ目の理由は、溝の深さが5cm程度しかなく、立ち上がりも不明瞭な点である。そのためか、調査区東壁の土層断面図には溝が記録されていない。また溝の断面図では埋土となるはずの土層が古墳時代の包含層と表記されている。二つ目の理由は、この溝は円弧状になるが一周していないことである。幅も3.6～6.6mと差が大きく、不整形である。現に調査時当初は円墳として調査していたが、途中で方墳と墳形の認識を変更した経緯がある。最後の理由は、重複関係にある新しい溝2条（SD502・504）も同一面上で確認していることである。調査区東壁・西壁両方の土層断面をみても、両溝は同一面に存在する。これらの理由から、この遺構が古墳の周溝である可能性は低いと考える。確かに「墳丘」とされる高まりの高さは約0.4mあり、その中から土師器小片と形象埴輪片1点が出土している。しかし、この遺物だけでは高まりが人工的に盛られた根拠としては弱いのではないだろうか。

では、この溝が何であったかという問題であるが、SD502やSD504の深さと比べてみると、幅3.6～6.6mもあるSD503が削平された結果、深さ5cmという極めて浅い溝になったとは考え難い。従って、

溝というよりは落ち込み状のものであった可能性も考えられるのではなかろうか。

溝からの出土遺物は甕の体部片など土師器小片のみであるため、遺構の詳細な時期は不明であるが、古墳時代中期から後期と考えられる。

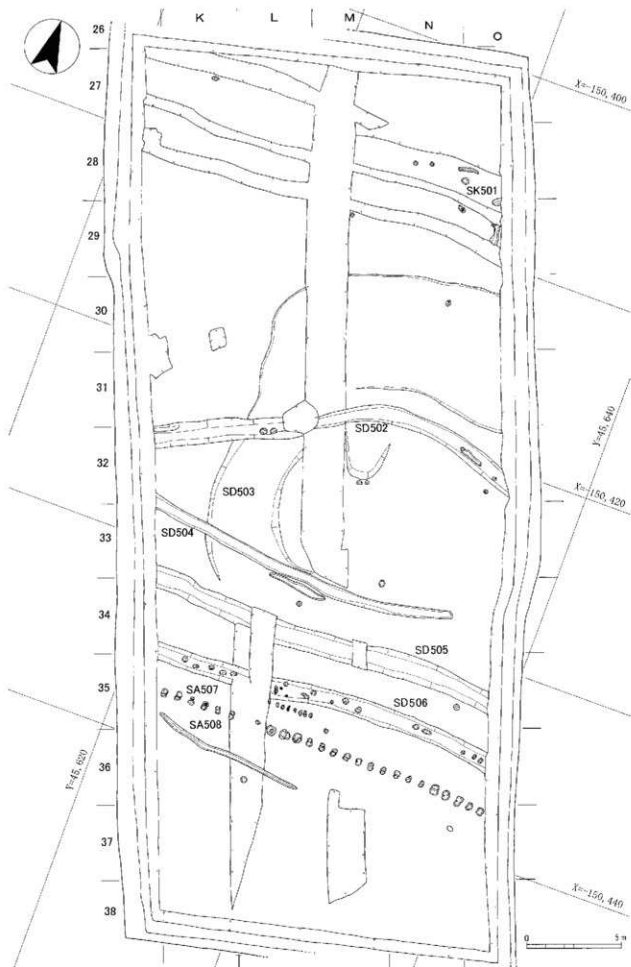
**溝SD504**（第74図） 長さ17.2m以上、幅約0.7m、深さ約15cmである。東西方向に延びる溝で、SD503との前後関係はSD504が新しい。断面形はU字形に近い。壺の体部片などが出土しており、古墳時代中期から後期の遺構と考えられる。

**溝SD505**（第75・76図） 長さ19.2m以上、幅約1.3m、深さ約60cmである。方位はおおよそE1°Sであり、ほぼ真東に延びている。断面形は逆台形である。遺物は須恵器杯身（第81図28・29）、杯蓋（同図27）、土師器甕体部片、土錘（同図30）などが出土した。須恵器は7世紀中頃のものと想定され、飛鳥時代の遺構と考えられる。

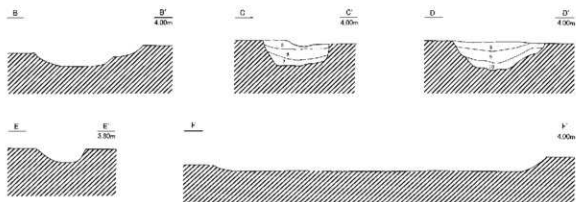
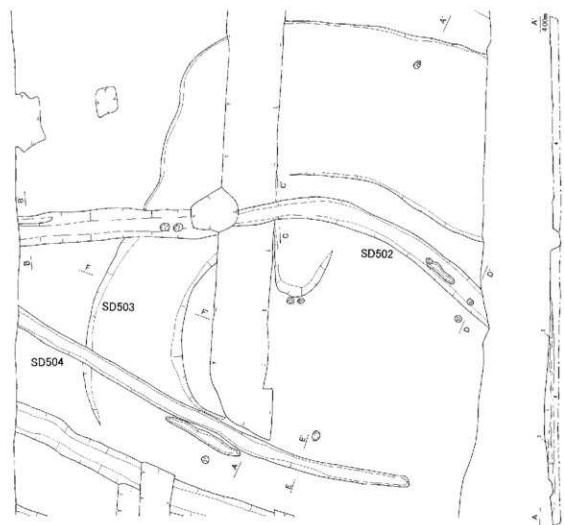
**溝SD506**（第75図） 長さ18.8m以上、幅約1.1m、深さ約20cmである。SD505の南側をほぼ平行して延びる溝であるが、深さはSD506の方が浅い。方位はおおよそE2°Nである。断面形は逆台形からU字形である。溝底に直径30cm程度のピットが多数存在する。土師器甕などの土師器小片が出土しているが、SD505と平行していることから飛鳥時代の溝と考えられる。

**土坑SK501**（第76図） 長径約0.4m、短径約0.3m、深さ約14cmで、平面形は楕円形である。出土遺物は土師器小片1点のみであるため、詳細な時期は不明であるが、古墳時代中期から後期の遺構であろう。第3面の調査区北部で確認された遺構は小規模な土坑やピットがある程度である。その中で遺物が出土した遺構はこの土坑のみである。

**槽SA507・508**（第75図） 長さ17.5m以上で、SD506の南側に平行して作られた槽である。溝がやや南へ彎曲するためか、槽も溝と同様やや彎曲している。SA507とSA508が重複しており、一度作り替えが行われたと考えられる。柱穴の規模は長径40cm、短径30cm程度のものが多い。柱穴間の距離は40cm程度である。出土遺物はいずれも土師器小片のみだが、SD505・506と同方向であるため、これらの溝と同時期のものと考えられる。



第 73 図 第 3 次第 3 面遺構平面図 (1 : 200)

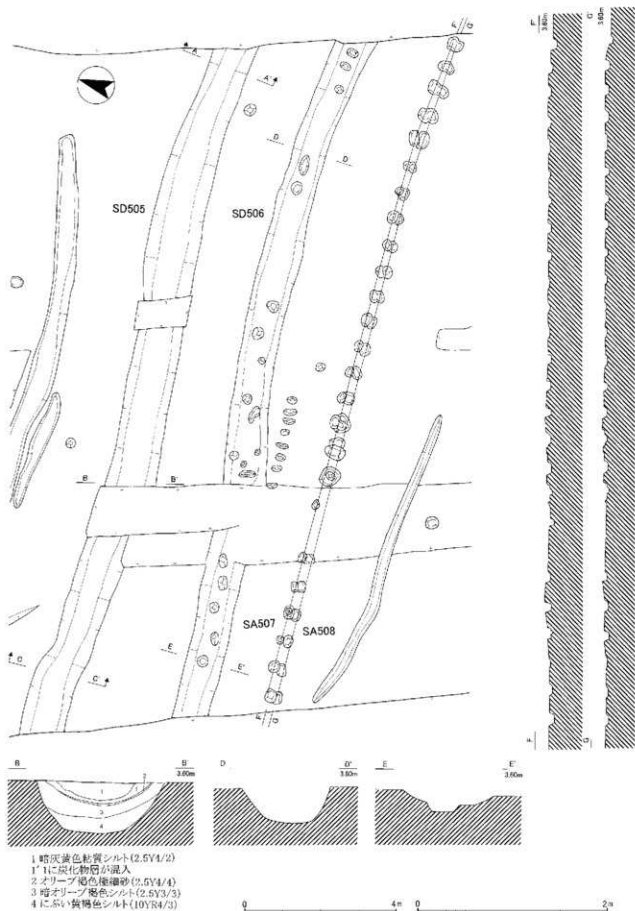


- |                                                          |                                                      |
|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 1 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3)<br>黄褐色シルトブロック(2.5Y5/4)多く含む          | 6 暗褐色シルト(10YR3/3)<br>褐色シルトブロック(10YR4/4)多く含む          |
| 2 灰い黄褐色シルト(10YR4/3)                                      | 7 暗オリーブ色シルト(2.5Y3/3)                                 |
| 3 褐色シルト(10YR4/4)                                         | 8 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)<br>にふい黄褐色粘質土ブロック(2.5Y6/4)含む 炭化物含む |
| 4 暗褐色シルト(10YR3/4)                                        | 9 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2) 鉄分・炭化物含む                          |
| 5 オリーブ褐色シルトブロック(2.5Y4/2)多く含む<br>暗灰黄色シルトブロック(2.5Y4/2)多く含む | 10 褐灰色粘質土(10YR4/1) 鉄分・炭化物多く含む                        |

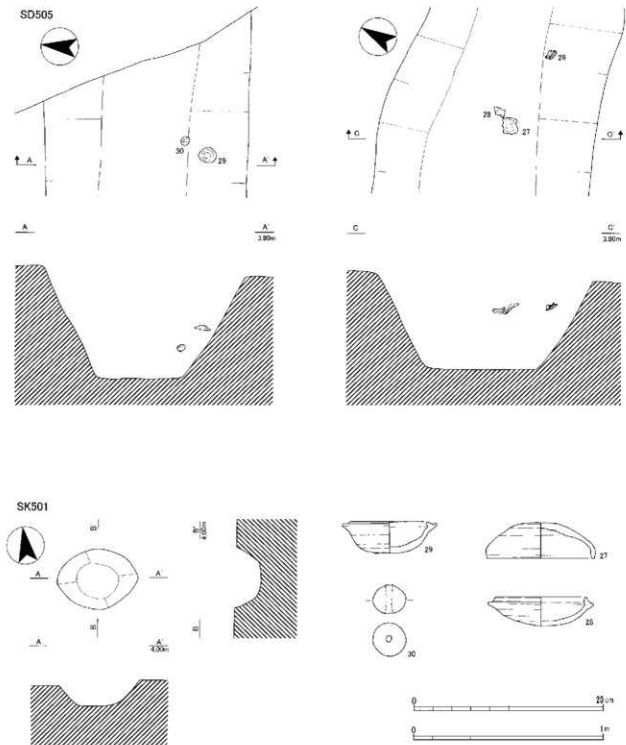


第74図 第3次SD502・503・504平面図・断ち割り図 (1:150)・断面図 (1:40)





第75図 第3次SD505・506、SA507・508平面図(1:100)、SA507・508断面図(1:100)、SD505・506断面図(1:40)



第 76 图 第 3 次 SD505 遗物出土状况图 (1:20)、SK501 平面图·断面图 (1:20)、SD505 出土遗物实测图 (1:4)

## ● 第2面(奈良時代)(第77図)

調査区北部から中央部にかけて溝6条、土坑1基、掘立柱建物1棟を確認した。

**溝SD401**(第78図) 長さ20.4m以上、幅約1.2mの規模で、東西方向に延びる。方位はE1°N～E7°Nである。深さは4.5～35.5cmと差が大きいが、平均すると20cm程度である。しかし、検出面の高さはSD401以北が他の箇所比べて約30cm低いことから、掘りすぎた可能性がある。その結果、SD401の東半分は一部平面検出されなかったとみられる。

**溝SD402**(第78図) 長さ約3.4m、幅約0.5m、深さ約10cmの小規模な溝である。南端はSD403と重複しており、その先へは続かない。東西方向の溝SD401・403の間に位置するが、このSD402のみ北東から南西方向の溝である。土師器甕口縁部が出土し、奈良時代の遺構と想定される。

**溝SD403**(第78図) 長さ20.2m以上、幅約0.8m、深さ約30cmである。SD401にほぼ平行しており、方位はおおよそE4°Nである。土師器甕の体部片など、土師器小片が出土した。

**溝SD404**(第78図) 長さ20.0m以上、幅約1.0m、深さ約25cmである。方位はおおよそE5°NでSD403とほぼ平行している。規模もSD403と近いが、溝底に直径20～30cm程度のピットが多数検出されている。このピットは西側では0.8～1m間隔であるが、東側ではやや不規則であるため、性格は不明である。奈良時代のもものと想定される土師器杯が出土した。

**溝SD405**(第78図) 長さ20.3m以上、幅約0.7m、深さ約10cmの浅い溝である。SD404と同様、SD403とほぼ平行しており、方位はおおよそE3°Nである。出土遺物は混入と考えられる弥生土器片のみである。SD403～405は約2mの間隔でほぼ等間隔に延びている。一方、これらの溝の方位は第3面で検出したSD505・506ともほぼ平行する。しかし、調査区東壁、西壁の土層断面からSD403～405とSD505・506の検出面は異なっており、出土遺物からも時期が異なることは明らかである。従って、飛鳥時代から奈良時代にかけての時期は、東西方向を意識してこれらの溝が掘削されたと考え

られる。

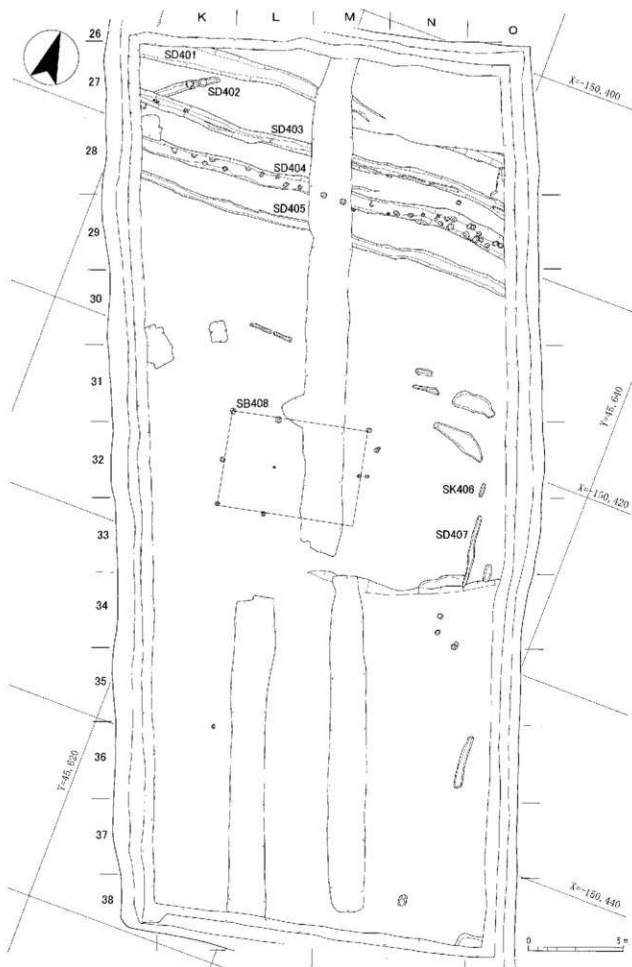
**溝SD407**(第79図) 長さ約3.8m、幅約0.3m、深さ約10cmの南北方向の溝である。出土遺物はなかった。

**土坑SK406**(第79図) 長さ約0.7m、約0.2m、深さ約5cmの小規模な土坑である。ただし、SD407の北側にあり、細長い平面形であることや非常に浅いことなどから、SD407と一連の遺構であった可能性がある。土師器小皿小片のみ出土した。

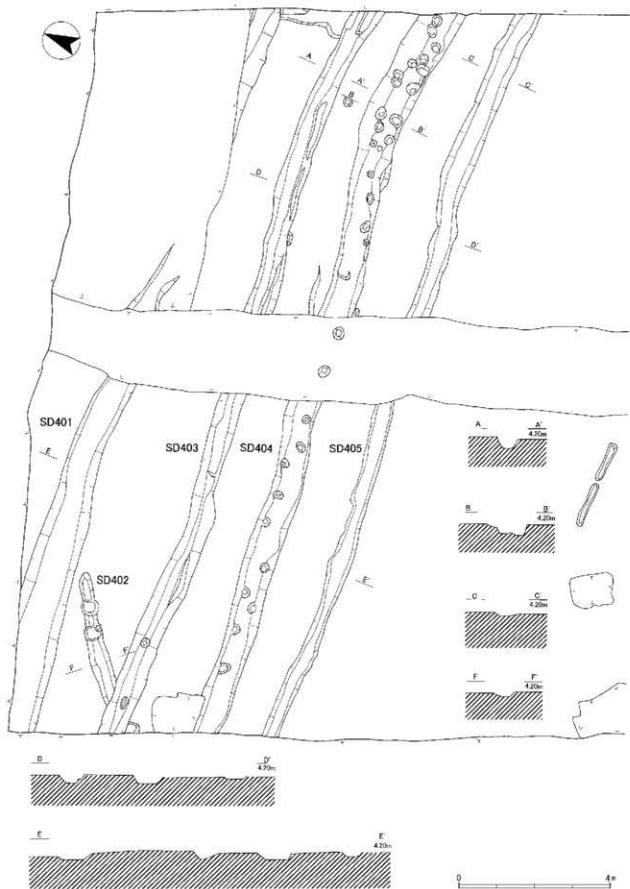
**掘立柱建物SB408**(第79図) 範囲確認調査坑によって桁行の柱穴が確認されていないが、2間(2.6m、2.2m)×3間(約2.5m)の掘立柱建物と考えられる。柱穴から土師器小片1点のみ出土しているが、棟方向はおおよそE12°Nである。SD403～405の方向に近いことから、これらの溝と同時期のものと考えられる。

### [註]

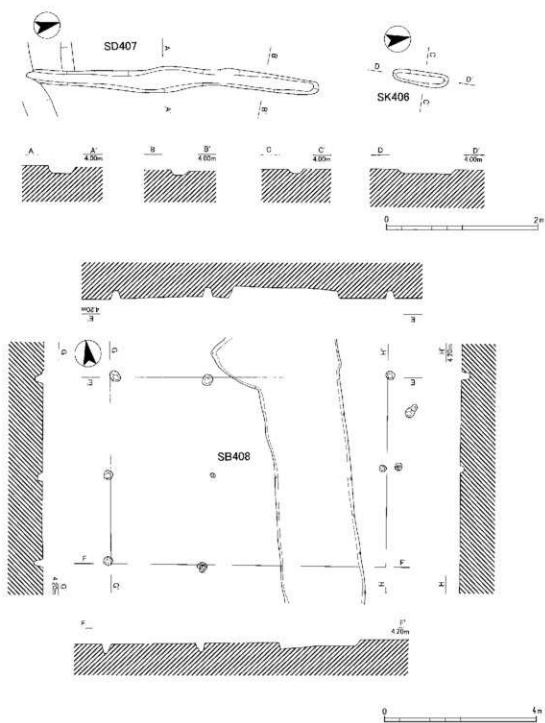
- 1) 以下、弥生土器については下記の文献に拠った。  
上村安生「1 伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』加納俊介・石黒久人編 木耳社 2002
- 2) 『明気強勝群・大日古墳群・甘糟遺跡・奥後遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1995  
水橋公志「南伊勢地域の須恵器編年に関する一考察」『研究紀要』第8号三重県埋蔵文化財センター 1999



第77図 第3次第2面遺構平面図 (1:200)



第 78 图 第 3 次 SD401 · 402 · 403 · 404 · 405 平面图 · 断面图 (1 : 100)



第 79 图 第 3 次 SK406・SD407 平面图・断面图 (1:50)、SB408 平面图・断面图 (1:100)

第29表 第3次 遺構一覧表

遺構番号	遺構面	地区	性格	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	備考
SD401	第2面	J27~M27	溝	奈良	20.4以上	1.2	20	E1~7°N
SD402	第2面	K27	溝	奈良	3.4	0.5	10	
SD403	第2面	J・K27、O29 L28~O28	溝	奈良	20.2以上	0.8	27	E4°N
SD404	第2面	J28~N28 O29	溝	奈良	20.0以上	1.0	25	E5°N
SD405	第2面	J・K28、N・O30 K29~N29	溝	奈良	20.3以上	0.7	9	E3°N
SK406	第2面	O32	土坑	奈良	0.7	0.2	5	
SD407	第2面	O33・O34	溝	奈良	3.8	0.3	11	出土遺物なし
SB408	第2面	K31~M33	掘立柱建物	奈良	7.1	4.8	25	E12°N
SK501	第3面	O28	土坑	古墳中~後期	0.4	0.3	14	
SD502	第3面	K31~N31 J32~O32	溝	古墳中~後期	20.0以上	1.2	37	
SD503	第3面	M30~O33	溝か	古墳中~後期	20.0以上	3.6~6.6	5	
SD504	第3面	J・K32、J33~M33 L34~N34	溝	古墳中~後期	17.2以上	0.7	15	
SD505	第3面	K33、K34~N34 M35~O35	溝	飛鳥	19.2以上	1.3	57	E1°S
SD506	第3面	K34、K35~N35 N・O36	溝	飛鳥	18.8以上	1.1	20	E2°N
SA507	第3面	K35・L35 L36~O36	溝	飛鳥	17.5以上	—	19	作り替えたもの
SA508	第3面	K35・L35 L36~O36	溝	飛鳥	17.5以上	—	15	はじめのもの
SZ601	第4面	N28・29	水田	弥生終末~古墳初頭	6.3	5.3	11	
SZ602	第4面	O29・30	水田	弥生終末~古墳初頭	4.0以上	2.0以上	14	
SZ603	第4面	N29・30	水田	弥生終末~古墳初頭	4.0以上	4.0	12	
SZ604	第4面	N31~O32	水田	弥生終末~古墳初頭	6.0	4.0以上	12	
SZ605	第4面	N33~N34	水田	弥生終末~古墳初頭	4.6	4.5	14	
SZ606	第4面	N34~O34	水田	弥生終末~古墳初頭	2.9以上	4.0	10	
SZ607	第4面	N34・35	水田	弥生終末~古墳初頭	6.0以上	2.3以上	12	
欠番	—	—	—	—	—	—	—	—
SZ609	第4面	N36・37	水田	弥生終末~古墳初頭	5.2以上	2.2以上	14	
SZ610	第4面	K27~L28、K29	水田	弥生終末~古墳初頭	7.2	3.6	14	
SZ611	第4面	L28・29	水田	弥生終末~古墳初頭	2.0以上	1.8	9	土坑か
欠番	—	—	—	—	—	—	—	—
SZ613	第4面	K27・28	水田	弥生終末~古墳初頭	5.6以上	2.6以上	14	
SZ614	第4面	K29~L30	水田	弥生終末~古墳初頭	3.6	2.8以上	26	
SZ615	第4面	K29・30	水田	弥生終末~古墳初頭	4.2	2.6	22	
SD616	第4面	K32・33、L32	溝	弥生終末~古墳初頭	7.4以上	1.2~3.4	16	
SZ617	第4面	N32~O33	水田	弥生終末~古墳初頭	4.3	4.0	14	
欠番	—	—	—	—	—	—	—	—
SZ619	第4面	N31~N33	水田	弥生終末~古墳初頭	9.8	3.3以上	10	出土遺物なし
SZ620	第4面	O33	水田	弥生終末~古墳初頭	0.8以上	0.6以上	8	出土遺物なし
SZ621	第4面	N35~O36	水田	弥生終末~古墳初頭	7.7	4.6	10	
SZ622	第4面	K27~M27	水田	弥生終末~古墳初頭	9.2以上	2.6以上	6	出土遺物なし
SZ623	第4面	K30~K32	水田	弥生終末~古墳初頭	8.9	4.0以上	14	出土遺物なし
SZ624	第4面	L30・31	水田	弥生終末~古墳初頭	5.5	1.6	14	出土遺物なし
SX701	第5面	O28~30	方形周溝墓	弥生後期	6.0以上	4.0以上	58	
SX702	第5面	N31~O34 N35	方形周溝墓	弥生後期~終末	16.0	12.0以上	59	N9°E
SX703	第5面	M27~O27 N28・O28	方形周溝墓	弥生後期か	8.0以上	4.0以上	7~49	N12°E 出土遺物なし
SD704	第5面	K27・L27	溝	弥生後期~終末	7.8以上	2.4	34	
SX705	第5面	K30~L33	方形周溝墓	弥生後期~終末	12.0以上	11.5以上	41	N17°E
SB706	第5面	N28・29	掘立柱建物	弥生後期	4.0	1.9	23	N21°W
SD707	第5面	O34~N34	溝	弥生後期~終末	5.0	0.65	21	SX702→SD707か SX702と同一の可能性あり

## 2 遺物

第3次調査で出土した遺物は、整理箱（コンテナバット）にして30箱である。弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多い。以下、遺構で記述した順に触れていく。

### a 第5面（弥生時代後期から終末）

**方形周溝墓SX701（1・2）** 1は広口壺である。口縁部は外反する単純口縁のものである。口縁部外面は上から下へケズリを施したのち、端部はヨコナデを施す。頭部にはハケが認められる。体部外面はハケの後ヘラミガキが施され、下半部には初段痕が認められる。また、体部上半部の前後2箇所にはハケによる文様が施されており、そのうち1箇所は2方向のハケによって円弧状の文様を描いている。体部内面下半部はケズリが施されている。上村安生氏による編年<sup>1)</sup>の第V-3～5様式のものと考えられる。2は高杯の脚部で、外反して開くものである。3方透孔が穿たれ、外面はヘラミガキ調整されている。内面は上部にケズリがわずかに認められるが、ハケが顕著である。

**方形周溝墓SX702（3～8）** 3は直線的に広がる広口壺の口縁部である。口縁端部は肥厚する。口縁部内外面ともに細かいハケが施されるが、頭部接合部内面は一部砂粒の動きが認められるほどの強いナデによって接合痕を消している。第V-5様式～第VI-1様式に属するものと考えられる。4は大型広口壺の頭部と考えられる。貼付け突帯が2条めぐり、わずかだがベンガラと思われる赤色顔料が認められる。口縁部の厚さは最大1.6cmもある厚手の土器である。いわゆる「パレススタイル壺」<sup>2)</sup>を意識した壺であるが、胎土は灰黄褐色で、尾張地域でみられるものとは異なる。しかし、胎土には1～3mmの砂粒が密に含まれ、中には7mmの砂粒も含まれていることから、在地産のものでもないと考えられる。第V-5様式のものと考えられる。5は広口壺体部である。頭部近くに2個1対の透孔が焼成後に1箇所穿たれ、その右下に線刻画がある。体部外面はヘラミガキ調整され、内面はハケの後ユビオサエされ、粘土帯接合痕が明瞭に残る。体部下半部にはススが付着している。体部が扁平な球形である

ことなどから第V様式のものである。6は受口状口縁をもつ小型甕である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、下部にキザミがめぐり、頭部から体部にかけてハケ調整された後、頭部には櫛描直線文が施される。内外面にススが付着している。8は台付壺の脚部と考えられる。少なくとも2箇所の透孔が確認され、3方透孔と思われる。端部にはキザミのついた貼付け突帯がめぐり、外面は磨滅のため調整は不明瞭であるが、内面はナデが認められる。胎土には雲母が含まれており、在地産のものである。

**方形周溝墓SX705（9～11）** 9は粗雑な小型壺である。口縁端部は内側へ折り返され、丸く肥厚する。体部は長胴で、最大径は下半部にくる。外面はケズリの後ハケが施され、内面は粘土帯の接合痕が明瞭に残る。外面には一部ススの付着や被熱による赤化が認められる。古墳時代後期から飛鳥時代のもと考えられ、遺構に伴う遺物ではない。10はワイングラス形高杯の口縁部である。全体的に内彎するが、端部は外反する。磨滅が著しいが、内外面にヘラミガキが認められる。第V-5様式からVI様式にかけてのものであろう。11は高杯脚部である。ヘラミガキ調整の後、3条で1帯の櫛描直線文が4帯施される。透孔は3方穿たれている。第V-3～5様式のものと考えられる。

**溝SD704（12～16）** 12は壺の口縁部で、大きく外反して開く。肥厚した端部にはキザミがみられる。口縁部は外面上部の一部にナデが認められるが、内外面ともにヘラミガキ調整されている。胎土には雲母が多く含まれる。第I-4様式に属するものであろうか。13は広口壺の口縁部から頭部である。口縁部外面はハケの後櫛描直線文が施されるが、磨滅のため不明瞭である。頭部外面には刺突がめぐり、14は粗雑な小型壺である。頭部は内外面にユビオサエが残り、屈曲は非常に緩やかである。体部外面はナデ、内面はナデ及びユビオサエによって調整されている。9と同様、古墳時代後期から飛鳥時代のもと考えられ、遺構に伴うものではない。15は脚付壺である。口縁部は緩く外反し、体部は扁平な球形である。外面はヘラミガキ調整され、体部内面下半部にはハケが施される。脚部は3方透孔が穿たれる。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、ヘラミ

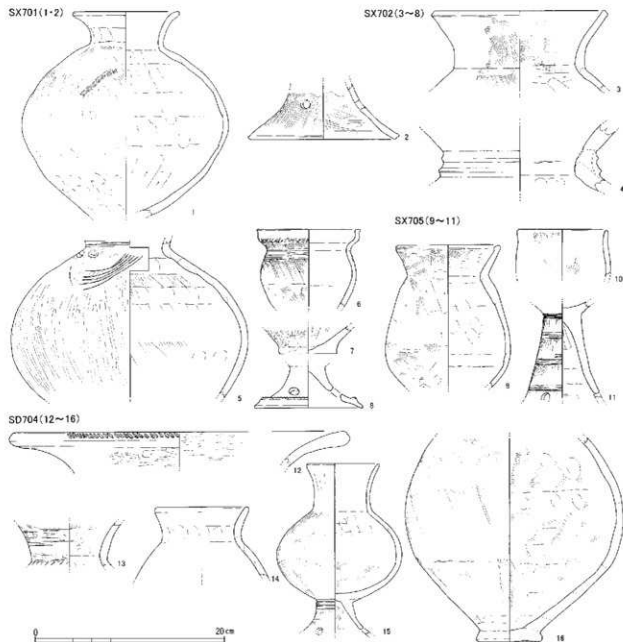


ガキの後、4条の櫛描直線文が2帯めぐる。第VI様式に属するものであろうか。16は甕の体部と思われる。体部の最大径は中心部にあり、内外面ともにハケ調整される。底部は平底である。外面にススが付着している。第VI-1様式前後のものと考えられる。

#### b 第4面（弥生時代終末から古墳時代初頭）

水田状遺構SZ601（17~19） 17は広口壺である。口縁部は内彎気味に開き、端部は内傾して面をなす。口縁部内面には粗いハケが施され、外面は細かいハケの後ナデ調整される。体部はやや扁平

な球形である。体部外面は上半部に細かいハケ、下半部に粗いハケが施され、下半部にはススの付着が認められる。体部内面は上半部にナデ、下半部に粗いハケが施される。第VI-2~3様式のものと考えられる。18は甕である。口縁部はくの字状に折れ、端部は外側へ肥厚する。体部の最大径は上半部にある。外面上部に一部ハケが残るが、内外面共にヘラケズリが施される。底部は凹底で、外面は横方向のヘラケズリが認められる。外面は頸部から体部上半部にかけてススが比較的厚く付着し、体部下半部は被熱による赤化が著しい。体部内面下半部にはコゲ



第80図 第3次遺構出土遺物実測図(1)(1:4)

も認められる。第VI様式のものである。19は外反高杯である。杯部は浅く、中位で稜をもち、内外面ともにヘラミガキ調整される。脚部は縦方向のヘラミガキの後、櫛描直線文が少なくとも4帯めぐり、櫛描直線文は4条が1帯であるが、最上段のみ9条である。第V-3〜4様式のものと考えられる。

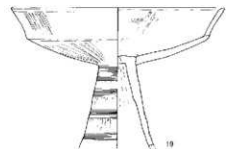
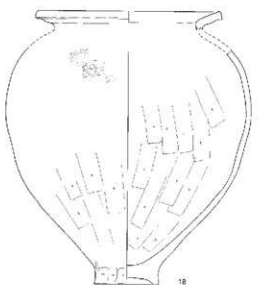
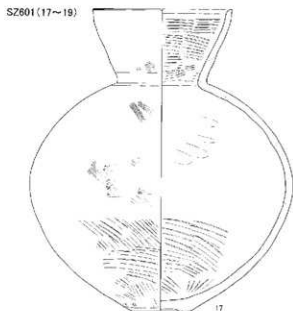
水田状遺構SZ603(20) 20は壺の口縁部である。外反して開き、端部は面をもたない。磨滅のため調整は不明である。

水田状遺構SZ610(22) 22は小型の碗形

高杯である。半球形の杯部は磨滅のため調整は不明瞭だが、一部にヘラミガキが残る。脚部はやや外反して開き、3方透孔が穿たれる。外面にはヘラミガキが施され、内面はナデ調整である。杯部と脚部は円盤充填法で接合され、頸部外面には脚部との接合時についたと思われる圧痕が残る。完形ではないため詳細な検討は難しいが、赤塚次郎氏による編年<sup>31)</sup>の廻間II〜III式(3世紀後半から4世紀前半頃)に併行する時期のものであろうか。

水田状遺構SZ613(23・24) 23は広口壺

SZ601(17~19)



SZ603(20)

SZ609(21)

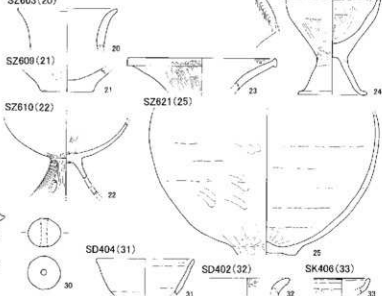
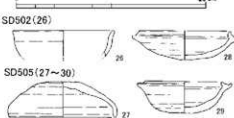
SZ610(22)

SZ613(23・24)

SZ621(25)

SD502(26)

SD505(27~30)



第81図 第3次遺構出土遺物実測図(2)(1:4)

の口縁部である。よく締まる頸部から口縁部が大きく開くもので、口縁端部は上下に拡張され、端部に羽状刺突文が加えられている。羽状刺突文は内面の端部にも施されている。口縁部外面はハケの後ヘラミガキ調整される。第VI-1様式のものと考えられる。24は台付鉢である。鉢部の外面は粗いハケ、内面はナデの後ヘラミガキが施される。口縁部はやや強いヨコナデ調整される。脚部は内外面ともにナデ調整で、内面はしぼり痕が残らないよう丁寧に仕上げられている。脚部端部は短く外へ折れ曲がる。

**水田状遺構SZ621 (25)** 25は壺の体部である。磨滅のため調整は不明瞭であるが、下部外面はケズリが施され、底部内面は工具痕が残る。器壁は3~6mm程度と薄く作られている。

### c 第3面（古墳時代中期から飛鳥時代）

**溝SD502 (26)** 26は土師器杯である。内外面ともに口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整である。ヨコナデによって端部はやや外反している。

**溝SD505 (27~30)** 27~29は須恵器蓋杯である。杯蓋27は天井部と口縁部をわけける稜線はなく、口縁端部は面をつくらない。天井部外面の下半部は回転ナデ調整されるが、上半部はヘラ切りの後は未調整である。杯身28・29はともに立ち上がりは低く内傾する。28は全体的に浅く扁平である。底部外面は未調整の範囲が広い。29は口縁部の歪みが大きく、体部はやや深い。底部外面には回転ケズリ調整される。いずれも伊勢在地窯もしくは美濃須賀窯系の製品で、明氣1・2号窯出土品と3号窯出土杯Hの中間的形態を呈するため、7世紀第3四半期頃のものと考えられる<sup>4)</sup>。30は土鍾である。直径3.5cmほどの球形で、孔径は0.6cmである。重さ32.4gである。

### d 第2面（奈良時代）

**溝SD402 (32)** 32は土師器壺口縁部の小片である。口縁端は外反し、端部外面に面をなす。内面にはヨコハケが残る。奈良時代の甕であろう。

**溝SD404 (31)** 31は土師器杯である。口縁部は直線的に立ち上がる。磨滅のため調整は不明瞭であるが、内外面ともにナデ調整されていると思

われる。詳細な時期は不明であるが、奈良時代のものであろう。

**土坑SK406 (33)** 33は土師器小皿の小片である。色調は灰白色を呈する。

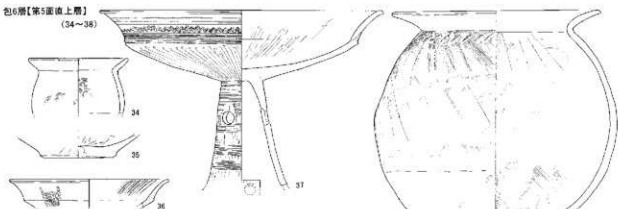
### e 包含層など

**第5面直上包含層 (34~38)** 34は小型甕である。口縁部はくの字状に曲がる単純口縁である。体部内外面はハケ調整され、体部外面下半部にはススが附着している。35は壺の底部である。外面はハケの後ヘラミガキが施され、内面はハケ調整である。底部には0.5~1mmの砂粒が密に含まれている。36・37は外反高杯である。37の杯部は浅く、中位で稜をもつ。口縁部外面には上段3条、下段5条の櫛描直線文がめぐり、その間に波状文が描かれている。杯部内面と外面下半部はヘラミガキ調整である。脚部には3方透孔が上下2段にある。上段と下段の透孔の位置は互い違いになっている。脚部外面は縦方向のヘラミガキの後、櫛描直線文がめぐり、櫛描直線文は最上段は10条だが、その下に5条1帯の櫛描直線文が少なくとも3帯めぐり、第V-3~4様式に想定される。38は台付甕である。口縁部はくの字状に曲がる単純口縁である。頸部の下側には櫛による刺突がめぐり、体部内外面はハケ調整され、外面には広くススが附着している。体部外面下半部は被熱による赤化が認められる。内面下半部には炭化物が附着している。第V-5様式に想定される。

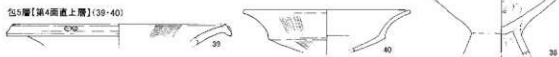
**第4面直上包含層 (39・40)** 39は広口壺の口縁部である。口縁端部の下部に粘土帯を貼り付け、垂下させた面に擬回線と円形浮文が施されている。円形浮文の裏側にも円形の粘土が貼り付けられている。胎土は赤褐色の砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。これらの特徴から在地産の土器ではないと考えられる。40は外反高杯の杯部である。口縁部は強く外反する。内外面ともに磨滅のため調整は不明瞭であるが、ヘラミガキ調整が認められる。

**第3面直上包含層 (41~47)** 41は広口壺である。口縁部はやや外反しながら大きく開く。体部はやや扁平な球形である。体部外面上部はクテハケが反時計まわりに施された後、その下にヨコハケが施される。下半部は磨滅のため調整は不明瞭であるが、

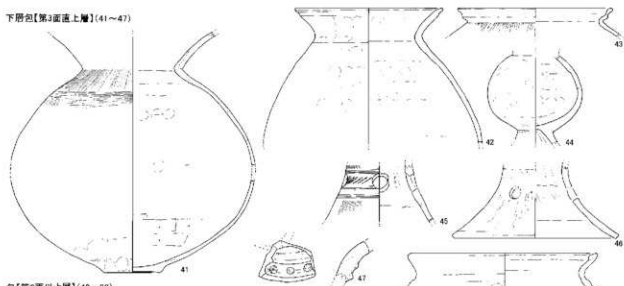
包6層【第5面直上層】  
(34~38)



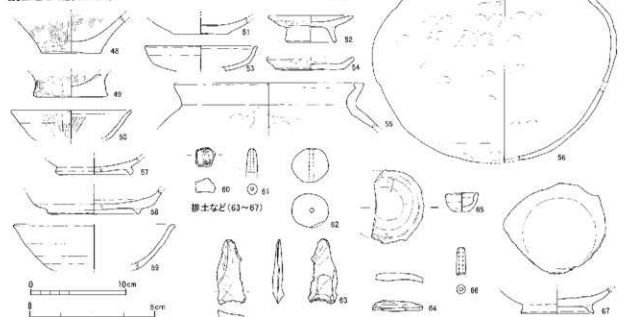
包5層【第4面直上層】(39~40)



下層包【第3面直上層】(41~47)



包【第2面以上層】(48~62)



第82図 第3次包含層出土遺物実測図 (63は2:3、他は1:4)

底部付近に工具痕が残る。体部内面底部はケズリが施され、器壁は薄く仕上げられている。第VI様式のものである。43はS字状口縁台付甕の口縁部である。口縁部は立ち上がりが弱く、外側に向かって広がり、口縁端部の面は上方を向く。これらの特徴から赤塚編年<sup>5)</sup>のC類に分類され、廻間Ⅲ式(4世紀前半頃)に想定される。44は脚付壺である。口縁部は欠損しているが、球形の体部に脚部がつく。外面はヘラミガキ調整され、体部内面はユビオサエ、ナデが認められる。45は器台の破片である。透孔は4方に穿たれていたと思われる。外面はヘラミガキ調整の後、上から3条、2条、3条の櫛描直線文が描かれる。最上段の櫛描直線文の上側と、その下側には櫛による刺突がめぐる。刺突は上段と下段とで方向が異なる。46は器台の脚部である。透孔は3方に穿たれていたと思われる。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。内面上部にはしぼり痕が残る。外面には部分的に赤彩が残る。47は形象埴輪片である。外反する器壁の外面に突帯を貼付け、竹管文を施し、その後強いナデが施されている。左上の部分に1箇所の透孔の一部とみられる焼成前穿孔がある。外面上部には粗い縦ハケ調整が認められるが、磨滅が著しい。

**第2面上に包含層(48~62)** 48・49は壺もしくは甕の底部である。底部外面が48はケズリであるが、49はナデである。51は土師質土器の皿で、いわゆるロクロ土師器である。底部外面には糸切り痕が残る。52は土師器の台付小皿で、皿部外面にはユビオサエが残る。斎宮編年<sup>6)</sup>Ⅲ-1~2期(10世紀後半から11世紀前半頃)に想定される。55は土師器甕の口縁部である。口縁部は短く、端部は内側に折り返される。端部上面に強いナデを施した結果、明瞭な面をつくる。体部内外面はナデ調整である。胎土に赤色の砂粒が含まれている。新田洋氏による編年<sup>7)</sup>の平安Ⅳ-1期(10世紀後半)のものであろう。56は土師器甕である。口縁端部は内側に折り返され、ヨコナデの結果、やや凹んだ面は内傾する。頸部は短く、器壁はやや厚手である。体部内外面は磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、ナデ調整されているようである。体部外面にはススが付着し、底部内面にはコゲが認められる。伊藤裕偉氏による編年<sup>8)</sup>の

(仮)A段階(12世紀前葉から中葉頃)のものであろう。57は灰陶陶器碗である。高台はやや低く、内彎しない。底部外面のケズリ調整は省略され、糸切り後ナデ調整されている。猿投竈編年<sup>9)</sup>の折戸53号窯式(10世紀前半頃)のものであろう。58・59は渥美産の陶器碗である。58は高台が低く、高台底部には初登痕や砂粒痕が残る。藤澤良祐氏による編年<sup>10)</sup>の第6型式(13世紀前葉頃)のものである。60は陶器碗底部を二次加工して作った加工円盤である。1辺約2cmの大きさで、全周に打ち欠き痕が残る。61・62は土錘である。61は半分が欠損しているが、長さ2.6cm以上、幅1.2cmの細長い形状である。黒斑が認められる。62は直径3.5cmほどの球形で、孔径は0.4cmである。重さ45.6gである。

**排土など(63~67)** 63はサスカイト製の石製品で、石鏝未製品の可能性がある。細部の調整が部分的で、多くは剝離面のままとなっている。64は須恵器杯底部である。側面の一部に打ち欠き痕が残ることから、二次加工された加工円盤と推察される。底部外面はヘラ切りの後未調整である可能性がある。65は土師器ミニチュア土器である。口径3.2cm、器高2.0cmほどの大きさである。丁寧なつくりだが、下半部に粘土帯の接合痕が残る。66は土錘である。一部欠損しているが、長さ3.0cm以上、幅0.9cmほどの長細い形状である。67は灰陶陶器碗底部である。欠損面の半周分には細かい打ち欠き痕が残されていることから、二次加工された加工円盤である可能性がある。底部内面には重ね焼き痕が残る、使用による磨耗が認められる。高台は細く、端部は外側へ反る。

#### [註]

- 1) 以下、弥生土器については下記の文献に拠った。  
上村安生「1伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』加納俊介・石黒立人編 木耳社 2002

年代観については、従来、弥生時代前期は紀元前3世紀、中期は紀元前1~2世紀、後期は紀元後1~2世紀と考えられていた。最近の研究では、北部九州の前期は紀元前8世紀まで、中期は紀元前4世紀まで遡る考え方が示されている。また、伊勢湾沿岸地方に西日本の弥生文化が到達したのは紀元前5世紀頃とさ

- れている。舞出北遺跡における弥生時代の遺構の中心が後期は、従来では今から約 2000 年前から 200 年の間にあたると考えられている。弥生時代の年代観については今後も研究が進められることであろうが、舞出北遺跡において年代を与えるのは現状では難しいことである。なお、これらの年代については大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館『弥生はいつから！？年代研究の最前線-』2007 年を参考にした。
- 2) 赤塚次郎「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 1995
  - 3) 赤塚次郎「V 考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990  
赤塚次郎「濃尾平野低地部における古墳時代の壺」『鍋と甕そのデザイン』第 4 回東海考古学フォーラム 1996
  - 4) 『明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・黒後遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1995  
水橋公恵「南伊勢地域の須恵器編年に関する一考察」『研究紀要』第 8 号三重県埋蔵文化財センター 1999
  - 5) 前掲註 3) 文献。
  - 6) 『斎宮跡発掘調査報告 I 内院地区の調査』斎宮歴史博物館 2001
  - 7) 新田 洋「平安時代～中世における煮沸具—「伊勢型」鍋—に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会 1985
  - 8) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会 1990  
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第 4 回東海考古学フォーラム 1996
  - 9) 橋崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告 (III)』愛知県教育委員会 1983  
斎藤孝正「東海地方の施軸陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 3 施軸陶器—』古代の土器研究会 1994
  - 10) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第 3 号 三重県埋蔵文化財センター 1994

第30表 第3次 出土土物観察表(1)

報告 番号	発掘番号	器種	器種等 グリッド	出土場所 出土層位		高さ(m)		形状	底径	断面技法の特徴	粘土	構成	色調	残存	備考
				口徑	器高	口徑	器高								
1	600-01	弥生土器	広口瓶	029	SX701北側溝 No.1, 2, 3, 4, 土器 群	11.0	21.8 以上	不明	不明	外:ヨコナガ, ケスリ, ハク, ハクのうちへらミガキ, 細紋直, ハクのうちへらミガキ, オサエ, ケスリ 内:ヨコナガ, ハクミガキ, オサエ, ケスリ	やや密	良	淡黄緑 10YR6/3	4/5 (口縁部 6/12)	前記2箇所にハクによる文様あり 観察番号2
2	600-01	弥生土器	高杯	N29	SX701南側溝西角	不明	5.9 以上	15.3	不明	外:ヨコナガ, ハク(6cm/cm), オサエ, ケスリ 内:ヨコナガ, ハク(10~10cm/cm), オサエ, ケスリ	やや密	良	赤赤褐 5YR5/6	脚縁部 11/12	通し3箇所 観察番号1
3	600-02	弥生土器	広口瓶	M31	SX702北側溝	17.9	8.5	不明	不明	外:ヨコナガ, ハク(10~10cm/cm), オサエ, ケスリ 内:ヨコナガ, ハク(10~10cm/cm), オサエ, ケスリ	やや粗	良	10YR7/2	口縁部 小片	観察番号6
4	600-03	弥生土器	広口瓶	032 0	SX702北側溝 西段 SX702北側溝	16.2	7.0 以上	不明	不明	外:ナガ, 駝付片(2枚) 内:ナガ, オサエ	粗	良	灰黄褐 10YR6/2	脚部 小片	わずかに赤彩 観察番号7
5	607-01	弥生土器	広口瓶	P22 032	SX702北側溝 西段 SX702北側溝	16.8 25.2	16.8 以上	不明	不明	外:ヨコナガ, ハク, 細紋直, 駝 付片, 細紋直, ハク, ナガ, オサエ 内:ヨコナガ, ハク(10~11cm/cm), オサエ, ナガ	やや粗	良	10YR7/2	体部 2/3	2箇所(の地味赤彩孔 観察番号あり 外周面付着 観察番号8
6	608-02	弥生土器	小壺	031 030	SX702北側溝 SX701南側溝	10.8	8.3 以上	不明	不明	外:ヨコナガ, ハク, 細紋直, 駝 付片, 細紋直, ハク, ナガ, オサエ 内:ヨコナガ, ハク(10~11cm/cm), オサエ, ナガ	やや密	良	10YR6/3	口縁部 3/12	内外面ス付着 観察番号5
7	609-03	弥生土器	壺	M31	SX702北側溝	不明	2.9 以上	6.0	不明	外:ハクミガキ, オサエ, ナガ 内:ナガ, 工具痕	やや粗	良	灰白 2.5Y7/1	底部	観察番号4
8	608-04	弥生土器	台付蓋 脚縁2	K33	SX702 ①層	不明	4.5 以上	11.3	不明	外:調査不明跡, ヨコナガ, 英田土付のちみずミ 内:ヨコナガ, ナガ	やや粗	良	淡黄緑 10YR8/3	脚部	通し3箇所か 観察番号3
9	610-02	土師器	壺	L32	SX705東側溝 No.1	5.7	15.0 以上	不明	不明	外:ヨコナガ, ケスリのうちへら 内:(9cm/cm) ハク, ナガ, オサエ	やや粗	良	10YR8/4	口縁部 5/12	外周ス付着 観察番号9
10	610-01	弥生土器	7の73 形高杯	L32	SX705東側溝 No.2	9.6	3.0	不明	不明	外:ヨコナガ, ハクミガキ, ハクミガキ	やや密	良	淡黄緑 10YR8/3	口縁部 1/12	観察らしい 観察番号9
11	609-01	弥生土器	高杯	L32	SX705東側溝 No.2	不明	10.1 以上	4.0	不明	外:ハクミガキのうち細紋直(3枚) 内:ナガ, ユビオサエ, ハク	やや密	良	10YR7/2	通し3箇所か 観察番号9	
12	609-03	弥生土器	壺	K27	SJ704 No.1	36.0	3.8 以上	不明	不明	外:ヨコナガ, 赤サミ, ナガ, ハクミガキ 内:ヨコナガ, ハクミガキ	やや粗	良	10YR6/4	口縁部	赤土前溝の上縁であり, 遺構に伴わない
13	609-02	弥生土器	広口瓶	K27	SJ704 No.2	不明	4.7 以上	不明	不明	外:ハクのち細紋直(黄文, 斜交文) 内:ハク, オサエ, ナガ	やや密	良	10YR6/4	脚部	観察番号14
14	610-03	土師器	壺	K27	SJ704 No.4	9.8	7.5 以上	不明	不明	外:ヨコナガ, ナガ, オサエ 内:ヨコナガ, ナガ, オサエ	粗	良	10YR6/4	口縁部	遺構に伴わない
15	610-04	弥生土器	脚付蓋	K27	SJ704 No.3	7.6	17.8 以上	不明	不明	外:ナガ, ハクミガキ, 細紋直(黄文)(4枚) 内:ナガ, ハク(9cm/cm), オサエ	やや密	良	10YR7/4	体部(赤文 (口縁部 2/12)	通し3箇所 観察番号9
16	609-04	弥生土器	壺小	K27	SJ704 No.2	不明	21.6 以上	6.8	不明	外:ハク(8~9cm/cm), オサエ, ナガ 内:ヨコナガ, ハク(9cm/cm), オサエ, ナガ	やや密	良	10YR6/4	底部	外周ス付着 観察番号14
17	604-01	弥生土器	広口瓶	M29	SJ601 No.1, 2, 3, 4	14.6	32.0	5.5	不明	外:ハク(2~3cm/cm), オサエ (2~3cm/cm), ナガ	粗	良	淡黄緑 7.5YR8/3	口縁部 8/12	外周ス付着 観察番号14

第31表 第3次 出土遺物観察表(2)

発掘 番号	系図番号	種類	型類等	グリッド	出土場所		容量(㎤)	底径	調査技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					出土層位	口径								
18	603-01	弥生土器	甕	K28	S2601 No.1	18.2	23.9 以上	6.6	外:ヨコナゲ、ヘラ(6本/cm)、 クヌギ、オサエ 内:ヨコナゲ、オサエ	粗	良	明赤褐色 S5R5/6	口縁部 2/12	外堀スス付着 内堀コダ(一部灰化) 観察番号13
19	603-02	弥生土器	高杯	K28	S2601 No.1	22.4	14.7 以上	不明	外: 胎土不明(各2ヶ所(1層×3)) 内: ヨコナゲ、ヘラミガキ	やや密	良	明褐色 7.5BR5/6	3/12	観察番号12
20	605-03	弥生土器	甕	K30	S2603	10.4	4.2 以上	不明	外: ヨコナゲ、胎土不明 内: ヨコナゲ、胎土不明	粗	良	にぶい黄褐色 10R7/4	口縁部 3/12	観察番号15
21	629-04	弥生土器	甕小瓶	K36	S2609	不明	2.5 以上	5.2	外: ナゲ、オサエ	密	良	外: 暗赤NS/ 内: にぶい黄褐色 10R7/3	底部	観察番号18
22	604-02	土師器	胴形高杯	K28 K29	S2610 S2612	不明	8.0 以上	不明	外: 調査不明、ヘラミガキ 内: 一部ヘラミガキ、ナゲ (磨料のため調査不明)	やや粗	良	外: にぶい黄褐色 10R7/3	3/12	正赤土師器 底面3箇所
23	605-04	弥生土器	大口甕	K27	S2613	15.4	3.5 以上	不明	外: 羽状刺突文、ハケ(9本/cm) 内: 羽状刺突文、ハケ	密	良	暗褐色 5BR6/8	口縁部 2/12	観察番号17
24	605-02	土師器	台付鉢	K28 K29	S2613 S2610	9.9	10.2	台径 7.0	外: 羽状刺突文、ハケ、ナゲ、ナゲ 内: ナゲのちへらミガキ、ナゲ	密	良	にぶい黄褐色 7.5BR7/3	口縁部 4/12	正赤土師器 観察番号18
25	605-01	土師器	甕	K36	S2621	不明	15.0 以上	6.2	外: ナゲ、クヌギ、オサエ 内: ナゲ、工員寄り黄	やや粗	良	暗褐色 7.5BR6/6	5/12	正赤土師器 観察番号16
26	602-05	土師器	杯	K32	S2602 3層	10.6	2.8 以上	-	外: ヨコナゲ、ナゲ 内: ヨコナゲ、ナゲ	密	良	灰白 10R8/2	口縁部 2/12	観察番号19
27	602-01	須恵器	杯	K34	S2605 No.1	11.2	3.8	-	外: 胎土ナゲ、ヨコナゲ、 ヘラ切り後不調査 内: ヨコナゲ、一方向ナゲ	やや粗	良	灰 NS/ NS/	灰白粗面 底面 口縁部 4/12	観察番号22
28	602-03	須恵器	杯身	K34 K34	S2605 1層 S2605 No.2, No.3	9.6	3.1	-	外: 胎土ナゲ、不調査 内: 胎土ナゲ、ナゲ	密	良	灰 NS/ NS/	2/3(口縁 部4/12)	観察番号23
29	602-02	須恵器	杯身	035	S2605 3層 No.1	8.1	3.4	-	外: 胎土ナゲ、胎土ナゲ、 ヘラ切り後不調査 内: 胎土ナゲ、一方向ナゲ	やや粗	良	灰白 10R7/1	ほぼ完全 (口縁部 9/12)	観察番号24
30	602-04	土製品	土埴	035	S2605 3層 No.2	底径 3.5	幅 3.0	高さ 3.0	全体的に顆粒	密	良	にぶい黄褐色 7.5BR/4	完全	孔径0.6mm 観察番号25
31	601-01	土師器	杯	K28	S2404	10.2	3.8 以上	-	外: ヨコナゲ、ナゲ、粘土継ぎ合わせ 内: ヨコナゲ、ナゲ	やや粗	良	暗褐色 5BR7/6	口縁部 3/12	観察番号20
32	601-02	土師器	甕	K27	S2402	不明	1.9 以上	-	外: ヨコナゲ、ナゲ(5~7本/cm) 内: ヨコナゲ、オサエ	やや粗	良	にぶい黄褐色 10R7/2	口縁部 小片	観察番号12
33	601-03	土師器	小皿	032	S2406	不明	1.6 以上	-	外: ヨコナゲ、ナゲ、オサエ 内: ヨコナゲ、ナゲ	密	良	灰白 NS/	口縁部 小片	観察番号21
34	612-02	弥生土器	甕	K30	6層包	10.4	5.9 以上	不明	外: ヨコナゲ、ハケ(6~7本/cm) 内: ナゲ、オサエ	粗	良	にぶい黄褐色 7.5BR5/4	口縁部 2/12	外堀スス付着
35	612-01 or土師器	弥生土器 or土師器	甕	034	6層包	不明	2.4 以上	7.2	外: ハケのちへらミガキ 内: ハケ(5~6本/cm)、工具痕	やや粗	良	明赤褐色 5BR5/6	底部	底面砂粒密
36	612-03	弥生土器	高杯	N31	6層包	16.8	3.0 以上	不明	外: ヨコナゲ、ヘラミガキ 内: ヨコナゲ、ヘラミガキ	密	良	にぶい黄褐色 7.5BR7/4	口縁部 1/12	





第33表 第3次 出土遺物観察表(4)

発掘 番号	発掘番号	種類	器種等	グリップ	出土遺物 出土単位		寸法 (cm)		観察技法の特徴	粘土	焼成	色調	残存	備考
					口徑	器高	底径	底径						
56	619-04	土師器	甕	K35	包	19.5	21.3	—	外:ヨコナゲ, ナゲ, オサニ, ケズリ 内:ヨコナゲ, ナゲ	やや粗	灰白 10P88/1	3/5 (口縁部 7/12)	外底スス付着 内底コガ付着	
57	618-02	灰輪陶器	碗	034	包	不明	1.7 以上	高台径 7.8	外:船付ナゲ, 糸切痕ナゲ 内:ロクロナゲ	密	灰白 2.5P82/2	底部 2/12		
58	618-01	陶器	山菜碗	K38	包	不明	2.3 以上	高台径 9.2	外:船付ナゲ, 船付ナゲ, 糸切痕, 糸切痕 内:ロクロナゲ	やや密	灰白 5P71/1	底部 5/12	黒炭産	
59	618-06	陶器	山菜碗	K35	包	16.7	4.9 以上	不明	外:ロクロナゲ 内:ロクロナゲ	やや密	灰白 2.5P71/1	口縁部 2/12	黒炭産	
60	618-10	陶器	加工円盤	J31	包	破	2.1	横 2.0	打欠き	やや密	黒炭	不明	山菜碗高台部打ち欠き	
61	618-08	土製品	土埴	K27	包	長さ 2.6以上	径 1.2	長さ 2.88	ナゲ	密	灰白 10P88/1	1/2	黒炭あり 孔径0.3cm	
62	618-09	土製品	土埴	K35	包	長さ 3.5	径 3.6	長さ 45.6g	ナゲ	粗	に5い黒炭 10P86/3	ほぼ完全	孔径0.4cm	
63	620-01	石製品	石鏝 糸製品小	K26	盤	長さ 2.4	幅 0.9	長さ 1.18	—	—	—	—	材質:サヌカイト 細部の調整が部分的で、 多くは削り面のままである	
64	621-04	須恵器	杯	—	鉢土	不明	不明	不明	外:ロクロケズリ, ロクロナゲ 内:ロクロナゲ, ナゲ	密	灰白 2.5P71/1	—	側面の一部に打ち欠きあり	
65	621-03	土師器	土埴	—	鉢土	3.2	2.0	—	外:ヨコナゲ, ナゲ 内:ヨコナゲ, ナゲ	密	に5い黒 2.5P86/4	ほぼ完全	丁寧なつくりだが、下半部 に粘土埋戻り痕が残る。	
66	621-02	土製品	土埴	—	鉢土	長さ 3.0以上	幅 2.18	長さ 0.9	ナゲ	密	黒炭 10P88/3	3/5	孔径0.4cm	
67	621-01	灰輪陶器	碗	—	鉢土	不明	2.6以上	高台径 7.0	外:ロクロナゲ, 船付ナゲ, 糸切痕 内:ロクロナゲ, ナゲ, 黒炭産	密	灰白 2.5P71/1	底径1/12	内面に使用による磨耗 側面の一部に打ち欠きあり	

## V 自然科学分析

### 1 科学分析の目的

舞出北遺跡では、発掘調査関連資料の科学分析をバリノ・サーヴェイ株式会社および株式会社九州テクノリサーチに委託、実施した。

第1・2次調査（下層）では、調査の最終段階で遺跡の形成過程を確認するため断り割り調査を行った。遺跡の形成過程の把握には層序の確認だけでなく、主要な土層の年代を明らかにすることでより明確なデータを得るために、年代測定を行った。

また、古墳S X 3 0 1周溝から赤色顔料の入った須恵器甕が出土した。この甕は体部に焼成後穿孔が認められ、穿孔部を上にした横位で確認された。甕の上部には円筒埴輪片で蓋をした状況であった。このような出土状況から意図的に置いたもので古墳祭祀に関わる所作の一部と推定される。古墳祭祀を解明する一手段として、甕内部の赤色顔料の同定を行った。

さらに、奈良時代の遺構面調査時には鉄滓やフイゴの羽口などが一定量確認された。県内では出土鉄滓等の金属学的な調査の事例が少なく、鉄生産の実態に関して不明な点が多い。本遺跡の鉄（器）生産関連遺物の調査で、鉄（器）生産のどの段階で生じた滓なのか、鉄素材はどこから得たのかなどの情報を把握し、奈良時代の本遺跡の様相を明らかにするために、金属学的調査を行った。

第3次調査では、下層断り割り調査によって弥生時代後期の方形周溝墓及び弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての水田状遺構を確認した。当該期の古環境の把握をするために花粉・植物珪酸体分析を、また水田状遺構の形成・埋没過程を把握するために軟X線写真観察も行った。

本章は委託先から提出された報告を基に、部分的に編集者が加筆・修正を行っている。また、各分析結果をひとつの遺跡の結果としてまとめるために、一報告を分解して並べ換えを行った。その際、上層の調査に関わる分析結果については既刊の上層報告書に掲載したため、本書では削除している。なお、

分析に関する事実関係には一切手を加えていないことを明記する。

各報告書を分解してしまうため、既報告分も含め、報告者をまとめて以下に示す。

[平成 13 年度]

- ・土器付着物の由来（上層報告書にて掲載）  
（バリノ・サーヴェイ株式会社）
- ・須恵器甕内の赤色物質の由来  
（バリノ・サーヴェイ株式会社）
- ・鍛冶関連遺物の金属学的調査  
大澤正己・鈴木瑞穂  
（九州テクノリサーチ・TACセンター）

[平成 15 年度]

- ・放射性炭素年代測定  
（バリノ・サーヴェイ株式会社）
- ・骨同定（上層報告書にて掲載）  
金子浩昌（バリノ・サーヴェイ株式会社）

[平成 16 年度]

- ・古環境分析  
辻 康男・辻本裕也・馬場健司・田中義文  
（バリノ・サーヴェイ株式会社）

### 2 放射性炭素年代測定

#### a はじめに

舞出北遺跡は、三重県松阪市舞出町（旧一志郡三雲町舞出）に所在し、雲出川下流域右岸の自然堤防上（標高約 5.5m）に所在する。発掘調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期の周溝墓・土器棺、古墳時代の墳丘、奈良時代の掘立柱建物跡・区画溝などが検出されている。

そこで、今回は、堆積物の年代観について情報を得るために放射性炭素年代測定を実施した。

#### b 試料

試料は、舞出北遺跡で採取された有機質土壌 5 点（No. 1～No. 5）である（採取地点は図 1 を参照）。

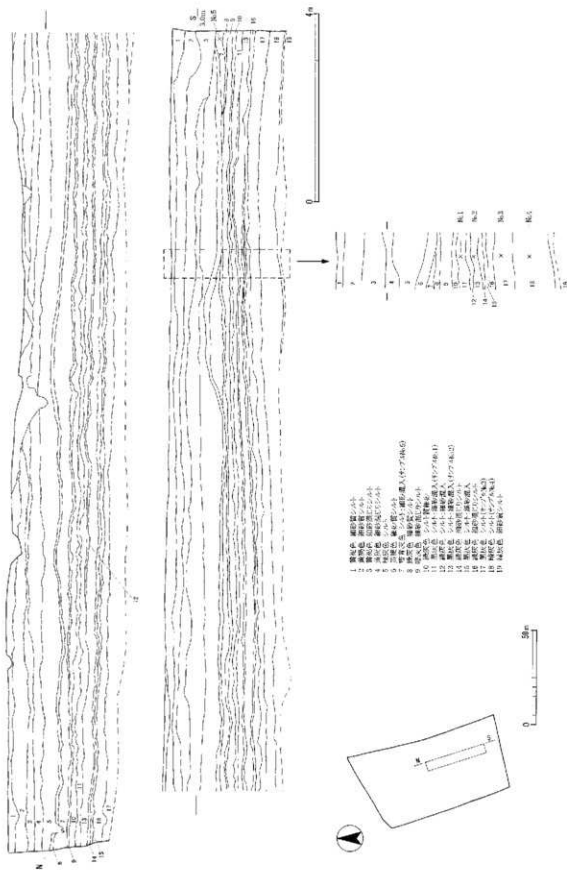


図1 分析試料採取地点 (1:80、1:2,000)

### c 分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

### d 結果および考察

結果を表1に示す。測定を行った5試料は、測定年代で2890-3890BP、補正年代で3030-4050BPの年代値を示す。なお、放射性炭素年代は、測定法自体

が持つ誤差や測定の前提条件である大気中の<sup>14</sup>Cの濃度が過去において一定でなかったことから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。そのため、年輪年代による暦年代既知の年輪の材について放射性炭素年代測定を実施することにより、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている(Stuiver, M. et al 1993など)。今回の測定結果の暦年較正結果を表2に示す。

ところで、近年、縄文時代の各時期の較正暦年代について検討がなされている(谷口 2001)。これを参考にすると、No. 4を除く試料が採取された層は、縄文時代後晩期に比定される可能性がある。これに対して、No. 4が採取された層は、縄文時代中後期頃に比定される可能性がある。少なくとも、No. 4には、他の試料と比べて古い時期の炭素が取り込まれていると考えられる。

表1 放射性炭素年代測定

試料	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1	有機質土壌	3,060±40	-15.60±0.62	2,910±40	IAAA-31262
2	有機質土壌	3,180±40	-14.06±0.79	3,000±40	IAAA-31263
3	有機質土壌	3,550±40	-21.75±0.76	3,500±40	IAAA-31264
4	有機質土壌	4,050±40	-15.72±0.82	3,890±40	IAAA-31265
5	有機質土壌	3,030±40	-16.74±0.80	2,890±30	IAAA-31266

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
		cal BC	cal BC	cal BP	cal BP		
1	3060±40	cal BC 1,390	- cal BC 1,329	cal BP 3,340	- 3,279	0.620	IAAA-31262
		cal BC 1,323	- cal BC 1,293	cal BP 3,273	- 3,243	0.277	
		cal BC 1,276	- cal BC 1,264	cal BP 3,226	- 3,214	0.103	
2	3180±40	cal BC 1,496	- cal BC 1,471	cal BP 3,446	- 3,421	0.299	IAAA-31263
		cal BC 1,462	- cal BC 1,410	cal BP 3,412	- 3,360	0.701	
		cal BC 1,942	- cal BC 1,876	cal BP 3,892	- 3,826	0.650	
3	3550±40	cal BC 1,841	- cal BC 1,813	cal BP 3,791	- 3,763	0.208	IAAA-31264
		cal BC 1,797	- cal BC 1,779	cal BP 3,747	- 3,729	0.142	
		cal BC 2,620	- cal BC 2,609	cal BP 4,570	- 4,559	0.094	
4	4050±40	cal BC 2,598	- cal BC 2,587	cal BP 4,548	- 4,537	0.084	IAAA-31265
		cal BC 2,584	- cal BC 2,552	cal BP 4,534	- 4,502	0.325	
		cal BC 2,540	- cal BC 2,492	cal BP 4,490	- 4,442	0.497	
5	3030±40	cal BC 1,373	- cal BC 1,338	cal BP 3,323	- 3,288	0.283	IAAA-31266
		cal BC 1,319	- cal BC 1,258	cal BP 3,269	- 3,208	0.571	
		cal BC 1,235	- cal BC 1,216	cal BP 3,185	- 3,166	0.146	

計算は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

計算には表に示した丸める前の値を使用。

これら堆積物の年代観については、今後、試料採取層位の層位的な検討を加え、さらに考古学的な発掘調査の所見を含めて、総合的に検討を行う必要がある、その上で改めて検討し直す必要もあると思われる。

#### [引用文献]

Stuiver, M., Long, A., Kra, R., (eds) (1993)

Calibration 1993. Radiocarbon, 35, 1-22.

谷口康浩 2001『縄文時代遺跡の年代』『季刊考古学』第77号 (株)雄山閣 p.17-21

### 3 須恵器壺内の赤色物質の由来

#### a はじめに

舞出北遺跡では、5世紀末から6世紀前半に比定される周溝を伴う古墳が検出されている。なお、この古墳の周溝底部からは体部を欠いた須恵器壺(第32図21)が横位で出土し、さらに、須恵器壺内部からは多量の土壌とともに赤色顔料と思われる物質が確認されている。本分析では、須恵器壺内の赤色物質の由来に関する情報を得るため、X線回折分析を実施した。

#### b 試料

試料は、須恵器壺の内部から採取した赤色物質を含む土壌1点である。

#### c 分析方法

試料を105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉砕した試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、X線回折測定試料とした。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した(足立1980、日本粘土学会1987)。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐、未公表)により検索した。

装置:島津制作所製XD-3A

Target: Cu (K $\alpha$ )

Filter: Ni

Voltage: 30kVp

Current: 30mA

Count Full Scale: 5,000C/S

Time Constant: 1.0sec

Scanning Speed: 2°/min

Chart Speed: 2cm/min

Divergency: 1°

Receiving Slit: 0.3mm

Scanning Range: 5~45°

#### d 結果

結果を図2に示す。須恵器壺内の土壌試料におい

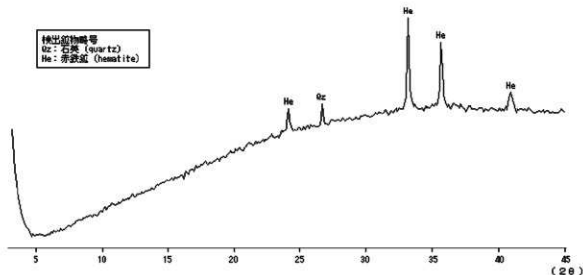


図2 須恵器壺内赤色物質のX線回折図

て検出された鉱物は石英（quartz）、赤鉄鉱（hematite）の2鉱物である。なお、約20°からバックグラウンドの上昇が見られる。

## e 考察

分析の結果、約20°からバックグラウンドの上昇が見られることから、須恵器甕内の土壌には比較的多くの鉄の存在が示唆される。検出鉱物において赤色を呈する鉱物は、赤鉄鉱（hematite）が代表的である。他に検出された石英（quartz）は、岩石や土壌などに一般的に認められる鉱物である。おそらく、須恵器甕内に混入した土壌に由来する鉱物と推定される。したがって、土壌中の赤色物質は、赤鉄鉱（hematite）と考えられ、いわゆるベンガラと呼ばれる顔料と推察される。

## [引用文献]

足立吟也 1980「6章 粉末X線回折法 機器分析のびき3」p.64-76, 化学同人

日本粘土学会編 1987「粘土ハンドブック 第二版」p.1289, 技報堂出版

## 4 鍛冶関連遺物の金属学的調査

### 概要

舞出北遺跡から出土した8世紀前半に比定される

鍛冶関連遺物（椀形鍛冶滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物、鉄製品）を調査して次の点が明らかになった。鍛冶作業は鉱石系荒鉄の不純物除去及び成分調整の精錬鍛冶から高純度鉄素材の沸し鍛接の鍛錬鍛冶による鉄器製作までの一連工程が想定された。ただし、鍛冶作業の主体は鍛錬鍛冶であって精錬鍛冶は僅かな作業量である。

### a はじめに

舞出北遺跡は三重県松阪市舞出町（旧一志郡三雲町舞出）に所在する、弥生時代から中世にかけての遺構が確認された複合遺跡である。このうち、8世紀前半代の溝で区画された掘立柱建物跡に伴い、羽口や鉄滓等が出土したため、該期の鉄器生産の実態を検討する目的から金属学的調査を実施する運びとなった。

### b 調査方法

#### b-1 供試材

表3に示す。鍛冶関連遺物計18点の調査を行った。

#### b-2 調査項目

##### (ア) 肉眼観察

遺物の肉眼観察による所見である。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

表3 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	地区	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目							備考		
						大きさ (mm)	重量 (g)	メタル度	マクロ 組織	顕微鏡 組織	ヒッホース 断面硬度	X線 回折	EPMA 分析	化学 分析		加付 硬度	
MID-1	舞出北	M15	上層包倉庫	鍛冶滓片	8世紀半	28×22	340	GL		○							
MID-2	舞出北	M11	下層包倉庫	椀形鍛冶滓	※	48×47	560	GL		○				○			
MID-3	舞出北	L9	※	椀形鍛冶滓	※	9.9×9	3490	GL		○				○			
MID-4	舞出北	L7	※	椀形鍛冶滓	※	4.5×3.2	360	GL		○				○			
MID-5	舞出北	L9	※	鍛冶滓片	※	2.1×1.7	10	GL		○							
MID-6	舞出北	L9	※	鍛冶滓片	※	1.5×1.4	40	GL		○							
MID-7	舞出北	K7	※	椀形鍛冶滓	※	3.4×4	500	GL		○			○	○			
MID-8	舞出北	K7	※	椀形鍛冶滓	※	3.4×3	200	GL		○							
MID-9	舞出北	M10	※	椀形鍛冶滓	※	9.3×8	2220	GL		○				○			
MID-10	舞出北	M10	※	椀形鍛冶滓	※	4.9×4.6	590	GL		○							
MID-11	舞出北	O10	※	含鉄鉄滓	※	2.7×2	100	鉄化[Δ]		○							
MID-12	舞出北	N11	※	椀形鍛冶滓	※	2.6×2.1	80	GL		○				○			
MID-13	舞出北	M10	※	鉄塊系遺物	※	2.7×2.2	120	鉄化[Δ]		○				○			
MID-14	舞出北	M10	下層包1層	椀形鍛冶滓	※	6×4.3	780	GL		○	○			○			
MID-15	舞出北	M10	※	鍛冶滓片	※	2.3×1.8	40	鉄化[Δ]		○							※付録2の7-鉄塊か??
MID-16	舞出北	M8	下層包2層	椀形鍛冶滓(含鉄)	※	4.8×3.7	890	GL		○				○			
MID-17	舞出北	O11	※	椀形鍛冶滓	※	5.9×5.4	1020	GL		○				○			
MID-18	舞出北	N7	SE40上層南西	椀形鍛冶滓	※	3.5×3.1	110	GL		○							

(※17点調査)

### (イ) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

### (ウ) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3 $\mu$ と1 $\mu$ で仕上げた光学顕微鏡観察を行った。

### (エ) ビッカース断面硬度

鉄質の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡を用いた。

### (オ) EPMA調査

分析の原理は、真空中で試料面 (顕微鏡試料併用) に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

### (カ) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O)、酸化ナトリウム (Na<sub>2</sub>O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>)、酸化クロム (Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission

Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

## c 調査結果

### MID-1 : 鍛冶滓片 (遺物番号 529)

(ア) 肉眼観察 小型 (24 g) の緻密な鍛冶滓片である。表面はやや風化気味で、細かい気孔が散在する。ごく一部を除き全面破面の可能性が高い。色調は黒灰色で針状の光沢があり、鉱物の巨晶化が窺える。

(イ) 顕微鏡組織 図版 39①～③に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wustite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>) が素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。なおヴスタイト粒内に微細な晶出物は確認されない。該品は、鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(ウ) ビッカース断面硬度 図版 39①の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕である。硬度値は510Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値<sup>1)</sup>を僅かに上回る値となったが、測定時の亀裂等による誤差の可能性が高く、ヴスタイトと同定される。

### MID-2 : 梔形鍛冶滓 (遺物番号 530)

(ア) 肉眼観察 鍛冶炉の炉底に堆積形成された梔形鍛冶滓の破片である。平面は扁平な扇形を呈する。上下面と側面1面は生きているが、残る側面2面は破面である。上下面はともに細かい凹凸が著しい。表面は風化気味で色調は黒灰色を呈する。特に下面側で風化が進んでいる。

(イ) 顕微鏡組織 図版 39④～⑥に示す。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。更に微細な金属鉄粒の散在が目につく。ヴスタイト粒内に微細な晶出物はない。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(ウ) ビッカース断面硬度 図版 39④の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕で、硬度値は455Hvであった。ヴスタイトと同定される。

(エ) 化学組成分析 表4に示す。鉄分の多い成分系である。全鉄分 (Total Fe) 61.28%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.13%、酸化第一鉄 (FeO) 63.50%、酸化第二鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 16.86%の割合であった。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) は



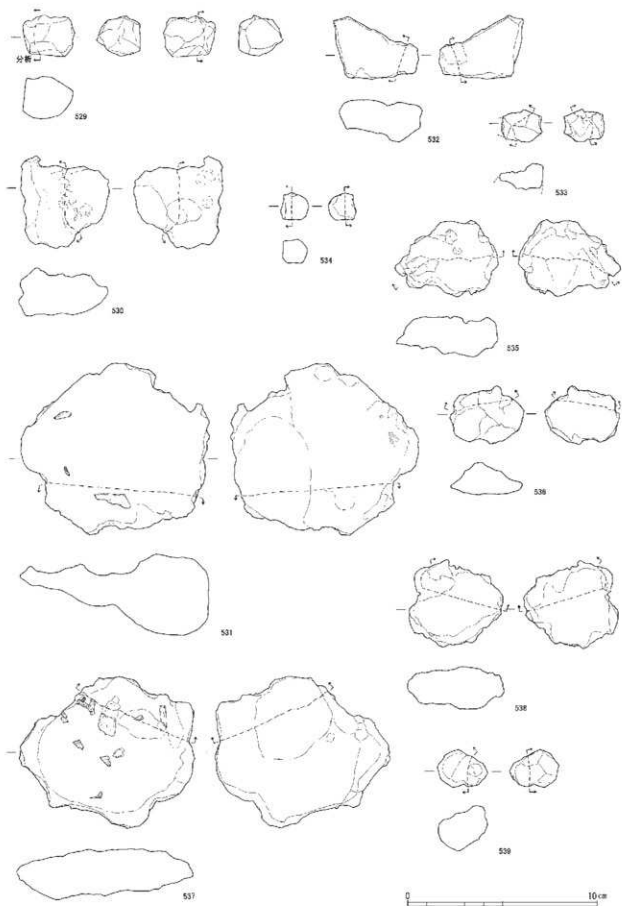


図3 鍛冶関連遺物実測図(1) (1:2)

17.17%と低めで、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は1.30%である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.21%、バナジウム(V)が<0.01%、酸化マンガン(MnO)も0.04%といずれも低値であった。また銅(Cu)は0.02%、五酸化燐(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)は0.21%である。鉄分主体で、脈石成分の少ない成分傾向から鍛錬鍛冶滓に推定される。

**MID-3： 腕形鍛冶滓 (遺物番号 531)**

(ア) 肉眼観察 比較的大型(350g弱)の腕形鍛冶滓である。側面に小さな破面が2箇所ほどみられるが、ほぼ完形に近い。断面形を見ると羽口側の肥厚が著しい。色調は黒灰色である。表面は上下面とも10~15mmほどの長さの木炭痕が残る。また表面に固着する黄褐色の酸化土砂中には、黒灰色の微細な鍛造刮片が複数混在する。

(イ) 顕微鏡組織 図版39㉗に示す。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。ヴスタイト粒内に微細な晶出物はみられない。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(ウ) ピッカース断面硬度 図版39㉗の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕で、硬度値は481Hvであった。ヴスタイトに同定される。

(エ) 化学組成分析 表4に示す。全鉄分(Total Fe)56.33%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.09%、酸化第一鉄(FeO)52.30%、酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)22.29%の割合であった。ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は21.76%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は2.37%である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.26%、バナジウム(V)が<0.01%、酸化マンガン(MnO)0.07%といずれも低値であった。また銅(Cu)は0.01%、五酸化燐(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)0.36%である。鉄分が高く、脈石成分の低減した組成から鍛錬鍛冶滓に分類される。

**MID-4： 腕形鍛冶滓 (遺物番号 532)**

(ア) 肉眼観察 やや偏平な腕形鍛冶滓の小破片(38g)である。上下面は生きているが、側面はごく一部を除き3面が破面である。色調は黒灰色で、破面には僅かに光沢がある。表面・破面ともに気孔はごく僅かで緻密な滓である。

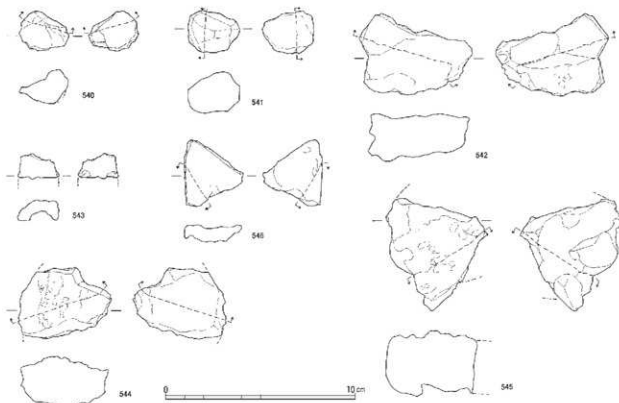


図4 鍛冶関連遺物実測図(2)(1:2)



結晶はヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) とマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) との固溶体<sup>2)</sup>と推定される。さらに微細な白色粒状結晶ヴスタイト、発達した淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが晶出する。なお鉱物組成に関してはEPMA調査の項で詳述する。

(ウ)ピッカース断面硬度 図版41①の多角形結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕で、硬度値は782Hvであった。

(エ)EPMA調査 図版47の1段目に滓部鉱物相の反射電子像 (COMP) を示す。1の番号をつけた淡灰色盤状結晶の定量分析値は67.5%FeO-30.8%SiO<sub>2</sub>-2.5%MgOであった。ファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) に同定される。2の番号をつけた白色で細長く伸びた結晶の定量分析値は98.2%FeOであった。さらに3の番号をつけた粒状結晶の定量分析値は96.6%FeOである。ともにヴスタイト (Wüstite: FeO) に同定される。

一方、4の番号をつけた多角形結晶の外周部の定量分析値は70.2%FeO-24.2%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1.8%TiO<sub>2</sub>であった。これに対して5の番号をつけた多角形結晶の内側部分の定量分析値は75.7%FeO-15.9%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1.7%TiO<sub>2</sub>である。この結果から、ヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) とマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) との固溶体に同定される。なおTiを微量固溶する。また暗色部はAlに富み、明色部がFeに富む傾向をもつ。

6の番号をつけた素地のガラス滓部分の定量分析値は40.4%SiO<sub>2</sub>-10.1%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-13.4%CaO-3.3%K<sub>2</sub>O-2.8%Na<sub>2</sub>O-29.9%FeO-1.3%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>であった。珪酸塩に微小ファイヤライトの析出があらう。そして7の番号をつけたファイヤライトの周囲に晶出する暗色結晶の定量分析値は65.6%SiO<sub>2</sub>-25.6%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-14.4%K<sub>2</sub>Oであった。正長石 (Orthoclase:  $\text{K}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ ) と推定される<sup>3)</sup>。

(オ)化学組成分析 表4に示す。全鉄分 (Total Fe) 33.29%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.08%、酸化第一鉄 (FeO) 32.25%、酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 11.64%の割合であった。また鉱物組成を反映して、二酸化珪素 (SiO<sub>2</sub>) が37.19%、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が9.43%と高値傾向を示した。製鉄原料の脈石に由

来する二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.51%、バナジウム (V) が0.01%と低値であるが、酸化マンガン (MnO) は0.27%と比較的高値であった。また銅 (Cu) はく0.01%、五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は0.40%であった。

大きく発達したヘーシナイトとマグネタイトの固溶体が晶出していることや、他試料と比較して脈石成分の高値傾向が確認されたことから、当試料は50gと小型ながら鉱石 (磁鉄鉱) 系で、鉄塊からの不純物除去の精錬鍛冶滓の可能性が高い。当遺跡内には鍛冶原料として鉱石原料の小鉄塊の搬入が考えられる。

#### MID-8: 楕形鍛冶滓 (遺物番号536)

(ア)肉眼観察 小型 (20g) でほぼ完形の楕形鍛冶滓である。平面は楕円状で、やや扁平な形状を呈する。上面は平坦で、下面は細かい木炭痕による凹凸が残る。色調は灰黒色で、破面では光沢が強い。

(イ)顕微鏡組織 図版41⑥~⑧に示す。素地の暗黒色ガラス質中に白色粒状結晶ヴスタイトが晶出する。該品は高温生成物でファイヤライトが微細化して結晶形態ではみられない。また⑦の中央は錆化鉄粒で、過共析組織痕跡が残存する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(ウ)ピッカース断面硬度 図版41⑧の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕である。硬度値は443Hvであった。文献硬度値の下限を若干割るがヴスタイトに同定される。

#### MID-9: 楕形鍛冶滓 (遺物番号537)

(ア)肉眼観察 比較的大型 (222g) の楕形鍛冶滓である。扁平でほぼ完形に近い。全面に細かい木炭痕による凹凸が残る。滓の地の色調は灰黒色。上面端部に1個所錆部があり、ごく小さな鉄部が存在した可能性を残す。

(イ)顕微鏡組織 図版42①に示す。暗黒色ガラス質中に白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが晶出する。なおヴスタイト粒内には微細な晶出物は確認されず、鍛錬鍛冶滓の晶癖であった。

(ウ)ピッカース断面硬度 図版42①の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕で、硬度値は495Hvであった。ヴスタイトに同定される。

(エ)化学組成分析 表4に示す。前述したMID

1、2、3に近似した成分系である。全鉄分(Total Fe) 59.82%に対して、金属鉄(Metallc Fe) 0.13%、酸化第一鉄(FeO) 56.54%、酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 22.51%の割合であった。ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は17.68%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は3.51%である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.20%、バナジウム(V) 0.01%、酸化マンガン(MnO) 0.06%であった。また銅(Cu) 0.01%、五酸化燐(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)は0.32%である。鉄分高く、脈石成分の低減した組成から鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### MID-10：梃形鍛冶滓(遺物番号538)

(ア)肉眼観察 やや偏平で、小型(59g)の梃形鍛冶滓である。向かい合う側面2面が破面である。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われる。地の色調は暗灰色である。全面に木炭痕による凹凸が著しい。

(イ)顕微鏡組織 図版42②に示す。写真左側は錆化鉄部である。金属組織は残存していないので、炭素含有量は不明である。当試料では他にも不定形の小さな鉄部が散在する。また写真右側は滓部である。暗黒色ガラス質中に白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが晶出する。なお錆化鉄の表面が酸化されて、ヴスタイト結晶が晶出する状況が確認できる。当鉄滓は風化が著しくヴスタイト結晶の硬度は304Hvを呈しているが、これは割愛した。

(ウ)化学組成分析 表4に示す。全鉄分(Total Fe) 63.87%に対して、金属鉄(Metallc Fe) 0.13%、酸化第一鉄(FeO) 47.34%、錆化鉄を多く含む酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 38.52%の割合であった。ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は9.45%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は0.58%である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.08%、バナジウム(V)が<0.01%、酸化マンガン(MnO)は0.07%などいずれも非常に低値となる。また銅(Cu)は視鉄元素で錆化鉄に含まれて若干高め0.02%、五酸化燐(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)は0.37%であった。

鉄分高く、錆化鉄の高めが影響してはいるが脈石成分の低減した値から、鉍石系鉄素材の鍛錬鍛冶滓に分類される。当遺跡出土の他の鍛錬鍛冶滓と比較すると、一見脈石成分の低減傾向が顕著で異なる鍛

冶原料での派生物の可能性も指摘できそうである。一方、鍛冶原料鉄は廢鉄器の再用鍛冶も看過できぬであろう。

#### MID-11：含鉄鉄滓(遺物番号539)

(ア)肉眼観察 ごく小型(10g)で塊状の含鉄鉄滓である。表面には黄褐色の酸化土砂が付着する。滓部は灰褐色で、細かい気孔が僅かに散在する。表面から風化が進んでいる。供試材を採取した切断面では、やや偏平な楕円状の錆化鉄が確認された。錆化が進み、内部が大きく空洞化する。また一部表層にまとまった滓部が付着する。鍛冶原料鉄の一種であろうか。

(イ)顕微鏡組織 図版42③～⑦に示す。③は表層に付着する滓部である。白色粒状結晶ヴスタイトが暗黒色ガラス質中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

また④～⑦は錆化鉄部である。④・⑤は錆化鉄の内部で、パーライト素地に網目状のセメントタイトが析出する過共析組織痕跡が残る。⑥・⑦は錆化鉄の表層側で、フェライト素地に層状のパーライトが少量析出する亜共析組織痕跡である。表層側に低炭素域が形成され、鍛冶炉内で加熱された際に酸化・脱炭した現象であろう。

(ウ)ビッカース断面硬度 図版42③の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕で、硬度値は496Hvであった。ヴスタイトに同定される。

#### MID-12：梃形鍛冶滓(遺物番号540)

(ア)肉眼観察 ごく小型(8g)の梃形鍛冶滓片である。上面と側面2面が破面。滓の地は黒灰色である。表面及び破面には、中小の気孔が散在する。

(イ)顕微鏡組織 図版43①～③に示す。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。なおヴスタイト粒内に微細な多角形結晶が析出するのはヘーシナイトである。

(ウ)ビッカース断面硬度 図版43①に白色粒状結晶の硬度測定の結果を示す。硬度値は488Hvであった。ヴスタイトに同定される。

#### MID-13：鉄塊系遺物(遺物番号541)

(ア)肉眼観察 ごく小型(12g)の鉄塊系遺物である。表面には黄褐色の酸化土砂の付着が著しく、

地の観察が困難である。側面は全面破面の可能性が高い。僅かに覗く地は黒褐色の錆色である。重量が軽く、特殊金属探知器での反応もないため、完全に錆化している。供試材を採取した切断面をみると不定形の錆化鉄部からなり、一部表層に滓が固着する。これも鍛冶原料鉄の一種であろうか。

(イ)顕微鏡組織 図版 43④～⑧に示す。④・⑤は試料表面に付着する酸化土砂中の微細遺物である。④は非常に微細な粒状滓<sup>4)</sup>、⑤は付着鍛造剥片<sup>5)</sup>である。微細な鍛冶関連遺物が確認された。両者は赤熱鉄素材の鍛打工程で派生して鍛冶作業の鍛錬鍛冶を裏付ける。

⑥は表層に固着する滓部である。暗褐色ガラス質滓中にごく微細な金属鉄粒が散在する。また柱状の結晶は、苦土かんらん石 ( $Mg_2SiO_4$ ) と鉄かんらん石 ( $Fe_2SiO_4$ ) の間の固溶体で、フェロホルトノライト (Ferrohortonolite)<sup>6)</sup> と推定される。鉱物組成に関しては EPMA 調査の項で詳述する。なお、こうしたガラス質滓主体の付着滓はよく鋳造遺跡で確認される。このため当試料も鋳造系鉄塊の可能性なしは製鉄炉の炉壁に接して生じた小鉄塊の可能性も配慮すべきであろう。

⑦・⑧は錆化鉄部の金属組織痕跡を示す。⑦は片状黒鉛の痕跡からねずみ銻鉄組織、⑧はパーライトとレデブライトの痕跡から亜共晶組成白銻鉄の組織痕跡が確認された。前者は凝固冷却速度が遅く、後者は速いところの組織であって銻鉄の小鉄塊である。

(ウ)EPMA調査 図版 47 の 2 段目に滓部鉱物相の反射電子像 (COMP) を示す。13 の番号をつけた結晶の定量分析値は 46.0% FeO - 17.9% MgO - 35.4%  $SiO_2$  であった。かんらん石類の鉱物で、苦土かんらん石と鉄かんらん石の固溶体フェロホルトノライト (Ferrohortonolite) に同定される。また 14 の番号をつけた素地のガラス質部分の定量分析値は 52.4%  $SiO_2$  - 16.8%  $Al_2O_3$  - 3.8% CaO - 1.6% MgO - 9.4%  $K_2O$  - 2.7%  $Na_2O$  - 15.5% FeO であった。珪酸塩に微細ファイヤライトの析出物であろう。

更に 15 の番号をつけた微細金属粒の定量分析値は 133.2% FeO であった。酸化物定量での測定値のため 100% を超える数値となっているが金属鉄 (Metallic Fe) である。なお 4.5%  $SiO_2$  - 1.3%  $Al_2O_3$

- 1.0%  $K_2O$  は周囲のガラス質部分を反映した値と推定される。当鉄塊表皮スラグからは砂鉄特有元素の Ti、V、Zr の検出がなく、始発原料は鉱石系が想定される。

#### MID-14：椀形鍛冶滓 (遺物番号 542)

(ア)肉眼観察 中型 (78g) の椀形鍛冶滓片である。上下面と側面 1 面が生きているが、他の側面 3 面は破面である。また厚みに僅かな片寄りがある。滓の色調は灰黒色で、破面では局部的に強い光沢を持つ。また破面には不定形の気孔が多数散在するが、重量感のある滓である。

(イ)顕微鏡組織 図版 44①～③に示す。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ぞれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質に晶出する。

(ウ)ピッカース断面硬度 図版 44①の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその頂端である。硬度値は 474Hv であった。ヴスタイトに同定される。

(エ)化学組成分析 表 4 に示す。前述してきた MID-7、MID-10 以外の滓に近似した成分である。全鉄分 (Total Fe) 59.54% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.10%、酸化第一鉄 (FeO) 63.00%、酸化第二鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 14.97% の割合であった。ガラス質成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) 19.97% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 1.55% である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は 0.28%、バナジウム (V) が 0.01%、酸化マンガン (MnO) が 0.06% といずれも低値であった。また銅 (Cu) は 0.01%、五酸化燐 ( $P_2O_5$ ) が 0.22% である。鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### MID-15：錆化鉄片 (遺物番号 543)

(ア)肉眼観察 小型 (4.0g) の錆化鉄片である。向かい合う側面 2 面は破面で、残る側面 2 面は刃線と考えられる。断面形は中央部で 3.5mm 程の厚みを持つ。中央に錆を持つ、鉄鏝等の破片の可能性を提示しておく。

(イ)マクロ組織 図版 44④に示す。断面形から両端が刃線で、上面中央に錆を持つ鉄器破片と判断される。全体が完全に錆化しており、金属組織の痕跡も残存していない。

(ウ)顕微鏡組織 図版 44⑤～⑧に示す。⑤・⑥は鉄器先端部である。点列状に並ぶ黒色部は非金属

介在物が剥落した跡と推定される。その分布や、横方向に伸びた形状に鍛打鍛練の痕跡を留めている。

⑦・⑧は内部である。金属組織痕跡は不明瞭である。

(工) EPMA調査 図版 47 の 3 段目に介在物の反射電子像 (COMP) を示す。16 の番号をつけた粒状結晶の定量分析値は 99.3% FeO であった。介在物組成はヴスタイト (Wüstite: FeO) 結晶である。低温還元直接製鋼法による塊煉鉄が素材である。

また 17 の箇所は暗黒色ガラス質を想定していたが、定量分析値が総計 71.0% と 100% を大きく割り込む値となった。これは介在物が剥落した凹部を測定したためである。FeO は周囲の錆化鉄を、また SiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> はガラス質の残渣を反映した数値である。砂鉄特有元素の Ti、V、Zr などの検出はない。鉱石原料の鉄素材が想定される。

#### MID-16: 梟形鍛冶滓 (遺物番号 544)

(ア) 肉眼観察 中型 (69g) の梟形鍛冶滓である。上下面と向かい合う側面 2 面が生きているが、残る側面 4 面が破面である。上面は中央がやや膨らむ形状で、表面には微細な凹凸が顕著である。下面には全体に長さ 1 cm ほどの木炭痕が残る。滓の色調は灰黒色で、破面では強い光沢を持つ。また破面には不定形の気孔が僅かに見られるが、緻密で重量感のある滓である。

(イ) 顕微鏡組織 図版 45①~⑤に示す。①は滓部である。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。②~⑤は滓中に散在する微細な錆化鉄である。②・③はフェライト素地に少量パーライトが析出する亜共析組織痕跡、④・⑤はパーライト素地に針状セメントイトが析出する、過共析組織痕跡が残る。

(ウ) ビッカース断面硬度 図版 45①の白色粒状結晶に硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は 462Hv であった。ヴスタイトに同定される。

(工) 化学組成分析 表 4 に示す。前述 MID-14 に大差ない成分系である。全鉄分 (Total Fe) 57.79% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第一鉄 (FeO) 59.27%、酸化第二鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 16.67% の割合であった。検鏡では錆化鉄が存在したが分析試料側には酸化第二鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) は高くはなくて落下鉄は

偏析をもつ。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は 22.23% で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は 2.27% である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 0.23%、バナジウム (V) が <0.01%、酸化マンガン (MnO) は 0.07% と低値であった。また銅 (Cu) は 0.01%、五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) は 0.26% である。鉄分高く、脈石成分の低減した組成から鍛練鍛冶滓に分類される。

#### MID-17: 梟形鍛冶滓 (遺物番号 545)

(ア) 肉眼観察 平面が扇形を呈する、厚手の梟形鍛冶滓である。側面 2 面が破面。上面は凹凸が顕著で 2 箇所瘤状に突出する箇所がある。また細かい木炭痕も散在する。下面では気孔や細かい木炭痕による凹凸が残る。滓は風化が進んだ部分は灰褐色、進んでいない部分は灰黒色を呈する。破面には不定形の気孔が散在するが、緻密で重量感のある滓である。

(イ) 顕微鏡組織 図版 45⑥~⑧に示す。素地の暗黒色ガラス質中に白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが晶出する。鍛練鍛冶滓の晶癖である。

(ウ) ビッカース断面硬度 図版 45⑥に白色樹枝状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は 498Hv であった。ヴスタイトに同定される。

(工) 化学組成分析 表 4 に示す。全鉄分 (Total Fe) 54.79% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.10%、酸化第一鉄 (FeO) 58.19%、酸化第二鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 13.52% の割合であった。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は 25.25% で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は 1.96% である。製鉄原料の脈石に由来する二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 0.32%、バナジウム (V) が 0.01%、酸化マンガン (MnO) は 0.07% であった。また銅 (Cu) は 0.01%、五酸化燐 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) 0.31% であった。鉄分高く、脈石成分の低減した組成から鍛練鍛冶滓に分類される。

#### MID-18: 梟形鍛冶滓 (遺物番号 546)

(ア) 肉眼観察 平面が三角形を呈する扁平な小型 (11g) の梟形鍛冶滓の破片である。上下面と側面 1 面は生きているが、残る側面 2 面は破面である。上面は平滑で表面がやや風化気味である。また端部に黒色ガラス質の突出部が存在する。このガラス質

部は羽口溶融物と推定される。下面は細かい木炭痕や気孔などによる凹凸がみられる。滓の地は灰色であるが、上面は僅かに紫紅色の箇所もある。破面は上下方向に伸びる強い光沢を持ち、緻密である。

(イ)顕微鏡組織 図版 46①～③に示す。素地の暗黒色ガラス質中に発達した淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが晶出する。

鉱物組成のみの調査のため、どの作業工程での派生物か言及するのは難しい。ただしファイヤライトのみが晶出し、他試料のようなヴスタイトの晶出が全くない。この種の鉱物相は、他遺跡でも時折みかけられる。赤熱鉄素材の酸化防止に塗布する粘土汁の多用で派生する滓の可能性を考えている。小型碗形滓であり精錬系ではなからう。

## d まとめ

舞出北遺跡から出土した、8世紀前半に比定される鍛冶関連遺物を調査した結果、一部に精錬鍛冶はあるものの大半が鍛錬鍛冶である。当遺跡内の主体作業は鉄器製作で沸し鍛接の鍛錬鍛冶作業が行われたと推定される。

(1)出土鉄滓は化学分析の脈石成分の数値から、大きく3グループに分類される。

### ①鉱石系精錬鍛冶滓

MID-7は他の試料より、製鉄原料に由来する脈石成分の高値傾向が顕著で、特にMnOは他の試料より一桁高い数値がでている。鉱物組成をみると、大きく発達したヘーシナイトとマグネタイトの固溶体の晶出が特徴的で、鉱石系精錬鍛冶滓の可能性が高い。

### ②鍛錬鍛冶滓

鉄分高く、脈石成分の低い数値から鍛錬鍛冶滓に分類される試料のうち、MID-2～4・9・16・17はTiO<sub>2</sub>が0.2～0.3%台の数値である。これは始発原料が鉄鉱石か砂鉄か判断するには難しい値である。現状では双方の可能性を念頭に置く必要があるが、鉄塊系遺物(MID-13)や鉄製品(MID-15)から砂鉄特有元素のTi、V、Zrの検出がないので現時点では鉱石系を想定しておきたい。

### ③鍛錬鍛冶滓

MID-10は脈石成分の低減傾向が著しい。何れの成分も小数量二桁の数値である。該品は錆化鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が多い成分系で脈石成分は低減傾向に片寄

表5 出土遺物の調査結果まとめ

符号	遺跡名	地区	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目							所見	
							TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス質	Cr	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub>		Fe <sub>2</sub> S
MD-1	舞出北	M15	上層包金層	鍛冶滓片々	8世紀半	W-F	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛錬鍛冶滓
MD-2	舞出北	M11	下層包金層	鍛錬鍛冶滓	*	W-F, 微小金属塊	61.28	16.96	1.20	0.21	0.01	0.04	17.17	0.02	鍛錬鍛冶滓
MD-3	舞出北	L3	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-F	56.50	20.29	2.37	0.26	0.01	0.07	21.76	0.01	鍛錬鍛冶滓
MD-4	舞出北	L7	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-F, 微小金属塊+晶出+P	59.40	14.20	2.17	0.33	0.02	0.07	19.73	0.01	鍛錬鍛冶滓
MD-5	舞出北	L3	*	鍛冶滓片	*	W-F	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛錬鍛冶滓
MD-6	舞出北	L3	*	鍛冶滓片	*	W-F, 微小金属塊+晶出+P	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛錬鍛冶滓
MD-7	舞出北	K7	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-MnOの鍛錬鍛冶滓	33.29	11.84	3.00	0.51	0.01	0.27	52.71	0.01	鉱石系精錬鍛冶滓の可能性が高い
MD-8	舞出北	K7	*	鍛錬鍛冶滓	*	W, 微小金属塊(1) 磁石遺物(1) 磁石遺物(2) 磁石遺物(3) Fは磁石	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛錬鍛冶滓
MD-9	舞出北	M10	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-F	59.82	22.61	3.61	0.26	0.01	0.06	17.60	0.01	鍛錬鍛冶滓
MD-10	舞出北	M10	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-F, 微小金属塊	63.67	26.52	0.58	0.08	0.01	0.07	9.40	0.02	鍛錬鍛冶滓(鉄塊系再生品か?) 派生物系成分の可能性がある
MD-11	舞出北	O10	*	合金鉄滓	*	深部 W+磁石 錆化鉄部 微小金属塊 微小金属塊	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶系合金鉄滓(鍛錬鍛冶滓系)
MD-12	舞出北	M11	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-F, 微小金属塊+晶出+P	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛錬鍛冶滓
MD-13	舞出北	M10	*	鉄塊系遺物	*	付着土中、微小砂鉄滓、鍛錬鍛冶滓、浮遊、ガラス質、Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 、Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub> 、Fe <sub>2</sub> S、Fe <sub>2</sub> S、片状高品位磁鉄塊	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶系合金鉄滓(2段階に付着派生物系成分の可能性がある)
MD-14	舞出北	M10	下層包金層	鍛錬鍛冶滓	*	W-F	55.54	14.67	1.55	0.26	0.01	0.06	19.67	0.01	鍛錬鍛冶滓
MD-15	舞出北	M10	*	鍛錬鍛冶滓	*	深部 W+磁石 錆化鉄部 微小金属塊 微小金属塊	-	-	-	-	-	-	-	-	深部付着土中、微小砂鉄滓、鍛錬鍛冶滓、浮遊、ガラス質、Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 、Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub> 、Fe <sub>2</sub> S、Fe <sub>2</sub> S、片状高品位磁鉄塊
MD-16	舞出北	M8	下層包金層	鍛錬鍛冶滓(多数)	*	深部 W-F, 微小金属塊+晶出+P 深部 W-F, 微小金属塊+晶出+P	57.76	16.67	2.27	0.21	0.01	0.07	22.23	0.01	鍛錬鍛冶滓
MD-17	舞出北	G11	*	鍛錬鍛冶滓	*	W-F	54.79	13.52	1.96	0.32	0.01	0.07	25.25	0.01	鍛錬鍛冶滓
MD-18	舞出北	N7	5549(上層清灰)	鍛錬鍛冶滓	*	W-F	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛錬鍛冶滓、粘土汁多用の可能性

W: (Waste) FeO, F: (Fayalite) 2FeO・SiO<sub>2</sub>, H: (Hematite) Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, Fe: (Ferrochromite)



る。親鉄元素の銅(Cu)が0.02%と高めと対応する。これは②の鍛錬鍛冶滓と同系の鍛冶原料が用いられた際の派生物であろう。やはり鉱石を始発原料とする鍛冶原料の、産鉄器を鍛錬した際の排出滓の可能性を提示しておきたい。

なお、化学分析を実施していない MID-1・5・6・8・10・12も、ヴスタイト・ファイヤライトの鉱物組成から鍛錬鍛冶滓に分類しておく。

(2) MID-11 含鉄鉄滓、MID-13 鉄塊系遺物の銹化鉄部の大きさをみると、長径で10数mm程のごく小型の鉄塊が鍛冶原料鉄として準備された可能性も考えられる。また前者から亜共析組織・過共析組織の痕跡が、後者から白銹鉄・ねずみ銹鉄の組織痕跡が確認された。様々な炭素含有量の小鉄塊を、製作する鉄器の性質に応じた使い分けが想定される。

(3) MID-13 鉄塊系遺物の試料表面に付着する酸化土砂中に、粒状滓・鍛造剥片などの微細な鍛冶関連遺物が複数確認された。これらからも当遺跡内で一連の鍛打作業が行われたことが裏付けられる。

三重県内では出土鉄滓等の金属学的調査の事例が少なく<sup>7)</sup>、鉄生産の実態については不明な点が多い。今回舞出北遺跡から出土した鍛冶関連遺物のまとまった調査が実施され、遺跡内での鍛冶作業の一端が明らかになった。しかし鍛冶原料の供給先に関しては、周辺地域での調査事例の蓄積を待って、再度詳細に検討すべきだろう。今回の調査では、一部鉄鉱石を始発原料とする鉄塊鍛入の可能性を指摘したが、この時期は滋賀県内琵琶湖周辺で製鉄操業の盛行が、発掘調査等により確認されている<sup>8)</sup>。こうした地域との関連性の有無を含め、今後の研究の進展が望まれる。

#### [註]

- 1) 日刊工業新聞社 1968『焼結鉱組織写真および識別法』  
ヴスタイトは450~500HV、マグネタイトは500~600HV、ファイヤライトは600~700HVの範囲が提示されている。
- 2) 黒田吉益・諏訪兼位 1983『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社

#### 第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル(Spinel Group)

スピネル (Spinel:  $MgAl_2O_4$ ) ヘーシナイト [鉄スピネル] (Hercynite:  $Fe^{2+}Al_2O_4$ )、ウルボスピネル (Ulvo-spinel:  $TiFe_2^{3+}O_4$ )、マグネタイト [磁鉄鉱] (Magnetite:  $Fe^{2+}Fe_2^{3+}O_4$ ) はすべてスピネル [尖晶石] 類 (Spinel group) に分類される鉱物である。スピネル類の化学組成の一般式は  $XY_2O_4$  と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。また、スピネル類は互いに固溶体鉱物をつくる。

#### 3) 前掲註2) 第4章 主要な造岩鉱物 4. 2長石類

長石類はカリ長石 (Or:  $KAlSi_3O_8$ )、曹長石 (Ab:  $NaAlSi_3O_8$ )、灰長石 (An:  $CaAl_2Si_2O_8$ ) の3つの成分が混じりあっているものと考えられる。このうち Or 成分と Ab 成分を結ぶ領域のものをアルカリ長石と呼び、Ab 成分と An を結ぶ領域のものを斜長石と呼ぶ。

正長石 (Orthoclase) は  $Or_{100}Ab_0Or_{70}Ab_{30}$  までの組成範囲を持っている。

#### 4) 粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

#### 5) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる<sup>9)</sup>。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite:  $Fe_2O_3$ )、中間層マグネタイト (Magnetite:  $Fe_3O_4$ )、大部分は内層ヴスタイト (Wüstite:  $FeO$ ) の3層から構成される(次ページ図5参照)。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのは  $Fe-O$  系平衡状態図(次ページ図6参照)から説明される<sup>10)</sup>。

鍛造剥片を王水(塩酸3:硝酸1)で腐食すると、外層ヘマタイト (Hematite:  $Fe_2O_3$ ) は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト (Magnetite:  $Fe_3O_4$ ) は黄

変する。内層のヴスタイト (Wüstite: FeO) は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト (Wüstite: FeO) が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

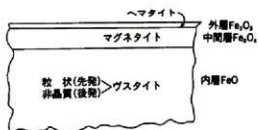


図5 鍛造薄片3層分離型模式図

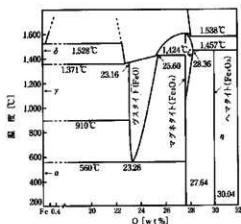


図6 Fe-O系平衡状態図

6) 前掲註2) 第4章 主要な造含鉱物 4. 7

かんらん石類 (Olivine Group)

かんらん石類は  $X_2SiO_4$  で表される。X には  $Mg$ ,  $Fe^{2+}$ ,  $Mn^{2+}$ , Ca などがはいる。この X の位置は 2 価のイオンだけで占められ、Al や  $Fe^{3+}$  のような 3 価の金属イオンはほとんど存在しない。Si の位置を Al が置換することもない。代表的なかんらん石としては、 $Mg_2SiO_4$  (苦土かんらん石),  $Fe_2SiO_4$  (鉄かんらん石),  $Mn_2SiO_4$  (テフロかんらん石),  $CaMgSiO_4$  (モンテセリかんらん石) などがある。

苦土かんらん石 ( $Mg_2SiO_4$ ) と鉄かんらん石 ( $Fe_2SiO_4$ )

はかんらん石類で最も代表的なものであり、両者を端成分として、その間に固溶体を作る。苦土かんらん石成分を Fo と書き、鉄かんらん石成分を Fa と書く。 $Fo_{100}Fa_0 \sim Fo_{90}Fa_{10}$  を苦土かんらん石、 $Fo_{90}Fa_{10} \sim Fo_{70}Fa_{30}$  をクリソライト (Chrysolite)、 $Fo_{70}Fa_{30} \sim Fo_{50}Fa_{50}$  をハイアロシデライト (Hyalosiderite)、 $Fo_{50}Fa_{50} \sim Fo_{30}Fa_{70}$  をホルトノライト (Hortonolite)、 $Fo_{30}Fa_{70} \sim Fo_{10}Fa_{90}$  をフェロホルトノライト (Ferrohortonolite)、 $Fo_{10}Fa_{90} \sim Fo_0Fa_{100}$  を鉄かんらん石とよぶ。

- 7) 三重県内の過去の鉄滓調査例として津賀二号墳供献鉄滓 (蛍光 X 線分析) や楠ノ木遺跡中世土壌出土鉄滓 (定性分析) の調査例があるが当方調査結果との対応はつきかねる。後者は鉱石系鍛冶滓の可能性をもつ。

① 鈴鹿工業高等専門学校材料工学科・三重県埋蔵文化財センター2001「材料の歴史を科学する」『鈴鹿工業高等専門学校紀要第35巻』

② バリノ・サーヴェイ株式会社1991「鉄滓に関する分析調査」『近畿自動車道 (勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査報告～第3分冊～楠ノ木遺跡』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター

- 8) この時期の滋賀県内で調査された製鉄遺跡は8世紀前半に比定される木瓜原遺跡、8世紀中葉に比定される野路小野山遺跡が挙げられる。

① 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1996『木瓜原遺跡 立命館大学びわこ・くさつキャンパス造成工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』

② 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1990『野路小野山遺跡発掘調査報告書』

- 9) 大澤正己1992「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県房総風土記の丘 年報15』(平成3年度)千葉県房総風土記の丘

- 10) 森岡ら1975『鉄鋼腐食科学』『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店

## 5 古環境分析

### a はじめに

舞出北遺跡は、雲出川の三角州平野上に立地する(図7・8)。今回の分析では、調査区から検出された弥生時代終末から古墳時代前期の水田跡と弥生時代後期の溝内埋積物の古環境復元を目的として、花粉・植物珪酸体分析を実施した。また、水田跡を挟む堆積層の不攪乱試料の軟X線写真観察を行い、水田跡の形成および埋没過程の把握にも努めた。

### b 試料

試料採取地点の位置を図7に、採取位置の断面図を図8に示す。分析試料は、水田跡から採取された試料3点(試料番号2、4、5)のうち、植物珪酸体分析は全試料、花粉分析は1点(試料番号4)を行う。弥生時代後期の溝埋積物に関しては、植物珪酸体、花粉化石それぞれ1点ずつ分析する。

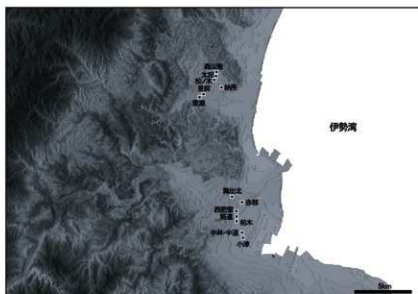


図7 舞出北遺跡とその周辺に立地する遺跡の位置図  
〔国土地理院の数値地図50mメッシュからカシミール Ver. 8.0 を使用して作成〕

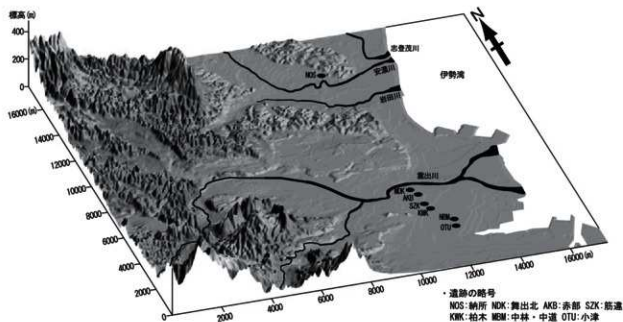


図8 遺跡の位置と周辺の地形  
〔国土地理院の数値地図50mメッシュ(標高)を使用して作成〕

### c 分析地点の層序

現地において堆積物観察を行い、調査区に累重する堆積層の記載を行った(図 10)。以下に、その観察結果を述べる。なお、堆積層の層相については、Miall (1992, 1996) の河成堆積相コードや松田 (1999, 2000) と中嶋ほか (2004)、人為的な擾乱堆積物の層相については、松田・バリノ・サージェイ (1996) の記載を参考とした。

T.P. 2.0~2.6mには、オリブ灰色を呈し見かけ上塊状をなす砂質粘土質シルト層が存在している。層内には、炭化物片が多く散在する層準が挟在する。T.P. 2.6~3.0mには、黄褐色を呈し不明瞭な水平葉理をなすシルト質砂層が累重する。層内には、植物の根痕と判断される生痕が形成されている。上方細粒化をなし、最上部には古土壌が形成されている。発掘調査で確認された弥生時代後期の遺構は、この古土壌に相当する層準付近から検出されている。T.P. 3.0~3.3mには、黄褐色を呈し見かけ上塊状をなす砂質シルト層が累重する。本層準内の T.P. 3.2m付近において、畦畔を伴う弥生時代終末から古墳時代前期の水田跡が検出されている。畦畔検出層準付近では、非常に塊状な層相をなし、偽礫ないし粒団と考えられる塊状堆積物の集合体の存在が観察される。また、微細な炭化物片も多く含まれる。T.P. 3.3mから現地表面に相当する T.P. 4.5mには、黄褐色を呈し塊状をなす砂質シルト~シルト混じり中粒砂が累重する。

上記のような堆積層の観察結果から、T.P. 2.0~2.6mの層準は、浮遊土砂を多く含む懸濁した氾濫水が滞水域で浮遊沈降するような堆積場において形成されたと解釈される。その粒度組成から、本層準はウォッシュロードを主な起源としていることが推定される。なお、ウォッシュロードとは、上流から浮遊流下してきた土砂のうち、河床に元々ほとんど含まれない泥や粘土からなる微細な荷重を指す用語である(伊勢屋 1998)。これらの特徴から、本層準は後背湿地の堆積環境が推定される。隣接する調査区で実施された放射性炭素年代測定結果をふまえると、縄文時代後期後葉頃から弥生時代前半頃まで後背湿地の堆積環境が形成されていたことがうかがえる。T.P. 2.6~3.0mの層準は、粒度組成と堆積構造から、

懸濁流と掃流の双方の運搬様式を含む洪水流が流入するような堆積場において形成されたと判断される。下位の泥層からのサクセッションと層相をふまえると、本層準は自然堤防付近の積環境が推定される。T.P. 3.0~3.3mの層準は、下位の層準よりも細粒化しており、相対的な局地的水位が上昇したことが示唆される。このような水位上昇は、氾濫原堆積物の供給源となる流路の埋没または河道変更により調査区の遠方に移動する、もしくは周辺での自然堤防堆積物の新たな累重により、本地点が相対的な低所に位置したことなどによって引き起こされたと考えられる。T.P. 3.3~4.5mの層準では、再び粗粒化する。層相から、本層準は自然堤防堆積物を母材として推定される。

以上、本調査区では、後背湿地から自然堤防へ堆積環境が変化し、その自然堤防において上方への堆積物供給が静穏化し、地表面上で古土壌が発達するようになった弥生時代後期に人間活動が展開したと推定される。断面割り断面で観察された弥生時代後期の深さ 70 cm前後の溝では、最下部から 20 cm前後に滞水堆積物と考えられる青灰色の粘土質シルトが堆積していた。このような溝内の堆積状況からは、地下水位が弥生時代後期に地表面からある程度深い深度に存在していたことが示唆される。弥生時代後期以降に調査区では、局地的な相対的水位が上昇傾向へと変化し、それまで累重していた自然堤防堆積物よりも細粒な堆積層に覆われるようになる。弥生時代終末から古墳時代前期の水田跡は、このような相対的水位上昇に伴う土壌・堆積環境の変遷過程において構築されたと推測される。そして古墳時代前期以降には、自然堤防堆積物の上方への付加がみられ、再び相対的水位が低下傾向を示すようになる。これまでの調査によって、舞出北遺跡では、室町時代の墓域、鎌倉時代および奈良時代の居住域、古墳時代中期の古墳、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝墓などが確認されている(川畑 2000, 2001)。本遺跡で検出された古墳は、河川氾濫堆積物に覆われ墳丘が良好に残存している(川畑 2001)。このような発掘調査成果から、基本的に舞出北遺跡では、弥生時代から中世にかけて、形成過程にある自然堤防上において、連続と人間活動が行われたことをうか

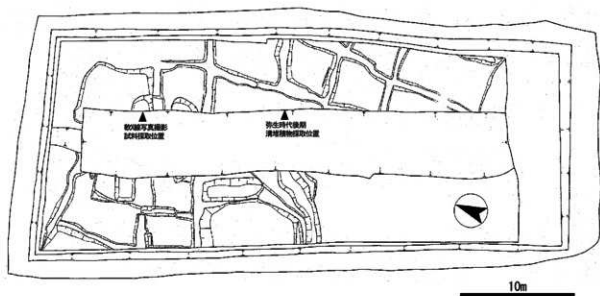


図9 分析試料採取位置図

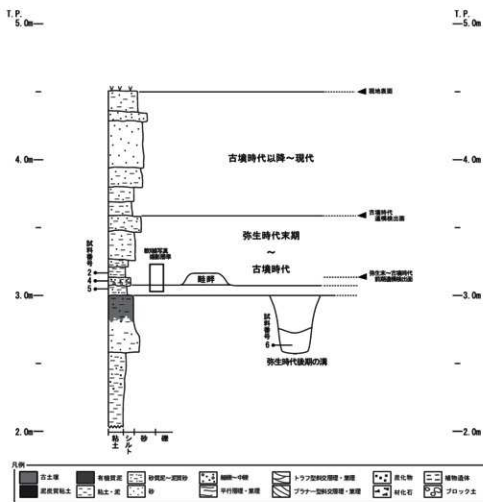


図10 分析試料採取層準の堆積物の累重状況

がい知ることができる。

## d 分析方法

### 1 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### 2 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位の変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

### 3 軟 X 線写真撮影

地層断面より採取したブロック状の試料から、幅 7cm、長さ 20cm、厚さ 1cm の板状の試料をプラスチ

ックケース内に分離、成形して軟 X 線写真の撮影を行った。撮影は東都文化財研究所の協力を得た。試料調整および撮影については、公文・立石編（1988）、斉藤（1993）を参考とした。

## e 結果

### 1 花粉分析

結果を表 6 に示す。分析を行った 2 試料とも花粉化石の保存が悪い。花粉化石はほとんど検出されず、シダ類胞子が多数認められる。シダ類胞子は、花粉に比べて風化に対する抵抗力が強いため（徳永・山内 1971）、風化に弱い花粉化石は大部分が消失し、シダ類胞子のみが多く残存したと考えられる。このように、花粉化石の組成は風化によって歪曲されていると考えられる。また、検出数が少なくなると、統計的な誤差範囲が大きくなる。花粉計測数とその誤差に関しては、Moore&Webb（1978）などに紹介されている。たとえば、今回弥生時代の溝内で検出されたアカガシ亜属の場合、計算すると出現率は 25% になるが、測定誤差を想定した出現率の範囲は 2～65% とその幅は非常に広い（信頼度 95% として計算）。このように、今回得られた花粉化石群集は、風化により歪曲され、かつ検出数が少ないことにより統計誤差も大きくなることから、分析結果を解析に用いることは難しく、考察を差し控える。

### 2 植物珪酸体分析

結果を表 7、図 11 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

水田遺構からは、栽培植物のイネ属に由来する短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、短細胞珪酸体が 100 個/g 前後、機動細胞珪酸体が 500-1,000 個/g 程度である。その他には、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。概して、ヨシ属の短細胞珪酸体の産出が目立ち、特に試料番号 2 で顕著である。植物珪酸体含量もこれを反映し、上位で増加する傾向が見られる。また、樹木起源珪酸体の第 IV グループ（近藤・ピアスン 1981）が検出される。第 IV グループは網目模

表6 花粉分析結果

種類	水田		溝内	
	4			
木本花粉				
モミ属	1	1		
ツガ属	1	1		
コウヤマキ属	-	4		
コナラ属アカガシ亜属	-	2		
エノキ属—ムクノキ属	1	-		
草本花粉				
イネ科	2	-		
ヨモギ属	6	-		
キク亜科	2	1		
不明花粉	-	-		
シダ類孢子				
ヒカゲノカズラ属	7	7		
ゼンマイ属	-	1		
イノモトソウ属	14	30		
他のシダ類孢子	51	82		
合計				
木本花粉	3	8		
草本花粉	10	1		
不明花粉	0	0		
シダ類孢子	72	120		
総計(不明を除く)	85	129		

表7 植物珪酸体含量

種類	(x100個/g)			
	水田		弥生	
試料番号	2	4	5	溝内
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	1.5	.7	1.7	1.0
タケ亜科ネザサ節	5.3	3.0	3.6	2.2
タケ亜科	7.5	4.8	2.8	2.0
ヨシ属	54.2	11.9	7.8	10.1
ウシクサ族コブナグサ属	13.2	2.6	3.8	2.0
ウシクサ族ススキ属	5.3	3.7	2.3	5.6
イチゴツナギ亜科	1.5	3.0	1.0	.5
不明キビ型	39.1	24.1	11.9	18.4
不明ヒゲシバ型	2.6	1.9	3.3	2.2
不明ダンチク型	6.0	4.5	2.4	3.9
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	7.2	10.4	4.7	9.3
タケ亜科ネザサ節	9.0	14.5	2.8	4.4
タケ亜科	.8	3.7	.4	1.2
ヨシ属	8.3	8.2	1.7	4.4
ウシクサ族	1.5	1.9	1.2	.7
不明	9.4	14.1	4.5	9.1
樹木起源				
第IVグループ	3.4	1.1	1.2	1.5
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	136.2	60.1	40.6	47.8
イネ科葉身機動細胞珪酸体	36.1	52.7	15.2	29.2
樹木起源	3.4	1.1	1.2	1.5
総計	175.8	114.0	57.0	78.5

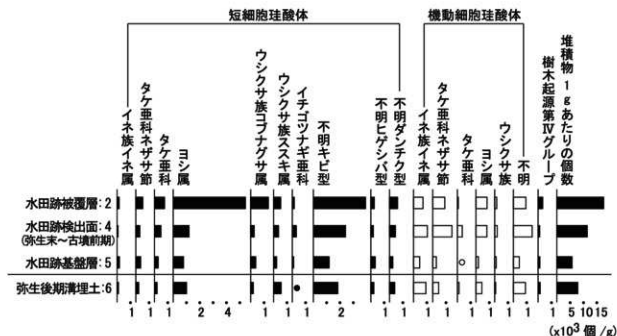


図11 植物珪酸体含量  
堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は50個/g未満の種類を示す。

様の付いた紡錘形を呈する。

溝埋積物から採取された土壌試料では、植物珪酸体含量が約 8,000 個/g である。検出される種類はイネ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体の第IVグループなどである。

### 3 軟X線写真撮影

堆積物試料および軟X線写真をもとに、層理および葉理と偽礫（ブロック土）や生痕の一部についてトレースを行った。そのトレース図と軟X線写真を図 12 に示す。以下に、観察された堆積・土壌構造についての記載を示す。

なお、軟X線写真の記載は、久馬ら（1998）の「土壌薄片記載ハンドブック」のほか、堆積物について宮田ほか（1990）など、土壌について佐藤（1990a・b）、森ほか（1992）、成岡（1993）などを参考とした。結果については、考察において併せて記載を行う。

## f 考察

### 1 弥生時代終末から古墳時代前期の水田跡を挟む堆積層の軟X線写真観察

検出された水田跡を挟む堆積層の不攪乱試料

を採取し、軟X線写真観察を行った結果、層準A～Eまでの堆積ユニットを認識することができた（図 12）。以下に各層準の特徴を述べていく。

層準Aは、にぶい黄色砂質シルトで構成される。直径 8 mm 程度の偽礫と考えられる塊状を呈する集合体が散在する。層準Bは、にぶい黄色砂質シルトで構成される。水平葉理が観察される。また、上方へ若干の粗粒化が認められる。層準Cは、暗オリーブ褐色砂質粘土質シルトで構成される。非常に不明瞭ながら水平葉理が観察される。層内には、微小な炭化片が散在する。本層準は、観察を行った堆積層で最も細粒である。層準Dは、暗オリーブ色砂質シルトで構成される。層内には、直径 5～10 mm 程度の偽礫と考えられる塊状を呈する集合体が散在する。また、直径 5 mm 前後の粒団を考慮される粒状の構造の発達も認められる。本層準では、葉理がほとんど形成されておらず、塊状の層相となっている。層準Eを構成する碎屑物は、砂と泥がよく攪拌された状態の層相を示している。軟X線写真の部分的に拡大した P1～4 では、本層準に該当する P3 で最も塊状ないし粒状の構造が発達していることが判る。このような構造は、観察を行った堆積層のうちで層準D

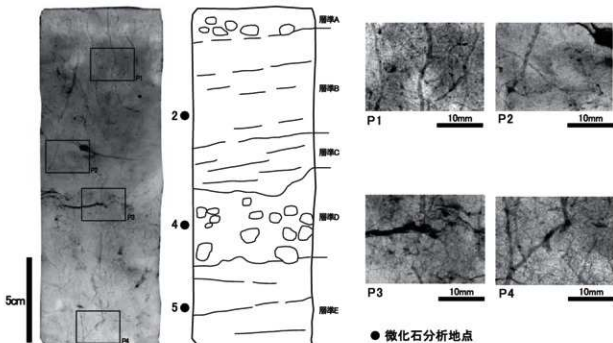


図 12 軟X線写真とそのトレース図



が最も土壌化の影響を受けていることを示している。層準Eは、暗オリブ砂質シルトで構成される。非常に不明瞭ながら水平葉理が観察される。観察を行った層準A～Eでは、植物の根痕と思われる直線状の粗孔隙や直径5mm前後の粒団を考えられる粒状の構造が分布しており、全体的に土壌化の影響を受けていると考えられる。

以上のような各層準の特徴と発掘調査結果から、層準Eは、流路からの洪水によって運搬されてきた堆積物によって構成されていると解釈される。層準Dは、軟X線写真の層相観察により、最も土壌化を受けていると判断された。検出された畦畔との位置関係をふまえると、層準Dは水田作土に相当すると推定される。このことから、層準Dで認められる土壌化の要因は、主に人間による耕作によるものであると考えられる。また、層準内で観察される偽礫は、耕作に伴って形成された可能性がある。埋没後の圧密を受けた値であるが、作土と認識される層準Dの層厚は、40mmを測る。層準Dおよび畦畔を覆って形成される層準Cは、層相から極浅い滞水域ないし湿地の堆積環境下で形成されたと考えられる。層準Bは洪水堆積物と解釈される。層準Aでは、偽礫の存在が確認されるが、最下部のみ観察であり、人為的な擾乱に起因するかどうかについて判断することは難しい。

以上、弥生時代終末から古墳時代前期の水田では、基盤をなす自然堤防を覆って累重したより泥質な洪水堆積物を母材として作土が形成されたと推定される。水田域では、耕作放棄後、極浅い滞水域ないし湿地へと変化したことが層相から推測される。植物珪酸体分析でも水田跡検出面の上位の層準で、湿潤な環境に生育するヨシ属が多産しており、層相観察結果と調和的傾向であることが認識される。このことから、地表付近の環境が湿性化していくような、相対的な水位の上昇過程にある自然堤防斜面において水田が造成されたことがうかがえる。現地および軟X線写真による層相観察から、本調査区において弥生時代終末から古墳時代前期に水田が形成された局地的要因としては、調査区における地下水位の上昇が指摘される。

## 2 花粉・植物珪酸体分析から推定される古環境

分析を行った層準では、花粉化石の保存状態が不良であった。花粉化石は、好気的環境による風化に弱く、分解されやすい(中村 1967 など)。花粉化石の組成が全体的に悪いのは、乾湿を繰り返すような状況下にあったためと思われる。当社のこれまでの分析事例から、舞出北遺跡周辺の考古遺跡では、遺構・遺物を挟在する自然堤防堆積物と判断される混泥・砂～砂層で花粉化石の保存状態が極めて悪いことが判明している。このことから、舞出北遺跡およびその周辺では長期間にわたって、地下水位が低く、好気的な地表付近の環境が維持されてきたことが示唆される。上記の結果をふまえると、弥生時代後期から古墳時代前期に調査区では、地表付近で好気的な環境が長く維持されるような場所であったことが花粉分析結果から推定される。

植物珪酸体分析では、弥生時代終末から古墳時代前期の水田作土に相当すると推定される層準で、栽培植物のイネ属が認められた。また、イネ属珪酸体は、弥生時代後期の溝埋土からも検出された。その含量は、短細胞珪酸体が100個/g前後、機細胞珪酸体が500-1,000個/g程度である。弥生時代後期の溝埋土からのイネ属珪酸体の産出は、溝の周囲にイネ属珪酸体を供給する場が存在していたことを示唆している。

弥生時代終末から古墳時代前期の水田作土に相当すると推定される層準のイネ属機細胞珪酸体の含量は、弥生時代後期の溝埋土とほぼ同様の分析値を示す。稲作が行われた水田跡の土壌ではイネ属の機細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが多いとされる(杉山 2000)。しかし、今回の分析では、この値を大幅に下回っている。結果でも述べたように、花粉化石には風化の痕跡が顕著にみられる。植物珪酸体の風化に関しては不明な点が多いが、植物珪酸体は土壌が粘土化する過程において風化していく(近藤 1988)、特に乾湿を繰り返す場所やアルカリ性の水域では風化が早く進行するとの見方もある(江口 1992, 1994)。今回の場合も、風化による消失は考慮する必要があると思われるが、イネ属以外では多産している種類もあることから、風化により極端に少なくなったとは考えにくい。

なお、大阪湾岸や瀬戸内沿岸域の氾濫原上に立地

する弥生時代前期の水田跡におけるイネ属機動細胞珪酸体の含量の集成では、イネ属の機動細胞珪酸体が数百個/g程度にとどまる事例が多いことが指摘されている(辻ほか 2004)。また、これまでに実施された考古遺跡の分析では、畦畔などが検出されている遺構検出面からほとんどイネ属珪酸体が検出されなかった事例も存在する(古環境研究所 1992, バリノ・サーヴェイ 2001・2002 など)。さらに、弥生時代の水田跡の分析事例であるが、同一水田面では、イネ属を始めとした植物珪酸体の空間的分布状況にかなりのバラツキが認められることも明らかとなっており(辻本 2001, 辻本・辻 2002, 辻本ほか 2003)。植物珪酸体の含量については、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いに関連があることも確かめられている(外山 2002)。この他、水田面だけでなく畝跡遺構やそれらが連続する層序でも、イネ属珪酸体は高率で検出される場合がある(バリノ・サーヴェイ 1996, 辻ほか 2003)。これらの遺構でのイネ属珪酸体は、はたけ耕作土の母材として下位の水田耕作土や付近の水田から流れ込んだイネ属珪酸体を多量に含む泥層の使用もしくは、農業資材として敷き藁などやすき込みのために圃場に持ち込まれた稲藁に由来するものと解釈される。

以上、稲作が行われた水田で通常認められるとされるイネ属機動細胞の含量をふまえると、今回の分析結果からは、水田跡検出面において稲作が実施されていたことを支持することは難しい。但し、本調査区の分析事例のように、畦畔など水田跡と考えられる遺構が明らかに検出されているのにも関わらず、イネ属機動細胞珪酸体の含量が少ない場合には、堆積速度が早いことや、耕作期間が短かったことなどが理由としてあげられ場合がある。しかしながら、上記したこれまでの分析事例から、イネ属機動細胞珪酸体の含量には、様々な要因が関係しているらしいことが予想され、遺跡形成過程に関わる堆積速度や人間活動に関わる耕作期間について、植物珪酸体分析結果のみで推定を行うことは困難であると認識される。これらのことをふまえると、発掘調査と水田跡検出面の層相観察結果とイネ属機動細胞分析結果の乖離が生じた要因については、現段階で不明で

あるとしか述べることができない。

イネ属以外の植物珪酸体に着目すると、検出された種類から、調査区の周辺では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてネザサ節、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などの生育がうかがえる。特に湿潤な場所に生育するヨシ属の短細胞珪酸体の産出が目立つ。水田検出面の上位で増加する傾向がみられたことから、この時期、周囲に湿潤な場所が広がった可能性が示唆される。また、今回の植物珪酸体の結果では、樹木起源の珪酸体が多産する。今回検出されたIV型は、モクレン属、シイノキ属など多くの種類の葉に形成されると考えられている(近藤・ピアスン 1981)。照葉樹が発達する西日本地域では、土壌中から樹木起源の植物珪酸体が多産することがしばしばある(杉山 1999)、今回もこの一例であり、周辺の森林植生に由来すると思われる。

#### [引用文献]

- 江口誠一 1994「沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして」『植生誌研究』2, p.19-27.
- 江口誠一 1996「沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値」『ペトロジスト』40, p.81-84.
- 伊勢屋ふじ子 1998「ウォッシュロード」『堆積学辞典』堆積学研究会編, 朝倉書店, p.297.
- 川畑由紀子 2000「舞出北遺跡」『一般国道23号 中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター, p.5-10.
- 川畑由紀子 2001「舞出北遺跡」『一般国道23号 中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター, p.5-16.
- 古環境研究所 1992「プラント・オパール分析調査報告」『二之宮千足遺跡 国道17号(上部道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学分析編)』建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.50-60.
- 古環境研究所 1999「プラント・オパール分析から見た静岡バイパス関連諸遺跡」『静岡・清水平野の埋没古環境情報』『考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相』一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査 1984~1993-(財)静岡県埋

- 蔵文化財調査研究所, p83-86.
- 近藤謙三・ピアスン友子 1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』12, p217-229.
- 近藤謙三・佐瀬 隆 1986「植物珪酸体分析 その特性と応用」『第四紀研究』25, p31-64.
- 近藤謙三 1988「植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代」『ペトロジスト』32, p189-202.
- 公文富士夫・立石雅昭編 1998「砕屑物の研究法」『地学団体研究会』p399.
- 久馬一剛・八木久義監修 1989『土壌薄片記載ハンドブック』博友社, p176.
- 松田順一郎 1999「瓜生堂第40次調査地における河川堆積作用の変化」『瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書—電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告—』(財) 東大阪市文化財協会, p93-105.
- 松田順一郎 2000「八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達」『小阪合遺跡—都市基盤整備公団八尾団地建設に伴う発掘調査報告書—』(財) 大阪府文化財調査研究センター, p259-276.
- 松田順一郎・バリノ・サーヴェイ 1996「北島遺跡の耕作地と古環境—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書—」(財) 東大阪市文化財協会, p157.
- Miall, A. D. 1992「Alluvial Deposits, in Walker, R. G. and James, N. P. (ed) Facies Models」『Geological association of Canada』p119-142.
- Miall, A. D. 1996「The Geology of fluvial deposits: Sedimentary facies」『basin analysis, and petroleum Geology. Springer』p582.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷 淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990「淡水生ゾウラの形成過程—琵琶湖愛知川河口部を例として—2. 地質構成と堆積相」『地質学雑誌』96, p839-858.
- Moore P. D. & Webb J. A. 1978『An illustrated guide to Pollen Analysis. Hodder and Stoughton』, p133.
- 中村純 1967『花粉分析』古今書院, 232p.
- 中嶋雅宏・中山朋博・百原 新・塚腰 実 2004「中新統土岐川陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水利的挙動—岐阜県多治見市大洞地区の例—」『地質学雑誌』110, p204-221.
- 森 也才志・滋賀栞子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992「土地利用による土壌間隙構造の差異—軟X線による観察を中心として—」『土壌の物理性』No. 66, p19-27.
- 成岡 市 1993「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』64-1, p90-97.
- バリノ・サーヴェイ 1996「珪化石・植物化石・樹種による古環境復元」『北島遺跡の耕作地と古環境—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書—』(財) 東大阪市文化財協会, p71-130.
- バリノ・サーヴェイ 2001「亀里平塚遺跡の自然科学分析」『亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長壽線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団, p343-353.
- バリノ・サーヴェイ 2002「横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析」『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第11集 第1分冊(本文編) (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団, p133-155.
- 砕屑性堆積物研究会 1983『地学双書 24 堆積物の研究法』地学団体研究会, p377.
- 齊藤文紀 1993「軟X線写真顕微鏡法」『第四紀試料分析法2 研究対象分析法』日本第四紀学会編, 東京大学出版会, p103-108.
- 佐藤幸一 1990a「八郎潟干拓地重粘土土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60, p25-30.
- 佐藤幸一 1990b「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60, p287-292.
- 杉山真二 1999「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38, p109-123.
- 杉山真二 2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と自然科学 3 考古学と植物学』辻誠一郎編著, 同成社, p189-213.
- 徳永重元・山内輝子 1971「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社, p50-73.
- 外山秀一 2002「池島・福万寺遺跡の立地と環境」『池島・福万寺遺跡 2 (福万寺1期地区) 一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編』(財) 大阪府文化財センター, p411-429.

- 辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文 2003「芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析」『寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書—集落東端部の様相と知見—』芦屋市教育委員会, p135-163.
- 辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀 2004「付章 前田遺跡の自然科学分析」『前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態—』芦屋市教育委員会, p1-36.
- 辻本裕也 2001「IFJ97-3 調査区の花粉・植物珪酸体分析」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII—IFJ97-3 調査区の概要—』（財）大阪府文化財調査研究センター, p120-131.
- 辻本裕也・辻 康男 2002「池島・福万寺遺跡の古環境復元」『池島・福万寺遺跡2（福万寺1期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編』（財）大阪府文化財センター, p361-410.
- 辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司 2003「自然科学分析の成果」『勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター, p151-192.

## VI まとめ

### 1 遺跡の立地について

今回、調査を行った第1・2次調査区と第3次調査区は幅約4mの道路を挟んだ南北に位置しているが、その標高は調査前段階で第1・2次調査区が5.5m、第3次調査区が4.1mと1.4mもの落差がある。この地形の変化が何に起因するものか整理しておきたい。

まず、調査区周辺の地形図に青木哲哉氏が作成された地形分類図<sup>1)</sup>を合成したものが、第83図である。この図からは概ね第1・2次調査区が自然堤防に、第3次調査区が後背湿地にあたることが判る。

次に、第1・2次調査区と第3次調査区の東壁土層断面図を平面図の距離に合わせて並べたものが第

84図である。この図から古墳時代包含層、奈良時代包含層、中世包含層の標高及び堆積状況の比較を行う。古墳時代中後期の検出面は第1・2次調査区南端と第3次調査区北端で30cm程の落差がある。巨視的にみて北から南へごく緩やかに傾斜していることがわかる。その上の古墳時代包含層は20cm程度とほぼ均一に堆積している。奈良時代の検出面の比高差は古墳時代より少なく、さらに緩やかな傾斜になっていたと推定される。その上の奈良時代包含層は第1・2次調査区で25cm程度の堆積が確認できるのに対し、第3次調査区では10~20cm程度と堆積の状況に差がみられる。中世検出面は第3次調査区では遺構が希薄なため捉えられなかったが、仮に



第83図 舞出北遺跡周辺の地形図 (1:5,000)

奈良時代包含層と中世包含層の間とすると、第1・2次調査区南端と第3次調査区北端で70cm程度と落差が大きくなっている。その上の中世包含層は第1・2次調査区で凡そ50～60cmの堆積が確認され、さらに3層に分層されているのに対し、第3次調査区では30～40cmの堆積で分層されていない。

中世の包含層より上層の堆積状況を比較すると奈良時代から中世にかけての状況ほど大きな差異は無いものの、傾向としては中世と類似した状況を示している。これらの状況を見ると、少なくとも奈良時代の遺構が埋積した後は雲出川の流れによってそれまでより多くの土砂が運ばれ、自然堤防が非常に発達したものと考えられる。その結果、現在のような地形が形成されたものと推定される。(原田)

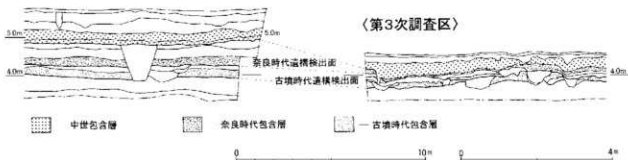
## 2 主要時期の様相

舞出北遺跡の一連の調査では、弥生時代後期以降、弥生時代終末から古墳時代初頭、古墳時代中後期(5世紀後半～6世紀)、飛鳥時代(7世紀)、奈良時代(8世紀)、平安時代(9世紀～12世紀)、鎌倉時代(13世紀～14世紀前半)、戦国時代(15世紀後半～16世紀前半)、近世(19世紀代)の遺構が確認された。その内、本報告書で掲載した奈良時代までの各時代の様相について時代別に概要を記す。

**弥生時代中期以前** 遺構は確認されなかったものの、弥生時代前期及び弥生時代中期後葉の遺物は一定量の出土が認められる。これらの出土遺物の中には遺存度が高くローリングを受けていないものもあり、近域に当該期の遺構の存在が推察される。

(原田)

**弥生時代後期から終末** 当地で人々が生活を始めるのは弥生時代後期からである。古墳境復元に  
(第1, 2次調査区)



第84図 第1・2次調査区及び第3次調査区東壁土層図(長さ1:200、深さ1:100)

よって、より標高の低い第3次調査区は縄文時代後期後葉頃から弥生時代前半頃は後背湿地であることが分かった。そして、弥生時代後期になると地下水位が低下し、自然堤防になったことから人々が生活を営む場になったといえる。当該期の遺構として、周溝墓が第1・2次調査区では3基、第3次調査区では4基確認され、調査地が墓域であったことが分かった。

また、第1・2次調査区中央部は遺構が検出されなかった。空地となっていたのであろうか。

さて、これらの墓域を形成した人々が居住していた場所について整理しておきたい。舞出北遺跡から最も近い当該期の遺構が確認されている遺跡は、現在のところ南へ約1.2kmの地点にある筋違遺跡<sup>2)</sup>である。筋違遺跡では弥生時代後期の竪穴住居が1棟のみ確認されているが、弥生時代の遺構の中心は前期の水田や中期後葉の方形周溝墓である。また、南南西へ0.6kmの赤部遺跡<sup>3)</sup>では、弥生時代中期の水田状遺構や古墳時代前期の集落及び水田状遺構が確認されているが、弥生時代後期の遺構は確認されていない。さらに北へ1.3kmの地点にある木造赤坂遺跡<sup>4)</sup>でも弥生時代中期の竪穴住居が確認されているが、後期の遺構は確認されていない。従って、舞出北遺跡周辺の当該期の集落は未だ不明である。しかし、舞出北遺跡の立地から考慮すると(第83図参照)、調査区東側にある現舞出集落付近の標高が高く自然堤防が広がっていることから、これら周溝墓群に関わった人々の居住域は現在の舞出集落付近に求められるのではなかろうか。(原田・野島)

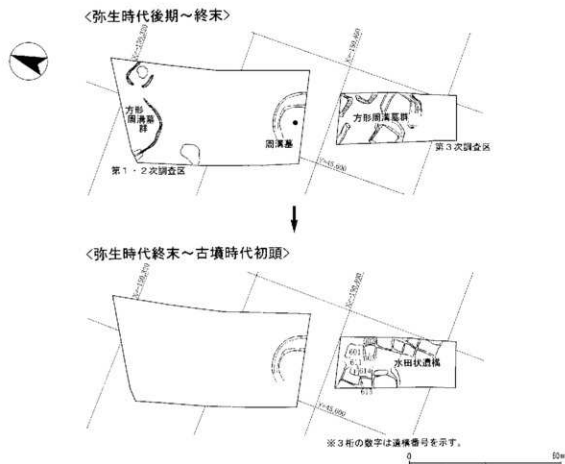
**弥生時代終末から古墳時代初頭** 第3次調査区において水田状遺構を20面確認した。なお、水田「状」遺構としたのは、検出状況から水田と判断し

たものの、花粉・植物珪酸体分析ではイネ属機動細胞珪酸体の含量が少なく、稲作が実施されていたことを示す確証は得られなかったためである。水田遺構は調査区の西側および北側では区画が乱れているが、南東部では方形の水田遺構が比較的格子状に近い形で整然とつくられている。南北方向の畦畔は、基本的に真北方向に近い角度でつくられている。しかし、SZ602・603・614・615の列およびSZ601・611は15°～20°西へ傾いている。各水田遺構の規模を示したものが第32表である。水田遺構の全形がほぼ分かるものを対象とした平均面積は20.3㎡であり、一辺の長さが4mに近いものが多い。また、面積の大きな水田遺構は南北方向に長い長方形であるものが多く、中規模の水田遺構2面分の長さをもつものもある。水田遺構の深さは平均13cmである。

古環境復元によって当該期は相対的に地下水位が上昇していたことが確認された。地下水位上昇によって形成された細粒な堆積層を利用して稲作が営ま

第34表 水田遺構の規模

遺構番号	東西(m)	南北(m)	深さ(cm)	面積(㎡)
SZ601	5.3	6.3	11.0	33.4
SZ602	2.0以上	4.0以上	14.0	8.0以上
SZ603	4.0以上	4.0	12.0	16.0以上
SZ604	4.0以上	6.0	12.0	24.0以上
SZ605	4.5	4.6	14.0	20.7
SZ606	2.9以上	4.0以上	10.0	11.6以上
SZ607	2.3以上	6.0以上	12.0	13.8以上
SZ609	5.2以上	2.2以上	14.0	11.4以上
SZ610	3.6	7.2	14.0	25.9
SZ611	2.0以上	1.8	9.0	3.6以上
SZ613	2.6以上	5.6以上	14.0	14.6以上
SZ614	2.8以上	3.6	26.0	10.1以上
SZ615	2.6	4.2	22.0	10.9
SZ617	4.0	4.3	14.0	17.2
SZ619	3.3以上	9.8	10.0	32.3以上
SZ620	0.6以上	0.8以上	8.0	0.5以上
SZ621	4.6	7.7	10.0	35.4
SZ622	9.2以上	2.6以上	6.0	23.9以上
SZ623	4.0以上	8.9	14.0	35.6以上
SZ624	1.6	5.5	14.0	8.8

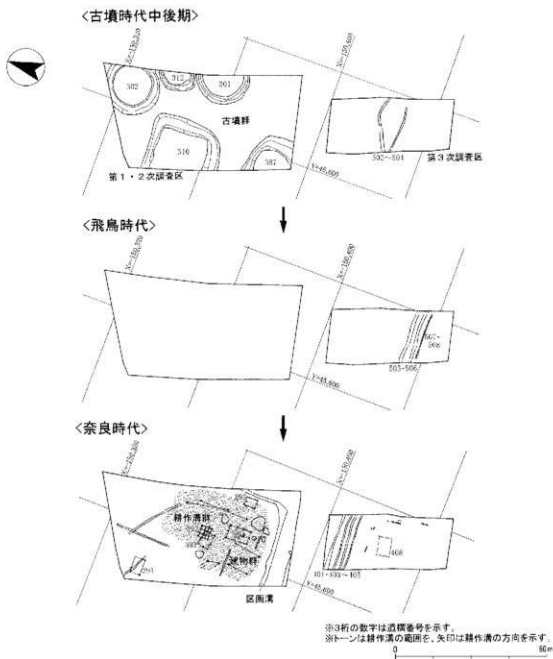


れていたようである。一方で、第1・2次調査では当該期の包含層及び遺構面は確認されていない。第3次調査ではこの遺構面を下層断り削り調査時に土層断面観察から確認したが、第1・2次調査では平面検出のみの調査であったため、この遺構面を見逃してしまった可能性がある。ただし、現地表面は第1・2次調査区の方が第3次調査区よりも約0.5～1.3m高く、弥生時代から中世の遺構面も第1・2次調査区の方が基本的に高い。地下水位が上昇したた

めに水田として利用したと考えるならば、地盤の高い第1・2次調査区では地下水位の高さが足りず、仮に水田状遺構があったとしても第3次調査区ほどの広がりではなかったと思われる。

また、当該期の居住域は前代と同様、調査区の東方に所在するのではないかと推定される。(野駕)

**古墳時代中後期** 第1・2次調査区で古墳5基、第3次調査区中央部を中心に溝3条、土坑1基を確認した。古墳は調査区東半に円墳3基、西半に



第86図 舞北北遺跡遺構変遷図(2)(1:1,500)



方墳2基があり、前後関係が明確であるものは周溝の重複関係からSX312→SX301、出土須恵器の時期からSX301→SX302である。方墳であるSX310・387は詳細な時期決定は困難であるが、出土遺物の組成がSX312と類似することからSX312に近似した時期と推察される。

確認された古墳群の中でも特にSX301は墳丘裾部付近で埴輪列及び木製埴輪等の樹立を推定させる木杭痕の検出、主体部からの豊富な副葬品の出土、周溝内へのベンガラの入った須恵器甕の設置、多数の埴輪・土器の出土など古墳の内外部施設の状況や古墳(被葬者)に対する儀礼の一端を窺い知ることができた。遺存度の違いから、SX301とその他の古墳との比較は単純にできないが、埴輪の出土状況を見る限りではSX301のみ埴輪で装飾されていたのは確実であり、本古墳群内ではSX301が突出した要素を持っているように思われる。

SD502～504はいずれも近隣場所に掘削されているが、弧を描くように巡るものや蛇行するものがあり、飛鳥時代・奈良時代のように向きの統一性は認められない。SD503・504が掘削された辺りは、自然堤防から後背湿地への変換点であり、当該期の人々にとって生活域とそうでない場の境界になっていた可能性が推察される。

**飛鳥時代** 第3次調査区南半部で溝2条、権2列を確認した。

SD505・506とSA507・508はほぼ東西方向に平行して延びている。権は重複しており、SA508→SA507となる。溝も権列もほぼ東西方向に向きを揃えて掘っているのが特徴の一つとして挙げられる。そして、溝を掘削する際の「方位の志向性」は後の奈良時代へと受け継がれていく。

**奈良時代** 第1・2次調査区で区画溝・掘立柱建物5棟、土坑数基、耕作溝多数を、第3次調査区では調査区北部から中央部にかけて溝6条、土坑1基、掘立柱建物1棟を確認した。

出土遺物は7世紀末から8世紀前半に集中している。各遺構の重複関係からは少なくともさらに3時期に細分することが可能である。特に第1・2次調査区で検出された掘立柱建物は方位からSB391・392・394・395(N0～2°E)とSB393(N10°

E)の2グループに分けられる。前後関係は遺構の重複からSB392→SB393が分かっている。また掘立柱建物とその周辺で検出した耕作溝との重複関係も明確である。これらの様相から、概ね耕作溝群→SB391・392・394・395→SB393と変遷を辿ることができると。一方で、第3次調査区で検出されたSB407はどの掘立柱建物とも向きが異なり遺構の重複関係もないため、他の建物との関連は不明である。

SD401・403～405は古墳時代中後期の溝SD505・506と同様、東西方向に延びる溝である。これらの溝は南側に掘立柱建物SB408があるため、集落の南限を示すものではなく、土地の区画を意図するものと思われる。

また、第1～3次調査で明確になった集落の特徴を列記すると、①雲出川に近接している ②出土遺物の時期は7世紀末～8世紀前半に集中している ③その内の一時期に掘立柱建物4棟(側柱建物3棟、総柱建物1棟)がほぼ向きを揃えて建てられていること ④畿内系暗文土師器の一定量の出土 ⑤円面硯・陶馬の出土 ⑥出土鉄滓等の分析結果から集落内で鍛冶が行われていたのが推測されること。また、調査区内M～P20グリッドでは輪の羽口片が多く出土していることから鍛冶が行われた傍証になることなどが挙げられる。

舞出北遺跡の所在する一志郡の状況はII-3-cで概説した通りである。畿内と伊勢を繋ぐ交通の要所であり、寺院が密集する地域で、畿内系暗文土師器が出土する遺跡も多く確認されている。一志郡の中心地域と考えられている堀田遺跡<sup>5)</sup>から約1.3kmとさほど離れていない場所であつた雲出川の水運を利用するのに好都合な立地条件であり、円面硯・陶馬などが出土したものの、「一志郡」の地域的な様相と比較してみた限り、現状では突出した特徴を持っているとは言えない。しかし現状において、当地域での古代の出土鉄滓等の分析事例が稀少で鍛冶の実態が不明瞭であること、集落遺跡の性格について下級官衙と一般集落を区別して捉えるのが困難な状況<sup>6)</sup>であることなどから、これらの研究の進展によって舞出北遺跡の評価も変わる可能性を秘めているのではなからうか。(原田・野島)

舞出北遺跡第1～3次調査では限られた範囲であったものの、弥生時代から近世に至る各時代の様相の一端を知ることができた。

本遺跡の周辺、雲出川下流域では1990年代後半以降、開発に伴う発掘調査事例が増加し、調査成果が蓄積されつつある。これらの成果と共に地域の歴史像を解明する一助となれば幸いである。（原田）

〔註〕

- 1) 青木智哉「第一章 三雲町の地形環境」『三雲町史 第一巻 通史編』三雲町教育委員会 2003
- 2) 三重県埋蔵文化財センター『筋違遺跡発掘調査報告-第1分冊-』2004
- 3) 松阪市教育委員会『三重県松阪市嬉野新屋庄町所在 赤部遺跡 一般国道23号中勢道路建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』2007
- 4) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報』19 2007
- 5) 三重県埋蔵文化財センター『原田 第6次調査』2005  
伊藤裕徳「ふたつの「こおりいち」～古代一志郡家に関する覚書～」『寄宮歴史博物館研究紀要』11 2002
- 6) 森川常厚「古代集落概要」『三重県史』資料編 考古2 三重県 2008

写真図版





調査区遠景（東から）



調査区遠景（西から）



SX311 (北西から)



SX318、SK319 (北西から)



SX388 (北東から)



SX388 土器閉塞状況 (南から)



古墳時代面全景 (13ライン以南) (北から)



SX301 主体部調査前状況（北西から）



SX301 西側周溝土層（南から）



SX301 埴輪出土状況（西から）



SX301 遺物出土状況（西から）



SX301 遺物出土状況（西から）



SX301 埴輪出土状況



SX301 埴輪直下須恵器出土状況



SX301 主体部 (西から)



SX301 埴輪列掘形検出状況 (南から)



SX301 (西から)





SX301 木杭痕 1 (南東から)



SX301 木杭痕 5 (北西から)



作業風景



SX302 馬歯出土状況 (西から)



SX302 (北西から)



SX310 南半部（北東から）



SX310 土器出土状況（西から）



SX312 土器出土状況（南東から）



SX387（東から）



奈良時代面全景（13ライン以南）（北から）



耕作溝群（北東から）



SD309（南東から）



SD308（北東から）



SD357 遺物出土状況（東から）



SD360 遺物出土状況（西から）



SD352（南東から）



SB392・393（北から）



SB395（北から）



SK399（南東から）



SF366（北から）



SF396（北西から）



SF396（北西から）



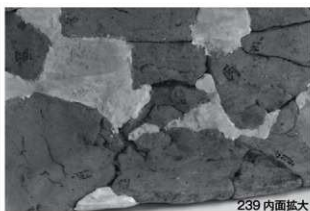
SZ363（北から）

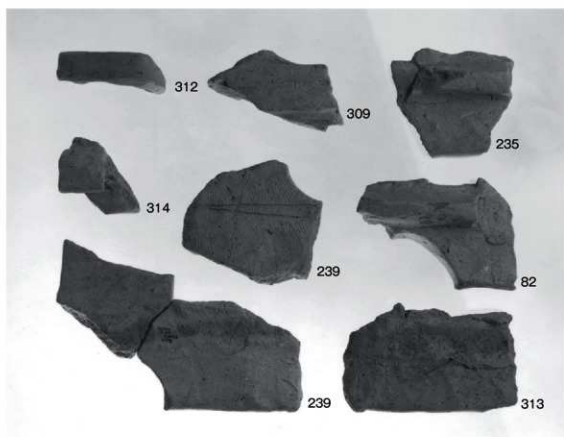
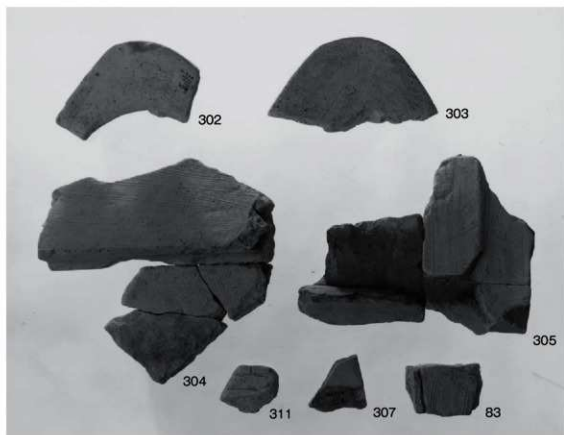


現地説明会風景







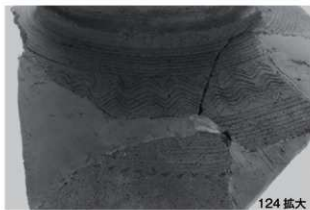






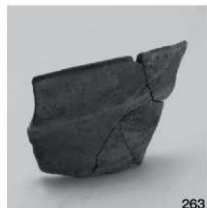


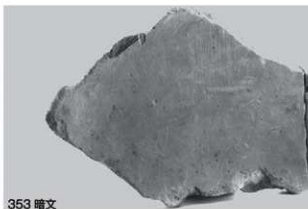




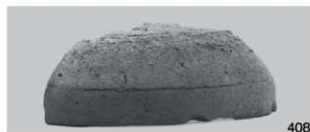


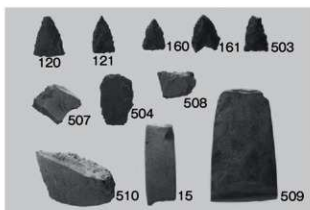
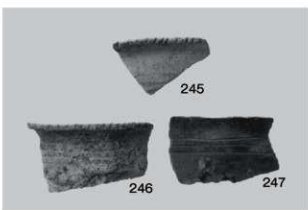
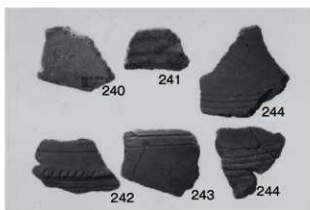


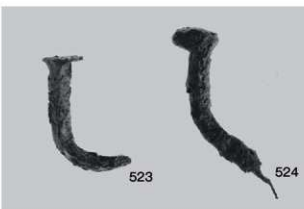
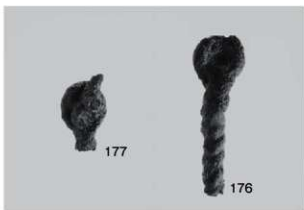














調査前風景（北から）



第 5 面全景（北から）



SX701 (北東から)



SX701 遺物出土状況 (北から)



SX701 南周溝土層断面 (西から)



SX702 北周溝土層断面 (西から)



SX702 (北から)



SX703 (東から)



SB706 (北から)



SX705 土層断面 (南から)



第3面包含層遺物出土状況 (西から)



SX705 (北東から)



SD704 (東から)



SD704 遺物出土状況 (東から)



SD704 遺物出土状況 (東から)



第4面全景 (北から)



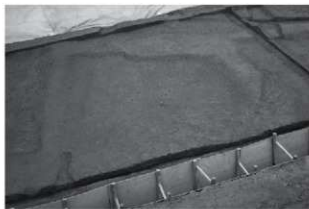
第4面全景 (北東から)



SZ601 遺物出土状況 (北から)



SZ601 遺物出土状況 (南から)



SZ617 (西から)



SD616 (西から)





SZ621 遺物出土状況 (北から)



下層断ち割り調査風景 (南から)



SD605 遺物出土状況 (西から)



SD605 遺物出土状況 (北西から)



第3面全景 (北から)



第3面南半部（北東から）



SD502・503・504（西から）



SD505・506、SA507・508 (西から)



SD506、SA507・508 (西から)



第3面包含層遺物出土状況 (東から)



第2面全景 (北から)



SD401・402・403・404・405 (北西から)



SD403 土層断面 (西から)



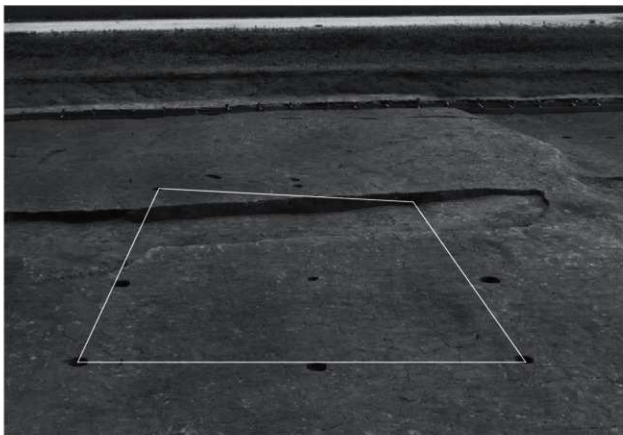
SD405 土層断面 (東から)



作業風景 (東から)



調査後風景 (平成20年4月撮影・北東から)



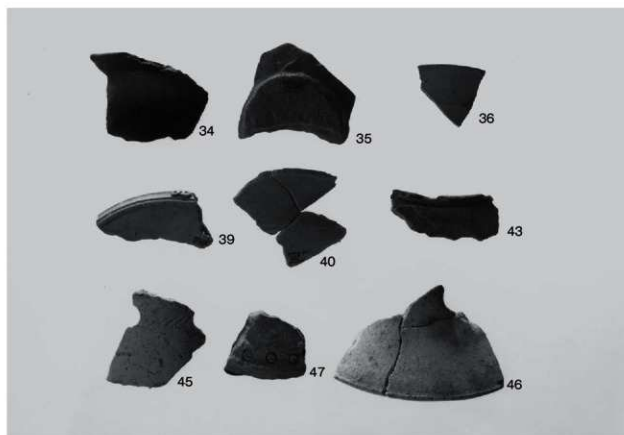
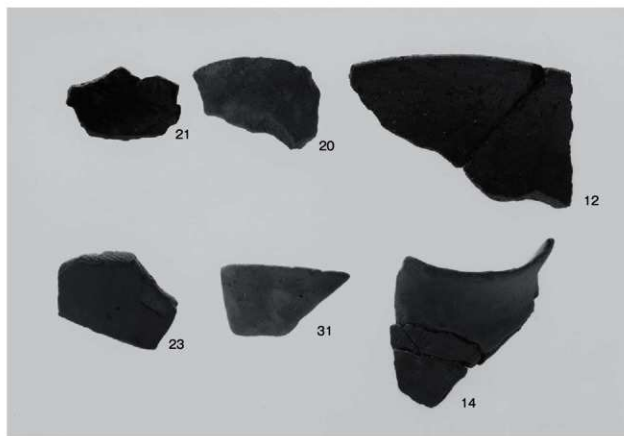
SB408 (西から)

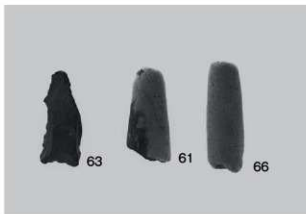
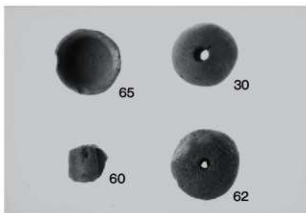
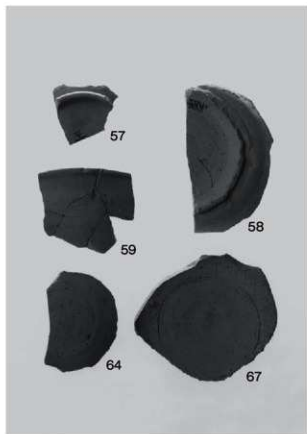
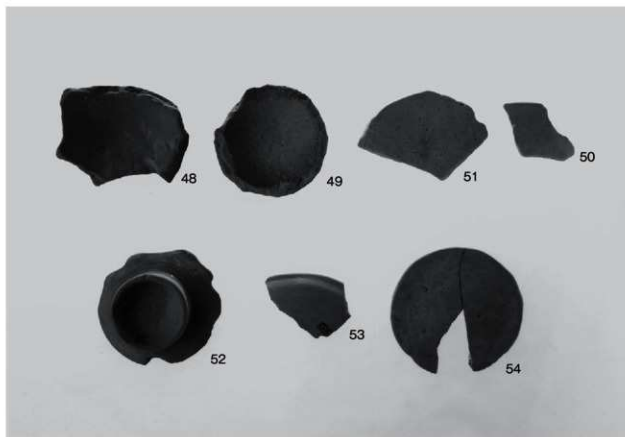










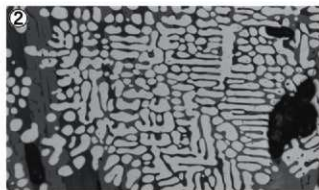
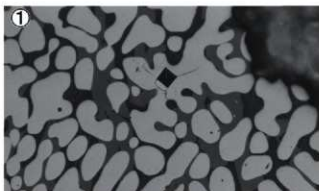


## MID-1 鍛冶滓片

- ① ×200 硬度圧痕：510HV  
 ヴスタイト  
 ② ×100 ヴスタイト・  
 ファイヤライト  
 ③ ×100 同上



×0.9

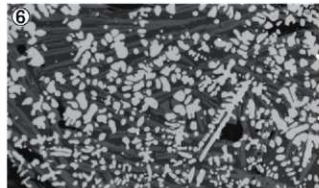
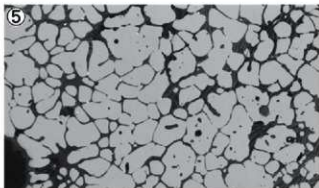
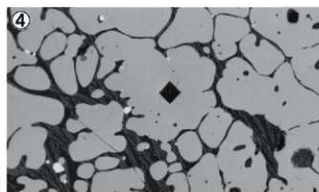


## MID-2 椀形鍛冶滓

- ④ ×200 硬度圧痕：455HV  
 ヴスタイト・  
 ファイヤライト  
 ⑤ ×100 同上



×1.0

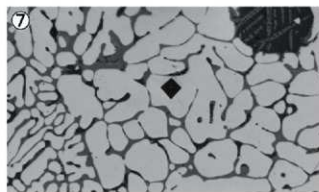


## MID-3 椀形鍛冶滓

- ⑦ ×200 硬度圧痕：481HV  
 ヴスタイト+  
 ファイヤライト



×0.5

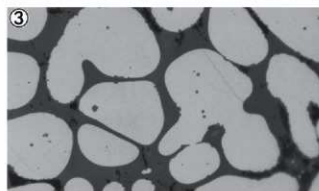
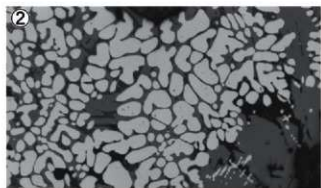
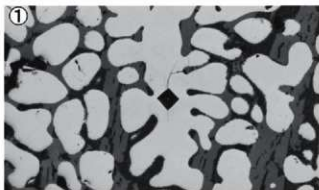


MID-4 梘形鍛冶滓

- ① ×200 硬度任意: 452HV  
 ヴスタイト  
 ② ×100  
 ③ ×400  
 ヴスタイト  
 (粒内微細  
 ヘーシナイト晶出)  
 ファイヤライト



x1.0

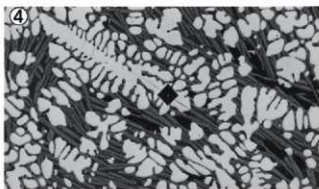


MID-5 鍛冶滓片

- ④ ×200 硬度任意: 484HV  
 ヴスタイト+  
 ファイヤライト



x0.8

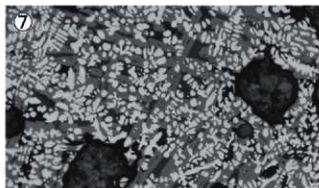
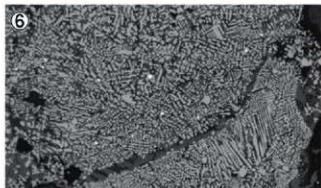
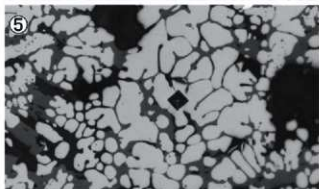


MID-6 鍛冶滓片

- ⑤ ×200 硬度任意: 483HV  
 ⑥ ×100 ヴスタイト  
 (粒内微細ヘーシナイト晶出)・  
 ファイヤライト  
 微小金属鉄粒散在  
 ⑦ ×100 ヴスタイト  
 (粒内微細ヘーシナイト晶出)・  
 ファイヤライト

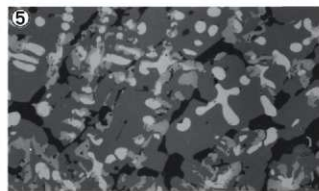
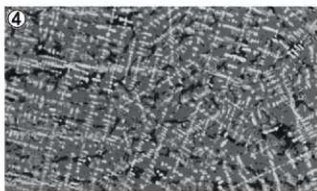
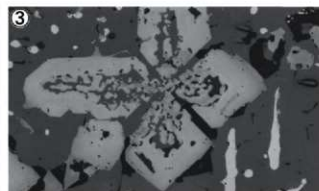
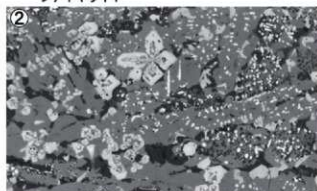
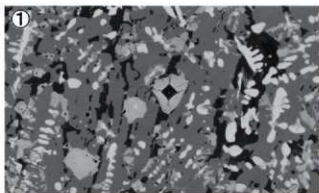


x0.7



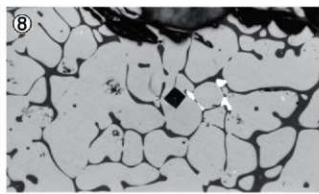
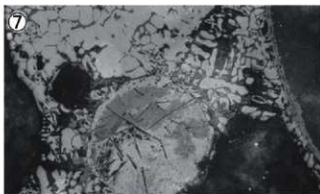
## MID-7 梘形鍛冶滓

- ① ×200 硬度圧痕：782Hv  
ヘーシナイトと  
マグネタイトの固溶体
- ② ×100 ③ ×400  
ヘーシナイト・  
ヴスタイト・  
ファイヤライト
- ④ ×100 ⑤ ×400  
ヴスタイト・  
微細ヘーシナイト・  
ファイヤライト



## MID-8 梘形鍛冶滓

- ⑥ ×100 ヴスタイト
- ⑦ ×100 中央：錆化鉄粒  
針状セメンダイト痕跡  
周囲滓部：ヴスタイト
- ⑧ ×200 硬度圧痕：443Hv  
ヴスタイト



図版 41 梘形鍛冶滓の顕微鏡組織

**MID-9 梔形鍛冶滓**

- ① ×200 硬度圧痕：495Hv  
 ヴスタイト  
 +ファイヤライト



×0.6

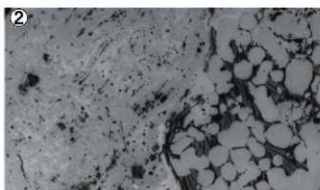


**MID-10 梔形鍛冶滓**

- ② ×100 左側：錆化鉄  
 右側：滓部  
 ヴスタイト・  
 ファイヤライト



×1.0

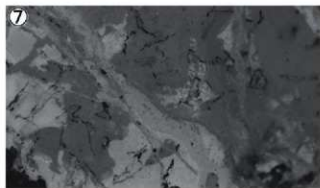
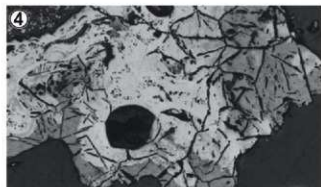
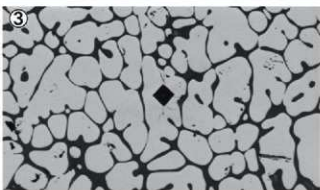


**MID-11 含鉄鉄滓**

- ③ ×200 滓部、硬度圧痕：469Hv  
 ヴスタイト  
 ④~⑦ 錆化鉄部  
 ④ ×100 ⑤ ×400  
 針状セメント・  
 パーライト：過共析組織痕跡  
 ⑥ ×100 ⑦ ×400  
 フェライト・少量パーライト：  
 亜共析組織痕跡



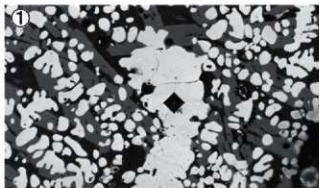
×0.7





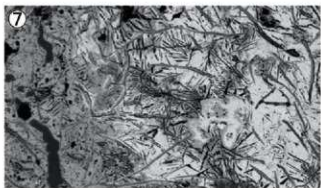
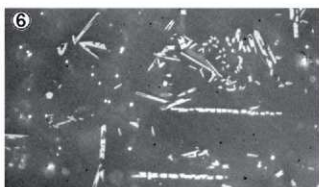
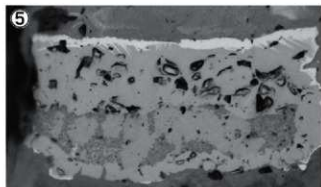
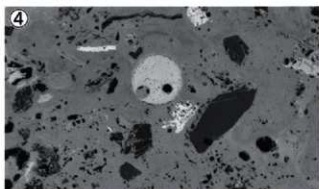
**MID-12 椀形鍛冶滓**

- ① ×200 硬度圧痕：488Hv  
 ゴスタイト  
 ② ×100 ③ ×400  
 ゴスタイト・  
 (粒内微細ヘーシナイト晶出)・  
 ファイヤライト



**MID-13 鉄塊系遺物**

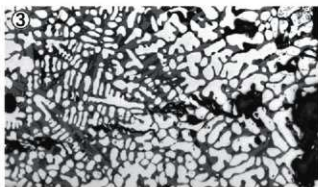
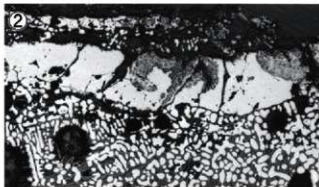
- ④ ×200 中央：付着粒状滓  
 ⑤ ×400 付着鍛造剥片  
 ⑥ ×400 滓部：ガラス質滓  
 微小金属鉄粒散在  
 フェロホルト/ライト晶出  
 ⑦⑧ ×100 酸化鉄部：  
 ⑦ わずみ錆鉄組織痕跡  
 ⑧ 白錆鉄組織痕跡



図版 43 椀形鍛冶滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

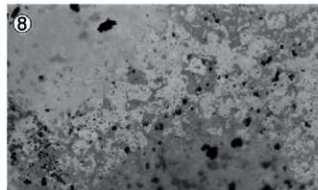
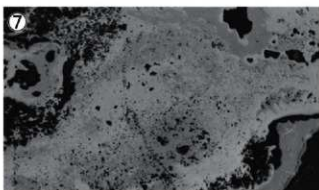
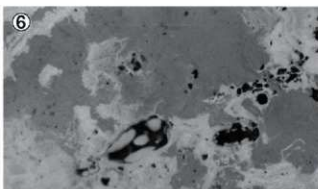
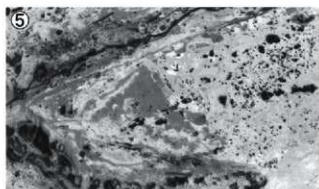
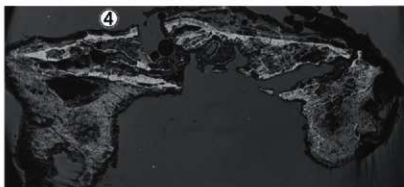
MID-14 椀形鍛冶滓

- ① ×200 硬度圧痕: 474Hv  
② ×100 上側: ヴスタイト凝集(層状)  
          ヴスタイト・ファイヤライト  
③ ×400 ヴスタイト・  
          ファイヤライト



MID-15 鍛造鉄器片

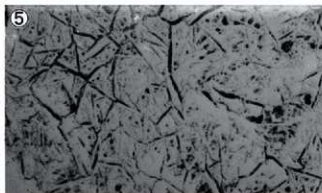
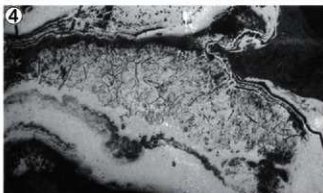
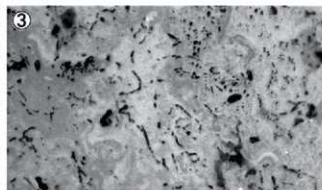
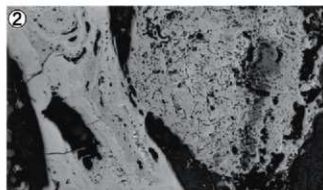
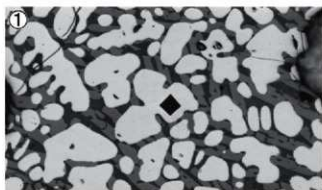
- ④ ×5 マクロ組織  
⑤ ×100 ⑥ ×400 鉄器端部: 錆化鉄  
⑦ ×100 ⑧ ×400 錆化鉄





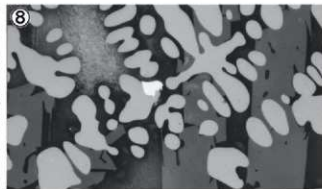
## MID-16 梔形鍛冶滓

- ① ×200 硬度圧痕: 462Hv  
 ゴスタイト・  
 ファイヤライト  
 ② ×100  
 ③ ×400 錆化鉄  
 フェライト素地へ  
 少量パーライト  
 ④ ×100  
 ⑤ ×400 錆化鉄  
 過共析組織痕跡



## MID-17 梔形鍛冶滓

- ⑥ ×200 硬度圧痕: 496Hv  
 ゴスタイト・  
 ファイヤライト  
 ⑦ ×100  
 ⑧ ×400

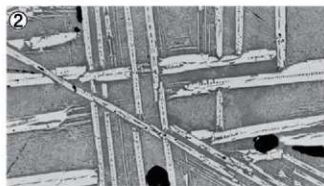
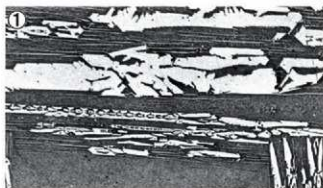


MID-18 梘形鍛冶滓

- ① ×100 ファイヤライト  
② ×100  
③ ×400  
ファイヤライト

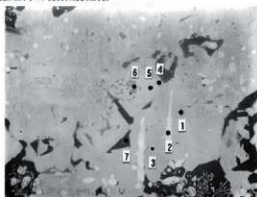


×0.8



図版 46 梘形鍛冶滓の顕微鏡組織

COMP  
×400



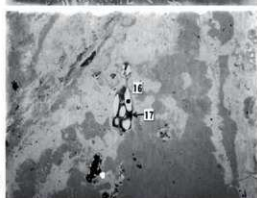
MID-7

COMP  
×700



MID-13

COMP  
×400



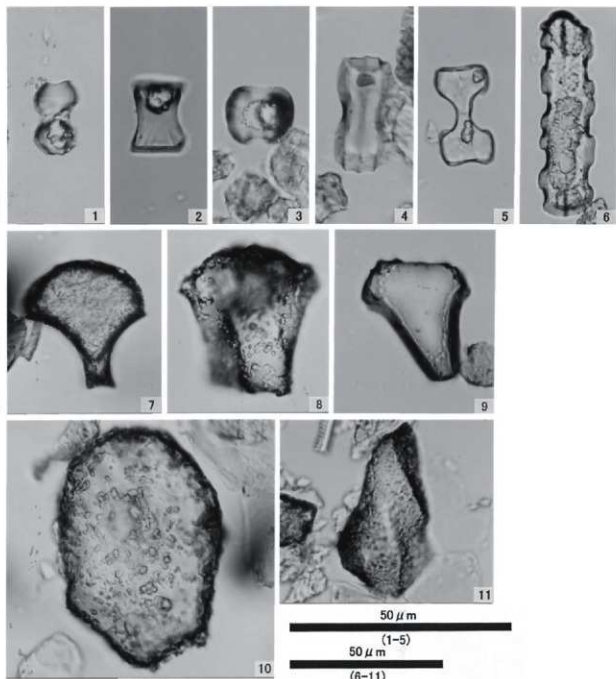
MID-15

Element	1	2	3	4	5	6	7
F	-	-	-	-	-	-	0.257
Na2O	-	-	-	0.005	0.003	2.770	0.935
MgO	2.548	0.136	0.122	0.142	0.333	0.055	-
Al2O3	0.303	0.546	0.909	24.226	15.871	10.080	25.626
SiO2	30.799	0.538	0.900	1.195	0.576	40.427	65.609
P2O5	0.071	0.003	-	0.009	0.914	1.253	0.039
S	0.005	0.005	-	0.004	0.001	0.202	0.907
K2O	-	-	-	0.104	0.941	3.324	14.379
CaO	0.203	-	-	0.104	-	12.434	0.021
TiO2	0.074	0.192	0.272	1.788	1.673	0.104	0.032
Cr2O3	-	-	-	-	0.090	0.043	0.020
MnO	0.277	0.089	0.082	0.017	0.131	0.054	-
FeO	67.812	98.187	98.622	70.235	78.734	29.948	1.932
ZrO2	0.034	0.038	0.035	-	-	0.195	-
BaO	-	0.023	0.016	0.039	-	0.893	0.220
V2O5	-	-	0.016	-	0.076	-	-
Total	101.825	99.746	98.508	97.753	94.543	102.732	108.949

Element	13	14	15
F	-	-	-
Na2O	0.184	2.694	0.353
MgO	17.909	1.393	0.182
Al2O3	0.841	16.959	1.283
SiO2	35.407	52.427	4.482
P2O5	0.269	0.268	0.026
S	0.005	0.011	-
K2O	0.544	9.430	1.008
CaO	0.395	3.760	0.277
TiO2	0.140	0.853	0.163
Cr2O3	-	0.045	0.045
MnO	0.236	0.015	0.044
FeO	46.005	15.501	133.164
ZrO2	-	-	-
BaO	0.028	0.106	-
V2O5	0.048	0.046	-
Total	102.110	103.615	141.125

Element	16	17
F	-	-
Na2O	0.003	0.024
MgO	0.685	0.066
Al2O3	0.407	11.795
SiO2	0.174	2.166
P2O5	-	0.069
S	0.010	0.008
K2O	-	0.040
CaO	-	0.220
TiO2	0.270	0.350
Cr2O3	0.034	0.012
MnO	0.094	-
FeO	98.324	56.256
ZrO2	-	-
BaO	-	-
V2O5	0.080	-
Total	101.079	71.024

図版 47 EPMA調査結果〔反射電子像及び定量分析値〕



1. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号 5)
2. ネザサ節短細胞珪酸体 (試料番号 5)
3. ヨシ属短細胞珪酸体 (弥生; 溝内)
4. コバナグサ属短細胞珪酸体 (試料番号 2)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (弥生; 溝内)
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号 2)
7. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号 5)
8. ネザサ節機動細胞珪酸体 (試料番号 5)
9. ウシグサ族機動細胞珪酸体 (試料番号 5)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (弥生; 溝内)
11. 樹木起源第IVグループ (試料番号 2)



## 報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどうまごちゅうほうせいどうろ(13こうく)けんせつじじょうにともなう まいできたいせきほつくつちようさほうこく Ⅱ							
書名	一般国道23号中勢道路(13工区)建設事業に伴う 舞出北遺跡発掘調査報告2							
副書名	第1次・第2次調査(下層)及び第3次調査							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-24							
編著者名	原田恵理子、水橋公恵、野馬美沙子、小林俊之、株式会社九州テクノリサーチ、パリオ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Ⅱa 0596(52)1732							
発行年月日	西暦2010年 3月 12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
舞出北遺跡	三重県松阪市 舞出町	24204	C1	34° 39' 20"	136° 29' 57"	19991128～ 20000217、 20000515～ 20001201、 20040517～ 20041224	計8,280  1,200 3,380 3,700	一般国道23号中勢 道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
舞出北遺跡	集落跡	弥生後期 ～終末	周溝墓・掘立柱建物		弥生土器(絵画土器含む)		5世紀～6世紀前半、 SX301のみ主体部・埴輪列 確認。周溝にはベンガラが 入っていたと推定される須恵 器を置いていた。  7世紀末～8世紀前半に集 中している。付近で小規模な 鍛冶が行われていた可能性あ り。	
		弥生終末 ～古墳初頭	水田状遺構		弥生土器・土師器			
		古墳中後期	古墳・溝・櫓		土師器・須恵器・埴輪・鉄 刀・鉄斧・馬具・馬骨			
		飛鳥	溝		須恵器			
		奈良	溝・掘立柱建物		土師器・須恵器・輪の羽 口・鉄洋			
要約	<p>三重県松阪市舞出町に所在する舞出北遺跡の調査成果のうち、第1・2次下層調査(弥生時代から奈良時代)及び第3次調査分を掲載した報告書。</p> <p>調査区は、雲出川によって形成された自然堤防上に立地する現舞出集落の西端部にあたり、弥生時代後期の周溝集落、弥生時代終末から古墳時代初頭の水田状遺構、古墳時代中後期の古墳群、奈良時代の集落跡が確認された。また、弥生時代後期から古墳時代にかけて河川の氾濫等による微地形の変化によって土地利用の変容過程が検証できた。</p> <p>特に、古墳時代中後期に築造された5基の埋没古墳の中でもSX301は僅かながらにも残存していた主体部、埴輪列、木製埴輪等の樹立の可能性を示す木杭痕等の外表施設、周溝内からベンガラが入っていたと推定される須恵器や古墳祭祀の痕跡、鉄刀をはじめとする豊富な副葬品、大量の埴輪の出土など、当地域における古墳の様相を示す情報をもたらした。</p> <p>また、奈良時代の集落は7世紀末～8世紀前半に集中しており、鉄洋等の金属学的分析から付近で鍛冶が行われていた可能性が示唆されている。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 115-24

一般国道23号中勢道路(13工区)建設事業に伴う

**舞出北遺跡発掘調査報告2**

—第1次・第2次調査(下層)及び第3次調査—

2010(平成22)年 3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 (株)アイブレーン